

幕末維新政治史の研究

笹部 昌利

目次

序章 幕末政治と幕末維新史研究

第一節 「幕末政治」の問われ方

第二節 幕末維新政治史研究における意義

第一章 幕末政治の生成とその背景

第一節 背景としての近世大名家―鳥取藩池田家を素材に―

1 日本近世の政治秩序から問う

2 近世大名家中の身分格式

3 大名家中と職制

4 「徒士」身分の流動性

5 大名「昵近」の政治的意義

6 安政六年の職制改革と中老職

小括

第二節 大名家よりの使者と近世京都 ―佐賀藩鍋島家の事例を素材に―

1 前提としての上京儀礼

2 近世大名家の「役」と京都

3 佐賀藩鍋島家の「京都」関連史料

4 嘉永元年の女御入内と使者

5 京都屋敷の業務と使者

6 大坂への道、京への道

7 京都における使者と勤め

小 括

第二章 幕末政治と鳥取藩池田家

第一節 攘夷と自己正当化 ―文久期鳥取藩の政治運動を素材に―

1 攘夷主義という前提

2 鳥取池田の「家門」意識と政治志向

3 国事周旋意識と攘夷

4 攘夷と国事周旋の展開

5 大名家の正当化と自立志向

小 括

第二節 京よりの政治情報と藩是決定 ―鳥取藩の情報収集システム―

1 京都留守居の理解

2 京都留守居と格式秩序

3 京都留守居の政治的位置

4 安達清一郎と幕末京都

5 「文久政治」から「元治政治」へ

6 元治元年の政情と藩是決定システムの改編

7 あらたな政治情報収集システムの構築

8 水戸藩内訌と「京師変動」への対応

小 括

第三節 長州戦争と鳥取藩池田家―戦争に対する政治意思を素材に―

1 鳥取藩池田家の毛利家救済意識とその意図

2 長州藩毛利家処分をめぐる政情と政治運動の変容

3 長州戦争に対する「家」存続の論理

4 長州戦争をめぐる池田家「日和見」の論理

小 括

第四節 大名家における「国事」対応と組織・構造

1 「御側」の政治的拡大

2 「御役替」と国事対応システム

3 「御側」・「学校」・「京坂支局」による国事周旋システムの成立

4 「上京」にみる命令系統

5 「周旋方」の成立と「国事」対応

6 家老の在京制度と「国事対応システム」の変容

第五節 幕末維新期の「農兵」と軍事動員―鳥取藩領の事例を素材に―

1 幕末政治史と「農兵」

2 幕末期の「軍事」

3 「農兵」とは

4 海防問題と「農兵」

5 幕末「農兵」の導入と実情―鳥取藩領の場合―

6 藩領内の知識人層による「農兵」主導と蹉跎

7 長州戦争への参戦と「農兵」

8 慶応二年の兵制改革と「農兵」

9 「農兵」の終焉 ―「農兵」から「歩兵」へ―

10 近世的「歩兵」の終焉と「国民皆兵」

小 括 ―軍事への自主性と政治的辺境に生まれた意識について―

補節 日本近代における「維新」観と近世秩序

1 鳥取の維新観

2 「二十士」の顕彰

3 維新史の基準と近世秩序

小 括

第三章 幕末期における薩摩藩島津家の国事運動と京都

第一節 薩摩藩の国事運動と島津久光

1 島津久光の率兵上京に対する見方

2 島津久光論

3 島津家と近衛家

4 宮廷社会のなかの近衛家

小 括

第二節 薩摩藩二本松屋敷の政治的意義 — 島津家の「国事」と京の拠点 —

1 序

2 近世の大名京屋敷

3 島津久光の外交体制

4 相国寺境内の政治的登場と二本松屋敷の成立

5 島津久光の「国事」運動の限界

6 久光退京後の二本松屋敷

7 薩摩藩二本松屋敷の政治的意義

小 括

第四章 幕末政治と「志士」 — 政治意識形成と行動 —

第一節 「人斬り」と幕末政治 — 土佐藩山内家の政治運動と個性 —

1 幕末の志士を見直す

2 「志士」の背景 — 庄屋・郷士と政治 —

3 「志士」と「人斬り」

4 土佐有志と「人斬り」

5 国事周旋と「志」

6 政治運動の個性としての「天誅」

7 「天誅」という名の「人斬り」の限界

8 その後の「天誅」

小 括

第二節 「志士」と由緒 ―丹波郷士の「志」と幕末政治をつなぐ―

1 「勤王志士束簡」

2 人が由緒を語るとき

3 湯浅五郎兵衛家の由緒

4 「志士」とは

5 「志」の形成と肥後藩細川家

6 湯浅五郎兵衛の立志

7 肥後細川・湯浅五郎兵衛の政局観

8 「志」のつながり

9 「御一新」がもたらしたもの

小 括

第三節 山中静逸と幕末政治 ―「柳ノ図子」がつかないだもの―

1 静逸という人物

2 「志士」と「草莽」

3 「建白」というおこない

4 「柳ノ図子」という通路

5 慶応三年の静逸

第五章 幕末維新人物像の形成

第一節 三条実美の政治意識形成とその転回

- 1 「尊攘派」というイメージ
- 2 政治意識の形成とその背景
- 3 宮廷改革へのまなざし
- 4 攘夷別勅使の政治的意義
- 5 三条家と草莽
- 6 安政大獄と政情
- 7 丹羽正雄の政治行動
- 8 「七卿落」と密使
- 9 増幅される三条実美像

小 括

第二節 勝海舟の軍事構想と日本型華夷意識

- 1 『氷川清話』のなかの思想
 - 2 勝海舟の思想形成と華夷意識
 - 3 海軍興隆のための西洋「知」
 - 4 神戸海軍操練所という思想
 - 5 亡き「友」、アジアの「友」
- 小 括

序章 幕末政治と幕末維新史研究

第一節 「幕末政治」の問われ方

近年、「幕末政治」という言葉が、研究上、なかば無造作に利用されている感がある。この枠組みを幕末維新史研究において定義づけたのは、大久保利謙である。

「幕末政治」は、江戸時代のいわゆる幕藩体制の政治から明治の近代政治体制への展開期のいわば過渡的政治形態で、動乱期として考えられているが、しかしこれを単に過渡的な時期として取扱うことは結局、明治政治が如何なる過程によって成立したかという問題をも曖昧にする結果となるのである。明治の政治は幕藩制の政治から直接展開したのでなく、「幕末政治」の段階を経て成立したものとみななければならない。換言すると「幕藩体制」と「明治政治」との間に「幕末政治」または「幕末国家」期を設定してこれを積極的に評価する必要があるのである。」

大久保は、「幕末政治」を近世の政治体制から、近代のそれへの移行していく過渡的状况と意義づけ、これの解明がなされないと、明治国家を説明することができないと、近代の前提的な理解をとる。筆者は、「幕末政治」を単に「過渡的状况」として捉えず、混沌と化した状況における人びとの思考、判断は明らかに近世、江戸時代に存在した政治、社会、文化、教育、さまざまな要素が影響していると考ええる。よって「過渡期」であると捉えるばかりに、理解できなかった人びとの意識、思想、行動を再考察しようと思う。

そのために、まずは幕末維新政治史の展開過程を再確認していこう。明治二十二年（一八八九）に編纂が完了した『復古記』は、戊辰戦争という武力をともなう政治変革を正しい変革であると説明し、続いて、岩倉具視や三条美実といった旧公家や、明治の「元勳」と称された政治家たちについても、その人生を讃えるべく「伝記」の編纂がなされた。また、明治政府は旧大名家に対しても「勤王事績」の調査、報告を求め、この継続事業として「藩史」や「家史」が編纂された。さらには、明治維新を「王政復古」の観点から意味付けるために、全二〇〇巻以上にわたる「日本史籍協会叢書」が大正末期から昭和初期にかけて編纂され、それは現在に至るまで、明治維新史研究の史料の根拠となりえている。日本近代の歴史と歴史学は国家と個人が正しく存在することを証明する手段となりえたのである¹⁰。

このような歴史のありかたは、日本においては昭和戦前および戦後の歴史学において否定されてゆく。すなわち社会および政治、経済、生産を唯物的にとらえる歴史学であり、史的唯物論とか、唯物史観と呼ばれる考え方である。資本主義経済の仕組みを分析した近代ドイツの経済学者、カール・マルクスによって提唱されたこの考え方によって、歴史はその発展段階における経済の生産力により一定の生産関係に入り、生産力と生産関係の矛盾により進歩するとされた。日本社会の矛盾を看取していた歴史学者は、この方法論を日本の歴史を紐解く重要な歴史理論であると考えた。明治維新史においても、服部之総、羽仁五郎によって、明治維新がわが国の革命史として議論され、戦後、その方法論は、遠山茂樹、井上清らによって受け継がれていき、「革命」としての維新変革の主体とは何であったのかを問う研究が旺盛になされ、蓄積されていく。

大正期から昭和戦前期に「革命」のモデルケースとして考察され、戦後に至り、確立、継承されていく流れは、青山忠正「明治維新の史学史」によって整理された¹¹。「日本資本主義論争」の折に問われた国家権力の性格規定は、あくまで西ヨーロッパ地域の現象の適合であり、その「変革」性のみを注視するのではなく、その政治過程の実証的な見直しの必要性を問い、戦後歴史学を超える明治維新史研究は「その緒についたばかり」¹²との青山の評価に比例する

形で、はからずも、もはや出尽くしたと解されていた明治維新史研究が、後進の研究者によってなされるようになった。

戦後歴史学を牽引した遠山茂樹は、その著書『明治維新』³において、マルクス主義的な唯物論を、長州藩に関わる史料によって実体化させ、維新によって「絶対主義」国家が成立されたと規定し、革命を導いた主体が、「尊攘派」から「討幕派」へと発展的変容を遂げ、そのなかで、地域の豪農や都市の豪商が下級武士と結びつき、維新変革の主体となりえたとする解釈を確立した。遠山の主張した主体形成をめぐる議論が、学会において盛んになされ、長州藩を中心とする研究史観が主流となった。しかしながら、史料実証の成果は、遠山の打ち立てた解釈を否定した。

三宅紹宣によって、長州戦争期の長州藩領内の景況は、遠山の主張するような「挙藩一致」といえるものではなく、戦争遂行のためには、周到な民心操作を要したことが明らかにされた。また、薩摩藩島津家との軍事連携、すなわち薩長同盟が、討幕を目指すものであることは、遠山以降の維新史研究においてなかば議論の前提になっていたが、前出の青山によって、薩長同盟を軍事同盟とみる見解に疑義が呈され、同時に長州藩内における討幕派の成立についても、単線的に見るのではなく、複線的な理由付けもふまえ、議論の再構築をせねばならないとの議論が立てられた。⁴ 遠山ら戦後史学において問われた幕末期の政治状況は、近代「絶対主義」国家成立のための前提として位置づけられたものであった。一九八〇年代、史的唯物論的な維新史研究が史料実証によって淘汰され、近世から近代への時代状況の推移とその構造について明らかにされていくとともに、戦前に作り上げられ、文部省によって編まれた『維新史』によって示されるような政治過程を大幅に見直していこうとする研究がなされた。

宮地正人の「幕末過渡期国家論」⁵、原口清の「近代天皇制成立の政治的背景―幕末中央政局の基本的動向に関する一考察」⁶は、国家体制の推移と再編について論じえたものであり、現在の研究に大きな影響を与え、方向性を明示した研究であるといえ、この分析方法をもって徳川幕府政権の組織や、朝廷内における政治意思決定のありよう、諸

大名家における国事対応のありようなどが考察されてきた。

徳川幕府政権の組織構造および人的関係に関する研究は、「佐幕派」勢力に対する考察の必要性を問うた大久保利謙⁹、幕末期の幕政改革のありようについて言及した田中彰¹⁰によって、一九六〇年代前半において問われていた。徳川幕府を注視する方法論は、戦前の皇国史的維新史研究に対するアンチテーゼとしてなされ、七〇年代に、幕府を対象とする研究は増加し、幕末の幕府の軍制改革が、維新後の資本主義成立の前提となるとの評価がなされ、この改革を「徳川絶対主義」体制を目指すものとする石井孝の議論が大きく支持された¹¹。八〇年代の政治過程分析の進展は、慶応期の幕政改革に対する評価を下降修正させた。原口清は、慶応期の幕政改革が、全国的次元において展開されたものではなく、あくまで「個別権力内部の政策」にすぎないと史料実証によって批判をおこなった¹²。

精緻な史料実証を旨とする研究は、殊に徳川幕府と国内諸政治勢力との関係によってなった政治状況の解明に重点を置き、進展していった。家近良樹による「一会桑権力」に関する政治史的研究¹³は、九〇年代前半期における幕末政治史研究の分水嶺ともいえる研究であり、徳川幕府と朝廷、双方の間に生成された「一会桑権力」の実体についての考察は、久住真也¹⁴や奈良勝司¹⁵といった二〇〇〇年以降になされた徳川幕府内部の組織論にかかる分析に大きな影響を与えた。朝廷に関する研究については、戦後にいたっても、戦前の天皇制への論及忌避の風潮が残存するかの如く、研究の深化が見られなかったが、ここにおいても家近の研究「幕末期に朝廷に新設された国事審議機関」¹⁶がその先駆けとなり、原口清¹⁷、箱石大¹⁸によって、組織論および人的関係が考察された。

大名家の研究についても、八〇年代における幕末の中央政局との関わりを問うべく、長州藩毛利家以外の研究が旺盛になされるようになった。「薩長中心史観」は、当該研究に根差した超えるべき課題のように認識されているが、薩摩藩の研究については、制約される史料の伝存状況が要因となり、六〇年代後半における毛利敏彦『明治維新政治史序説』¹⁹以降、大きな進展が見られなかった。しかし、鹿児島県を挙げての史料編纂事業である『鹿児島県史料』の編

纂、刊行が進展するにつれ、島津家および藩士にかかる史料が研究に要されるにともない、研究の深化がなされた。なかでも、明治二年（一八六九）、維新の功績により賞典禄十万石を得、明治四年（一八七一）九月には宗家より分家した島津久光が玉里島津家を創立。久光の命によって収集、調査された史料、「玉里島津家史料」は薩摩藩島津家中の国事にかかる動向を追う手掛かりとして活用されるようになった。

佐々木克によってなされた幕末期の政治史研究によって、薩摩藩、ことに藩士大久保利通を中心に薩摩藩内の人的関係が洗い出され、薩摩藩島津家による政治主導性の確立過程が実証された²⁰。薩摩藩政史料編纂と公開は、中央政局における大名家の研究を進展させ、文久二年四月、久光の率兵上京以降の政治過程が、幕末政治においてあらたな政治制度、すなわち「公議」政体創出の可能性のある時代状況として、宮地正人の研究²¹をその先駆けとして研究蓄積がなされた。これらの研究は、元治元年（一八六四）に開催された大名諸侯の朝廷内会議への参画、すなわち参与会議の成立と解体に意義を見出すものであったが、ことに三谷博が参与会議を「公議」制度化の試みであると解して、同年三月、会議自体は瓦解したにもかかわらず、「公議」観念は、以降の政治世界において、政治に関わることに對する正当性の根拠となりえたと評価し、これが近代における政治制度に連綿と繋がっていくことを積極的に評価したのである²²。

このような薩摩藩によって主導された中央政局に対する研究の活性化は、それまで幕末維新史研究に利用されてきた歴史資料以外への視野を広げる形となり、これまで等閑視されてきた大名家における政治意識形成および政治動向の意義を問う研究として進展していくことになった。三上一夫の研究²³が端緒となり、高木不二によって深化された越前藩松平家の研究²⁴は、諸大名家からみた幕末政治史研究のモデルとなる事例である。無論、このような研究には、一九七〇年代以降の自治体史編纂事業の活発化も相俟って膨大に新史料が発見されて、府県史や市町村史として編纂・刊行されたことが大きい。

第二節 幕末維新政治史研究における意義

筆者が、明治維新时期あるいは幕末維新时期の政治史研究において重要視する点がいくつかある。これらを素材として、本研究の意義をあらかじめ提示しておきたい。

まず一点目に、幕末維新时期の政治過程の背景として、日本近世の政治秩序に論点を見出そうとしたことである。幕末維新时期の政治史は、前節で見てきたとおり、検証すべき事項に対する精緻な実証によつて、多くの政治過程のラインが描かれてきた。しかしながらそれは、「攘夷」と「開国」、「尊王」と「佐幕」というような、政治に対する主義を、歴史を認識するためのキーワードとし、当該期に政治に関わった人物や組織が当てはめられて、作られたラインであったことはもはや言い尽くされたことである。そこでは、権力をめぐる対立や闘争の面ばかりがクローズアップされ、政治対立の派閥が形成され、どの派閥に身を置き、または旧体制を打破する主体となったか否かで、人物や組織に対する評価の優劣が付されてきた。本稿は、十九世紀半ばに生成された政治混沌の状況、すなわち幕末政治に対して、武家社会、宮廷社会、はたまた地域社会に存在した人間が、どのような背景のもと、混沌に向き合う判断をしたのかを確認しようとしている。歴史事項として、一般化されて認識されている「尊王攘夷」主義的な人びとは、どのような背景のもと、どのような偶然を経て、政治行動をとったのかを鳥取藩池田家、佐賀藩鍋島家の事例を素材に論じている。(第一章第一節および第二節)

二点目に、維新の変革主体の解明に重きを置いた従来の幕末維新时期の政治史研究において、その対象になりえたのは、政治動向の革新性とともに、それを裏付ける史料情報も豊富な長州藩毛利家であったことは、研究上、もはや周知の事柄である。「薩長中心史観」と呼称された認識により、幕末維新の政治史は変革主体で問わねばならないといっ

た風潮がいまだに強く存在する。筆者は、あえて長州藩毛利家を客体として取り扱い、そこにどのような幕末維新史が描けるのかを、鳥取藩池田家や津山藩松平家を素材におこなってきた⁵⁵。七〇年代の研究において、多くの大名家が「日和見諸藩」と認識されたが、鳥取藩池田家もその一つとして認識されたといつて過言ではない。(第二章第一節、第二節、第三節、第四節、第五節)

三点目に、維新変革の主体と位置づけられながらも、史料伝存にかかる物理的な問題から薩摩藩島津家の政治史研究の深化が遅れたことは前述のとおりである。筆者は、島津久光の政治主導性に注目し、久光の政治運動の場となった京都との関係性を問い、薩摩藩の政治運動のあり方について考察している。なかでも、臨濟宗大本山相国寺の境内に京屋敷を営んだことに触れ、その造営にかかる契約のあり方のほか、同施設の政治的有効性についても問うなど、これまでの研究でなされなかった方法論で、幕末政治と薩摩藩島津家の関係性を再考察している。(第三章第一節および二節)

四点目に、「志士」という言葉を、明治維新という時代変革に対する歴史認識として捉え直し、幕末政治における人びとの政治行動を再検討しようとしていることである。ここに言う「志士」とはすなわち、「徳川封建的政治社会」を打破し、あらたな時代を築いた「有志」と解された人びとを指す。「幕末の志士」は、日本近代における理想像であった。その理想的人材が幕末期に存在したという仮説によって生み出された存在であり、近代日本人の模範と解されたのである。そうしたイデオログ形成の問題について、近代ナショナリズム論の観点から再考察したいと考える。(第四章第一節、第二節、第三節)

五項目として、人物史を重視し、その背景となる幕末政治および社会を考察する方法論を取る点である。歴史の探求のためには、「制度や文物のあり方から探るのが普通」と解されるのが一般的であるが、人物史の深化が歴史の総合的認識の有効なる手段であることが、深谷克己によって指摘されている⁵⁶。幕末維新の著名人のみならず、無名の人

物が掘り起こされて、歴史への関連付け、意義付けがなされれば、幕末維新史という大きな歴史理解の潮流を理解することに寄与すること大であると考え²⁷。(第五章第一節および第二節)

序 注

- 1 「幕末政治と政権委任問題―大政奉還の研究序説―」(『史苑』第二〇巻第一号、一九五九年、のち『大久保利謙歴史著作集 一 明治維新の政治過程』吉川弘文館、一九八六年に収録、一頁)
- 2 田中彰『明治維新観の研究』北海道大学出版会、一九八七年
- 3 青山忠正「明治維新の史学史」(『歴史評論』五八九号、一九九九年。同『明治維新と国家形成』吉川弘文館、二〇〇〇年に収録)
- 4 同右、二六頁。
- 5 遠山茂樹『明治維新』岩波全書、一九五一年、改訂版、一九七二年(のち岩波同時代ライブラリー、一九九五年、岩波現代文庫、二〇〇〇年として復刊)
- 6 三宅紹宣『幕末・維新时期長州藩の政治構造』校倉書房、一九九三年。
- 7 『講座日本近世史 八 幕藩制国家の崩壊』有斐閣出版、一九八一年(のち宮地正人『天皇制の政治史的研究』校倉書房、一九八一年に再録)
- 8 遠山茂樹編『近代天皇制の研究』岩波書店、一九八七年(のち『幕末中央政局の動向 原口清著作集 一』岩田書院、二〇〇七年に収録)
- 9 前掲大久保論文。
- 10 『岩波講座 日本歴史』一四巻、岩波書店、一九六二年(のち田中彰『幕末維新史の研究』吉川弘文館、一九九六年に収録)。
- 11 『増訂明治維新の国際的環境』吉川弘文館、一九六六年、第六章。
- 12 原口前掲論文、五九頁。
- 13 家近良樹『幕末政治と倒幕運動』吉川弘文館、一九九五年。
- 14 『長州戦争と徳川将軍―幕末期畿内の政治空間―』岩田書院、二〇〇五年。
- 15 「幕末幕府改革派勢力の動向―『条約派』有司の政治姿勢」(『日本史研究』四七六号、二〇〇二年、「奉勅攘夷体制下における徳川将軍家の動向―文久三年将軍上洛後の性格規定をめぐる相克」(『日本史研究』五〇七、二〇〇四年)のち奈良『明治維新と世界認識体系』有志舎、二〇一〇年に収録)
- 16 『日本歴史』四四八、一九八五年(のち前掲家近『幕末政治と倒幕運動』に収録)

- 17 「文久二、三年の朝廷改革」(『名城商学』四一別冊、一九九二年、のち前掲原口著作集に収録)
- 18 「公武合体による朝幕関係の再編―解体期江戸幕府の対朝廷政策―」(山本博文編『新しい近世史』一卷、新人物往来社、一九九六年)
- 19 『明治維新政治史序説』(未來社、一九六七年)
- 20 『大久保利通と明治維新』(吉川弘文館、一九九八年)、『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館、二〇〇四年)
- 21 宮地「幕末過渡期国家論」(前掲宮地『天皇制の政治史的研究』所収)
- 22 三谷博「維新と「公議」―最初の「公議」政体創出の試みを中心に―」(近代日本研究会編『明治維新の革新と連続―政治・思想状況と経済』山川出版社、一九九二年所収、のち三谷『明治維新とナショナリズム』山川出版社、一九九七年に収録)
- 23 『公武合体論の研究』御茶の水書房、一九七九年
- 24 「幕末文久期の中央政局と越前藩」(『近代日本研究』一四、一九九七年)、「慶応期の越前藩政と中央政局」(『近代日本研究』一六、一九九九年)のち、高木『日本近世社会と明治維新』有志舎、二〇〇九年に補訂、改題の上、収録)
- 25 笹部昌利「津山藩と幕末政局―中央政治と「攘夷」への対応の一形態―」(『佛教大学大学院紀要』二七号、一九九九年)。
- 26 『状況と歴史学』校倉書房、一九八四年
- 27 人物史の有用性については、笹部昌利編『幕末維新人物新論―時代をよみとく16のまなざし』昭和堂、二〇〇九年の「はじめに」において述べた。

第一章 幕末政治の生成とその背景

第一節 背景としての近世大名家―鳥取藩池田家を素材に―

1 日本近世の政治秩序から問う

本節において目指されるテーマは、日本近世、すなわち十七世紀以降の日本に存在した政治制度やステータスなどにより形成される秩序が、幕末期の政治にいかに関わるのかを問うことにある。ここで利用する大名家に関する知見は、その多くを日本近世史の研究成果より得ている。このようにあえて述べるのは、ここで用いる方法が、今日までの幕末維新期の政治史研究においては選択すべきであるとの十分な認識がなされていないと考えるからである。それには次のような理由にある。

まず一つには、序章においても述べた戦後の明治維新史研究の方法によると思われる。明治維新史研究は近代日本の原点としての政治・経済・社会形成のプロセスを究明する「革命史」的意義を有する研究として、戦後の歴史学界において活発に議論されてきた。これを継承し、階級闘争や「絶対主義」成立の論及を旨とした「講座派」的歴史学においては、淘汰された歴史対象への分析に重きが置かれなかった。このような研究状況を青山忠正は明治維新を対象とした「史学史」としてとらえ、「政治的諸勢力の現実の活動の中から、国家・社会の変化の様相を捉え直」すこと、そして政治過程の実証的分析の必要性を主張した。この主張は、変革主体の解明に終始するあまり、実際の政治組織の構造や動態についての考察が欠如していたことへの批判であるといえる。

さらに、明治維新に関するさまざまな史料、伝記資料の復刊や、「自治体史」編纂の全国的な事業展開により、これらを史料根拠として用いた実証を旨とする明治維新史研究は飛躍的に業績を伸ばしたが、その一方で、既成の理解の枠組みに歴史事象を当てはめ、政治過程を叙述するという単調な分析に留まっている点。これが二点目の理由である。確かに論及された事例は増えた。これまで対象とされなかった徳川幕府の役人や大名家の家臣一人ひとりの情報が、こと細かに洗いなおされたのであるが、盛り込まれる情報が細くなる一方で、それによってあらたな歴史理解が生まれたのかといえば、決してそうであるとはいえない。また、幕末維新史研究における興味と素材が多岐にわたり、歴史事象、事項に関するたいへん細かな考察が増える一方で、本来あるべき歴史学研究における有用性を無視した研究が目につくようになった。

三点目に、政情分析の方法論の見直しがはかられ、派閥対抗の構図よりみる政治史からの脱却が試みられているものの、政治派閥の呼称や歴史用語を使用しないか、または別の言葉に置き換えて叙述をおこなうという方法にとどまっております、あらたな研究視角を提示するに至っていない点があげられよう。確かに政治史研究において用いられた派閥は、政治史上に登場する人物の「派閥横断的」な性格もあり、実態に即したものとはいえない。また、そこにおいて用いられた「派閥」は、日本近代という時代のニーズに適した、後付けのイデオロギーが込められた枠組みである。そうであるからといって、政治派閥の枠組みを無視し、理解の一助としないということが有効な叙述手段であるとはいえない。近年、幕末期に存在した政治派閥形成の意図が、当該期の政治的な必要性に従って生成されたことを解明していく家近良樹による論稿も発表され、派閥史観にフタをすることのない研究がはじめたといえよう。

ここでは、幕末維新史に介在する問題を解決するために、鳥取藩池田家を素材として検討する。この素材を選定した理由は二つある。まず一つ目に、それがかつて長州藩毛利家のような「変革主体」として評価された大名家ではないことである。先行研究は明らかに、多様に存在したはずのモデルケースのなかから長州藩毛利家を対象として選択

し、これを論じることと、幕末日本を論じることを同義的に解しておこなわれてきた。いま一つには、鳥取県立博物館蔵「鳥取藩政資料」の史料的有用性に他ならない。主な論拠として活用した「家譜」は、天保年間に池田家臣にそれぞれに作成、提出させたものに、維新後、明治初年までの事歴が、明治二十年段階に、池田家によって調査、加筆されたもので、鳥取藩池田家中の人事および履歴に関する基礎的史料であり、総計一六一三点から成る⁷⁾。

ここでクリアすべき課題を数点設定しておきたい。一点目に、近世大名家の政治秩序・制度を確認し、それらを幕末期の政治状況に当てはめて論じ、幕末維新期の政治史に新視角を見いだすこと。特に、「大名昵近」という大名家中の人事について、「国事周旋」と呼ばれる当該期に固有の政治動向に対して如何なる規定性を有するのかを検討したい。二点目として、幕末期における「国事」に対する大名家中の政治意思決定と、決定された政治意思の命令系統を再確認すること。これによって、大名家中のどの部分が「国事」に対して敏感に作動し、実際の政治運動となって顕れるのか明らかとなろう。

2 近世大名家中の身分格式

近世大名家が、かつて戦国の争乱のなかで組織され、機能した「軍団」内の制度を、家中の格式あるいはステータスとして存立していることは、笠谷和比古らによる近世大名家の政治構造に論及した先行研究によって明らかにされている⁸⁾。笠谷は大名家の一般的な階層秩序モデルを次のように設定する。

大名 ↓ 一門衆・家老 ↓ 組頭（番頭） ↓ 物頭 ↓ 平士 〔騎馬士〕
徒士 ↓ 足輕 ↓ 中間・小者（小人） 〔歩兵〕

右の階層秩序は、すべてのケースに適合するといえるものではないが、この軍制上の階層秩序に近似した制度を鳥取藩池田家は、家中の身分格式として、導入、継承している。

大名・着座・大寄合・番頭・物頭・羽織幌・寄合組・諸奉行・馬廻
 〔士分以上〕
 徒士・弓徒・掃除坊主・苗字付・無苗
 〔士分以下〕

表1 鳥取藩池田家中の家格			
格式	家数	主な家名および内容	就任する主な職名
着座	11	荒尾(但馬)・荒尾(志摩)・和田(以上を「三家」と呼称)・津田・鶴殿・乾・池田(日向)・池田(大蔵)・池田(図書)・荒尾(駿河)・荒尾(山城)	家老職
大寄合	4	着座家の庶子。荒尾(頼母)・津田・鶴殿(長義)・鶴殿(猪兵衛)	非役
番頭 証人上	4	番頭筆頭。福田・菅・安養寺・矢野	中老本役・江戸御留守居役など
番頭 譜代番頭	7	神戸・天野・高木・香河・箕浦・加藤・宮脇	御城代・中老本役など
番頭 平番頭	14	「代々鉄砲」とも。馬廻を支配する組頭。黒田・円山・太田・唯・佐藤・大西・山岡・堀場・三浦・荒尾・横河・佐分利ほか	小仕置・中老助役など
物頭	30～50	足輕を支配(「足輕大將」。役人による昇進の上限(「役筒」預け)	御側御用人・御普請奉行・元締役など
羽織幌	12～14	軍使・伝令をつとめた家。「御使番」とも。	御目付・御奏者
寄合組	7→30	高禄(1000石程度)で非役	非役 幕末には学館奉行、銀札場長役など
諸奉行	不定	奉行職など役方に就任するに当たり設定された格式	普請吟味役・勘定頭・京都御留守居など
馬廻 平士	不定	着座または番頭に所属する組士。無所属の「無頭組」もあり。	郡奉行・新田奉行・学校吟味役など
徒士	不定	「取次替」(御目見許可)。役人に就任(「御役徒」、無役(「御用方徒」))	御八人・御帳奉行など ※表3参照
弓徒	不定	「御歩行弓」「御徒弓」とも。手伝役・御門上番のほか、無役もあり。	御料理人・小船頭など
掃除坊主	不定	「坊主」とも。徒士の庶子で徒格振り替え前の年少者	「役方(御納戸、御側、御数寄屋勤め)
苗字付	不定	苗字許可。	山奉行・見廻役・徒役人助役 など
無苗	不定	主に武家奉公人の格式。足輕一般。精勤、年功者は苗字付に昇格	水主、中間、犬飼、台所飯方 など
家業家	不定	特殊技能をもって召し出された家	砲術家・兵学家・儒家・茶道家・絵師・医師など
『鳥取藩史』2職制志、『新修鳥取市史』2(鳥取市、1988年)より作成			

表1は鳥取藩池田家中の家格を示したものである。鳥取藩池田家中における最高のステータスは、「着座」と呼称され、藩政を執行上、家老職に補任される。つづいて、「着座」家の嫡子以外の庶子のための、名誉職的な格式である「大寄合」。そして軍役上、士分以上を統括する家の格式としての

「組頭」までは、大名家中の上層家臣の格式である。

「物頭」は行政職務の責任者の格式として存在し、その折には弓・鉄砲・旗・長柄などの武家道具を預かることで、同格式を得たことが証明された。天保期以降、池田家中においては行政職務の増加がみられるが、物頭格はこれに連動し増加する傾向にあった。「羽織幌」は、かつて軍式上の伝令役を担い、平時は大名と家臣間の奏者役を勤めることが多い。「寄合組」は非役、かつ名誉職的な格式であり、年頭御礼の内容が寄合組以上は「太刀」を拝領する（「太刀御礼」が、それ以下は「鳥目」（ちようもく、金銭の意）を拝領する「鳥目御礼」という儀礼上のボーダーとなる格式である）。

「諸奉行」は「御役人」とも称され、各種奉行所の責任者的役割を担った。この格より鑑の所持が許可された。十八世紀以降、藩政改革にともなう職制の分化によって、物頭同様に諸奉行格は増加し、給人層の庶子で素行優秀な者に付与されていく。「馬廻」は「平士」とも呼ばれ、有事には着座、番頭により編成される「備」（組）に配属され、平時は在方、町方の奉行職などを担った。以上の格式は「士格」とされた。

「徒格」には、「徒士」以下、「弓徒」など、「士格」への上昇の可能性を秘めているものや、「徒士」の庶子、年少者は「掃除坊主」とされ、その職務によって「役方」と「番方」に分かれた。「苗字付」は苗字を許可された最下位の格式であり、さらに下位には武家奉公人に付される格式として「無苗」があり、足輕や水主、台所飯方などを勤め、精勤者はまれに「苗字付」に昇格した。

さらに、鳥取藩池田家中には、以上の格式のほかに「家業家」という、特殊技能をもって大名家より禄を食む家の格が存在した。具体的には、砲術家・兵学家・馬術家・軍用役・医師・茶道・儒者・礼法家・故実家・絵師・鷹匠などがあげられる。これらの家は、能力をもって取り立てられるので、後述する「徒士」格と同様に、「御取立」の家とも称された。

表2 鳥取藩池田家の「職」と「場」				
		場所	主な職名	職務内容
国内	城内	御櫓	家老	藩内政務全般を取り扱う(藩治)
		御側御用部屋	御側御用人・御側役	大名側近業務を担う(家政)
		御勤部屋	御勤役	旧儀(儀式・儀礼)調査
		御目付部屋	御目付	藩政の監査・監察
	城外	御勘定所	元締役・勝手方長役	藩内財政を取り扱う
		在御用場	郡代・在方長役	農村地域の管理を担う
		裏判役所	裏判吟味役	物資調達
		武器製造所	武器奉行	大砲・鉄砲製造
		学館(尚徳館)	学館御用懸・学館奉行	藩士教育・学館運営
		寺社役場	寺社奉行	領内寺社の統括
		町御用場	町奉行	鳥取城下町の管理を担う
		蠟座・産物役所	蠟座奉行・産物会所長役	特産(国産)物を取り扱う
		御船場	御船手役	水上交通・海岸警備を担う
		御作事場	普請奉行	土木・建築業務を担う
国外	江戸	江戸上屋敷	江戸詰家老・御聞役・御留守居役	大名の不在時の代理。徳川公儀との交渉
	大坂	大坂蔵屋敷	大坂蔵役(大坂御留守居役)	年貢米の販売・管理。徳川公儀との交渉
	京都	京都屋敷	京都御留守居役	徳川公儀および朝廷への対応
	伏見	伏見屋敷	伏見御留守居役	徳川公儀および朝廷への対応
※『鳥取藩史』2職制志および鳥取県立博物館編『特別展鳥取藩32万石』(同、2004年)を参考として作成				

では、特殊技能者の取り立てがいかになされたのか。彼らはまず家中の関係者に非公式にも見出されて、大名に勤仕する御側御用人へ「紹介」のち、一定期間、「賄金」(「続料」、「足留料」ともいう)が支給された後、「取立」がなされた。「家業家」の格式が付与され、学館などへの勤務形態が決まった。彼らには「家業家」という格に加えて、「徒士」格が与えられることが通例であり、特殊技能者として、また家中を支える人材としての二つの格を有したことになる。特殊技能者としての「家業」の業替は基本的に許されるものではなかったが、家中における職務功績に従い、特恩として廃業し、家中職務への専念と士分へ昇格する例が稀に見られた。これを「家業放免」といった。

3 大名家中と職制

以上の大名家中の格式に、ある程度照合する形で、職制は存在する。「ある程度」というのはすなわち、「家業家」の「家業放免」や、物頭格より徒士格における昇進によって、担うべき職掌に異動が生じるからである。表2は、鳥取藩池田家中に存在する職掌をその場所と内容によって分割して示したものである。

職制は大きく、国内と国外(江戸、大坂、京都、伏見)に分かれ、国内における職制は城内と城外に分かれる。城外には勘定所や裏判役所といった財政および物資供給に関わる役所機関の他、「在方御用場」という農村地域の支配に関わる役

所機関、教育施設である学館もこれに含まれた。城内には大名家政務運営の執行機関が置かれるが、三ノ丸内郭の「走櫓」をその場として、家老が藩の政治全般を取り扱う「御櫓」と、同じく三ノ丸の大名の居住空間としての「居間」に程近く、御側御用人が大名側近として家政を取り扱った「御側御用部屋」とに、その場を分かち。大名家中における政務方針は、藩内統治にばかりが注視され、藩内職制が一枚岩的に組織されているように認識されがちである。ここでは家老差配により「御櫓」において決済される職務を「藩治」、御側御用人差配のもと家政運営を取り扱う職務を「御側」として異なる職制系統として取り扱うこととする。そのことは、すなわち幕末期にあらたに議すべき政務としての「国事」（大名の上京を基本行動として展開される政治運動＝藩屏業務）に対して、大名家中のどの部分が敏感に作動していたのかを把握できることになる。

4 「徒士」身分の流動性

大名家中の家格昇降に伴う身分流動についてはすでに触れたが、ここでは「取立」がなされる格式としての「徒士」という身分について考えよう。「徒士」格式は、近世前期、中期、後期と、その条件に変容をみる。「徒士」格は元来、「取次替」（年頭御礼の際、士分以上家臣は着座が取次ぎ、士分以下は奏者が取次ぐ）との別称が示すように大名家中の職制の境に位置する。雇用は基本的に「一代召抱」であり、召し抱え中は、城外役所の役人に任じられることが多かった。次の史料は、元禄二年（一六八九）段階における「徒士」格の規程を示したものである。

此度御歩行方御支配之御法、御書付出、自今以後御振替元俗人御取立ニハ、いづれも去々年被仰出候新規ニ被召出御歩行並、三人扶持拾八俵可被仰出候事、並其者、品ニより御吟味之上ニて、支配輕重可被仰付との事也。

表3 「御役徒」員数比較 弘化4年・文久2年			
役名	弘化4年	文久2年	備考
御八人	6	6	
御帳奉行	3	6	
御根執算筆役	2	4	
奥到来	7	7	
御勤部屋書記	5	5	
御式台到来	2	2	
奥目付	3	3	
大小姓頭書記	-	2	
表御用人書記	-	2	
御軍式足輕下取立	-	1	
御合図役	-	19	※内13人は倅御雇
御船手	6	13	
御城代手	1	1	
御普請手	11	9	
三智麻呂様御附下役	-	2	
御目付手	26	37	
御国産方	-	2	
学校	5	6	※他に1人、倅御雇
御武器奉行手		4	
寺社方	6	6	
町奉行手	2	3	
御前様御附		2	
御勘定手	24	30	
御蔵奉行	12	12	
裏判手	18	19	
在方	22	29	
御蔵目付	18	18	
御銀札場	6	6	
大勘定	2	-	
御廻米方	2	2	
蠟座	4	6	
	191(ママ)	274(ママ)	差引、83人増し
所々加役			
奥到来加役	2	2	
奥到来加役清帳	-	4	
御勤部屋加役	1	1	
御勤部屋加役清帳	-	2	
御式台到来加役	1	1	
御日記清帳役	6	6	
御勘定所加役	-	4	
在方加役	2	3	
御根帳役	3	3	
裏判加役	-	1	
寺社方加役	3	2	
学校	2	6	
御根取方	-	1	
他倅御雇	-	11	
「御役御役人増減粗調」(『鳥取藩史』2巻所収)による			

徒士格の雇用について「自今以後振替元俗人御取立」と、あくまで一般よりの新規採用とされ、給与も「三人扶持拾八俵」(約四十五石)であり、吟味の上、雇用条件の見直しはあるとされていた。享保十一年(一七二六)において、その雇用形態に変化が生じる。

御徒之者振替之儀、先年被仰出通、二十五年御奉公申上候もの振替可被仰付候、二十五年より内ハ如何様之子細、又ハいつれより御頼ニても被仰付間敷事。

右によれば、「御徒之者振替之儀」は、「二十五年御奉公」したものに限り、次代への「振替」が許可されることとなった。これを「跡目取御徒」と呼び、これにより次代のものへの身分保障がなされることとなったのである。文久三年(一八六三)には徒士格の永代振替が可能となり、徒士格が急増する¹⁰。表3は、弘化四年(一八四七)と文久二年(一八六二)段階において、「徒士」格のものが担う職数を比較したものであるが、軍制に関わる職務や、「御側」関係の職務を担う「御役徒」に増加に見られるのがわかる。また元治元年(一八六四)段階において算出された徒士の員数は「御役徒」「御用徒」あわせて、五五四人を数えた¹¹。

このような大名家中の底辺層において、ある職を遂行すべく生じた人員雇用のありかたの変化は、個人に対する功

勞への恩典をきっかけとして生じ、文久三年、徒士格の永代振替が許可されるに及び、その格と職掌が一定化するにいたる。徒士身分の者は「御役徒」として奉行役所の助役のほか、御側御用などにおける、さまざまなレベルで実務を担当したのである。磯田道史は、このプロセスを徒士格の「世襲」化と意義づけ、大名家中維持のための武家範疇の下方向への拡大と論じた。この見解は、幕末期における政務多端に対応するための職掌増加の状況と関連付けて考えると、なお説得力を増す¹²⁰。

5 大名「昵近」の政治的意義

ここでは、大名の「御側」に注目し、大名より命じられる「昵近」（じっこん）の政治的意義について考える。鳥取藩池田家における「昵近」は、近世初期より存在し、元来は大名家中というよりも、他大名、そして公家へと向けられ、仲むつまじき懇親の度合いを示すタームであった。ならば、大名家中に対する「昵近」とはなにか。ここでは、「大名が恣意的に作り出す政治状況において、「近臣」化をもたらす人事制度である」との仮説を立てることとする。幕末期の公家の政治活動において、当該社会に存在した「近臣」制度に着目した仙波ひとみは、公家の政治的急進性と朝議との関連性を問うという分析視角を呈したが¹²¹、この枠組みは、大名家中の「昵近」に近似するものである。双方に共通することは、臣と主君の距離の接近はすなわち、その臣の政治性が著しく高まるということである。鳥取藩池田家中における「昵近」の例を見ていくことにする。

表4は、儒家として任用された鳥取藩士堀庄次郎（敦斎）に対する人事および職務遂行に関する命令を編年で並べ

表4 堀庄二郎の職務と「昵近」	
年月日	辞令内容
弘化4/6/4	「…於学館講釈相勤候様被仰付旨御用人を以申渡之」
嘉永5/3/21	「…学館御殿向御用懸り被仰付旨相伺候上御用人を以申渡之」
嘉永5/3/22	「…御居間講釈申上候様被仰付旨御用人を以申渡之」
安政元/6/21	「…此度昵近被仰付御礼席初野善藏次ニ被仰付旨御用人を以申渡之」
安政3/7/21	「…左近将監様御学問被成候付、御用之透と被成御頼候間罷出候様御用人を以申渡之…」
安政6/10/21	「此度学校文場学正被仰付、文場引諸諸事締合之儀心を付可相勤旨被仰出候」
万延1/6/7	「…学校御改正ニ付、学正之席合此度被成御改候付、御礼席在御吟味役次ニ被仰付、依之御役料三拾俵被遣旨被仰出候 但し御文学御相手被仰付置候付、其俵昵近被仰付候事」
文久2/9/9	「其方儀思召之旨も有之二付、御役被成御免御礼席佐善修藏次ニ被仰付旨被仰出候、但追而御舎之品も可有之事」
文久2/10/5	「其方儀学校奉行学正兼帯仰付、御礼席神戸大助次ニ被仰付、仕人三人被遣旨被仰出候、但、昵近被仰付、且又御内御用懸り当分兼帯被仰付、此度急御参府之御供立御先出足被仰付候事」
（「堀緝熙家譜」№8989 鳥取県立博物館蔵）	

たものである。堀と学館との関わりは、弘化四年（一八四七）六月、学館においておこなわれた「講釈」より始まる。その当時、堀家の当主は父、金之丞であり、庄次郎はいまだ家督にはなかったが、学館における勤務には優秀な子息への特別枠として「倅御雇」なる制度が設けられていた。家督を継承するのは嘉永四年（一八五二）十二月で、翌五年三月には「学館御殿向御用懸」を命じられている。これは、学館業務で、特に「御殿」、大名居館への対応が求められる役であるといえる。安政元年六月、初めて「昵近」が命じられ、格式は馬廻（士分）となる。安政三年七月、池田家本家より別家（「分知」という）の鹿奴池田家の当主、池田仲立（のち仲建）の「学問御用」を命じられる。

安政六年（一八五九）十月、「学校文場学正」と教育現場における教授方の最高責任者となる。万延元年（一八六〇）六月には、学校改革¹⁵⁾に際し、格式と役料に変更があり、格式「諸奉行」となり、「役料三拾俵」が支給されることとなった。ただし池田仲立への「御文学御相手」はそのままに、大名への「昵近」が重ねて命じられた。文久二年（一八六二）九月には、藩主池田慶徳主導による「御役替」がおこなわれ、堀も学校吟味役へと降職されたが、これには藩主の意向があり、翌十月には「学校奉行学正兼帯」に復職し、格式も「諸奉行」への対応が求められ、藩主の「急御参府之御供立」に加わるように命じられた¹⁵⁾。度重なり、「昵近」が命じられていることは、すなわち、永続性はあるものでなく、その都度更新されるものであることがわかる。

表5 正墻薫の職務と「昵近」	
年月日	辞令内容
安政5/4/12	「…御居間御講釈申上候様被仰付旨、御用人を以申渡之」
安政6/3/27	「…学頭支配可被仰付処、当時白井重之進支配被仰付旨相伺候、其段御側御用人を以申渡之」
安政6/4/21	「…支配頭替りニ付、金ノ間詰被成御免御礼席其俣大小姓上ニ被仰付、仲ノ間え相詰候様被仰付…」
安政6/6/11	「…家業其俣此度学校御吟味役文場懸り被仰付、御礼席佐善修蔵次ニ被仰付、御役料銀拾五枚…」
文久1/1/1	「…御内御用有之ニ付、肥前佐賀并長崎表え罷越候様被仰付…」
文久2/10/24	「…学校御吟味役文場懸り被仰付御礼席順序被仰付旨被仰出候、但し御居間御講釈前々之通…」
文久3/5/14	「…御改革ニ付学校御吟味役被成御免此以後御相手被仰付、依之昵近御礼席初野善蔵次ニ被仰付…」
文久3/8/19	「…不時御参府之御供急出足被仰付、且又周旋方被仰付、勤向之儀者加藤十次郎承合相勤可申旨被仰出、其段学校え呼出申渡之 但し若御発駕之御間ニ合不申節者御見懸々次第可致御供旨…」
（「正墻種太家譜」No.10187 鳥取県立博物館蔵）	

表5は、堀と同様に、儒家として取り立てられた鳥取藩士正墻薫への人事および職務遂行命令を示すものである。正墻家の格は「家業家」（「徒士」格）である。正墻は安政五年（一八五八）四月、「御居間御講釈」を命じられ、自らの技能を大名家中において発揮することとなり、翌六年三月、学制改革においては、正墻ら儒者への命令系統が変更される。それまで学校奉行および「学頭」による差配を受けてきたが、以後は御側御用人（当時、白井重之進）による直接差配がおこなわれる。同時に「三の丸」の詰間が大名の居間に程近い「仲ノ間」に改められた。

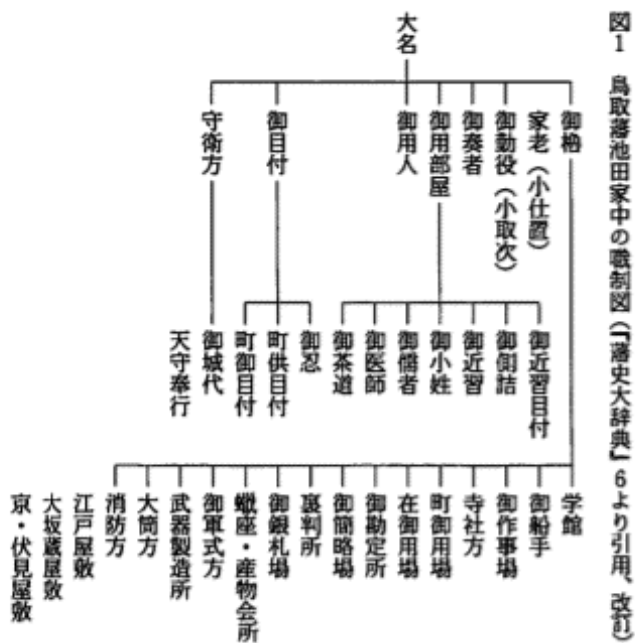
安政六年三月における学校改革は、城内の「御側」と城外の「学館」とを直結させ、御側御用人を頂点とする命令系統ができたことを意味する。同年五月において、鳥取藩内の職制全体におよぶ職制改革が執行され、「御側」と「学館」との命令系統は機能しなくなるが、翌年、改革された職制が反故となると、再度、「御側」と「学館」の命令系統が成立するようになる。文久元年正月には「御内御用」として「肥前佐賀并長崎表」へ情報収集に赴き、「御側」にて内容説明をおこなっている。後述する「国事周旋・探索」という職務はこの段階では、正式な職として認められていない。正

墻のこの探索は、あくまで大名任意によるものと考えられる。探索によって得られた成果が高く評価され、文久三年、「国事多端」を理由に、儒家家業の放免と「学校御吟味役」を免じられると同時に、「昵近」として大名「御相手」を求められる。文久三年八月、「周旋方」を命じられ、支配は側役加藤十次郎に付属するものとされた。

表6 景山龍造の職務と「昵近」	
年月日	辞令内容
嘉永2/12/18	「二宮奎之助儀、浪人景山龍造と申者、儒学出懸宜致出精候付相応之御品奉願御用人申立之趣も有之ニ付、為続料格別ニ毎歳銀五枚宛被遣旨御用人を以申渡之」
嘉永5/12/18	「景山龍造と申者、儒学心懸宜致出精候付、先達而為続料銀五枚被遣置候処、此度士列ニ被成御雇学館え罷出致教授候様被仰付旨被仰出、其段二宮奎之助御座敷え呼出申渡之」
嘉永6/1/27	「…此度於学館講釈被仰付旨、学校奉行申遂しニ申渡之」
安政1/12/21	「先達而士列ニ被成御雇学館え罷出致教授候様被仰付置候処、引続致出精候ニ付御儒者ニ被召出、五人扶持被遣、御礼席福永源藏次ニ仰付旨被仰出」
安政2/ 3/1	「景山龍造儀被召出、初而之御目見被仰付候事」
安政5/4/11	「…被召出以来年限少々ニ候得共、出精相勤候段御用人格別ニ申立之筋も有之ニ付、此度御礼席金ノ間詰溪大禄次ニ被仰付旨被仰出其段御用人を以申渡之」
安政6/4/21	「…支配頭替りニ付金ノ間詰被成御免御礼席其俣大小姓上ニ被仰付、仲ノ間え相詰候様被仰付…」
安政6/6/21	「家業其俣御系譜懸并学校御書物類取締役兼帯被仰付旨被仰出」
万延1/8/20	「御居間御講釈申上候様被仰付」
文久2/9/9	「此度昵近被仰付御礼席土肥謙藏次ニ被仰付旨被仰出、其段白井重之進より申渡之」
文久3/8/14	「…御用向相済候付、用意次第急々出足、京都表え罷越可申、尤周旋方被仰付候間、初向之儀者於京都加藤十次郎承合可相勤旨被仰出、其俣白井重之進より申渡之」
(「景山道遠家譜」No.9241 鳥取県立博物館蔵)	

目見」が許されている。景山と大名との距離が近くなったこと、と同時に彼の格式が徒のなかでも「御目見徒」であったことがわかる。安政五年四月には、三之丸「金ノ間詰」を許され、翌六年四月には、学制改正に従い、「仲ノ間詰」へと改められる。これは正牆と同様である。同年六月、「家業其俣御系譜懸并学校御書物類取締役兼帯」が命じられる。

表6は伯耆国会見郡出身の浪人身分から取り立てられた儒者、景山龍造への人事および職務命令を示したものである。嘉永二年（一八四九）十二月、御側役二宮奎之助の推薦により、「儒学心懸」が認められ、「続料」として毎年銀五枚が支給されていた。景山が正式に雇用されるのは嘉永五年十二月、これまで、続料として「銀五枚」を支給してきたが、「此列ニ被成御雇学館」にて教授するよう命じられた。ここに、「格式御取立」として、「家業家」（「徒士」格）での雇用関係が成立した。安政元年（一八五四）正月より、「学館講釈」は開始され、景山は学校奉行に属することとなった。同年十二月、学館教授に加え、「御儒者」に召し出だされる。これは正牆にもいえることであるが、「家業家」として召し出だされた、学館勤務の儒者は、「無足儒者」と呼ばれた。「御儒者」に召し出だされたということは、すなわち大名家中が認めた正規の儒者、具体的には「御側業務」に携わり、「侍講」を担うことのできる儒者であるということを意味した。ただ、士分を付与されたというわけではなく、給与および格式については「五人扶持」で徒士格にとどまった。安政二年三月、初の「御



6 安政六年の職制改革と中老職

さらに、万延元年（一八六〇）八月には、「御居間御講釈」が命じられ、文久二年九月、「周旋方」と「昵近」が命じられる。格式は馬廻となり、士分格が許されることとなる¹⁰。

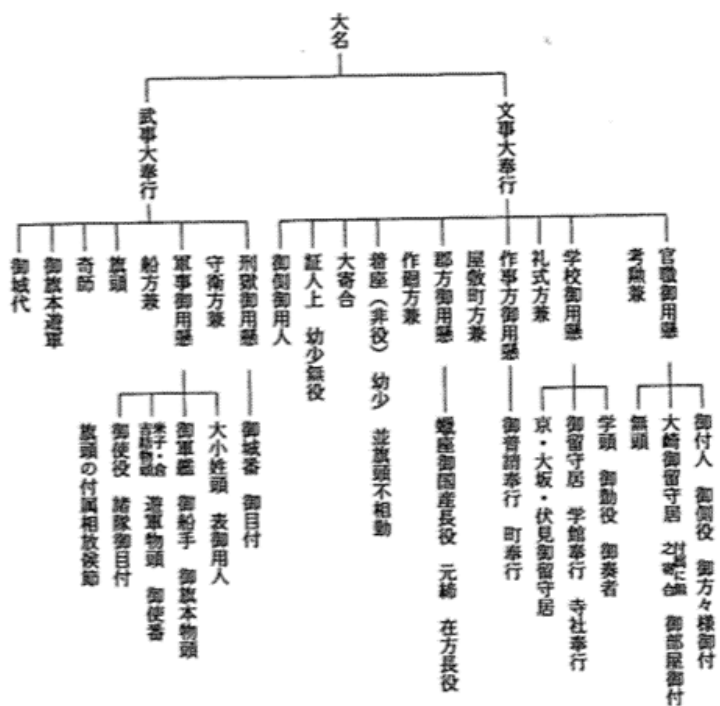
以上、「昵近」を命じられた「家業家」に関する三つの事例より、特殊技能が大名より求められれば、彼らの技能は「御側」において活用されること。具体的には「学館講釈」から「御居間講釈」へと職務執行の場を移すものであること。大名と家臣との間の距離は、大名家中に存在した格式秩序によつて一定されていたが、「昵近」は、その距離を小さくし、制度的安定を破る形で機能していることなどがいえるであろう。

「昵近」という事象は、大名の意図が強く打ち出され、幕末期には政治制度化していたと考える。実際に、彼らの人事にみる「御目見」から「昵近」への流れは大名と彼らとの間の政治的一体感を生成する方向に働いたのである。

幕末期の鳥取藩池田家において特徴的とも思えるのが、大名である池田慶徳の政治主導性である。このような大名家中において大名宗家に政治権力の集中が志向されるのは、近世中後期における藩政改革における大名の位置づけにも似ており、これはすべての大名家に一般化できるのではないかと考えている。すなわち、大名宗家に集中した政治権力によつて、優れた「御側」が形成され、その結果として、国政への対応がなされているという点において共通するからである。

第二章においても詳しく述べるが、鳥取藩主池田慶徳の場合、彼の水

図2 安政六年職制改革以降鳥取藩池田家の職制図（鳥取藩史）2より引用（改訂）



戸徳川家に生をうけたという出自が問われ、父、徳川斉昭の政策と重ねて論じられがちであるが、その政治意識としては鳥取藩祖池田光仲による親政（「大名直仕置」）の制度的復活を強く意図したものであったと考える。事実、嘉永五年（一八五二）の池田慶徳入封以後、手掛けられた改革は数多く、大名の政治主導性の確立を志向しておこなわれたものに安政六年の職制改革がある。それ以前の職制は図1であり、近世前期の藩政確立期より機能してきたとされる。改正された職制は図2のように示され、特徴的であるのは、「文事」と「武事」を二分し、それぞれに置かれた大奉行のもと、分業システムが設定されていることである。ことに世襲の家老職として「藩治」を統括した着座は、文事大奉行に統括される一つの機関に組み込まれている。また、家老の補佐を目的とし中老職が設定されている。この際、中老職にあった人間（田村貞彦、白井重之進、大西儀左衛門ら）は総じて「昵近」を命じられており、「御側」と「藩治」

との関係をはかることとなった。

このように、池田慶徳は世襲着座によって運営されてきた政治制度の見直しをはかったが、着座層の反発が著しく強く、約一年間で、元の月番家老により執行された藩治職制のありようへと立ち返ってしまう。ただし、この際に注目すべきは、先にみた学館関係者の差配が御側御用人により執り行われていることである。

これにより、御側と学館をつなぐ学校御用懸以下の役務系統がそのまま残り、これが御用部屋の差配機構として存

第二節 大名家よりの使者と近世京都 ―佐賀藩鍋島家の事例を素材に―

1 前提としての上京儀礼

幕末期に京都は「政治都市化」していくと理解されて久しい。近世後期、天皇の政治的位置が浮上し、堰を切ったかのように上京してくる大名および大名家臣とそれにとまなう武家人口の増加のありように、幕末京都が日本の政治の中心地であるとの認識がなされた。同様の認識は、先行研究においても、一般的な理解となっているが、たとえば鎌田道隆「幕末京都の政治都市化」¹⁾は、ペリー来航以後の外圧の高まりと京都朝廷の政治的関わりや大名家の上京事例に、近世京都の都市構造の変化をみる。

このような変容を強調する考え方には、近世京都が政治から縁遠い存在であり、京都に住まう天皇および公家が、徳川幕府によって作り出された「禁中並公家諸法度」によって学問への専念がなかば義務付けられ、政治から隔離された存在であるといった、従来の近世宮廷社会に対する考え方も影響しよう²⁾。

江戸を「政治都市」、大坂を「経済都市」、京都を「文化都市」とする三都観は、われわれにとってもはや通俗的な認識となっているが、この認識を前提として、近世後期に天皇の政治的位置は浮上し、加えて諸大名の頻繁な上京とそれにとまなう屋敷の増加をその理由とし、幕末の京都が政治都市となったと理解されてきたのである³⁾。

本節においては、佐賀藩鍋島家より京都に派遣された使者の事例を素材に、近世の大名家と京都との政治的関係を考えるとともに、近世京都の政治性についてもあわせて考えてみたい⁴⁾。

2 近世大名家の「役」と京都

近世日本における政治の中枢が、徳川幕府の本拠地たる江戸であることは言うまでもないことであるが、当時の京都に政治的なエッセンスがなかったかといえ、それは否である。そこには、先に述べた三都観の通俗化が大きく影響していると考ええる。

徳川幕府による政治支配のもと、大名家は京都と関係を密にはできなかった。徳川将軍家が自己の権威の保証を、天皇に求め、「将軍宣下」によって権威の補完がなされて成り立っていたわけであるから、大名家を権威の源泉たる京都に近づけることは原則としてあつてはならなかった。事実、西国の大名は江戸への参勤をおこなう際には、大坂に入った後、伏見から京を回避して大津に向かい、東海道を陸行して江戸に向かうことが、なかば通例となっていたことからわかりえる。

しかしながら、大名家と京都との関係が無になることはなかった。そのような関係は、従来論じられてきたような、京文化の地方への波及性についてのみいえるのではなく、朝廷儀礼への政治的関与が、徳川将軍と大名との軍役執行の観点からなされていることから、そういえるのである。

大名家は、朝廷に対し使者を派遣した。その数こそ頻繁ではないが、大名自身の官位昇進の礼を述べる際や、天皇家に天皇即位や女御入内などの慶事があつた際には、祝儀の使者を京都に派遣した²²。むろん、あくまで徳川幕府の定めた公儀役の一環であつて、大名家の積極的な意思からでたものではないが、大名の意思を帯びた使者が京都に向かい、京都において朝廷儀礼に参加する。このような朝廷儀礼への参加は、近世期においてどのような手続き、段取りを経てなされていたのか。この疑問を解くことは、筆者が明らかにしたい幕末政治の構造の基礎構造を明らかにする作業になりえると考ええる。ただ、このような観点から考察された研究はないといつてよい。この理由としては、大

名家側の史料に、近世京都に関わる史料の伝存が絶対的に少ないことも影響しようが、筆者は、鳥取藩池田家、佐賀藩鍋島家、龍野藩脇坂家などの藩政史料群より大名家臣の上京記録を確認した。

3 佐賀藩鍋島家の「京都」関連史料

ここでは、佐賀藩鍋島家文書のなかにおいて、大名家と京都の関係がうかがえる史料を紹介しておきたい。ただし、公益財団法人鍋島報効会が所蔵管理し、佐賀県立図書館に寄託收藏されるマイクロ複製史料から抽出した情報であることを断っておく。

「京大坂其外御役人方江御進物定式」(No.八六二・一二)は、烏丸通四条下る西側に所在した京都屋敷詰人員における京・大坂で幕府役人への進物についての規定書である。状況に応じた進物の例が記載される。

「元禄四年 京都御屋鋪頭人に付、牛島源蔵江年寄中々相渡候控」(No.三二六・一三)は、元禄年間に新装された京都屋敷の代表者たる「頭人」すなわち京都留守居の牛島源蔵に、藩重役から言い渡された案件についての書き上げであり、主たる内容は「京都御進物方」についてである。たとえば「献上」とは、禁裏・院中、御三家・老中・年寄に対する進物のレベルを指し、「中上」とは、京都所司代、奏者番・諸役人への進物、「並」とは、京都町奉行、僧侶などへの進物、「並下」とは、京都町奉行所の与力や鍋島家中の者への進物であり、それぞれ、品目、数量が決められていた。

「元禄三年 京都屋敷掟」(No.三二四・七)、「元禄三年 京都屋敷科代之条々」(No.三二四・八)は、前記、京都屋敷中における生活、行動に関する禁止事項につき書き上げである。

「京都一件ニ付御贈答其外留書」(No.九一〇・一)は、文久二年(一八六二)から翌三年における藩主鍋島直正(閑

叟)の上京に際して、直正と公家、特に鍋島家の縁家である久世通熙との往復書翰の写しである。また「御出京日記」(No.〇二二・二六〇)は、直正の上京に随行した側役の役務記録である。特に側役鍋島河内による藩主上京の準備作業(「京都手入」)について記される。

さて、本節の史料根拠となる「京都御使者一順御記録」は、嘉永元年(一八四八)九月から、嘉永二年二月にかけて、鍋島主馬(本藩着座納富鍋島市佑の子、領地高六〇〇石)が、「女御(九条尚忠六女、のち英照皇太后)入内」に際し、祝儀の使者として上京した折に作成された覚書であり、主馬に同行した納富鍋島家の祐筆が記したものと推察される。鍋島家の代表として上京するにあたり、その準備過程および上京に際しての納富鍋島家中の意識や、上京後の公家、在京幕府役人との交際について記されており、大名家による「上京」の作法や実態がうかがえる興味深い史料といえる²⁴⁾。

4 嘉永元年の女御入内と使者

嘉永元年(一八四八)十二月、左大臣九条尚忠の娘夙子が孝明天皇の女御として入内することになり、京の公家社会のみならず徳川幕府、大名家においてもその対応に迫られることになる。

嘉永元年九月二十七日、家老職の鍋島安房より着座家鍋島市佑の子、鍋島主馬に女御入内に際する使者の命が下る。納富鍋島家においては、当然のことながら、供立て(従者の人数)、スケジュール(九条夙子入内の日と佐賀を出立する日)に加えて、「合力」すなわち藩からの補助金がいくら計上されるのか懸案事項となる。

そこで、まず、弘化四年(一八四七)八月、孝明天皇即位の際の使者を先例とし、最初の見積もりが算定された。早速、同日のうちに市佑家は使者旧例を持つ大身の家老鍋島主水家(領地高三〇〇〇石)に使者相浦来助を派遣して

伺いをたてた。

- 一 御主従御人数之事 「付紙主従三拾人、乗馬壹疋ニ而罷越候様御差図相成候事」
- 一 御出立ニ付御合力員数之事「付紙正定銀拾壹貫五百目宛之内、式分半引ニて正味銀八貫六百弍拾五匁ツ、被相渡候事」
- 一 別段御合力御座候哉之事、附員数之事 「付紙依頼金百五十両渡シ被下候事」
- 一 御願之末御取替等差出候哉之事、附右同断「付紙再三之末近年数度之旅動難渋無抛旨を以、金百両御取替被差出候事」
- 一 大坂之方ニ而御渡方御座候哉之事 「附右同断」
- 一 同所ニ而御願ニ而被差出候廉御座候哉之事 「附右同断」
- 一 彼地御引払之節御合力御座候哉之事²⁵

問い合わせ事項について、それぞれ付紙が貼られ、質問事項への応答がなされている。供立てについては三〇名とし、乗馬一疋の使用が許されたこと。藩から補助金については、銀八貫六二五匁ずつ支給とのこと。また「別段御合力」、補助金の予備費用として金一五〇両が支給されるとある。また移動による出費が高額にのぼるため、金一〇〇両の「取替」、すなわち費用の立て替えがなされた。

その後、使者勤めにかかる費用についての調査は続けられ、「前方文化文政の度は別御用にて大坂被差越置候人より右御使者勤相成居、近例無之に付、当節の儀無抛寛政の節被相寄」と、寛政二年（一七九〇）十二月、それより二年前の天明八年（一七八八）、いわゆる「天明の大火」によって焼失した禁裏および仙洞御所の造営が終了した際の祝儀の使者の先例に従うようが御納戸役福田兵太夫から提示された²⁶。

これによると、銀八貫目が佐賀を出立する際の補助金、また道中の費用として、一貫六〇〇目が支給され、しめて

九貫六〇〇目が支給されることが暫定的に決まった。「調子」とあるのは、人足賃銀などの内訳を指すが、供立て一四人にて、佐賀から大里（北九州市門司）まで銀一一九匁七分、人足駄賃三五匁六分三厘、大坂までの船の手配も「八反帆」船一艘（二六〇匁）が貸し切られ、船中における食事代一九九匁九分二厘、しめて六二五匁二分五厘が支給されることになった。また、大坂および京都における人足の雇用および乗馬の借用についても大坂屋敷がおこなうこととなった。十月七日には、佐賀藩の京都および大坂屋敷に対して、書簡が送られ、行列、参内の折の装束、武家道具の手配につき問い合わせがなされている²⁷。

しかし、藩財政の厳しき折、藩からの補助金支出も削減される。史料中「但、二分半引」つまり額面の二五パーセントが差し引かれ、出立に際する補助金は銀五貫二五〇匁となり、嘉永元年の物成代より支給されることになった。京都・大坂との間の交渉により、道中、参内に必要な物品の準備が進んでいくなか、上京にかかる大まかな経費を割り出した鍋島市佑家は、十月十四日、成富十左衛門以下、着座衆に対し書状を呈し、補助金の加増を求める²⁸。

私倅主馬儀、今般京都御使者被仰付候ニ付、為御合力廉々ニ而、正定銀拾三貫六五〇匁より貳分半引ニ而被渡下候度、承知仕難有次第奉存候、然上は何角難申上奉恐入候得共、前方勤相成候向々段々承諾候処、先以伏見より京都迄之処不相応之行列向ニ而看板一通りハ不及申、為持道具等も過半於彼地手当仕候半而不相叶、且若党其外若服ニ到迄御並方見合ニは是非取繕候半而ハ一時之混合ニ而觀美之事といたし少も僣略仕候通りニ而は御外聞ニも相懸候由、殊ニ滞在中ハ日々之様外勤仕而已ならず、両御殿御家臣其外小屋出入等も不少趣相聞（中略）御合力丈共ニ而引足候儀無御座、（以下略）

鍋島主馬の使者勤めに際して、「銀拾三貫六五〇匁より貳分半引」、すなわち一〇貫二四〇匁が補助金として下され

ることになったが、伏見から京都に至る道中の行列は、他の大名に比して、遜色ないものにするべきである。休憩、休泊の折に用いる「看板」は勿論、随行の「若党」に持たせる道具、装束も「観美」にしなければ、「外聞」にもかかわることを理由にさらなる補助金の加増を求めている。結果、同月二十五日、藩当局は、京坂において要される費用の増額を認めた。

5 京都屋敷の業務と使者

使者勤めにかかる費用とともに、京都における供立てについても議論がなされた。嘉永元年十月十七日、着座衆より佐賀藩京都留守居に宛てた書状によって、「京都御入内二付、鍋島主馬儀主従十四人御使者被仰付被差越候付、於其許廿五人満合候丈之出人、偕又乗馬借入」については、「文政之度」すなわち文政八年（一八二五）九月、仁孝天皇女御入内に際する使者に準ずるものとされた²⁹。この折に使者を勤めたのは、藩士小山平五左衛門であり、伏見―京都間の供人数は、案内人である「下座見」、「足輕」を含めて六十八人、京における公家屋敷廻勤の折には四十二人であった。伏見・京都間の行列のありようは、「莊嚴」で「威嚴」あるものでなければならぬ。使者一行は伏見で旅装を脱ぎ捨て、装いを儀礼儀式に対応しうる高価なものに改め、供揃の規模も倍増される。

人足の手配および装束、武家道具の購入および借用など、国許からの使者の対応に当たるのは、京坂に滞在する大名家の役人であった。大名家の大半は、京都および大坂に屋敷を有し、京には京都留守居、大坂には大坂蔵役がおり、それぞれを補佐する下役とともに勤務した。大坂蔵役については、大坂蔵屋敷に出入りする物資流通の管理と、大坂商人への借銀工面が主な職務となるが、京都留守居については、従来問われてきたような文化伝道の側面より、むしろ朝廷儀礼に対する政治的関わりをもって捉えるべきである（図1）。

鍋島主馬上京にあたって、京都留守居丹羽嘉左衛門および京都屋敷納戸役古賀権左衛門より書状によって、京都の

情勢が報じられる³⁰。

まず、京都留守居からは、幕府要職者の上京への対応、「関東より御使向（老中酒井左衛門尉忠発）」が嘉永二年「正月廿六、七日之内御着」のため、鍋島主馬は老中入京以前に上京するよう求められるとともに、関白鷹司政通が辞意を表明しているといった、宮廷社会のありようが報じられている。さらに、京都屋敷納戸役古賀権左衛門よりは、使者上京にあたって必要な「借入物」の件につき、早速手配にかかる旨が報じられるとともに、「女御入内」の期日が嘉永元年十二月十五日の「午刻」（正午）に治定したことが知らされている³¹。

6、大坂への道、京への道

京からの連絡を受けて、上京の段取りが進んでいく。まず行程であるが、佐賀城下より豊前国大里宿までは陸行、大里宿浜よりは借用した帆船によって移動して大坂へ赴き、大坂より伏見までは、便船にて移動、伏見より京都の道中は、前述のとおり、「莊嚴」に陸行するという行程となった。大名参勤時も大坂までは海路、乗船するため、使者の折も同じルートがとられたことがわかる。

次に、佐賀・大坂間「供立」が決定される。内容は図2のとおりである。上段左が先頭、中段左から右、下段へと続いていく。一見して、参勤行列の大名部分のみを切り取ったような形態であり、使者とはいえ、駕籠周りに六人も

図1 佐賀藩鍋島家の京都屋敷のシステム

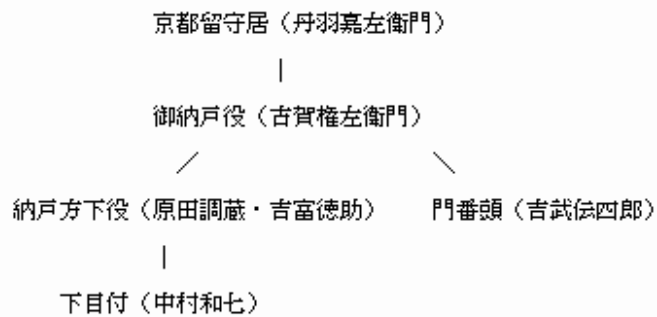


図2 佐賀－大坂間供立

御具足櫃 2人	御扶箱 1人	御扶箱 1人	御小姓	御小姓	御小姓	御継
御対継	御歩行	御歩行		御駕籠	陸尺 4人	
御対継	御歩行	御歩行	御小姓	御小姓	御小姓	御継
御長柄傘		口取				
	御茶弁当	御牽馬	沓籠	御沓掛 1人	御沓掛 1人	
御草履取		口取				
	若党 1人					
合羽籠 3人	御供頭（乗馬）					
	継持 1人					

て編成された。判明している人員のみ挙げれば、供頭に相浦五郎左衛門 小姓は、納富寛平、相浦来助、白井次郎、佐野虎蔵、他二名、歩行は古川卯左衛門、秋山金大夫、荷物を担ぐ仲間に仁比利助、高浜徳五郎、手塚貞助らである。

嘉永元年十二月二十三日に佐賀城下を発った一行は、陸路で豊前大里を経由し、嘉永二年正月二日、大坂蔵屋敷に至る。佐賀藩の蔵屋敷は、「天満十一丁目下半町（現、大阪市北区西天満二丁目）」に立地した。佐賀藩蔵屋敷は船入りを完備し、大坂に所在した蔵屋敷のなかでは格段に大きな規模であった。一行の到着に先んじて、供頭相浦五郎左衛門が蔵屋敷に至り、「御屋敷内住居」の件につき相談した。しかしながら困ったことに、江戸留守居で鍋島一門の神代鍋島左京が先着、滞在中であった。「差合」の状況になってしまったのである。大規模な蔵屋敷において、少々の「差合」は問題ないものと思われたが、同月三日、「御屋敷内御引越役所之際ニ御住居」することになり、蔵屋敷付近に所在した花屋仁兵衛宅に投宿することになった。同月五日、相浦五郎左衛門と白井次郎は、京都屋敷へ赴き、先に依頼しておいた品物の準備状況および入京を果たす日時につき相談をおこなった。結果、使者の入京は正月十日に決定し、相浦らは一旦、大坂に向かい、主馬一行に合流した。

大坂滞在時の主馬は、蔵屋敷に滞在こそできなかったものの、大坂屋敷

図3 伏見－京都間供立

下座見 1人	御具足櫃 2人	封御箱 4人(手代入り)	封御台 2人
封御継 4人(手代入り)	御歩行 6人(内、御刀筒持人 2人)	御打物 1人	
御小姓	御小姓	御小姓	御継
	御駕籠	陸尺 6人	3人(手代入り)
御小姓	御小姓	御小姓	御継
御長柄傘 1人	御草履取 2人	御扶箱一対 4人(手代入り)	
		口取 1人	
御茶弁当 1人	馬物入持 1人	御牽馬	沓籠一荷 1人
		口取 1人	
			若党 1人
御留懸二荷 2人	合羽籠四荷 5人	押 2人	御供頭乗掛
			継持 1人
			草履取 1

の人間にもてなしを受けている。正月五日には、「うどん」を食し、六日には、天王寺に参詣し、住吉に赴いて、「公儀之御船藏ニ出三代將軍家光公御乗船ニ相成候御船」を見物している。七日には、蔵屋敷に程近い、「天満宮」に参詣している³³。

正月九日、早曉に大坂を出発した一行は、同日に伏見に至り、佐賀屋七右衛門宅に投宿した。一行を迎えたのは、京都御納戸役古賀権左衛門、下役原口調蔵であった。佐賀屋を訪れたのは、入京のための準備、供立てについての相談であった。

伏見から京都屋敷の人員が使者たちをリードする形となる。伏見で雇用した人足を含めた行列は図3のとおりとなる。

一段目「下座見」が先頭から右へ、二段目、「御小姓」へと続き、三段目、「御長柄傘」から右へ、四段目「御留懸」から列末へ至る。京都で調べられた武家道具が行列に加わり、これを雇い入れた人足が担ぐ。この人員が大幅に増えていることがわかりえよう。また、伏見から地理情報に長けた「下座見」が加わる。文字通りの意味からいえば、「下座見」は通常、屋敷門前を通過する門番の下役を指したが、ここでは道先案内役として雇用された人足である。このように大名京屋敷は、大名家と京を繋ぐ役割を果たすが、その規模は大名家ごとに、一様ではない。佐賀藩鍋島家については、前出、図1のような組織となる。

7 京都における使者と勤め

公家邸宅への訪問、京都の有力寺院との関係維持、京都所司代への使者入京の届出、そして禁裏への参内期日の折衝など、京都留守居以下京都屋敷の面々が取り仕切る。嘉永二年正月十日、四条烏丸下ルに所在した佐賀藩京屋敷に到着した鍋島主馬一行は、京都留守居の取り決めたスケジュールに従い行動することになる。

主馬の使者としての任務は、京都および近郊に所在する鍋島家と縁のある寺院への参詣、公家諸家への廻勤、そして祝儀のための参内ということになる。時系列的に見ていこう。

まず、正月十三日、主馬らが訪れたのは近江坂本に所在した比叡山西塔の学頭寺院である正観院と「三井寺」と通称され天台宗門宗の総本山園城寺であった。十七日には、日吉山王社、比叡山延暦寺を参詣し、八瀬を経由して、上賀茂、下鴨社に詣でている。

つづいて、公家諸家への廻勤である。史料上、「御勤」とあり、使者の重要な公務であることがわかる。準備として京都留守居が京都所司代へ届け出、許可を得たのち、諸家への訪問がなされている。公家への廻勤をとりなした京都所司代酒井忠義へは、正月二十一日、「煎海鼠一箱」を献上し、御太刀・御馬代が進上されている。その後、武家伝奏であった坊城俊克・三条実万、京都町奉行であった水野下総守、明楽大隈守、禁裏付武士の内藤安房守へも廻勤され、その後、久我・飛鳥井・甘露寺・堀河・姉小路・藪・野宮・油小路・清閑寺・綾小路家への「御勤」がなされた。なかでも、度重ねて「御勤」がなされたのは縁戚公家（縁家）であった久世家と中院家であった。使者が赴いたすべての公家には、あらかじめ決められた献上物が贈られるが、なかでも近世初期以来の血縁関係を有する中院家と久世家は「両殿」と称され、格別の対応がなされた。久世家は子女が五代藩主宗茂の正室に入っており、九代藩主斉直の女

は「少将」久世通熙の側室となっている。史料上、「久世前大納言」と記されるのは、久世通理であり、正室は八代藩主鍋島治茂の女であった。

中院家は、子女が三代藩主綱茂の側室に入ったのを始めとし、八代藩主治茂の娘が「中院前侍従」通繫の側室となっている。

幕末期における大名家の政治運動を考えるうえで、縁戚公家（縁家）の存在は重要である。文久二年（一八六二）末以降、諸大名の上京が頻繁におこなわれるようになると、入京の窓口となるのは縁戚公家であり、同家の廷内における権威、求心力の有無がそのまま大名家の政治動向の緩急に大きく関わってゆくからである³⁴。

たとえば、文久二年閏八月、朝廷から大名家に下された国事周旋の命を考えてみよう。朝廷は、諸外国への対応をめぐる世情不安が苦慮し、「公武一和、万民一致」で国難に取り組める状況とするよう以下の大名家に周旋を求める。命じられたのは、仙台藩伊達家、肥後藩細川家、福岡藩黒田家、芸州藩浅野家、佐賀藩鍋島家、岡山藩池田家、津藩藤堂家、阿波藩蜂須賀家、久留米藩有馬家、薩摩藩島津家、長州藩毛利家、土佐藩山内家の一二家である。これらの家が近世を通じて保ってきた宮廷社会との政治的関わり、大名家は有するステータス（侍従以上）、縁戚公家の宮廷内での位置などをふまえて考察すれば、朝廷側の一方的な積極的政治意思の表れとのみ解することのない、あらたな論点が提示できよう。

さて、女御入内にかかる祝儀参内についてである。まず幕府「上使」である酒井左衛門尉忠発が高家の畠山長門守義宣とともに正月二十七日に入京し、同月晦日に参内をおこなう。鍋島家においては、「御参内首尾好相済珍重御事」と「上使」参内への祝辞を述べている。使者である主馬の参内は、京都所司代より口達が下され、嘉永二年二月三日となった。以下、同日条の日記である。

同三日、少々雨降り晴ル。今日御参内ニ付、五ツ前より日野様御殿御出御屯御差図之上、唐御門より御上り御下りハ御台所御門也。惣而御献上物彼は女御様之方とも相済候儀、七ツ過夫より御所司代両伝奏御三使え御廻勤。
暮比御帰り（以下略）³⁵

同日は雨天、あいにくの天候であつた。このような事態に際して、参内作法の指導にあたつたのは、日野家であつた。当主、日野資敬が主馬に諭した「心得」には「雨天」の際の従者の雨具の使用許可の他、中立売御門の外で「乗物牽馬」は降りて、残しておくこと。

参内人員は主馬の他、「惣御門より内」へは「若党六人 草履取一人 挟箱一」、「唐御門より内」へは「若党一人 草履取一人」とせよ。さらに参内が混み合つた折には、「喧嘩口論等」ないように心がけよと命じられた³⁶。

使者鍋島主馬の参内は滞りなく済み、翌四日、武家伝奏三条実万邸へ訪問した折、孝明天皇よりの「勅答」頂戴するため再度参内が指示され、同月五日に参内し、「勅答」が下された。

嘉永二年二月八日、一通りの使者任務を遂行した鍋島主馬は京を発つ。この日の天気は雨であり、記録には「御京着之節も雨天、又此節も雨天」とある。参内の折も雨天であつたことから、天候に恵まれない上京となつた。伏見の佐賀屋に戻って、京都での購入物、要した借入物の代銀が支払われ、翌九日、平等院へ参詣、宇治より三十石船にて大坂へ向かい、同十日、十一日は、大坂市中の見物にあて、二月十二日、大坂を出立した一行は二月二十一日、佐賀に到着した。

納富鍋島主馬の使者勤務は、予算、儀礼、外交と様々な問題をクリアし、遂行された。主馬がいまだ家督相続間もない若い人材であり、使者任務をその経験値とするために任じられたという面も否めない。主馬の例のみならず、このような大名家使者の上京は、天皇家における慶弔の度ごとに執行されたとみてよい。また、嘉永元年の女御入内の

折に使者を派遣した大名家は、「非蔵人日記」の記述によれば、「加賀宰相中将（加賀藩前田家）以下諸大名侍従以上四十四家」であり、また「俊明卿記」には参内した大名家の使者について「二十万石以上、并侍従以上」とあり、使者参内の規定がなされていることも、天皇と大名家の関係性をうかがううえで興味深い。

近世の天皇（朝廷）は、徳川將軍家と大名家との政治的關係（いわゆる幕藩体制）の枠外に置かれ、枠外から將軍権力を補完する存在として認識されてきた。しかし、執行された天皇家の儀式への参加の是非が、諸大名の付与された官職によってあらかじめ決められている。確かに、武家官職は徳川將軍が天皇に申請し、大名に付与されるものではあるが、朝廷にとって大名の官職は、朝廷からみた大名家の尺度であるように考えられる。

このように考えるとき、近世の武家と公家をめぐる政治關係には、天皇と徳川將軍、徳川將軍家と大名家、天皇および朝廷と大名家という、複数の政治的枠組みが存在する。大名と天皇および公家の關係を捉ええる際には、近世後期、天皇が政治的に浮上し、高揚した天皇權威に対して、大名家が尊崇の念を抱き、働きかけをおこなう、いわゆる大名家の「尊王」、「朝臣化」と解釈されてきたが、天皇と大名家の關係は幕末期に密になったとして、その枠組みは朝廷儀礼への参加にみられるように近世を通じて存在している。この前提をふまえ、幕末期における大名家の上京と国事参加は再考されるべきである。

小 括

本節では、以下の点について論じた。

一つめに、大名家における宮廷社会への「慶事」の対応についてである。嘉永段階で、大名自身の上京があらさまにおこなえない状況において、大名家臣が大名の意思を代弁する使者として立てられた。予算面については、任命

された家臣の個人負担が前提とされ、藩の会計からは「合力」すなわち補助金の形で補填された。任命された諸家においては、任命の榮譽に喜ぶ半面、実際の費用の工面に悩まされることとなった。

二つには、「上京」または「入京」ということが、他の移動を旨とする行動とは大きく意味合いが異なることである。それは、本節でも述べた供立ての規模の差異にもあらわれ、かつ、「合力」を求めた納富鍋島家の理由づけに見える、然るべき規模、作法に準じないなら、「御外聞ニも相懸」かるとする意識にも表れよう。渡辺浩は、論稿『御威光』と象徴』において、行列によって生成される荘厳性と、これを彩る装飾品、すなわち「家具・従者・荷物・衣装等の全てが舞台装置・大道具・小道具となつて威信の系列を表象」と述べ、これが武士によって差配される社会システムを維持する方向に働いたと論じたが、京に向かう使者の規模、装束への気配りが、単なる大名家間の牽制的意思を越えたところにおいて志向されていると考える。

三つめに、大名家と縁戚公家との関係についてである。幕末期における大名家の政治運動が、宮廷社会に所在する縁戚公家の政治的位置・発言力に大きく依存していることである。このことは、文久年間、大名家の国事周旋が活発になされていた時期に、佐賀藩鍋島家の国事運動が効果的になされなかったことについてもいえることである。文久二年八月七日、名君として名高い佐賀藩主鍋島直正（閑叟）が縁家久世通熙に宛てた書翰に「国家周旋之義、黒田・細川両家え御内沙汰有之候趣ニ候、就而は隣国之人々御内沙汰御座候而弊藩え御沙汰無之候様ニ而も如何、去迎拙方差支之程も難計漫ニ被仰下候而、却而当惑心配仕候而も如何ニ被思召」²²と問うのは、隣国の大名家へは下されている「内勅」が、鍋島家には届いていないことへの疑念だけでなく、幕末期に長きにわたり議奏職に任じられた縁家の久世家への一層の尽力を求めるものであった。中院家当主で、議奏加勢の中院通富に対しても同様の思いが抱かれたであろう。中院通富の宮廷社会における主導性の創出が、慶応末年の鍋島家の政治的浮上を誘発すると考えるが、稿を分けて検討したい。

第一章第一節 注

¹ 青山忠正「明治維新の史学史―「絶対主義」と「変革主体」―」（『歴史評論』五八九、一九九九年五月所収）、のち同著『明治維新と国家形成』吉川弘文館、二〇〇〇年に再録）。

² 青山は前掲『明治維新と国家形成』の序章において、「幕府」・「藩」の呼称を用いるのは、明治維新が、すなわち「王政復古」であると認識されたことの帰結（五頁）であるとして、研究史において常用化した用語の使用を回避している。佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）は、文部省『維新史』とは異なる概念で、「自分の言葉」（四四〇頁）による幕末史の叙述ができたとしている。

³ 家近良樹「長州藩正義派史観の根源」（同編『もうひとつの明治維新』有志舎、二〇〇六年）

⁴ 鳥取藩政資料の概略について、鳥取県立博物館編『鳥取藩政資料目録』（同、一九九七年）を参照。

⁵ 笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、一九九三年）、同『士の思想―日本型組織・強さの構造―』

（日本経済新聞社、一九九三年）

⁶ 大名家中に政治意思決定について、福田千鶴「幕藩制的秩序の形成」（『新しい近世史』一、新人物往来社、一九九六年所収、のちに同著『幕藩制的秩序と御家騒動』（校倉書房、一九九九年に改稿、再録）は福岡藩黒田家の家老合議システムの成立を論じた研究であるが、家老稟議のありかたと藩政全般とを直結させて考察することを否定し、「評定レベル、奉行レベル、用人レベルなど、藩政機構の諸役職レベルで担当した藩政の具体的内容（範囲）を確定し、藩政を重層的に構成していくこと」の必要性を主張している。

⁷ 磯田道史「徒士層の相続制度」（『史学』七〇・一、二〇〇〇年、のち同著『近世大名家臣団の社会構造』東京大学出版会、二〇〇三年に改稿、再録）

⁸ 「御徒以下御法式」No.七一二七、鳥取県立博物館蔵（以下、県博と略）

⁹ 同右

¹⁰ 「御用部屋日記」No.四七六八、県博蔵。『鳥取藩史』二、三八頁（鳥取県立図書館、一九七一年）

¹¹ 『鳥取藩史』二、三七頁。

¹² 河手龍海「因州鳥取藩における格式御取立について」（鳥取大学教養部「歴史と社会」研究会『歴史と社会』一、一九九〇年）

¹³ 仙波ひとみ「幕末朝廷における近臣」（家近良樹編『もうひとつの明治維新』有志舎、二〇〇六年）

¹⁴ 鳥取藩における学校改革については、竹下喜久男「幕末期鳥取藩尚徳館の学制改革」（幕末維新学校研究会編『幕末維新期における「学校」の組織化』多賀出版、一九九六年所収）および磯田道史「幕末維新期の藩校教育と人材登用——鳥取藩を事例として——」（『史学』七一・二・三、二〇〇二年）参照。

¹⁵ 「堀緝熙家譜」No.八八九九、県博蔵。

¹⁶ 「正墻種太家譜」No.一〇一八七、県博蔵。

¹⁷ 「景山道遠家譜」No.九二四一、県博蔵。

¹⁸ 池田慶徳の改革については、『鳥取県史』三（鳥取県、一九七九年）に詳しい。このほか河手龍海「鳥取藩における安政改革について」（『神女大史学』一二、一九九五年）がある。

第一章 第二節 注

¹⁹ 鎌田道隆「幕末京都の政治都市化」（『京都市歴史資料館紀要』一〇、一九九二年所収、のち同著『近世京都の都市と民衆』（思文閣出版、二〇〇〇年）

²⁰ 京都市編『京都の歴史』七、維新の激動（京都市、一九七九年）を初めとする自治体史研究を抛り所とした日本近世の理解において、未だに顕著である。またこの理解を超えようとする研究は、学習院大学人文科学研究所の研究組織「朝幕研究会」の諸氏によって旺盛になされていることも付言せねばなるまい。

²¹ 従来のな三都観を相対化する見方は、園田英弘『「みやこ」という宇宙——都会・郊外・田舎』NHKブックス、一九九四年）より教えられたところが多い。

²² 素材とする佐賀藩鍋島家についての研究は、藤野保氏を中心になされた業績『佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館、一九八一年）『続佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館、一九八七年）という大部な先行研究が藩政史研究の水準となつ

ている。近世後期から幕末史にかかる財政、軍事にかかわり、木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』（九州大学出版、一九九七年）がある。

²³ 大名家からの使者派遣の観点から、朝尾直弘「井伊直豊の京都上使」（彦根藩資料調査研究委員会編『譜代大名井伊家の儀礼』（サンライズ出版、二〇〇四年）および井伊岳夫「京都上使をめぐる井伊家と領民」（同前書）が、天皇家慶事の折の彦根藩主の上使発向について検討している。

²⁴ 本節は、史料根拠の多くを「京都御使者一順御記録」（佐賀県立図書館蔵鍋島家文庫 No. 〇二二・二二八）に求めている。以下「使者記録」とのみ記すことにする。

²⁵ 同右、「使者記録」

²⁶ 「使者記録」

²⁷ 「使者記録」

²⁸ 鍋島市佑「口上覚」（成富十左衛門ほか着座衆宛て）「使者記録」所収。

²⁹ 「使者記録」

³⁰ 京都留守居役については鳥取藩池田家の事例を検討している。拙稿「京よりの政治情報と藩是決定―幕末期鳥取藩池田家の情報収集システム―」（家近良樹編『もうひとつの明治維新』有志舎、二〇〇六年）を参照されたい。

³¹ 「使者記録」

³² 宮本又次「佐賀藩屋敷について」（同編『大阪の研究』三、一九六九年所収）『旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告』大阪市文化財協会編、一九九一年。

³³ 「使者記録」

³⁴ 井上勝生「幕末公家の政治空間―縁家を中心に―」（笠谷和比古編『公家と武家』Ⅱ「家」の比較文明史的考察、思文閣出版、一九九九年）、清水義仁「江戸時代の縁家について―武家から公家への助力金を中心に」（『中央史学』二八号、二〇〇五年）など。

³⁵ 「使者記録」

³⁶ 「使者記録」

³⁷ 宮内庁編『孝明天皇紀』一卷、平安神宮、一九八一年。

³⁸ 「京都一件ニ付御贈答其外留書」（佐賀県立図書館蔵鍋島家文庫 No. 九一〇・一）

第二章 幕末政治と鳥取藩池田家

第一節 攘夷と自己正当化 ―文久期鳥取藩の政治運動を素材に―

1 攘夷主義という前提

本節では、文久期の鳥取藩の政治運動を素材に、攘夷と諸藩の政治運動の関わり、および政治運動の意味について考察していく。

幕末期、特に文久期以降、活発化の様相を呈する諸藩の政治運動に対する従前の研究史の視角は長州藩一点に集中し、同藩の研究蓄積をもとに明治維新史研究は体系づけられたと言っても過言ではなからう。例えば、概して「尊攘運動」と呼称される文久期の長州藩主導による急進的政治運動の枠内で諸藩の動向を捉え、多くの「攘夷主義」諸藩が創造され、そうして創り上げられた「攘夷主義」的政治運動の延長線上に「倒幕運動」を見るという安易な方向性で明治維新をとらえるようになった。

それでは「攘夷主義」から「倒幕」へという明治維新のメインコースがなぜ生成されたのか。これは戦後歴史学を主導してきた先学諸氏を取り巻く時代状況に起因するのではないか。明治維新史研究においては遠山茂樹、井上清らがその対象となろうが、彼らは、確実に戦後日本に存在したあらゆる体制的矛盾に直面してきた。そのような状況下において、彼らの意識のなかで諸外国が如何に認識され、その「外国観」が明治維新史研究に如何に反映されたのかが問題なのである。しかしながら筆者には「戦争」の事実をはじめ、あらゆる闘争の存在は認識されてはいても、それを経験したわけではない。

従来は、「攘夷」について、長州藩の政治運動の急進性に見合う理解がなされてきたが、実際には文久二、三年（一八六二、三）に長州急進派と行動を共にした熊本藩士から「攘夷と申候へハ心得候気取多候処、何ぞ打払候が攘夷ニては有之間敷敷」と、攘夷を急進的政策として解釈し、行動する長州藩への疑念が表出してきていたことも事実であり、筆者は攘夷を急進論的解釈で一面的に理解することに反対の立場をとる。よって本節では新しい視角として、諸藩の政治運動において攘夷が如何に認識され、如何なる状況において提唱されたのかを鳥取藩の政治運動を素材に明らかにしたい。

また、幕末維新期の鳥取藩の政治史の先行研究には、『鳥取県史』三卷近世政治がある。同書は戦前に刊行された『鳥取藩史』の皇国史観的叙述を反省し、あらたに広く史料を収集して作成、刊行されたものであり、鳥取藩政治史研究の礎となっている。しかしながら、幕末期の鳥取藩の政治史についての論述には、戦後の明治維新史研究の成果および歴史理論が反映され、あらかじめ「攘夷主義への傾斜」を議論の前提として、鳥取藩の政治運動が展開されたとの論旨で貫かれているのである。よって鳥取藩政治史研究の礎としての『鳥取県史』も、もはや相対化すべき時期にきており、その相対化の試みとして、新しい明治維新时期における諸藩の政治史研究の出発の一つになれば、と思う。

2 鳥取藩池田の「家門」意識と政治志向

ここでは鳥取藩池田家における由緒、自己認識について考えていく。鳥取藩池田家とは、元和三年（一六一七）より十六年間に、因伯二国を治めた池田光政の備前岡山への移封に伴い、寛永九年（一六三二）代わって入封した池田光仲より系譜を引く池田氏をさす。

藩祖光仲の直系は嘉永元年（一八四八）の十代藩主慶行の早世と、それにくわえて慶行に嗣子がなかったため途絶え、幕命により加賀藩主前田斉泰の次男喬松丸が十一代藩主慶栄として跡目を継ぐことになったが、同年五月、入国途中、伏見において急死する。毒殺が噂されるほどの突然死に藩政府内は騒然となった。ともかくも再度、幕府との継嗣問題折衝を余儀なくされた鳥取藩、「將軍家の御血筋にて御継ぎ下され候はば、国方人心居り合ひ宜し」と要求した。藩内の動揺を押さえるため「將軍の血」を求めたのである。

これに対し、幕府は水戸藩主徳川斉昭の五男、五郎麿の鳥取藩主襲封を斡旋し、十二代藩主池田慶徳が決定した。嘉永五年（一八五二）閏二月、慶徳は初入国し、以後、水戸の藩政かい改革に習い、学制、殖産など諸改革に積極的に着手することになる⁴⁰。

周知の通り、鳥取藩池田家はいわゆる「外様」に類別されるが、幕末期に到り藩士層から鳥取藩池田家を、徳川「家門」と考える風潮が出てくる。その「家門」意識を考える上で留意点を二、三挙げておこう。

一つめに、鳥取藩池田家の原型としての池田家成立の際の徳川家康とその婿池田輝政の関係。それにくわえて輝政の子忠継、忠雄が徳川家康の外孫であるという事実が再確認されることにより生じた徳川家との近親意識である。

二つめに、大名家に「將軍の血」が入ったこと。十一代將軍家斉の子は早世したものを含めて五十五人にも及び、継嗣の家慶以外の健康な男子は概して他家の養子となり、家督を継ぐことになるが、鳥取藩池田家にも文化十四年（一八一七）九月十八日、家斉の十二男の乙五郎が、当時藩主であつた八代池田斉稷の娘喜代の婿養子として入る。「將軍の血」が外様藩に入ると、その藩主の官位、家格が上昇する。この際、池田斉稷は従四位下から従四位上に叙せられ（官は少将のまま）、家格改めとして葵の家門の使用を許可され、また江戸城の殿席が従来の「大広間」席から徳川家門および加賀藩前田家が詰める「大廊下」席へと変更されるなど⁴¹、他の外様藩との差別化が図られる。同時期に阿波蜂須賀家に家斉の二十二男である松菊（後の斉裕）が入り、鳥取藩池田家同様に家格改めがおこなわれている⁴²。

三つめに、「將軍の血」とも関わるが、「烈公」徳川斉昭の子であるという事実と、幕末期の尊攘論高揚との交錯から発生する「英明君主」イメージである。水戸徳川を継承した斉昭の嫡子慶篤以外では、池田慶徳、一橋家主の徳川慶喜のほか、川越藩主の松平直侯、備前岡山藩主の池田茂政、浜田藩主の松平武聡などが他家へ養子の例であるが、彼らは「烈公」の子というだけで、藩内外よりその才を過大評価される傾向がある。

以上の要因が、藩主から藩士にいたるまで一種の上流階級意識にも似た「家門」意識を持たせ、幕末期の鳥取藩池田家中においても政治運動の必然性を規定する方向にはたらく。

さて、幕末期、大名は内憂外患の克服を案じて、ネットワークを形成し、国事に関する意見を交換しあうようになるが、その時、大名を連結する装置的な役割を担ったものとして、江戸城本丸の殿席空間が考えられる。江戸城殿席は家格やその時点の政治的位置によって異なるが、「大廊下」席は上部屋、下部屋に分かれ、幕末期には上に御三家、下に福井、津山、阿波、明石の家門および、鳥取、加賀、福岡の外様が詰めた。この「大廊下」席に属する事実は、外様の鳥取藩にその他の外様諸藩が有さない徳川家との近親意識が発生させることになる。

加えて幕府は安政四年（一八五七）八月、ハリスの將軍謁見要求に対する幕府方針につき、本格的に政治介入が許されなかった「大廊下」諸侯へ諮問した。これを「大廊下」席内で協議し、諸外国の受け入れおよび全国的な兵制改革要求を旨とする建白書を提出した⁹。この事実により「大廊下」に属する鳥取藩池田家が、いわゆる外様とは異質な存在であり、また幕府をサポートする形で幕政に参画できうる可能性を見いだすきっかけとなった。

以上により成形された鳥取藩池田の「家門」意識は、文久期に攘夷問題をめぐり政治運動を導き出す原動力となつてゆく。

文久期、鳥取藩の政治動向が顕著となるのは、文久二年（一八六二）十月から翌三年十月までの約一年間である¹⁰。まずは国事周旋決定までの経緯を見ていこう。

文久二年四月の京坂地域は、島津久光の率兵上京に触発される形で参集した真木和泉・平野国臣ら攘夷グループが、久光を擁して倒幕の義挙を企て、その一方で薩摩藩が藩内突出派を鎮圧する事件、いわゆる寺田屋騒動が勃発するなど緊迫した状況にあった。

鳥取藩大坂留守居役からの京情報報告が国元に届くと、不穏な雰囲気を知った藩政府は、四月二十八日に在府を終え、帰国の途についた慶徳を出迎えに赴くことを決め、五月一日、家老和田邦之助が藩兵約七〇〇名を率いて鳥取を発つ。

かたや、この京坂の状況に鑑み、これを機に慶徳が国事周旋に立つべきと考える国事周旋推進派（以下、推進派と略）が存在した。推進派の一人で藩主側役の二宮奎之助は、慶徳が伏見に至るや、直ちに入京し、国事に尽力せよと説くが、慶徳はこれを却下し、帰国の途につく。この「伏見一件」は「鳥取に於て尊攘事件に付、初めて物論を生じた」とされ、以後、慶徳周旋の実現に向け、説得に取り組むきっかけとなった。

鳥取藩校尚徳館の教授方を中心に構成される推進派は、「伏見一件」を「御家」の恥辱と考えた。また「因薩長と一同之儀を通し事件を取行」うべきと考え、伏見において二宮とともに慶徳へ入京を勧めた側役の門脇将曹は、同二十一日、早速、推進派の首領格の堀庄次郎に「伏見一件」以来の経緯を説明する。以後、推進派は「伏見一件」で被った「恥辱」を挽回するべく、慶徳への説得取り組みことになる。

しかし、藩主の側近衆から成る保守派は、推進派が手を組もうとした薩長両藩の行動を「不良を図るもの」と考え、「伏見一件」についても、「幕府の定法を守れるなり」として、堀ら推進派の要求に取り合おうとはしなかった。

しかし毛利慶親、山内豊範の長州、土佐両藩の勢力が七月下旬に入京し、京都が尊攘急進派に席卷されたとの情報が国元に報じられると、慶徳は堀ら推進派の主張に興味を示し始める。翌閏八月二十八日、「幕府勅命を奉ずる充分ならず、況や藩公の建言の聴かるゝ事なし」、これでは「上書百篇すとも功なからん」とする堀の主張に合意し、江戸

での周旋を一旦は決める。この後、側近衆による幕府随順の保守的主張に決心を揺るがされたものの、九月五日、慶徳はついに国事周旋を正式に決意する。

このように鳥取藩の政治運動は、まず堀庄次郎ら藩士層から熱望され、その方法としてまず藩主慶徳が江戸または京都へ赴き、その地に滞在して朝幕双方あるいは諸侯との折衝にあたるのが目指された。しかしながら、この際、藩士の建白の論点が藩主慶徳の早急な上京のみに向けられ、国事周旋の具体的なビジョンが存在しなかったことは、以後、藩内での意見対立の溝を深めてゆく原因となる。

3 国事周旋意識と攘夷

藩主を国事周旋にあたらせるべく藩士層より提出された建白書のなかから四点をピックアップして分析し、藩主慶徳の政治運動の意義を明らかにする。

まず、堀庄二郎の文久二年八月の建白を見ていく¹²⁾。堀庄二郎は当時、藩校尚徳館の「学正」という、藩教育現場の最高責任者であるだけでなく、藩主の相談役的立場にあり、慶徳の国事周旋への決意に最も影響を与えた人物の一人である。

堀は、池田慶徳による国事周旋がすなわち、朝幕双方に対してなされる奉仕、協力であると述べ、幕府より攘夷策略の決定があれば「御両国（因幡・伯耆）の武威を以て、天朝を補佐」し、諸藩に割拠の兆しがあれば「天朝幕府之御際に於て大段御難渋之御所置」に当たるべきとした。また国事周旋の理由について、慶徳が「故烈公の御所出」或いは鳥取藩池田家が「被对幕府格別之御続柄」であるからと、慶徳の国事周旋決行に特別な理由づけをしていることは前述の外様家の「家門」意識を考える上で注目される。

ついで堀は文久二年九月に建白で、慶徳周旋による鳥取藩の政治運動が薩長外藩のそれに続くものであるとし、上京して国事周旋をおこなおうとする藩はあるが、実現できうる藩は、現状では「長薩を除くの外一向無御座」、朝廷が依頼できうる藩は薩長を除き、鳥取藩のみであるとする。そして今、上京周旋すれば「万一御親征」となった際、朝廷から「御先鋒」を命ぜられ、「御家ハ中興の御元勳」となり、「朝廷において無比の御重賞」を受け、「御自身之御功」にせよ、と慶徳の周旋が後世の鳥取藩池田家に優位性をもたらすと説く¹³⁾。

次に鳥取藩士高浜正彰(良蔵)による文久二年、藩主宛ての建白書を見ていく¹⁴⁾。高浜正彰は尚徳館舎長を務め、嘉永期の学制改革に尽力した藩教育の中心人物の一人である。なお以下の建白書はすべて文久二年に藩主慶徳に提出されたもので、内容から判断して八月ないしは九月に作成されたものと考えられる。

高浜も鳥取藩池田家が「東照神君之御孫子」に準じ、「御家柄にても外藩之比ニ非ず」と、池田家の權威を主張する。また「外藩之如く幕府を御処置」することを非難し、幕府に対して「尊攘之儀御陳ニ相成、毛利侯之如く公武御合体之儀精々御取持被」ることは「御家之御責任」であり、かつ「御家のみニ不限、御親藩は御同様」と、国事周旋を薩長外藩に委ねてはならず、それをおこなうのは鳥取および親藩でなければならないとする。また、「毛利侯之如き之外藩」でも国事に尽力しているのに「御親藩」が傍観している状況ではないとし、この機会に慶徳が「御親藩之御方々様へも御廻文御座候而、方今之時勢不可黙之趣伝々儀建白」し、「親藩之威力を以、外藩畏服仕候処出来候而、幕府之重リ」となるよう勧誘すべきと述べる。

最後に藩士大塩則誼(久米蔵)から出された建白書の内容を見ていく¹⁵⁾。大塩則誼は尚徳館教官(句読方)である。大塩は「西国之諸侯、京師へ昵近し当時之形勢」を疑問視し「幕府ニ於御一大事」状況であると述べる。かつ文久二年五月、大原勅使東下の際の要求によって「一橋越前之三公を御補佐」により幕府が攘夷決定することを想定し、そうなれば「早々諸藩退京ニ相成り天下一致之所ニ至」り、同時に「薩長二州杯之深意、実ニ以斟酌致し難く奉存候、

万一天子を挟ミ兵端を開」く危険も避けられるであろうとする。また池田家は「幕府ニ於て格別之御至親」であるから、然るべき処置をはかるべきとし、慶徳の「御英明を以、急ニ御建白ニ相成り、速ニ幕府御役人之曲直を黜陟ニ相成り、幕府より政途御一新之旨御奏聞被成、且攘夷之令を五畿七道之諸藩ニ下し、公武御合体之御処置ニ相成候様、御補佐」すべきと述べる。さらに国事周旋の具体的な方法として、在京する外藩勢力の幕府批判の根拠となっている「夷賊猖獗の義」、つまり攘夷を幕府に決意させ「攘夷の令を海内へ下」すと続ける。そして「隔心」する「薩長二藩等」外藩勢力に対して、国事周旋の「趣意」を嚴重に責問すれば、慶徳の「名天下に溢れ」、薩長は「必屈服」するであろうとする。

尚徳館関係者が主体となり構成された堀ら藩内の推進派は、薩長外藩勢力が滞京し、それぞれの周旋により生じた状況に乗じて、慶徳を滞京させ、薩長同様に周旋に当たらせて、「因薩長」三藩による義挙に参加しようとした。しかし「伏見一件」により挫折をみると、「御家」の権威を主張し、慶徳の周旋を自明であるとし、くわえて日和見状態と化している親藩勢力の奮起を促すべきと主張した。

以上から、藩士層から発せられた国事周旋推進要求の最初の動機づけが、「夷狄」の接近により発生した体的危機ではなく、政局を主導する薩長外様藩の政治運動により、あるべき將軍権力による政治体系がまさに崩壊に瀕するという国内的危機から発生しているといえる。

そして薩長外様藩主導の中央政局に、鳥取藩が参入していくためには、外藩には存在しない「御家」の由緒、格といった封建的な自負心によって理論武装し、薩長外藩を不当化し、自らの国事参加を自明化するほかはない。つまりそれは藩士の建白書において、慶徳が水戸前藩主徳川斉昭の子であり、慶徳の周旋を「上天朝から下列国に至る迄、一同希望」するから、国事に尽力すべきである。また池田家が「幕府格別の御統柄」「東照神君の御孫子」に準ずる家柄であるから、朝幕双方を補佐し、「親藩之威力を以、外藩畏服」しなければならない、などという論理をたて、これ

をもって外藩を差別化し、藩主慶徳の国事参加を必然化しようとするのである。

それでは藩主慶徳の国事周旋によってなにを得ようとするのか。換言すれば、鳥取藩政治運動の真の目的はなにか。それは堀の建白にみえる「万一御親征」となれば、その「御先鋒」となること、「中興の元勳」となることであり、かつ朝廷からの「無比の御重賞」を得て、慶徳自身の「功」とすること。すなわち藩士層が望むのは、現状の政局ないしは、未来の不測の状況における鳥取藩池田家の優位性の獲得、或いは個別領有権の維持であり、つまり如何なる政治状況においても、自己の存在を「正当」たらしめることであった。ここで、藩士の求める「正当化」のベクトルが、上から規定された行政機構としての「藩」ではなく、自らが仕える「御家」へ向けられていることは注目に値する。

この推進派の主張には、儒者としての立場が反映されており、政治運動が自家のためのみならず、「三百年徳川家之恩沢」に報いるためのものと認識されている。また推進派の国事周旋志向は、一定の攘夷論により形成されたものではない。例えば堀が、急進的攘夷論者の平野国臣を「狂人」と評し、藩内から平野らへの加担者が無いよう慶徳を論じたことからわかりうる¹⁶⁾。

鳥取藩内の推進派は、中央政局において争点となっていた攘夷問題の解決を手段として国事周旋をおこない、鳥取藩池田家を「正当」たらしめるべく主張した。ならば、攘夷を手段とすることは必然であったのか。

京都詰周旋方の景山龍造は文久二年十二月十三日、江戸での一通りの周旋を終えた慶徳に対して次の建言をおこなった¹⁷⁾。まず景山は再び京都へ向かう慶徳に、そのまま滞京し、周旋を続行するよう「御帰京の上は、朝議御必然御与参の儀と奉存候」と慶徳の朝議への参与が必然である旨を述べ、慶徳が京都において「公明正大曲直邪正御弁解」をおこなえば、「私設管見の輩」、つまり長州系尊攘急進派は「鋒を相収」めて退京し、急速な攘夷断行要求はなくなる¹⁸⁾と推測している。しかしながら急進派の退京を見届け、そのまま慶徳自身も帰国してしまつては、慶徳の「名は立」つが、「折角之御尽力水之泡と相消」えてしまう。京都では、外藩による「勤王も攘夷も不振儀明如火」であり、外藩

が自領に引きこもり「割拠」を企て始めるには時間の問題である。よって慶徳は「御帰国御袖手御傍観」してはならず、その時こそ中央政局における慶徳の存在を知らしめる契機であるとし、慶徳の長期滞京周旋を求める。

景山は国事周旋に際し、攘夷のみを唱えることをそれほど重要視してはいない。むしろタテマエであつてもよいとするのである。重要なことは慶徳が京都に長期滞在し、朝議に参加することであり、それがすなわち鳥取藩の「正當化」の手段であると認識しているのである。ゆえに正當化の手段は「攘夷」だけに限定されるものではない。政局上には手段としうる選択枝は他にも存在し、攘夷提唱はその一つの可能性にすぎない。政治運動において攘夷提唱を手段として選択した意図は、国事周旋の運動対象が関係する。例えば、後述する藩主慶徳の文久二年十一月以降の国事周旋には、幕府が朝廷から派遣された攘夷別勅使に適切に対応できるよう、幕府に当面の攘夷問題に対応する意志を持たせるべく攘夷提唱が必要となった。ここでは幕府の現状を否定しなければ周旋は成立しないが、状況に応じて正當化の手段は流動化し、否定の方向も異なることになる。ただ藩主池田慶徳による政治運動において、「攘夷」が手段として選択されたといっても、それが藩是でないしは当面の藩方針とはならないことを付言しておく。あくまでも攘夷提唱は藩主慶徳が上京し、中央政局に止まり、鳥取藩或いは慶徳の存在を朝幕および全国諸藩に知らしめ、正當化する手段であつたのである。

4 攘夷と国事周旋の展開

幕末期、いわゆる幕藩制解体期において藩は、かつての大名領としての「家」のあり方を模索し始め、自ら徳川家との近親関係を強調し、かつ厚遇を受けた鳥取藩池田藩においても多分にもれず、個別領有権を維持するために「家」の自立ないし割拠が志向され始める。これは従来、幕藩制の構成要素であるはずの「藩主」が、本来の大名家の主と

しての自己像を再確認する過程であると考えられる。このことは前章において、藩主慶徳の国事周旋を求める藩士が「御家」Ⅱ「自己」の正当化を志向していることからもうかがえよう。

右のような、藩主および藩士による「家」の自立志向は、文久三年（一八六三）以降、顕著となる。以下、前述の攘夷提唱による国事周旋（以下、攘夷周旋と略）Ⅱ「自己正当化の一手段」の論理をふまえ、各局面における池田慶徳の政治運動を分析し、藩の自立志向の創出について検討していく。

文久二年（一八六二）五月二十六日、江戸からの帰国後、推進派藩士からの度重なる建言により京都の不穏な状況を察知した慶徳は、幕府へ十三カ条からなる幕府改革要求を進言する²⁰。その骨子は、幕府主導の京都警衛の徹底による「異姓之大藩（Ⅱ薩長など）」の退京と、「親藩之大家」の政治参入、特に前尾張藩主徳川慶勝の上京周旋を求めるものであったが、この段階では、自らが国事周旋に当たるとは考慮の対象には入らず、専ら幕政改革による状況打開を図っている。

また慶徳は九月五日の幕府宛て建白書においても、「天意は幕よりも薩長先に知之と申姿」となっている状況を非難し、また頻繁な朝廷からの勅使東下にみられるような、これまでの幕府の朝廷に対する受け身の政治姿勢を批判し、徳川慶勝や前越前藩主で、政事総裁職の松平春嶽ら「親藩有志の大諸侯」が上京して叡慮をうかがうなど、幕府側から積極的に京都に赴き「君臣の御礼」を尽くし、まずは「公家御一和」の素地としての「尊王御一和」の状況を築くべきとした²¹。慶徳は右の建白書を作成し、同日幕府・親藩の奮起を促すべく、京都、江戸に赴き国事周旋に当たるところを決意する。

十月二日、鳥取を発った慶徳は、同七日に伏見に至り、二条斉敬より国事周旋を依頼する書翰を受け取る。これは同四日に天皇により二条に与えられた慶徳への内勅を受け、早急な上京を命じるものであった。文久二年以降、諸藩の政治運動の焦点は中央政局と化した京都へと向けられ、禁裏守衛のために滞在することで、朝廷内のさまざまの公

家と接触していくのだが、上京に至るまでのきっかけとして、朝廷内の特定の公家との人脈が重要になってくる。

薩摩藩島津家と近衛家、土佐藩山内家と三条家などの縁戚関係はよく知られているが、鳥取藩池田家には二条家と縁故が存在した。当時右大臣であった当主、二条斉敬の生母は水戸藩徳川斉昭の実姉であり、二条斉敬が慶徳にとつて従兄であった事実からも、これ以降の慶徳と二条家の密な関係をうかがえる。また文久二年五月、勅使として江戸へ赴いた大原重徳も、慶徳宛ての書翰において「一橋殿は御実弟之儀故、御登庸有之上は、於貴兄（慶徳）も御実弟合心戮力尊攘之道を被行候」²⁰と慶徳の周旋を望んでいたことから、公家衆が將軍後見職一橋慶喜の兄としての慶徳に大きな期待を寄せていたことがわかる。

慶徳は十月十五日入京後、国事周旋の勅諭を受け、同二十日、武家伝奏坊城俊克より江戸への東下周旋の命を受け、翌二十一日には江戸へ向けて発つ。慶徳はこの際、朝廷から幕府に対する勅使への待遇改定に関わる数カ条の朝旨を携え、十一月五日に江戸へ着き、以後、松平春嶽、山内容堂、松平容保との会談を重ねた。そして当時、幕議において決定された奉勅攘夷の方針に対して異議と唱え、將軍後見職の辞任を表明し、登城を拒否していた実弟、慶喜の説得に当たった。

慶徳の江戸での周旋は、慶喜との攘夷問題への幕府側の対応策をめぐる両者の意見対立で難行していたが、ともかくも十一月二十七日、攘夷別勅使三条実美が江戸城に入り、攘夷の勅諭を正式に伝え、將軍により一応は受託された（攘夷断行の件は来春上洛の際に決議、親兵設置の件は固辞）。

これを見届けた慶徳は、自らの江戸における周旋に区切りをつけ、十二月四日、江戸を発ち、同十九日に再入京する。入京後、朝廷への江戸の政情報告や、在京中の前宇和島藩主伊達宗城、熊本藩主細川慶順の実弟長岡護美とともに、朝廷に対し外藩勢力の退京を求める請願運動をおこなうなど多忙を極めた慶徳は、新年を京都で迎えることになる。その後、大坂湾警備の状況を視察するべく下坂し、文久三年（一八六三）正月四日から大坂藩邸に滞在し、同七日

には大阪湾巡視中であつた天保山および紀淡海峡等を巡視した。そして同十五日、慶徳は幕府がまず攘夷期限を決定し（一年から一年半後）、その後、早急な武備充実につとめ、將軍権力のもと、挙国一致体制により夷狄に備えるべきとする幕府宛て建白書をしたため、同日帰国の途についた²¹⁾。

以上のように、文久二年五月の幕政改革を求める建白書の提出から同年九月、自らの国事周旋を決意するまでの慶徳の政局に対する視角は、外藩の政事運動、攘夷問題の対応に手を焼く幕府の因循ぶりに向けられた。しかし自らが国事に当たる意志はなく、尾張および越前など親藩勢力の奮起を促し、親藩主導の幕政改革を要求することで、幕府の現状を否定し、幕府に外藩の排除を実行させ、京都における外藩の政治活動を否定する手段をとった。

その後、国事周旋に当たるべく上京した文久二年十一月から、大坂湾警備の視察を経て、一旦帰国の途につく文久三年正月までの慶徳の政治運動の視角は、現行の幕府を、朝廷の要求する攘夷が適切に受け入れうる状況へと修繕することに向けられた。文久三年正月十五日の幕府宛て建白書においても「内憂」への対応策として、將軍が攘夷断行の期日を定めることにより、將軍権力のもとでの挙国一致体制の構築を求めているように、この段階でも慶徳の目的は幕府の再建にあつた。また慶徳が江戸での周旋後、自らの手柄を望まず、即座に帰国する姿勢を見せたことからわかるように、いまだ藩士層の求める自己正当化への志向はなされず、慶徳の「攘夷」の提唱は幕府救済の手段となつたのである。

5 大名家の正当化と自立志向

前にみた池田慶徳の政治運動は、幕府救済の色が濃く、ここから藩士推進派の求める「御家」の「正当化」を目指すには、藩主が既存の將軍権力からの自立を志向すること、或いは藩主たる「自己」から大名家の主たる「自己」像

への転換が必然となる。ここで藩の自立志向の要因を提示してみよう。

一つめに、藩としてなすべき役割が明確化してくること。例えば、文久三年二月十四日にとりあえず決定した攘夷期限（四月中旬、後に五月十日と改定）とそれに伴う摂海警備および文久三年三月に朝幕双方より諸藩（十万石以上）に下された禁裏守衛の命。

二つめに、幕威再興を目指す政治運動と現行の幕政との間に矛盾が生じたこと。つまり文久三年五月、幕府の生麦事件の償金支払いにより、攘夷周旋により幕府救済を目指してきた彼らの国事周旋が矛盾したために生じた幕政への不信感である。

三つめに、藩主の上京、禁裏守衛などによって朝廷との接触を密にするにつれ、彼らの政治運動視角が朝廷内部の問題へと転化されたことである。

以上を考慮し、文久三年初旬以降の鳥取藩の政治運動を検討していく。

さて、文久三年正月十五日、大坂を發った慶徳は同十九日、帰国途中の姫路において、將軍上洛の先発として上京してきた一橋慶喜と老中格小笠原長行から將軍上洛まで滞京し、国事周旋に当たるよう求められ、正月二十三日、再び入京し、北野松梅院に入った。入京した慶徳は、当時、在京中の慶喜、容保、容堂、春嶽、宗城ら諸侯および、前関白近衛忠熙、中川宮（のち朝彦親王）とともに、將軍上洛の前段階に、前年の攘夷勅使派遣の折から問題となっていた攘夷期限確定について会談を重ねた。

慶徳はここでも攘夷期限の早期確定を主張した。『鳥取県史』三巻では、この段階に至り、彼の国事周旋の方向性が、藩内外の急進派の影響を受け、攘夷主義的傾向が強調されはじめたとする。しかし、前年の江戸での周旋以来、慶徳の国事周旋の目的は、幕府が攘夷の主導権をとりうる挙国一致体制を構築することであって、それはこの段階においても貫徹されており、慶徳の周旋目的は攘夷即断を要求する急進的主張ではなく攘夷期限の確定に向けられていたの

である。

慶徳は朝廷から二月二十一日、「摂海守備総督」を任命されると、すぐさま大坂へ赴き、加茂社行幸の命が下ると三月八日上京し、同十一日の行幸に供奉するなど、朝命に柔順に活動した。慶徳は三月七日の將軍の庶政委任勅諭の受け取りおよび行幸の完了に自身の周旋に一応の区切りをつけ、大坂湾警備および隠岐警備を理由に同一六日、帰国の途についた。

さて、慶徳の帰国後、朝廷は文久三年三月二十七日、諸藩に対し一万石につき一名の割合で、御守衛兵（親兵）の差し出しを命ずる。これに対し慶徳は四月二十四日、岡山藩主の池田茂政宛て書翰において、朝廷から親兵差出の命が下り、鳥取藩は京都へ三十三人は差し出さねばならず、また幕府よりも京都守衛の命があり、藩兵「一備」は差し出さねばならない²³。しかし鳥取藩には「隠岐応接」（松江藩と共同）および大坂の天保山、尻無川付近の警備があり、「进而も人数は引足不申、自国領海は如何手段無之次第、夫々手当向も行届兼、大当惑」していると述べ、岡山池田家が如何に対応するのか問い合わせをおこなっている²⁴。

そもそも自領警備は、幕藩制軍役体系の一環であり、文久三年にはその遂行も藩兵だけではままならない状況に瀕していることも事実で、これを期に鳥取藩は農兵の徴発に力を注ぐようになる²⁵。つまり摂海および京都への兵動員に触発される形で、自領警衛の意識革新が図られたと理解できよう。

また文久三年三月から八月十八日に起こったクーデター、すなわち文久政変までの間、諸藩には朝幕双方から禁裏守衛について異なる命令が下るようになる。特に朝廷からの守衛命令には、三条実美ら急進派公家が主張し実現した親兵制度と、二条斉敬、中川宮ら朝廷上層部から御所九門、禁裏六門警備というように、朝廷内に異なる二つの命令系統が存在した。これは藩側が差し出す藩兵の絶対数を増加させたばかりか、いずれの命令系統が正当なのかという疑念を生じさせ、朝幕双方へ向けて、政令画一化を求める声が強まっていく。

慶徳が自領の警備で頭を悩ませているなか、五月九日、横浜において、幕府はイギリスが要求していた生麦事件の償金を支払う。当然、これに対し朝廷および諸藩勢力は幕府非難の反応を示す。なぜなら四月二十一日に將軍家茂は攘夷期限を五月十日とする旨を朝廷に奉答しており、滞京中の將軍と留守を預かる幕閣の方針が完全に矛盾してしまったからである。

償金支払問題の情報を得た鳥取藩京都守居の安達清一郎（のち清風）は、すぐさま帰国し、これを藩主慶徳に報じた。幕府の因循行為に、これまで幕威再建を目指す国事周旋にあたってきた慶徳は憤慨する。またこの償金支払問題に、実兄の水戸藩主徳川慶篤が関与していたことで、幕府に攘夷の主導権を握るよう促してきた攘夷周旋は致命的な打撃を受けた。

慶徳は五月十五日付の池田茂政宛書翰において、「江戸の次第何とも驚嘆の至、実以水公（慶篤）毎度の失体御同情痛却至極」とし、幕府がこのような因循ぶりでは「是迄彼是周旋仕候儀も水泡と消滅致し、如何とも絶言語候」と、幕府および兄慶篤への不信感をあらわにした。そして慶徳自身が上京して朝廷内の動揺を押さえようとしても「兄弟之中ニ違勅之罪を負候ては、容易ニ罷出候も深畏入」と、これ以後の政治運動もままならないと述べている²⁶⁰。

かたや、幕府方針に対し憤懣やる方ない茂政は五月二七日付の慶徳宛て書翰で、幕府の因循ぶりを非難した。さらに、「天下の大勢、戦争眼前に有之候間」、つまり対外戦争勃発の危険性がある現況において、「此上は因伯備、心を合、山陰山陽を鎮圧致し申度御座候間、耆人は京畿、耆人は自国に罷在、変に乘じ作（美作）・播（播磨）に兵を出し、東西応援を為考に御座候」と、幕府が攘夷問題の処置をおざなりにする状況で、自領周辺（中国地方）において、鳥取・岡山両藩の共同により自主的な必戦体制を構築しようと提唱する²⁶¹。

これに対して慶徳は六月五日付の茂政宛て書翰で「良策」と同意している²⁶²。むしろ、この茂政の主張は構想の域を出るものではないが、幕府・親藩勢力の政治運動がいき詰まるなかで、「地域」としての軍事協力体制を思考し始めた

事実には、藩主の既存の枠組みからの自立志向を見いだせよう。

この間、鳥取藩内では、文久三年五月の幕府の償金支払以降、藩主慶徳の上京周旋決行の可否をめぐり、文久二年五月「伏見一件」以来、尾を引いてきた推進派（側役兼周旋方頭取の土肥謙蔵ら）と藩主側近勢力を中心とする保守派（側用人和田平太夫、同黒部権之助、小姓頭側役兼帯土肥兵太夫ら）との間の確執が再燃してきた。

藩内情勢が混沌とするなかで、慶徳は幕府（五月二十四日）、朝廷（六月二日）から上京周旋を求められた。この折、堀庄次郎は慶徳に対し、藩主側近衆により推進派（周旋方）の言路が封鎖されている状況を批判し、また「一定之廟算十分之御決心無座候而ハ、容易ニ御上京被遊間敷」と、慶徳の上京周旋の前に然るべき藩是の決定が急務であると建白した²⁰⁰。

鳥取藩は、文久二年十月以降、藩主慶徳の上京周旋をメインに政治運動を展開してきた。この政治運動は幕府が攘夷を主導する状況を創出すべくおこなわれてきたから、鳥取藩の方針（藩是）が「攘夷」に一定しているかのように思われがちだが、鳥取藩ではこれ以前も、そして以後も堀の憂慮する藩是の決定はなかった。藩是未決の藩内事情によって、これ以後、さらに藩内確執が深まり、文久三年八月十七日、京都において当時、伏見留守居・京都留守居兼帯であった河田佐久馬（のち景与）ら、二十二名の藩士が藩主側近グループを暗殺するテロ事件（本圀寺事件）を引き起こすことになった。

具体的な藩の政治方針は未確定のまま、慶徳は朝幕双方の命を奉じ、六月七日、近日上京する旨を布達し、同二十一日鳥取を発ち、二七日入京し、本圀寺に入った。同時期には阿波藩世子の蜂須賀茂韶（七月十五日）、岡山藩主池田茂政（七月十七日）が入京し、同四月から禁裏守衛のため在京中の米沢藩主上杉斉憲とともに、同六月九日の將軍家茂東帰後の京都において、二条斉敬ら朝廷上層部と関係を密にし始める。上京した慶徳らは、真木和泉・久坂玄瑞ら長州系急進派が三条実美ら急進少壮公家を通じて主張していた「攘夷親征」論への対抗として展開されてゆく。

慶徳は七月七日参内の折、攘夷親征の布告等に関する諮問を受ける。即答を拒んだ慶徳は同十四日、そもそも旧来は「御親征」により政事が執行されてきたが、現状では公卿、幕府、列藩が存在する。もし夷狄が侵攻してきたなら、まず、「幕府拒戦の術を尽す、勿論の事」、「公卿英武の諸藩有将略輩に詔有て、戦の術を尽さ」せ、なおも苦戦するなら「親王方被任将帥、其上にて御親征」を断行すればよいとし、急進派の機先をそらすための猶予策として、まうち国四国方面の要港へ攘夷監察使を派遣すべき、との建白書を提出した²⁰。

この慶徳の段階的な親征の主張は、他方、幕府による攘夷問題の早期解決をも促すものであった。それは、慶徳が同十二日付の徳川慶篤宛て書翰で、京都における攘夷親征論の存在を報じ、「叡慮貫徹攘夷罰奸之御処置、水卿（慶篤）御一手にて御進発被遊程之御果断」を要求していることからわかる²¹。

また、段階的親征論は、慶徳の在京時、少なくとも文久三年八・一八政変までは政治運動の主説となり、自らを京都に在京せしめることで、自己の正当化をはかるための一手段として唱え続けられた。

前述の通り、慶徳、茂韶、茂政、斉憲の四人と朝廷上層公卿の関係は「私に朝議に参与する事を命ぜられ、総て詔勅の下るもの四侯の手を経るに非れば敢て下さず」と、朝議への参画を許されるほど密なるものであった²²。そして慶徳らは朝議との関係を深めてゆくなかで、個人としてではなく、一つのグループとして国事周旋に取り組むようになる。

慶徳は七月二十四日付、茂政宛ての書翰において、「長薩紛統一糸」つまり、長州系急進派と在京の薩摩藩勢力のもめごと（薩摩藩の禁裏守衛停止、御所九門の通行不可など）につき、「一例集会」の開催を求める²³。また、同集会は京都の芸州藩（浅野）邸でおこなわれ、「津山中将（松平慶倫）、淡路（蜂須賀茂韶）、津（藤堂高潔）両侍従」へ、集会議事に関する連絡がなされており、慶徳ら朝議参加諸侯の他、浅野、津山松平、藤堂を含めた諸侯グループが形成されていた。この諸侯グループは八・一八政変後、そのまま滞京した慶徳らによって組織化され、「組合」と称して、禁裏参内

および市中警備に携わるようになる。成立当初の諸侯「組合」は、浅野茂勲、茂韶、慶徳、茂政を頭に四分され（一、四番）、ローテーション制で決められた「御用日」には参内、あるいは担当部署の警備に当たるといった形態がとられた。

以上のような①京都（禁裏）、大坂湾警備に多くの藩兵が徴発されたことにより生じた自領警衛の念と朝幕双方より政令が下ることへの疑念、②幕府の償金支払問題により生じた幕府方針と自らの政治運動の間の矛盾および幕府への不信感により触発、志向された自領周辺地域の攘夷必戦体制、③二条斉敬ら朝廷上層部との密なる関係により生じた朝議参加と「朝巨化」の傾向、④諸侯集会・諸侯「組合」等による藩単位の政治的結束は、「いずれも既存の枠組み、つまり將軍権力からの自立志向の一側面と位置づけられる。

文久三年初旬から八・一八政変後における政治運動は、前述の諸要因により將軍権力からの自立志向を生み出し、かたや朝廷からの依存度の高まりにより、朝議参加という新たな政治運動の形態で展開された。ここでも慶徳の政治運動の骨子は「攘夷親征」運動の批判等に見られるように、一貫して攘夷問題への対応に向けられ、彼らの政治運動と攘夷との関連性がうかがえよう。そして藩士の求める「御家」の正当化は、既存の枠組み（幕藩制、將軍権力）からの自立志向と、朝廷との密接な関わりの中かで展開された文久三年五月以降の政治運動により体现された。つまり攘夷周旋により中央政局に長期にわたり存在することが、すなわち個別領有権維持のための自己正当化の手段であったのである。

しかし、慶徳らの政治運動も文久政変後に破綻をきたすことになる。政変後、老中酒井忠績を上京させ、朝廷側の意志が引き続き攘夷であることを確認した幕府が、九月十四日、横浜鎖港談判を開始したことにより、慶徳らの攘夷周旋を旨とする政治運動の必要性が消失したからである。

前述の通り、慶徳ら諸侯は政局における明確なビジョンを見いだせなかった。よって、彼らの政治運動においては、

眼前にある政治主張および体制を否定することでした。自己の正当を獲得することができなかった。つまり、当座の局面において否定対象を見いだせないことは、まさに彼らの政治運動の破綻を意味したのである。

鳥取藩および諸藩の政治運動の限界については、同十月、慶徳と時を同じくし、京都から帰国していた池田茂政が一二月四日、慶徳に宛てにしたための書翰中にうかがえる。

まず茂政は、「兎角、薩・越勢甚敷様子、加之、会藩も同様ニて専ら因循説を主張」していると、島津久光、松平春嶽らによる開国主義的思考および公議政体樹立を目指す政治運動を因循とする。また、仮に慶徳らが「今上京候ても、迎も右之説ニは」同意できず、いわんや「貴兄（慶徳）・小子（茂政）等之力ニて、薩・越・会之説を破り候儀は、千万六ヶ敷」、今となって「攘夷は不宜、開港は宜敷と申候ては、名義の相立」たず、これまでは攘夷を表立って主張して事足りたが、「今、されハとて考も付兼候」と、久光らが主導する中央政局に、もはや彼らが参画する余地がないとの言及は、まさに慶徳らの攘夷提唱を手段とする政治運動が限界にあったことを物語るものであろう³⁶⁾。

小 括

以上、文久期の鳥取藩の政治運動を素材に、藩による政治運動、「攘夷」周旋の意味について考えてきた。

中央政局に対する藩勢力のねらいは、国事周旋に携わることにより自家の「正当」を獲得することであった。彼らはその手段として「攘夷」周旋を選択し、政治運動を展開した。ただ藩主池田慶徳を中心とする鳥取藩の政治運動は、藩是が未確定であったことが影響し、政局に対する明確な見解を打ち出せず、ただ眼前の問題を否定することにより中央政局に存在しえたのである。

文久期に発生してきた藩士層の建白に見られる国事に対する積極的姿勢、既存の枠組みからの自立を志向しはじめ

た藩主の意識は、慶応期の藩主層の藩主の意志に拘束されない自由な動向、幕長戦争期に見られる反幕府的な政治運動への連続性をも想定させよう。今回取り上げた鳥取藩に限らず、国事周旋を推進する藩の目的はいずれも、個別領主権維持のための自己正当化であったと考える。その過程で生じる政治運動の異質性は、「攘夷」或いは「公武合体」などという言葉の意味に対する認識の差異によってではなく、自らを正当化するための「手段」の差異によって生まれる。だから「尊攘派」や「公武合体派」という派閥抗争的な枠組みで藩勢力の動きを捉えては、彼らの政治運動の意味を曖昧にしかねない。

ゆえに、個別藩の政治運動を理解するためには、その背景および手段を再確認する作業が必要であり、このことはそのまま、明治維新政治史研究の当面の課題であるといえよう。

第二節 京よりの政治情報と藩是決定 ―鳥取藩の情報収集システム―

1 京都留守居の理解

十九世紀半ばの京都には、あらたな政治舞台として国内外からのまなざしが注がれた。大名家においては「朝廷の藩屏」たる自らのありようを、徳川幕府においては「夷狄」から京を守るという自らに課せられた「征夷」職掌を確認し、長きにわたる全国支配の正当性の是非について、その「主」たる天皇に問いただす場となる。このように幕末期の京都が「政治都市」化したことは、研究史におけるなかば常識³⁵となり、そこにおいて展開される政治事象につい

ての本質的な意味についてはさして問われることはない。「政治都市」幕末京都において展開される大名家の政治運動において欠くべからざる分子である京都留守居についても、在京の要職であるとの漠とした解釈のもとに論じられて
いる感が否めない。

ならば、日本近世史の研究蓄積に在京の大名家諸機関に対する理解の方法を委ねたいところであるが、大名留守居研究の主眼は江戸に置かれ、寄るべき業績が見当たらないというのが現状である³⁶。近年、大名家と公家社会との儀礼的な諸関係を論じるもの³⁷、大名家における平時の軍役としての京都警備を論じるもの³⁸など、近世京都と大名家の諸関係を論じる研究は出始めてはいるが、幕末期の大名家在京諸機関のありようを照射するものではない。かつて服藤弘司がその著書『大名留守居の研究』の結論において付言したように、現在においても「京都留守居の考察が、大名留守居の実態、とくに、幕末期のそのの解明のうえで、必須欠くべからざるものである」にもかかわらず、「決して忽せにできない」³⁹状況にさして変わりはないのである。その理由としては史料的な制約も考えられる。現在、全国に所在する旧大名家史料において、近世京都に関する史料（公務日記および書簡など）は点数および情報量において、江戸のそれに比して乏しいといわざるをえない。幕末の戦乱状況における被災の影響もあるが、管見の限り、文久年間以降の史料はその残存が確認されることが多く、それ以前のものについては、大名家中において廃棄書類としての扱いを受けている可能性があるのではないかとも思える。

とはいえ、幕末期の在京諸機関に対する理解を等閑にするわけにはいかないで、まずは幕末政治から照射される大名家在京機関について論じていきたい。そのために本節では、鳥取藩池田家の京都屋敷を中心とした京坂地域に所在する大名家諸機関について基礎的考察をおこない、幕末期において同機関が大名家の政治運動にいかに関わり、そこから発せられる政治情報が大名家の政治意思決定にどれほどの規定性を有したのかを論じたい。以下、大名家の京・大坂の屋敷については、池田家の居城に所在する藩政執行部の管理のもとに遠隔地に置かれ、同地における業務を取

り扱うセンターの意味合いから、「支局」と表現することとする。

2 京都留守居と格式秩序

近世大名家における京都屋敷に対する理解は、先の理由をもって立ち遅れているといわざるをえない。「留守居」であるとはいえ、大名家江戸屋敷におけるそれとは、就任できうる格式、そして職務内容も当然ながら異なる。鳥取藩池田家の京都留守居につき、同家に関する明治期の編纂物である『鳥取藩史』では、以下のように解説される。

京都留守居は、禁裏に対する御勤向に対し、藩を代表すること、幕府に対する江戸御留守居の如し。尤も凡そ所司代、若くは京都町奉行を通ずるものとす。今切関所女通手形は、家老より所司代に申達請求するの例なりしか、元禄五年以後、当役より直接所司代に向け請求することゝなれり、一体に江戸御留守居に比し、交渉事件多からず、皇室御慶弔に対する御使者の肝煎、藩公任官昇進の節、口宣受の準備等は重要な事項なるも、其度数に限有りて、御歴代一兩度之有るに過ぎず。然るに安政以後朝幕関係切迫し、諸藩主・家中及浪士の入洛する者多く、従て京都留守居は、非常の劇職となり、且又政治手腕を要すること多くなれり。格式諸奉行、仕人二人即四人扶持十六俵を給せらる。⁴⁰

京都留守居は朝廷に対する池田家の代表として、元禄五年（一六九二）から存在し、皇族および朝廷内の慶弔に出席する使者の斡旋業務、大名の官位昇進の際における口宣の授受がおもな任務であるが、大名一代の間に数度とあることがなかった。ただ、他の大名家においても、「用達」として京の商人を士分格として雇用しているように、池田家

においても用達（呉服所）諸家との関係を持った。ならば、用達との経済的な諸関係が生まれ、恒常的な業務があるはずであるが、京都留守居は「閑職」と評される。これには、池田家が十七世紀半ば以来、伏見屋敷を有し、同所に住居する伏見留守居が京都の朝廷へ対応し、かつ用達諸家とのつながりを有したからである。

池田家の伏見留守居は、寛永九年（一六三二）、池田家の「御国替」（注にて説明）当初から存在し、文久三年（一八六三）八月、河田左久馬（のち景与）が罷免されるまで、河田家によって世襲されたが、同家には伏見留守居と同時に京都留守居を兼帯していた時期がある。文政九年（一八二六）七月、河田佐助は「京都御留守居御目付請持、伏見御留守居兼帯」を命じられたが、佐助の求めにより伏見留守居を本務とし、京都留守居を兼任している⁴¹。常時遂行されることのない京都留守居の任を兼務することで十分に事足りうるものであった。京都屋敷は、元禄年間より油小路下立売に存在した。そもそも大名の京中への進入は差し控えることが常であったので、池田家の場合、江戸参勤の折には伏見屋敷に宿泊し、同地より京を回避する形で、大津に抜けた。大名の滞在することのない京都屋敷には留守居、補佐役としての「目付」、諸々の雑用にあたる「仕人」が駐在する施設として存在し、大名の滞在に堪えうる機能に欠けていたと考えられる。

このような京都支局の管理者たる京都留守居が、『藩史』の解説によれば、「安政以後朝幕関係切迫し、諸藩主・家中及浪士の入洛する者多く」なり、政治手腕を要する「非常の劇職」となってゆく。とはいえ、大名家の国事周旋運動の活発化にともない京都留守居という役職の本質的な意味合いが変容するのかといえ、それは非である。京都留守居が幕末京都で大名家の政治運動を代表するポストというように考えられ、藩内において政治的発言権を有し、政治に長じたものが就任するものだというイメージが、幕末維新という時代を考える際に否応なしに働いてしまっている。京都留守居という役職の本質を知るには大名家中の格式と職分をふまえて考えなければなるまい。

第一章において述べたとおり、大名家臣の格式と職分は密接にリンクする。池田家の格式の構造、身分階層を示せ

ば、家老職を担う「着座」を筆頭に、着座家など高い家柄の子弟のために設けられた「大寄合」、足輕を統率する「番頭」、鉄砲および弓兵を引率指揮する「物頭」、「使番」とも称され、戦時には、陣中において軍使・伝令に勤め、以後、物頭同等の待遇を受けた「羽織幌」、高禄だが、定職を持たない「寄合組」以上の格式は、家柄や拝領物によって与えられた格である。それ以下の格式は、その家が勤める役儀や功績に伴い付与される。つまり功績により、一定度の上昇が認められる格式ということになる⁴²。

京都留守居を職分としうる家は、「諸奉行」の格式を有することが条件とされた。また、江戸留守居には、「諸奉行」より上級格式の「物頭」格を有する家が任じられた。このような家格と職分により構成される武家社会システムは、政治混乱をきたしたといわれる幕末においても厳然として機能しており、これによって幕末期の大名家臣それぞれの政治運動の性格が、おおよそ把握できると考える。

大名家中において繰りひろげられる幕末期の政争とは、すなわち厳然として機能している大名家臣の格式と職分の相関関係によって形成される政治秩序への参入を望むもの、秩序自体を改変し、あらたな政治秩序を構築しようとするもの、これを固持し、伝統的権威の維持に固執するものによって展開される。たとえば、次節において、主に取り上げる鳥取藩士安達清一郎家は、同家の初代弥一兵衛が、寛文七年（一六六七）、藩祖池田光仲に「御坊主」として召し出された後、貞享四年（一六八七）に還俗し、炭薪奉行に就任した時に与えられた格式は「諸奉行」であった。この格式は役儀に伴い異動するので、五代当主、辰三郎に至るまで、役儀に応じた「諸奉行」格式を有する家であった。ただし、安政五年（一八五八）以降、軍制格式の改編が進み、「諸奉行」以下の格式の者でも、個人の功績で「物頭格」に班せられるようになる。辰三郎は文政十一年（一八二八）、銀札場銀奉行に就任後、蔵奉行、裏判吟味役など藩財政面で業績を上げ、安政三年（一八五六）八月、礼席「寄合之上（＝「物頭」格）」が与えられた⁴³。辰三郎の功績は池田家内における安達家の評価を高め、家督相続後、子の清一郎への期待へとつながっていった。

3 京都留守居の政治的位置

京・大坂における大名家の役職配置について述べる。文久二年（一八六二）以降の鳥取藩池田家の京都支局は複数の家臣によって運営される。従って京都留守居であるからといって責務が集中するのではなく、京坂の諸役人による協力により運営される。幕末期においても、通常は図（文久二～三年、鳥取藩池田家京坂支局図）のような協力体制が成立する。まず京都留守居とそのサポート役としての大坂留守居、伏見留守居が存在し、そして支局運営に費やされる経費については、大坂と藩地を行き来する元締役（格式、物頭）が京都に出向し、対処することになる。また京都目付（格式、馬廻）は伏見目付をも兼任し、留守居のサポートや屋敷の監視、呉服所（用達）の監査などに務める。

大名の在京時には、京都留守居の上部に在京家老および側用人が位置する形となる。たとえば、池田慶徳の文久二年十月における上京の際には、着座鵜殿大隅、池田式部が随行するが、着座は軍式において「旗頭」となり家臣によって編成される軍事的まとまりである「備」を差配する。よって、有事ではなくとも、大名の発駕に連動して着座家老が動き、これに差配されて「備」が従うと考えてよい。たとえば着座鵜殿大隅には、大名の護衛に当たり、奇師（一※カッコ内は人数）差配下に、諸隊目付（一）、組頭（一）、使役（一）、組士（一九）、銃頭（二）、小頭（二）、足軽（三〇）、そして番頭（一）の差配下に、組頭（一）、組士（一）、銃頭（二）、小頭（二）、足軽（三〇）が従い、着座池田式部には、番頭（二）、組頭（一）、組士（一九）、銃頭（二）、小頭（二）、足軽（三〇）が供奉するので、総計約一五〇人が加わることになる⁵⁴。当然ながら大名の供揃もなされるが、文久二年十月の上京時の供揃の編成および規模を示す史料は管見の限りない。文久三年（一八六三）六月上京時の供揃については、約三〇〇名で編成されている⁵⁵ので、家老の「備」と合わせ、四五〇～五〇〇名の人員が国元・京都間を、また京都・江戸間を移動したと考えられる。また文久三年二月、

家老の在京体制がとられ、京都支局は「京都詰大奉行」たる家老の命令を受け、行動するようになる⁴⁶⁾。

4 安達清一郎と幕末京都

ここでは幕末期における京都留守居の職務内容について、鳥取藩士安達清一郎の動向から追うことにしよう。安達清一郎は幕末期、京都留守居を務めた人間のなかでまとまった日記を残す。彼の伝記的な考察にも耐えうる史料であるが、京都留守居役との関係性についてのみ付言するなら、安達は先にみた家格の問題に加え、京、大坂、江戸そして水戸を巡遊し、同地での学問を通じてできた幅広い大名家内外との交友関係を有した。これが「外交官」的要素の求められる幕末の京都留守居の条件と考えられた。

藩主侍講で、藩校尚徳館学正堀庄次郎（格式、家業家、のち馬廻）は、「彼（清一郎）名聞テ、公卿之間、綾小路々々（綾小路俊実、大原重徳の実子）既曾欲見之使、彼往謁必能洒国辱⁴⁷⁾とし、彼の握る人脈を有用と判断し、藩儒景山龍造（格式、家業家、周旋方兼任）も、「此上ハ京師へ内使を立、大原家へ寡人存意之所を能く咄し、急速御内勅御依頼書下り候様ニ不致而ハ不相成」、「安達清一郎より外ニハは人無し⁴⁸⁾と述べる。

文久二年九月二十二日、安達と堀は、「探索方」として上京を命じられる。攘夷勅使三条実美東下の景況および薩長両藩の動向を調査し、かつ朝議に働きかけ、藩主の入京を求める勅諭降下の幹旋を縁家の二条家および大原家に依頼することが職務内容であった。九月晦日、安達らは大原重徳に入説し、大原のとりなしで、十月一日、二条家から内勅を得、同月四日、帰国。翌日、「京都手入」の功を賞せられるとともに、京都留守居役に任じられる。

其方儀、此度京都留守居被仰付、依之御役料前之通被遣、御礼席山部隼太次ニ被仰付旨被仰出候。但し、昵近被

仰付、且又大原家急御使者被仰付候間、用意次第出足、御道中枚方駅え御迎罷出可申事¹⁵⁰。

家督相続直後における安達家の格式「馬廻」が、「山部隼太次」（＝「諸奉行」）へと変更された。京都留守居という職に相応しい格式へと昇格したことになる。さらに「昵近」が命じられ、藩主慶徳に近い立場を得た¹⁵¹。

さて、幕末期の京都留守居の任務の一つに大名の上京および禁裏参内に際する準備がある。近世社会において大名自身の入京に関する明確な先例は存在しなかったため、その対処を余儀なくされ、京都所司代や町奉行所など在京の公儀諸機関、さらには公家を訪問し、入京作法に関する情報収集をおこなう。先例となつたのは文久二年四月、薩摩の島津久光および同年七月の土佐藩主山内豊範の入京であった。久光に関しては、前年から大久保一蔵、中山中衛門らを縁家の近衛家に派遣し、準備工作に余念なかったが、徳川幕府の主要機関への届け出はなく、認可はなかった。山内家は藩主入京を京都所司代に申し出たが、一旦、幕府に伺いを立てるようにと申し渡されており、入京に手間取っていた。池田家においては、正攻法でいくと山内家と同じく足止めを食らうと判断し、藩主の入京後、縁戚公家を訪問し、事後承諾の形で京都所司代に届ける方法が取られた。文久二年十月十五日、伏見より入京した慶徳は一旦、京都屋敷に立ち寄って昼食を済ませた後、着座鵜殿大隅、側用人和田平太夫、中老田村貞彦らを供として屋敷を発ち、同時に安達は山部隼太と同道にて、所司代に藩主上京を届け出、そのまま二条家へ進物贈呈に赴き、饗応の後、夜、「本陣」の北野松梅院へ帰るという行程をとった¹⁵²。

また、公家社会に対する鳥取藩池田家中の広告塔として、藩主池田慶徳の人間性や主義主張を披露していく。この運動の成果として得られるものはすなわち、文久二年閏八月より、数度にわたり大名家に下される国事周旋の「内勅」であった。池田家は文久二年閏八月の「内勅」においては国事周旋を求める対象から漏れていたが、「尊王第一次二攘夷次ニ富国強兵、是主人之心ニ候」¹⁵³と藩主の英明を謳う安達ら京都支局による入説が功を奏し、同十月十四日付の

朝廷よりの国事に関する内達書では、先に対象とされた薩長土を含めた一一家に加わる形で、豊後岡藩中川家と共に、選出されている⁵⁴⁾。池田家に対する評価は、在京諸大名家からもうかがえる。文久二年十二月、熊本藩主細川慶順の先発として、上京した藩主実弟長岡良之助は、近日に迫る藩主上京のための情報収集をおこなうため、公家、大名家を廻勤するが、良之助が藩地の家老に当てた書翰によると、中川宮朝彦親王が慶徳を非常に高く評価しており、その他、会見した公家の見解を総評して、「因州侯は京都一番評判も宜敷」⁵⁵⁾と述べ、池田家と共同にて国事周旋に携わるべき、と促す。

京都屋敷および「本陣」用地探索も幕末期の京都留守居の重要な任務となる。池田家の京都屋敷（通称、油小路屋敷）は手狭であったため、早々に拡張するか、あるいは新用地の購入が問題となった。大名といえ、普通、上京時、京都屋敷には滞留することなく、縁のある寺院の塔頭や神社の社家を「本陣」として借り受け、滞留することが多かった。「本陣」設定の理由については、藩主と家臣が恒常的に接触することを避け、家臣一同に驕りが生じないようにするためと考えられ、大名と家臣団との秩序を藩地同様に京都においても設定する意味合いが大きい。「本陣」は藩主の宿泊施設であるだけでなく、在京の家臣が公務として足繁く通う京都支局の中枢としての役割を担う。池田家は慶徳の上京前、「本陣」を二条家のとりなしをもって、北野社の社家松梅院に決めていたが、「北野御滞留十日ニも及候てハあしく二付、到而御手狭ニてよろしく故、假なりニも御屋敷出来いたし候様、御屋敷近辺ニ而思ハしからず候へは外ニてもよろしく可然土地見定メ御買上ケニ可致事」⁵⁶⁾と、新たな用地購入が急務となっていた。屋敷拡張、土地購入を指揮するのは、池田家の勘定所と裏判所を統括する元締役石原節之丞である。京都屋敷における経費運用は、池田家が指定する「用達」数家と京都留守居、伏見留守居との交渉で済まされ、元締役への報告は事後承諾の形をとっていた。だが、文久二年末以降、政治に莫大な諸経費が費やされるため、元締役が京都留守居と連携し、有効的な政治諸経費の運用に努めた。

屋敷地および「本陣」用地選定問題が本格化するのは、文久三年正月、藩主慶徳の長期滞京決定後である。安達は北野の地を「北野絲竹歌吹之地ニテ士夫遊惰ニ流ル、ノ弊甚しく、且坊諸方ニ散在して統一ならず」と評し、「長き滞留ニてハ差支」がある⁵⁷⁾。しかし、当時、京都屋敷地および「本陣」を求める動きは、上京してくる大名諸家においても同様であった。文久三年二月から三月、安達は京都の地をくまなく探索した。安達は日記とは別に、自ら京中を歩いて得た情報を書き記している⁵⁸⁾。これによると安達は「二条川東辺御屋敷地」の調査に重点をおいていたことがわかる。文久三年、鴨東地域には諸大名家の屋敷および「本陣」が急増する。禁裏や二条城周辺から、諸大名家の関心が川を隔てても、広大な用地を求める意識がうかがえる。安達も鴨東の地所から「二条川東の屋敷地」を候補に挙げたが、士風に不相応との判断のもと、結論を据え置きにしていた。

文久三年五月に至り、油小路通中立売付近に売地が見つかった。在国の中老白井重之進宛て、五月七日付書翰において、「此所ハ当御屋敷ニも近く場所柄ニ於而ハ申分も無御座所ニ御座候、先年大火之後いまた建家も少く御座候間、一丁四面ニて地代家代共六千金迄ニては御買取りニも可相成と奉存候」と、既存の油小路屋敷に近く、かつ広大な地所の早々の買い取りを望み、家政執行部にて評議を求めている。結局、七月一七日、新屋敷地は安達の実要求通り、油小路中立売の地所に決定する⁵⁹⁾。「上屋敷」と呼ばれるこの新屋敷が完成するのは元治元年（一八六四）六月であり、油小路屋敷同様、禁門の変の折の火災を免れ、明治二年（一八六九）、明治新政府に屋敷地を譲渡するまで、存続することになる。

5 「文久政治」から「元治政治」へ

文久二年（一八六二）四月の薩摩藩島津家による率兵上京は、それ以後、展開されていく大名家による政治運動の

ありかたを導き出したといつて過言ではない。大名自身が、領国を出でて、京・江戸に赴き、江戸では幕閣への政治的助言をおこない、京では天皇を取り巻く政治混乱のただ中に身を置くことこそ、国事周旋の真のありようであるとの認識がなされた。それは、文久二年四月以来、政局をリードした島津久光が、同年閏八月、禁裏参内の折の建白に見える。「此上ハ朝議確乎トシテ不被為動匹夫之激論一切御採用不被為在、関東之处置静ニ御觀察被遊度」、「匹夫之論激烈ニ過キ、且己カ名利ノ為ニスル事多ク御座候得ハ猥リニ御採用不被為在様」⁶¹⁾と、徳川幕府が政治改革に乗り出したなか、下から聞こえてくる主張に耳を傾けることを拒絶せよ、と訴えた。大名自身が政治をおこなうことの「名義」を重視する久光の主張は、以後、活発化する大名の上府、上京のありかたを正当化する方向性を示した。そこには、大名家臣や浪士による政治運動を「急進」・「突き上げ」と解し、これを否定し、排除する論理を有し、この論理になかば迎合する形で、文久二年下半期、大名は堰を切ったかのように上京をおこなった。「文久政治」は大名主体型の政治運動によって生成された。

さて、鳥取藩池田家においては、藩主池田慶徳による文久二年十一月、翌三年文久三年六月、二度に渡る上京を経、「攘夷」をめぐる政論の相克のなかに身を置き、国事周旋に当たった。二度目の上京周旋を終え、池田慶徳が帰国する文久三年十月。大名家と国事との関わり方を変えようとする動きが池田家京都支局において生まれる。このことは慶徳帰国後の京都政情を、安達清一郎が在国の側役衆に宛てた文久三年十一月二十八日付用状によりうかがえ、「中将様（池田慶徳）・備前様（岡山藩主池田茂政）・阿州様御父子（阿波藩主蜂須賀斉裕、茂韶）之内御上京」が再度命じられているが、京都の政情に鑑み「此度ハ御不快ニ而御断被仰上候方可然と奉存候、備前様・阿州様ニも御同様之御儀と奉存候」と、病を理由に断るべきとする。その理由として「当時会・薩・越・土・宇和島・久留米・肥後同盟ニ而諸事周旋有之、結局之处航海論ニ押し詰メ候見込ミ」と、薩摩、越前をはじめとする積極外交を旨とする諸侯連衡による政治思潮を挙げ、これに与することができないからだと述べる⁶²⁾。

安達は、ここにおいて大名の国政参加を必要とはしていない。京の本陣玄関前に陣幕を張り巡らし、上京期日が近いと見せかけて病を理由に上京の延引を重ねることを求める³⁰。京都支局は大名の上京・上府により執行された徳川幕府および朝廷に対する、これまで同様の国事周旋では成り立たないと判断した。この京よりの政情報告により十二月三日、藩政執行部は、池田慶徳の「足痛・痔疾」を理由に上京断念に決する。これ以降、京坂支局から発せられる政治情報が量的にも増大し、質的には情報媒体となった人物の政治的見解が色濃く反映されてくるようになる。情報を供給するというよりも、建言に重きが置かれたといつてよい。実際、文久三年末から慶応期にかけて、鳥取藩池田家においては京坂からの情報にその政治意思決定を委ねていた。ただし、それがすなわち政治力の低下を意味し、「日和見」的な動向であると断定しうるものではない。池田家においては、中央の政情に対応できるシステムが、質量ともに充実した政治情報取得を目的として改編されていくことに注目したい。大名自身による上京周旋を介さず、多様に張り巡らされた情報網より得られるニュースを手がかりに大名家の方針である藩是を決定してゆく性格が、元治元年以降の政治には存在するのである。

6 元治元年の政情と藩是決定システムの改編

大名による国政参加を旨とする政治運動に見切りがつけられた鳥取藩池田家の京坂支局において、本来、大名家が有した政治システムとは別の命令系統が生成される。

幕末の政治混乱とそれにとまなう大名家の国政参加は、大名家臣団の格式と職制の並立状況にある変化をもたらす。その一つが、国事周旋役および探索方の存在であり、さらには、御側部屋に控える「近習衆」（側用人・側役・近習など）の積極的政治参画である。

国事周旋方および探索方という幕末期特有の新職には、先にみた大名家臣団における格のモデルに属さない家の人間が任命される。他大名家の職制と併せて考えると、士分を有さず、藩政に参加できなかった下級家臣あるいは陪臣層、具体的には格式馬廻や士分以下の徒士、儒者、医者など、格式「家業家」のなかの有能者や、大名との特別な親密性を得たものに付与される職である。大名との特別な親密性は、大名より直々に「昵近」が許されることから生じ、これにより従来、藩政参加が適わなかった人材の政治参加が実現し、その功績によって、上の格式へのステップアップできうる可能性を有したことは、下に閉ざされた大名家既成秩序の枠組みを打ち破りうる制度と意義付けができる。

文久三年末、つまりは藩主池田慶徳の国政参加がおこなわれなくなってから、側役あるいは「昵近」を許された「国事周旋役」の政治参加が以前にもまして多くなる。ただし、これは幕末期の時代風潮としてしばしば取り上げられる「言路洞開」的な意味合いでのみ認識される問題ではない。上京周旋をやめた大名のもと、既存の職制および命令系統とは別に設定された「あらたな政治情報収集システム」と意義付けられるものである。この大名近習衆を中心として生成された「あらたな政治情報収集システム」と京都留守居ほかの京坂支局はいかに関わっていくのか。在国中の大名と近習衆、そして「昵近」の関係を得た周旋方との間で往復された用状を筆写し、編まれた冊子「京坂書通写」（県博蔵、No.一三〇八五―一三〇九〇）なる史料より考察する。

7 あらたな政治情報収集システムの構築

鳥取県立博物館に所蔵される「京坂書通写」から、元治元年（一八六四）正月から慶応三年四月まで、京坂支局から国元に伝えられた政情情報のありようがうかがえ、横半帳の冊子で十二点から成る。「写」と銘打たれたその表題か

ら、後年に編まれた二次的な史料ともとれるが、京坂から出された用状を政治情報として書写した冊子で、役務日記と同時並行で作成されたものであると推察される。同史料の性格に対する精緻な分析は別稿に譲るが、記載内容と、鳥取県立博物館蔵の鳥取藩政資料中、基本史料とされる「控帳」(国元家老の執務日記、「御櫓日記」、御帳奉行による記録、明暦元年から明治二年四月まで、二三八点)とは内容を異とし、城中における稟議の場である御用部屋の右筆によって作成された「御用部屋日記」の記載情報の一つとなっていると考えられる。

つまり、「京坂書通写」に記載される京坂支局からの情報は、「控帳」・「御国日記」に記される藩政一般に関する記録には反映されず、大名・側近および月番家老の稟議によって議せられた、国事への対応をめぐる審議において有効であったと考えられる。近習衆、「昵近」を得た周旋方・探索方より得られる政治情報は、国事対応という非常事項に対する重要な政治意思決定の手がかりとなったのである。以下、史料引用する用状については、断らないかぎり「京坂書通写」を典拠とする。

大名在京が不要であると判断された鳥取藩池田家の京都支局において、対応を迫られた問題は、文久三年十一月、横浜鎖港交渉に関する諮問要請に応じる形で上洛してきた徳川慶喜への対応であった。文久三年末から翌四年(一八六四)にかけて、内政(長州藩毛利家処分)と外交(横浜港開鎖問題)をふまえた国是樹立に向けての動向のただ中に慶喜はいた。薩摩藩の島津久光のペースで展開されんとした「朝議参与」制²の当事者となった慶喜は、鳥取藩池田慶徳の上京を請う。

(前略) 賢兄御儀、皇国之御為御誠忠を御尽力之儀は勿論心得居候処、開鎖之利害御建白之趣不相立候儀を不平にて公武え対し御氣随之御振舞可有之坏、世上取沙汰致し候由、伝承致候(中略)大樹公、明七日頃御上着と申事にて、御上京之上は公武論決之上、長州御処置早々御治定と存候、此度賢兄御上京無之候ては、終に大嫌疑を生じ候

事も難量、骨肉之親誠心痛之至ニ御座候、備前えも御相談之上、早々御上京相成候様存候、尤御支度も可有之候得共、先以急便上京御治定丈ヶ之儀は、其筋え御申立ニ相成候様存候。且又、因備兄弟上京相成候は、小生之為実ニ力ニ相成候儀、吾身上心中御賢察可被下候（以下略）⁶⁴

文久四年正月五日にしたためられた書状は、京都留守居安達の手を経て、十二日、国元に届けられる。慶喜はここで、将軍上洛を間近に控え、池田慶徳の上京がなければ嫌疑が生じるであろう。慶徳と慶喜そして将軍家は「骨肉」の関係にあり、岡山藩主池田茂政も併せ、兄弟による周旋が今、必要なであると、述べる。その緒についたばかりの国是審議の場において、慶喜は血を分けた兄弟の助力を望む。これ以後、京坂地域を政治基盤とし、政治を主導してゆく慶喜の政治意識が読み取れ、薩摩島津、越前松平といった大名諸侯会議による政治的連衡が強調される当該期の政治史の再考が余儀なくされよう⁶⁵。公論を尽くした会議の存在自体を、そもそも有用とは解してはおらず、水戸徳川の血脈に自らの政治的正当性を補完させようとしていた。「朝議参与」制瓦解の要因とされる、慶喜の「変心」は、参与諸侯とは異なる彼自身の政治路線を貫こうとした際の意味表明と読むべきものである。

さて、慶喜の求めに際して、池田家が出した答えはいかなるものであったか。文久四年正月十五日、慶徳は、安達ら京坂支局よりの政治情報を得、使者として中老黒田日向を上京させて、「養子之身分、家之瑕疵を引出候ては養実之先祖（鳥取藩池田と水戸徳川）ニ対し不相済」とするも、「先年来之持病再発」を理由に上京の勅命を被つても、「暫時御猶予相願」ほかないというものであった⁶⁶。以後、正月二十一日、藩主の上京が家中に布達、正月二十八日に首途儀礼がおこなわれ、二月七日の発駕が予定されるも、「御不例」、つまりは藩主慶徳の病を理由に、延期され、これが繰り返されることとなる。

京都に派遣された黒田日向は、藩政執行部の意図を京都支局に伝える。藩主慶徳は、京情報告をふまえ、上京しな

い。黒田日向から御側御用部屋に宛てて出された二月三日付用状によれば「中将様（慶徳）御進退之儀、今日も於駿州方（在京家老荒尾駿河）評論」したが、「今少し談決ニ至り不申、何卒御上京ニ不相成様ニ仕度物と日夜苦心」しているところ。さらに慶喜の言う嫌疑については、「御譴責杯之事は更ニ氣遣有之事は無御座、却て於幕府は因・備・筑・肥之類は御倚頼之様子」であり、「薩・会之如く表は忠誠之形勢御座候ても、内心には一物」有ることは「一橋公始として御承知之御様子」とし、諸侯会同に際する慶喜のスタンスについても述べる。

二月十一日、長州出兵の内命が徳川幕府より下され、池田慶徳は「加勢」を命じられる。同日、二条城に赴き、老中酒井忠績・水野忠精より奉書を預かった京都留守居安達清一郎は、すぐさま土肥謙蔵（学校文場学正兼周旋方）にこれを託し、上京延引出願中なるも、「形勢」をふまえた判断を求める。その「形勢」とは、これに添えられた河毛文蔵（在京御側役）・河崎政之丞（近習兼周旋方）より国元御側役に宛てた用状中、京都で噂される徳川幕府との間を裂く「離間策」の存在であつた⁶⁷⁰。同十五日に、老中よりの奉書が鳥取に届くや、慶徳は上京を決せず、近習の伊王野平六（周旋方兼記録方）に上京を命じ、「病」を理由に、着座筆頭の荒尾但馬（清、米子城主）を名代として上京させることに決するのである。実際に「癰疽瘰癧」という持病はあるが⁶⁷¹、「病」を理由に政治の現場に藩主がおらずとも成立する体制が、在京着座のもと構築されてゆく。

新国是樹立に向けて、諸侯を含めた形で展開された会議では、これを機とし、日本の積極的開港政策に転じさせた島津久光ら諸侯、「国内人心安定」させるため、不可能を承知で、まずは横浜港のみを閉鎖せんと考える中川宮朝彦親王らと見解に相違が見られたものの、元治元年二月十九日、將軍家茂の署名による朝廷に宛てた上奏書において、「横浜鎖港之一条」は「愈鎖港仕候見込」であり、「是非共成功仕候心得ニ御座候」⁶⁷²と記され、久光ら諸侯が合意したため、外交方針に関する合意形成は得られたが、内政、長州藩処分については紛糾した。二月十一日の段階で決定した処分案（「長の末家及び家老各一人を大坂に呼び出し」、老中一名が大坂において喚問）が、同二十四日の会議で

一度取り消しとなるなどした。

先行研究においては、参与諸侯と慶喜の会議開催中における政治動向の相克や、幕末政治史のなかでの公論形成についての画期的意義が問われるが、先にみた慶喜の水戸徳川家出身者への傾倒や、在京幕臣の意識などに見られるように、根本的な政治的スタンスからして成立しえないのである。会議開催を前にし、公論形成に賛辞を述べていたはずの慶喜は、徳川幕府権威の固持を目指し、その方法として、京都における自らの政治基盤を確保し、権威を拡大させることを望んだ。鳥取藩池田、岡山池田らが慶喜の政治基盤の要素となったことはいうまでもない。ことにこの慶喜の思いが、三月二十五日、將軍後見職を辞し、禁裏守衛総督・摂海防御指揮への就任、四月二十日、庶政委任の勅書降下となって現実化される。

元治元年三月以降、「朝議参与」制の解体による有力大名家による政治運動の行き詰まりと、それに伴う徳川幕府の政治権威の増長を、在京の鳥取藩士は如何に見ていたのか。

京都詰を命じられ、上京した河毛文蔵（記録方頭取兼側役）による元治元年四月九日付用状によれば、「此度大樹公御親政之御手始ニ候得者、人之意表ニ出候位御憤発も不為在候而者、徳川之天下も乍恐今少し之間と奉存候」と、「朝議参与」制瓦解後の政情を徳川將軍による「御親政」の開始であるとし、ただし意表をつくほどの一大奮起がなければならぬと評する。鳥取藩士の政局観には、やはり薩摩島津対徳川幕府という構図が成立していたようである。島津久光が薩摩藩兵とともに京を発つのが四月十八日。よって河毛は、国政への関与が事実上困難となった在京中の久光および薩摩勢について記すが、他のそれに比して委しい。

（前略）尹宮（中川宮）え薩より御縁女被参候事御談済ニ而、此間薩人兩人帰国候趣ニ御座候、安芸世子へも薩より縁組有之趣、依之芸之廉物者不残薩え致し、薩人異人と交易致候よし、先比久留米人蒸気船ニ而承り候、右之

嘶承り候者御座候、此度薩州之世話ニ而蒸氣船壹艘買入申候次第、薩州人久留米を進め、当今之形勢ニ而軍艦無之而者亦も防御相成不申、依之壹艘御用立申ト決而代理者入り不申運用方之者迄添而出し申候趣、右懇篤之意を以て久留米之産物を不殘薩州江売渡し呉候様と相談し、此節綿・油之様夥敷交易百二十門之大砲八艘之軍艦は悉く皇国之ため情を薩ニかけ候人え渡し候者ニ御座候、可惡甚敷事御座候（以下略）

薩摩島津家から中川宮および芸州藩浅野家への縁組や、薩摩藩が「異人」と交易し、他家に蒸氣船・大砲などの購入を斡旋していることにつき述べ、大名家において増強される軍備と薩摩藩の関与に対し、疑義をいだいている。

また、大坂留守居役山部隼太（京都留守居役兼帯）・京都留守居役安達清一郎（伏見留守居役兼帯）による元治元年四月二十日付、連名用状においては、退京してゆく諸大名をその人物評を含めて論じ、また「所謂奸徒と申御方ニは御引取ニ相成」と、薩摩島津・越前福井など政情を混乱させる「奸徒」の退京に代わり、中央政治の今後を担う存在として、徳川慶喜・尾張徳川前藩主徳川慶勝に期待を寄せている。実際、鳥取藩京都支局と徳川慶喜の一橋家との政治的連携は密におこなわれており、慶喜に対する政治折衝および書類の提出についても、「最初は御家老御中老之名前ニ而差出し候談合ニ御座候得共、右ニ而は不都合之訳も御座候ニ付、私共諸役連名仕候、右は極メテ僭越之事ニ御座候得共、内々一橋様えも申上候所、公より此節は忝人ニ而も正論を主張致候得は、天幕之御為ニ相成候間、速ニ差出し候様御沙汰有之」と、当初は家老・中老など家中における上位の格式にあるものによりおこなわれていたが、留守居・周旋掛クラスの間においても容易に遂行されうるようになっていた。鳥取藩京都支局においても、徳川慶喜を池田家中一同が随従すべき人物として認識しているし、慶喜にとっても自らの政治基盤を作らねばならないときであった。慶喜の政治活動について、安達は「水戸原市之進・摂津源太郎兩人一橋様御用人見習御雇被仰付、且又壮士百人御借り被成、追々橋府え引越申候」と、後の腹心となる原市之進らのほか、本来なら関わりのない「壮士」をも傘

表 元治元年4月、大名の「推任叙」					
家名	藩地	分類	措置	官位の変化	
松平春嶽※1※4	福井	家門	叙任	正四位下・権中将	→ 正四位上・参議(宰相)
島津久光※1※3	薩摩	外様	叙任	従四位下・権少将	→ 従四位上・権中将
細川慶順	熊本	外様	叙任	従四位下・権少将	→ 従四位上・権中将
池田茂政	岡山	外様	任官	従四位下・侍従	→ 従四位上・権少将
徳川慶勝※2	尾張	御三家	叙位	従二位	→ 正二位
伊達慶邦	仙台	外様	任官	権中将	→ 参議(宰相)
鍋島閔叟※1	佐賀	外様	任官	権中将	→ 参議(宰相)
蜂須賀斉正	阿波	外様(準家門)	任官	権中将	→ 参議(宰相)
池田慶徳	鳥取	外様(準家門)	任官	権中将	→ 参議(宰相)→辞任
黒田斉漣	福岡	外様	任官	権中将	→ 参議(宰相)
井伊直憲	彦根	譜代	任官	権少将	→ 権中将 ※還任
有馬慶頼	久留米	外様	任官	権少将	→ 権中将
南部利剛	盛岡	外様	任官	権少将	→ 権中将
山内容堂※1	土佐	外様	叙任	従四位下・侍従	→ 従四位上・権少将
佐竹義堯	秋田	外様	叙任	従四位下・侍従	→ 従四位上・権少将
松平忠誠	忍	家門	叙任	従四位下・侍従	→ 従四位上・権少将
黒田慶賛※2	福岡	外様	任官	侍従	→ 権少将
浅野茂勲※2	芸州	外様	任官	侍従	→ 権少将
藤堂高潔※2	津	外様(準譜代)	任官	侍従	→ 権少将
蜂須賀茂韶※2	阿波	外様(準家門)	任官	侍従	→ 権少将
松平茂昭	福井	家門	叙位	従四位上	→ 正四位
伊達宗城※1	宇和島	外様	叙任	従四位下・侍従	→ 従四位上・権少将
松平頼聰	高松	家門	叙位	従四位下	→ 従四位上
久松(松平)勝成	松山	譜代	叙位	従四位下	→ 従四位上
松平定安	松江	家門	叙位	従四位下	→ 従四位上
立花鑑寛	柳川	外様	叙位	従四位下	→ 従四位上
丹羽長国	二本松	外様	叙位	従四位下	→ 従四位上
中川久昭	岡	外様	叙位	従五位下	→ 従四位下→辞任
※1は前藩主(朝議参予諸侯)					
※2は大名世子					
※3島津久光の官位は文久4年正月13日、朝議参予拝命と同時に推任叙されたもの。					
※4松平春嶽は元治元年2月16日、京都守護職就任の折、京職である「大蔵大輔」に任官する。					
『中山忠能履歴史料』、『大日本維新史料稿本』元治元年4月11日条、同17日条、『維新史』附録「諸藩一覧」により作成。					

下に組み込んだシステムを作らんとしている¹⁾。

元治元年（一八六四）四月、同年正月の將軍家茂上洛への供奉および、国事周旋の労を賞し、官位の「推任叙」がなされる。「推任叙」というのは、和田英松『官職要解』によれば、「別に希望しないのに、上より推して」（四一頁）なされる叙位任官であり、さらに、その公家および武家の功労および才智を称えるために、元来の家格に合わない官位が贈られるという特別の措置である²⁾。元治元年四月の「推任叙」の例を表を作成し、挙げておこう。

徳川慶喜、松平容保を除く「朝議参与」諸侯のほか、元治元年正月を前後して在京し、その緩急こそあれ、国是審議に関わった大名の官職および位階が上昇している。島津久光ら「朝議参与」諸侯の「推任叙」は、国是審議の中心となり「朝議参与」を辞して領国へ帰国するに当たり、朝廷・徳川幕府双方から与えられた功労褒賞的な措置であろう。

不自然なのは池田慶徳に対する「推任叙」である。彼は、文久三年十月を境に在国し、国政に非関与であつたし、そして以後もこのスタンスは崩されることはなかった。さらに、池田慶徳が「推任」されて、辞退した官が「参議」であることも注意しなければなるまい。

「参議」とは、律令制の令外官の一つであり、位階の三位から四位のものが就任することが通例で、大納言・中納言に次ぐ重職とされ、国政審議の場に臨み、政策決定に寄与するべきポストであり、唐名の「宰相」とも称された。元治元年四月十八日、池田慶徳は、徳川幕府より、「御国事格別尽力有之候ニ付、宰相御推任之儀、御所え被仰立候処被仰立之

通被宣下旨被仰出候間、宰相仰付候、尤以後之例ニは不相成儀と可被奉存候」との布達を受けるも、同二十四日、慶徳は周旋方山田宗平を京都に遣わして、二条家に、また同二十八日に老中酒井忠績へも辞表を呈し、翌五月十九日、これが聴許された。

多くの大名が、官位の「推任叙」に預かるなか、どうして池田慶徳は「参議」拜命を断ったのか。その理由を、まず元治元年四月十六日、記録方頭取兼側役河毛文蔵からの用状より見る。河毛は大坂において、岡山藩主池田茂政に会い、元治元年正月よりの滞京周旋についてうかがい、「今少し御残被遊御尽力之处奉希度候得共、薩人之去就に依而は無御扱次第も御座候様奉伺候」と、池田茂政の国事周旋が、薩摩藩島津家の滞京事情に左右されてうまくいかない現状を憂うとともに、茂政が「御暇御参内之上、少将へ御転任」したことは喜ばしいことであるが、「然ルに春嶽侯正四位上参議え任、島三中将え任、細川侯両公子之周旋之故、因而御位階罷進、伊達老公も位階昇進」し、今なぜ、このような大名の昇進がおこるのか「不審至極」であり、「矢張開港説相唱へ、皇国之人民塗炭之苦を傍観」する人々の昇進の意味について疑義を呈している。

京都留守居安達清一郎は、同月十八日付用状において、「仙台侯始一昨年来御上京之御方ニ從而二十六侯御推任ニ御座候得共、御城内別而混雜委細之儀相分り兼」ねると述べる。さらに、河毛文蔵は、四月十八日付用状においても、「国事御尽力候付、此度宰相御推任之事被仰上候所、天朝よりも被仰出候趣被仰渡恐悦至極」と、慶徳の国事尽力に対し「宰相」推任がなされ、喜ばしいことであるが、「先日備前様少将御転任も俄之事ニ而御困被遊」、且つ「備前様も薩越之同日御転任之事、甚以御不本意之思召」されていると、薩摩、越前と同視されることを不本意に思う池田茂政の見解を述べる。「御国論も可有御座候得共、一旦は御辞表御差出ニ相成候方可然」と、まずは辞意を述べるのが先決とし、「薩越天下を患惑し何之寸功なく参議中将等え登り紛紜之議論」も存在するので、「名を求而も無御座候得共、少しも後れを取らせハ一本も指をさゝれ不申様」いたすべきと忠告している。

安達清一郎および河毛文蔵は、元治元年四月における大名への「推任叙」を池田家の慶事とは認識せず、むしろ不可解な措置と解し、「推任叙」は將軍上洛の供奉から生じた勲功にあるという。慶徳は在国していたし、將軍上洛の際の供奉などできようはずがない。よって、京都支局においては、慶徳の参議推任と、滞京および恒常的な国事周旋が結びつけて考えられた。またこの池田慶徳の参議推任は、先の徳川慶喜による上京要求と連環するものであると考えられる。慶喜の思惑を実証しうる史料は管見の限り見当たらないが、傍証できうる事実はある。慶徳が慶喜の頼るべき実兄であったことはいうまでもないが、同時に参議推任された仙台藩主伊達慶邦は徳川斉昭の娘を正室とし、慶喜の妹を紹介した関係を有する。蜂須賀斉裕は、十一代將軍家斉の子であり、彼が蜂須賀家の養子となった際、徳川家門の格式を有したが、慶喜との関係に則していえば、母は水戸徳川の縁家たる鷹司政熙の娘であり、かつ正室も鷹司政通の娘である。鍋島閑叟については、彼の母は鳥取藩八代藩主治道の娘、かつ正室は徳川家斉の娘であり、閑叟以降、徳川將軍家との血縁を得た家柄である。黒田斉溥については、九代藩主の斉隆が、一橋家の出身であり斉隆の筑前福岡就封の折、將軍家治より松平の称号と徳川家門に準ずる格式を有したことから、その政治意識は徳川幕府主導による政治体制の安定を志向するものであった。

慶喜は、薄弱な政治基盤を固めるために、出自である水戸徳川や徳川將軍家の血縁に頼る傾向がある。そのなかで実兄である慶徳はキーパーソンであり、参議となって在京することこそ、まさに「小生之為実ニ力ニ相成」³³であった。この後に、在京の公儀勢力たる会津藩松平家、桑名藩松平家との協力体制（いわゆる「一会桑」政権）のもと、京都における政治基盤を高める慶喜であったが、あくまでそれは池田慶徳をはじめとして形成されんとした参議グループによる協力体制が反故になった後の妥協策であったとも考えられるのである。

8 水戸藩内訌と「京師變動」への対応

鳥取藩池田家においては、京都支局の政治体制確立が急がれ、かつ上質かつ多量な京都支局からの政治情報に的確に対応するべく、池田慶徳を中心とし国事評議をおこないうるあらたな政治システムの構築が志向される。あらたに生成された国事対応システムにおいて、その対応を迫られた政治事象は、元治元年三月、筑波山で挙兵した水戸天狗党の動向と、現実になりつつあった長州藩毛利家処分への対応であった。

水戸天狗党による内訌問題は、その首魁となつた田丸稻之右衛門、藤田小四郎ら四名による池田慶徳宛ての連署建白が周旋方千葉重太郎によつて鳥取に伝えられており¹⁵、また、この義挙鎮静のため、横浜鎖港の決断を徳川幕府に求めた水戸藩主徳川慶篤によつても、四月十七日付、慶徳、池田茂政宛ての書状によつて、現状報告と助力歎願がなされ、その概略のみ解された¹⁶。これを受け、江戸藩邸へ問い合わせがなされたが、元治元年五月、藩主慶徳に伝えられた政治情報は以下のようなものであった。

鳥取藩江戸留守居洞龍之輔の元治元年五月十二日付の用状によれば、將軍家茂の東歸および政治総裁職松平直克の着府が報じられるも「御当方様御屋敷内にも下々には相分り不申候趣ニ御座候」とさしたる情報のない旨を報じ、「万事変た世の中ニ相成申候」となかば気の抜けたコメントを付す。また、横浜鎖港談判については「表は其氣而も無御座候を来は追々繁昌ニ而、既ニ当節は異人腹藏立申ニ而賑々敷事」と談判など始まる様子もないことを「横濱へ参候者」から聞いたと述べる。懸案の水戸天狗党については「太平山集屯之浪士とても近頃とんと表沙汰無御座候、追々減しは不申趣ニ御座候得共替り候説も無御座ニ付、格別増減無御座儀と奉存候、如何様治まり付候事哉、合点行不申候」と、浪士の動静についてさしたる興味を示すことなく、浪士数の増減など漠とした報告に終始して居る。さらに、同じく洞龍之輔の同月十九日付の用状では、「太平山之激士、今以屯致し居候近辺慕行仕候よし、乍去格別之事にも無

御座候噂人数は追々増候と申事ニ御座候、善悪とも今以御所置無御座趣一向合点参り不申」と徳川幕府の判断に委ね、「困た御時節ニ御座候」と愚痴り、横浜、江戸の景況は変わりなく、同地の無事ばかりを報じる。事無き現状を喜ぶ役人一般にありがちな報告書といえはそれまでだが、洞の報告は藩主の御側に生成された政治情報収集システムには不適なものであった。よって、元治元年五月二十六日、黒田日向、安達清一郎、河毛文蔵という、京より良質な政治情報を発信した人材を江戸屋敷に派遣し、的確な情報収集作業に当たらせた。三名の江戸行の報せを聞いた洞は、五月二十八日付用状において、江戸、横浜、水戸に関して「実事探索行届兼申候」と情報収集作業の怠慢ぶりを吐露することとなる。

幕末政治の比重が京・大坂に傾くにつれ、それまでならば、格式の高い家臣が詰め、公儀および在府の大名家との交渉に当たる繁多な江戸屋敷が閑職となり、京坂支局には政治的才智ある人材が赴任するようになった。藩校尚徳館関係者が、藩主への建言により認められて、「昵近」となって御側勤仕が許され、周旋方・探索方となって赴く先は京・大坂であった。京・大坂から江戸に赴任し、国元に届けられた情報を見れば、その詳細さと優れた政治視角がうかがえよう。

河毛文蔵は、京を発つ前日、五月二十五日にも、用状を認めている。水戸における天狗党に関する大まかな情報は、徳川慶喜へ拝謁した際に得ており、「関東之鎖港之事并水府一条之事も段々奉伺候得共、横浜之儀は川越侯へ御任セニ相成候ニ付大方取掛りに相成とあらふ」と、慶喜は出自の水戸藩徳川家の騒動に冷静を装う。これには同行した安達清一郎とともに憤り、「先天下之事は度外ニ御置被遊、一口を申上ハ御隠居之様之御気分ニ而京洛丈御守衛被遊候思召歟」と、京都のことのみ重視している慶喜に「清一郎と一处ニ罷出大ニ失望」している。江戸に入った河毛文蔵の第一報は元治元年六月十五日付の用状である。

(前略) 水中納言様俄二御反覆結城党六百人水邸へ参り大場(一真齋)・武田(正生)始原市(原市之進)等之者八人死を賜り候様申出候趣、遂二御囚二相成申候二付、迎も最早京師二而尽力不致而は関東二而は手を下す所も無之处、此節水人先手之通道中殊之外六ヶ敷御座候二付此方藩人相成上京仕候、翌十二日主税頭様(水戸連枝宍戸藩前藩主松平頼位)え参殿、両君(頼位・宍戸藩主松平頼徳)へも早速拝謁被仰付候、両君にも御困難御当惑、中将様(慶徳)え面目なき段御厚謝御座候、全く此度之儀一朝一夕之故二あらず、昨年より水人結城党之者太田老公道醇・板倉侯(勝静)等え窺二入込入説致し、幕府御役人え結ひ候趣、太田公余程尽力被成と申事二御座候、此等之事二而川越侯御直二言上、板倉侯えは御退被成候所、中納言様結城を御信用之折柄二候得は大ニ御逆鱗、川越侯我俣致し方以之外之事二付御出勤不被成様との事二而、川越侯えは大樹公より暫退き居申候様重而御沙汰御座候得は夜中二而も登營被為在候様御直命御座候之由、追討も牧越(笠間藩主牧野貞明)・松右京(高崎藩主大河内輝照)両公え被命先達而発軍二御座候、主税様より討手少しも遷延致し候所尽力致し候様二御沙汰も御座候而、其内二は湊小川屯集之徒八百人計出府致し、中納言様え陣死も致し結城等も働可申候建論致し居申候所、追討使発向致候二付而は築山を援け戦争二決し候趣、其内板倉侯も昨日一日出動直二引籠、水野も今日御引と申事二御座候、中納言公より川越侯御退役を時々弁し御催促被遊と申事二御座候、今日御用番様え御建白差出し拝謁之水野侯え相願候様との御差図二御座候得共、只今日御引二相成候得は急二は六ヶ敷と奉存候、水戸様えも掛合致し御座候得共、未夕何之御沙汰も無御座候、兼而同志之仁は国元え帰り、或は京師へ上り忤致し候二付別而不都合二御座候、迎も急二拝謁は無覚束と奉存候、ケ様之模様二而我等進退も究り申候(以下略)

江戸留守居役の洞に比して、詳細な政治情報である。水戸藩内激派天狗党の運動を阻止しようと立ち上がった「結城党」すなわち弘道館諸生派の動向。水戸連枝宍戸藩前藩主松平頼位、宍戸藩主松平頼徳への面会と両者の困惑。川

越藩主松平直克の事態收拾への非介入方針に対する「我俟」たる評価と將軍家茂からの罷免通告。徳川幕府の軍勢を巻き込み、三つ巴の混乱状況を的確に描写し、これに手をこまねき、登城拒否を始めてしまった板倉・水野両老中の姿勢に対し、これでは事態の收拾は困難であると述べるとともに、「我等進退も究り申候」となす術がない旨、報じる。

水戸藩情を受け、鳥取藩池田家がおこなった対応は、横浜鎖港もままならない徳川幕府に対し、まず横浜鎖港の具体的プランを立て、「野州一揆之徒、且、諸方潜伏之士、攘夷先鋒に加」えることで、まずは混乱鎮静に当たるべきと建言したことにとどまる¹⁷⁶。この建言の採用を待つべく、安達、河毛らは同年七月中旬まで江戸滞在を余儀なくされる。河毛が言うように水戸藩内訌問題は他大名による周旋で鎮静されるものではなかった。当事者たる徳川慶篤が思い悩んだあげくに、事態收拾を先とし横浜鎖港論を捨象したことにより、鳥取藩池田家による周旋は実を結ばなかった。そして、在府期間が長引いたことは結果として安達、河毛ら京都支局の柱となるべき人材の京都不在を意味した。

長州処分への対応をめぐることは、鳥取藩池田家ではその対応策を講じるべく、周防・長門両国に、そして京坂方面に周旋方および探索方を派遣し、その政情を調査するとともに政治運動が「反徳川幕府」へと硬化しないための周旋に努めた。周旋内容の逐一については、すでに拙稿において論じたので繰り返さないが、元治元年三月、「征長」処分を定めた徳川幕府に憤激し、諸隊（遊撃隊および膺懲隊）の編成および強化が急がれていたなか、周旋方松田正人が長州に赴き、その鎮静に努めている¹⁷⁷。

元治元年四月、在京の河毛文蔵は同十三日付の用状において、松田の周旋について触れ、「長藩人遊撃隊動揺二付而は先達而正人奉遣し説得致サセ候処、先は鎮静二相成」ったが、遊撃隊の内から「老体之者」を撰出し、五十人余りで近日上京する噂があり、免罪交渉中の在京の長州藩士は苦心し、さらなる鎮静化を鳥取藩京都屋敷に依頼してきている。「長人五十名之上京致し候而は平家之水鳥の如くすは長人五百人も上京と騒立」ると、一旦、退京した薩摩・福

井松平・宇和島伊達が再度入京し、息を吹き返しかねず、「長州之名分も相立」ないので、「御家より鎮静方ひたすら相頼」ように求める。長州勢の動向が諸大名家退京の後、慶喜を中心とし「静謐」となった京都の政情を悪化させると理解したのである。

京の静謐なる状況は、遠く水戸藩内訌問題によっても影響を被る。安達清一郎ら京都支局主要人員の江戸出向にともない、京都支局の実務は大坂留守居兼帯の山部隼太が担う。山部より出された元治元年六月一九日付の用状によれば、「水戸様御様子ニ付、一橋公被遊御苦心」と、徳川慶喜が出自の水戸徳川家内訌問題に頭を悩ませており、その要因として、「水藩四人ニ而去十六日夜平岡延四郎を斬奸、河村敬十郎え手を負セ」た、慶喜側近平岡四郎殺害事件をあげる。また、慶喜は、京都の混乱状況を「五日以来会藩我俣」と、京都守護職会津藩松平家と、「五日」の事件、つまり会津藩預かりの新選組による浪士肅清、すなわち池田屋事件によるものと見ており、「形勢御回復」の方法を探っているという。これに池田家が対応するために、「御分知様之内御壺方御人数等も早々御登セ相成候様」と、池田家の分家当主としかるべき数の藩兵の速やかなる上京が必要であると述べる。また在京着座の荒尾駿河の帰国にともない、代わって京都詰の家老となっていた着座津田雄次郎も六月十九日付の用状において、殺害された平岡四郎の斬奸状況および検死について報じるとともに、「一橋公を扶助し屹度正義御主張被為在候様可致之所、御家来と申は大抵幕府より御付被成候もの、弊藩より差出居候人数は些少之事ニ而甚微力之至り」と、慶喜による政治体制扶助の必要性と分家当主および家老一人の早急な率兵上京、そして時勢に対する「国論」すなわち藩是の決定を求める。

大名の上京が見送られる政情において、池田家京都支局が政治の軸と定めた徳川慶喜をバックアップしうる体制の構築が模索されているのである。鳥取藩池田家において国政へのスタンスを決定させたのは、京都においてまさに起こらんとしていた戦乱に対する情報であった。江戸出向中の河毛文蔵の人員補填として、京都詰を命じられた近習兼周旋方黒川八十輔は、六月二十五日付用状において、池田屋事件の後、さらに公儀への意識を硬化させ、その冤罪

を晴らすべく率兵してきた長州毛利勢の伏見屯集の動向を報じた。「先刻長州屋敷（伏見）着致し其外町方下宿致し惣人数余程之趣、行装は筒袖ニ而小袴袖印を付、間ニは小具足も有之と申事、明道具は不及申銘々所持」しており、「輦下揺動」の基となる。「両御館之内又者太夫ニ而も上京ニ相成候方宜哉」と、長州勢によって引き起こされるかもしれない混乱状況に対応するため、分家当主および家老の上京を促す。国内、ましてや、天皇の住まう京において、勃発せんとする内乱は未然に阻止しなければならないというのである。

この情報を得た鳥取藩池田家においては、かねてから準備に当たっていた着座鶴殿主水介「一備」を上京させ、事態の收拾に当たろうとした。この折、大名慶徳は鶴殿を呼び寄せ、以下の訓示を認めた書付を下す。元治元年六月二十九日に出された、この書付の内容こそ、京坂よりの情報が収集、吟味され決定された元治元年の藩是となった。骨子は六つ。①長州藩の寛大処分に際して「為神州何処迄も誠実に周旋」し、諸外国に対し「内憂」が生じていると悟らせないようにせよ。②「浪華・山崎」へ長州討伐の命が下ったならば、「禁闕御守衛」を理由に断り、在京者は「奴僕ニ至迄」身命を投げ打つ覚悟をするように。③長州勢が京近郊に進発してきた折に勃発するであろう薩摩・会津両藩との戦闘には、それが「洛外之事」であることを理由に傍観し、「畿内中」における戦争回避のための説得に尽力せよ。④伏見・鳥羽など長州勢が京の間近に迫り、今にも入京の気配が見られたときには、「勅免無之内」は入京させないよう差し押さえること。⑤京における他人との面会は、「最早是迄と違、集会致にも及間敷」ため一切禁止し、在京家老以下は訓示の旨を貫徹する心得あるように。⑥長州勢が「押て上京候得は、幾重にも取押」えて、「以武威令処置、干戈を動し候得は、禁闕を守護し奉り、王命を奉し、断然身首を抛ち討長致す心得勿論ニ候事」と、京における内乱の回避と戦線非介入と、長州藩の粗暴の振る舞いには、「武」をもって相対する準備をせよ、とを述べた。この慶徳の意思決定は、元治元年七月の京にのみ適応されるべきものではなく、長州戦争に対する池田家の政治姿勢となる。

京の政情がいよいよ切迫の様相を呈していくにつれ、先にみた慶徳の述べた訓示は如何に機能したのか。京都支局

内では、長州勢への加担、共闘を主張して憚らない藩士一同の鎮静が急がれ、藩主昵近で侍講の堀庄次郎が京都目付に任じられて上京し、長州への加勢と軽率な行動を慎むよう説諭する。

元治元年七月九日付、山部隼太の用状では、京における内乱勃発に対処しうる「御所御警衛」についての評議が「大抵御決」なったことを報じ（鳥取藩は上賀茂社警備）、同時に、禁裏守衛総督たる慶喜は、戦乱回避のため「天龍寺・山崎等屯集」する長州勢の「引払」を求めて「説得尽力」しており、在京の諸大名家においては、山部隼太の統括のもと、留守居一同が会合を持ち、各藩留守居の連署によって長州藩毛利家を寛典に処するよう重ねて願書を朝廷に提出した旨、報じられる¹⁹⁾。着座鵜殿主水介の率兵上京につづき、京都支局から唱え続けられた「分知」池田家の上京が実現する。七月十五日、池田家分知池田徳定が慶徳の名代として上京するが、この折にも先の訓示は貫徹されている。「脱藩浮浪之輩」との接触は避け、干戈を用いたならば、速やかに取り押えること。長門・周防二国の追討については強いて断り、討長の命が下っても、一旦は断りを入れ、両勢力の説得工作に取り組むように。長州勢が説得に応じなければ、「此上は臨機討長之御心得之外無他」と、段階を踏んだ形で武力行使を執行するとした²⁰⁾。

京都支局は、この後も京都近郊における長州勢の動静についての探索、調査を続ける。周旋方黒川八十輔の元治元年七月十六日付用状には、長州勢の動きに関する「当地之模様も先同様」と相変わらずと、抜き差しならない状況であることを報じ、「（福原）越後よりも又々歎願差出し候得共、今以御所置付不申、天龍寺・光妙（すゑ）、光明）寺之人数は先引取申候、追々長人共上坂仕、讃岐守様（清末藩毛利元純）左京介（長府藩毛利元周）も登り候様子、多人数相成程事六ヶ敷哉と奉存候」と、長州藩からの度重なる釈明歎願に対し、然るべき対応がなされていないことを述べ、長州支藩主も上京の様子で、人数が日を追うにつれ増大し、様相は困難を極めると予測する。支局においては、七月十五日、「（鵜殿）主水介・（山部）隼太・周旋方一人（土肥謙蔵）罷出、色々申上候所、昨日は一向御沙汰、先日二違ひ何とも不奉畏退出致し候、此上は周旋致し候様被仰付候得共、迎も容易ニ長人も引取不申」と禁裏へ対策を講じる

よう申し出るも、沙汰なきに終わっている。また「一橋公昨日も今日二御沙汰替り之様ニ而ハ実ニ残念之事」と徳川慶喜自身の長州処分の方策も落ち着くことなく、このままでは「戦争ニ相成可申」と、京中における戦乱勃発が不可避であると報じている。

京よりの政治情報をもとに、大名池田慶徳が決定した情報戦線非介入の藩是によって、京における長州勢と薩摩・徳川幕府間の戦闘である禁門の変へ政治的にも、軍事的にも、一切の関わりを持つことはなかった。鳥取藩池田家は、同年十月以降開始される長州戦争に対して、朝廷および徳川幕府よりの命を待ち、内乱勃発の恐れあるときには、これを最小限に食い止めるべく出兵するという藩是をもって相対し、ここにおいて「乱臣之國柄」と評された長州藩毛利家は池田家にとって討つべき対象と認識されたのである。

小 括

本節では、およそ次のことが考察できたであろう。まず、大名家京都屋敷を軸とする京坂支局のありようと幕末期の国政に関する職務増加にともなうシステムの変容についてである。鳥取藩池田家においては才知ある人材が支局実務に当たり、同所の政治判断および執行が、文久二年以降、展開されてきた大名自身による国事周旋を俟たずとも遂行できうるレベルにまで高められていることである。近世後期から近代において問われる能力主義的な政治システム生成の萌芽ともとりうるが、幕末期に支局運営に投入された才知は、厳然として存在した大名家の格式および職制の枠のなかで位置づけられるものである。幕末政治において、その能力主義を問うならば、周旋方や探索方という本来の職制に存在しなかった職のありようと、池田家において元治元年初頭以降、生成されうる周旋方・探索方を含む大名側近による国事審議および政治情報収集システムについての考察が必要となる。本節では、その両件について、

「京坂書通写」なる史料と、そこに認められた用状の分析により、大名上京が執行されなくなった大名家の国事への関わりについての基礎的考察をなした。ここに生成されたあらたな政治システムの詳細については、そこに関わる人員と政治情報の性格をふまえ、考察を深化させることにしたい。

大名自身による政治運動に執行されなくなったことを示すトピックとして、池田慶徳の「参議」推任叙の問題を取り上げた。徳川慶喜よりの池田慶徳上京要求を含め、元治元年三月以降、禁裏守衛総督たる慶喜を中心として形成される「一会桑」主導の京坂政情の有力な政治主体となる可能性を有したこのみならず、ニュースソースたる京都支局よりの政治情報を議し、大名の病身たることを理由に、上京および「宰相」辞退に及ぶ池田家の政治意思決定は、すなわち確固たるビジョンを有さず、ただ大名自身が上京・上府をおこなうことによって成立しえた「文久政治」から、内乱勃発の危機のみならず、外に対しても政治問題を孕んだ元治元年の国政において、藩国の維持存続のために、もたらされる情報の一つひとつを吟味しなければならない状況へと転換されていることを意味しよう。ゆえに、情報の有用性がそれまでに比して著しく高まった政治状況として、「元治政治」は説明できうるのである。そして、周旋方、探索方や大名「昵近」の増加は、この状況に対応するべく生まれた事実として説明できうるのである。

幕末政治といえば、登場する人物の才知と、それによってもたらされる政治事象に注意が払われてきた。このことは、これまでの明治維新政治史が討幕主体の形成の問題ばかりに終始したことの理由の一つとなろう。

第三節 長州戦争と鳥取藩池田家―戦争に対する政治意思を素材に―

1 鳥取藩池田家の長州藩毛利家救済意識とその意図

先にみた文久二年（一八六二）十月から、藩主池田慶徳が上府、または上京することにより、鳥取藩池田家の国政参加を旨とする政治運動（国事周旋）は展開された。これは池田家に限られることなく、藩主あるいは藩主の代行としての世子（藩主嗣子）を主体として、徳川政権・朝廷（天皇、公家）に政治的な働きかけをおこなうという政治運動の方法は、同年四月の薩摩藩島津久光の上府・上京運動以降正当化された、当該期における大名家による政治運動の特徴である。

たとえば、文久二年閏八月、江戸において、一通りの幕政改革要求を終え、再度上京した島津久光が、武家伝奏・議奏に提出した「朝議確乎トシテ不被為動、匹夫之激論一切御採用不被為在」²²との建言書の文面によって、「浪士」または「匹夫」、つまり浪人・下級の大名家臣という軽輩の政治的言動をあからさまに否定し、浪士・大名家臣層による下からの言路を断ち切り、大名家の政治運動は、あくまで大名が主体となり、その名義のもとに展開されるべきと方向性を示したことからわかりえる。

この方向性をもとに、文久三年（一八六三）八月、長州藩毛利家臣を中心とする急進グループ（いわゆる尊攘急進派、尊攘激派）により生成された「攘夷」「天皇親征」を旨とする政治路線は、下からの身勝手な言動と否定的に解され、京都守護職会津松平家および在京の大名権力に排除されることになったのである。

政変後、正規の路線に軌道修正された大名家の政治運動は、安政五年（一八五八）の通商条約調印以来、国政における最大の政治案件となっていた「攘夷」をめぐる対外問題²³と、政変によって、在京の大名家臣（薩摩島津、会津松

平）によって政治運動の方向性を否定され、国政への参加資格を奪われ、朝議改革をもくろんでいた三条実美ら七人の公卿をなかば拉致して、藩地山口に赴いた長州藩毛利家の処分をめぐる問題という、国内外に対する二つの政治案件を解決するべく展開されていく。

さて、政変後、鳥取藩池田家における政治運動は、徳川政権による攘夷問題の解決と、事実上、政変の敗者となった長州藩毛利家の処分への対応をめぐり、在京の藩主慶徳が私見を朝議に申し出るかたちで展開された。前者については、政変後の朝廷の「攘夷」意思を明確にするべく、有栖川宮熾仁親王を攘夷別勅使として江戸に派遣し、徳川政権に早期解決を求めようとされたが、江戸築地の軍艦操練所において、九月十四日、老中水野忠精・同板倉勝静らとアメリカ・オランダ総領事との間で、横浜鎖港交渉が開始され、形式的にも幕府が「攘夷」への姿勢をとりはじめたことで、勅使派遣は延期（事実上、中止）となった。これにより、文久二年十月の初上京から徳川將軍主導により「攘夷」問題を迅速に解決すべき、と主張することで展開されてきた慶徳の政治運動の意義を消失することになり、十月十日、慶徳が帰国する原因となる。

また、後者、長州藩毛利家処分については、同家に対する朝廷内の溜飲を下げ、国内における争乱勃発を回避するため、政変後、度々、建言書を提出している。では、なぜ、長州藩の処分を寛大化しなければならないのか。それは、九月二五日、津山藩主松平慶倫³³・阿波藩世子蜂須賀茂韶・津藩世子藤堂高潔・岡山藩主池田茂政・安芸藩世子浅野茂勲ともに連署にて朝議に提出された、在京時における最後の建白書にあらわれる。

（前略）去ル十八日以来、疎暴之処置有之候趣にて、毛利讃岐守以下帰国被仰付候儀は、元より疎暴之処置無之とは難申候得共、昨年以來薩長之儀は、衆心勤王之基本相開候処を人心承知仕居候儀ニ御座候間、二国和睦合心致し候様御処置無之では、自ら列藩嫌疑を懷ては甚御大事之儀、薩長二藩ニ不限、惣て列藩一致ニ無之では拒攘

も難相成、実ニ御大事之御場合ニ付、何卒其辺を以、朝議を被尽、長門宰相父子之处は、御用も被為在候節は可被為召と申様ニ御沙汰被成下候は、微臣共も一列之儀ニ付、深難有畏入候。右之段可然執奏希入候。(以下略)⁸⁴

長州藩毛利家臣の「疎暴之处置」はあながち肯定できないが、彼らの政治運動が、薩摩藩島津家とともに「衆心勤王之基本相開」くために展開されたことは、もはや「人心承知」するところである。また「列藩一致」でなくては「拒攘」(＝攘夷)が困難である。よって毛利家に対する処分は寛大であるべきとするのである。

ところで、政変以前から慶徳の「攘夷」の方策についての基本的方針は、徳川將軍主体であつたはずである。だが、ここでは「攘夷」のための主体は列藩であるとし、そのなかにおいて長州藩毛利家の存在を重視している。では、この毛利家擁護の意識がいかにして生成され、池田家の政治運動にいかに関わっていくのか考えていく。

文久二年(一八六二)閏八月十四日、毛利家は藩主慶親の名をもって、関白近衛忠熙に対し建言書を呈し、朝議において破約攘夷の国是を決し「攘夷」向けての確固たる意思を示した⁸⁵。そこにおいて、毛利家は、「皇国正氣御維持」のため「断然独立ニテ」攘夷に取り組む気構えがあることを明らかにした。彼らの姿勢は、翌三年、將軍家茂が上洛の上、決定された攘夷期限(文久三年五月十日)に、領内関門海峡を通航中のアメリカ商船に対して砲撃をしかけ、単独にて攘夷行動にでたことからもうかがえる。だが、攘夷に向けての確固たる気構えも、アメリカ艦に同家の有する砲台および船舶を攻撃され、同じく砲撃をおこなったフランス艦隊に前田・壇ノ浦砲台を攻撃、占領されて、劣勢に追い込まれ、米佛両国の軍事力を目の当たりにしたことにより、陰りと焦りが生じてきた。毛利家の焦りは、領民まで巻き込んで、矢継ぎ早に結成され、毛利家の軍団編制に組み込まれた「諸隊」⁸⁶や、次にみる隣国諸大名に対する攘夷応援要求となつてあらわれる。

文久三年六月九日、藩主毛利慶親は、毛利家世子定広の侍講山縣半蔵(のち宍戸璣)と世子小納戸役長嶺内蔵太(の

ち渡辺内蔵太）を安芸浅野・岡山池田・阿波蜂須賀・土佐山内・浜田松平・鳥取藩池田に派遣し、諸外国との戦闘に際し援助を求めた。⁸¹

長嶺・山縣両名が鳥取城を訪れたのは、七月三日。あいにく藩主慶徳は、朝廷の求めに従い上京しており、側用人花房隼馬・武器奉行岡崎平内・学校奉行学正兼帯堀庄次郎が応対した。この際、毛利家側は、以下の書面を差し出し、その了解を求めた。

（前略）此度叡慮遵奉幕議随順之御趣意にて、御領内ニをみて米佛等夷船被及討払候処、素より兵備手薄く、軍政至て不整之儀ニは候得共、義之所重力の有限尽誠は可仕之处、微力独任にては皇国御持堅めの御目途は難相立、甚以奉恐入候次第二付、御応援之御手段は有之間敷哉、御高慮被成下度（以下略）⁸²

アメリカ・フランスとの交戦により「兵備手薄く、軍政至て不整」、「微力独任」では対抗しがたいとの認識のもと、池田家に応援を求めている。これを受け、池田家側は、在京の藩主慶徳に問い合わせた後、正式に回答を述べるとし、早速、飛脚を以って在京家老に宛て書状を送り、加えて堀庄次郎が上京し、事情を説明することになった。

毛利家の応援要求をめぐり、池田家内では二つの見方が生まれた。一つは、毛利家の攘夷の姿勢に共感し、即刻、精選の「壮士」を長州に派遣するべき⁸³、あるいは毛利家の加勢を望み、さしあたり「御国産之大砲、或は玉葉之類御送ニ相成候ては、如何可有御座哉」⁸⁴と、毛利家に対し積極的な援助をおこなうべきとするもの。もう一つには、「長州侯え御使者等御差向被成候儀共、万一有之候得は、此節柄無益之御手数掛りても不宜」⁸⁵と、毛利家に加勢することで、池田家の政治運動の弊害となり、加えて、急速かつ無謀な攘夷をよしとしない徳川幕府の意向をはばかるものである。

前者は、特に文久二年九月、藩主慶徳の上京決定後に任命された「周旋方（国事周旋方）」⁹³に多く見られる見解で、「周旋方」は、江戸および京坂地域、諸大名家において要人への折衝および情報収集という外交活動にあたり、そのため急進的志向を有する大名家臣と交流があった。毛利家擁護の意識は、同家臣との交流から芽生えたものであろう。また、「周旋方」を差配する池田家京都藩邸（京坂における政治執行権限を有するようになるため、以下、京都支局と呼称）の諸役（在京家老、留守居、目付）も一様に、毛利家擁護の姿勢をとった。諸大名家の上京および將軍家茂の上洛を得て、政治・外交の「場」となった京都において、攘夷断行志向は、もはや世論となっており、毛利家が単独でこれをおこなったことは、否定されるより、むしろ称えられるべきことになっていたのである。

文久三年六月、再度上京していた藩主慶徳は、毛利家の行動に賛意を表せない立場にあった。彼の政治主張は、文久二年十月になされた、初めてのの上京以前から一貫していた。攘夷はおこなうべきとするも、その主体はあくまで徳川將軍であり、これを補佐する徳川家門でなければならない。実際、上京後、「攘夷親征」を主張して、天皇を「夷狄」の矢面に立たせ、同時に朝議を変革することで、自らの正当性を証明しようとした急進派の公家、これと交わり既存の徳川政治体制批判を展開する大名家臣らの政治運動を退け、何度となく幕府に建白書を呈して、徳川將軍主導による攘夷問題への対応を促していた。ゆえに、慶徳にとって毛利家臣による急進的な政治行動は、攘夷に対するあきらかなスタンドプレイであったのである。

この毛利家拒否の反応は、他の大名家においても同様であった。毛利家からは、長嶺・山縣の他に、家老浦鞆負の陪臣で、「遠近方」（「周旋方」と同義力）を命じられた秋良敦之助⁹⁴、坂上忠輔を宇和島伊達家および薩摩藩島津家・熊本藩細川家ほか九州諸大名に派遣し、同様の援助が求めたが、「婉曲の辞を以て之れに答」るばかりで、「敢て猛進弘攘に当るの決意」⁹⁴をする大名家はなかった。

文久期における大名家の政治運動の主体が、大名あるいはその世子であることは、先にも述べた。池田家において

も例外なく、藩主慶徳の意向が、そのまま同家の政治運動の方針となった。これに異を唱える家臣は、なんとか藩主の思考を改めようとはかるが、その矛先は藩主を取り巻く側役一同に向けられ、主君の心を惑わす「奸物」として、葬り去るという行動にでる。文久政変の前日、八月十七日に、京都における本陣としていた本国寺でおこった「周旋方」を中心とする側役殺害事件の原因である。

ともかくも毛利家への対応をめぐり、池田家中の見解は二分された。だが、前出の毛利家擁護の建白書に見られるように、政変後、慶徳は一変、毛利家擁護の姿勢をとった。政変後、毛利家は冤罪をはらすため、家老根来上総を上京させ、朝廷に歎願書を提出しようとしたが、入京を禁止されていた。これに対し、慶徳は、毛利家側の言い分を聞きただした上で、「寛大之聖慮、公明正大之御処置」あるべきとし、攘夷には「日本之力を尽」さなければならぬ。その方法はともかくも、攘夷に尽力してきた毛利家を「入京差止と申様にては、群少之疑心より如何様之心得違之もの出来不仕共難測」と、毛利家が処分されることにより、毛利家のおこないを正義としてきた大多数の人間の心を失望と不安を生じさせてしまうと主張した⁹⁵⁰。

さらに、周旋方として在京していた沖探三（守固）⁹⁵¹から鳥取城下の弟、沖剛介に宛てた書翰（文久三年九月十三日付）⁹⁵²から、政変後における慶徳による毛利家擁護の意図がうかがえる。

（前略）君上（慶徳）ニも愈廿一日（九月）頃御帰国之御様子ニ御座候処、帰国論ニ付、種々議論有之。全薩会処置不正ニ付、堂々議論御建白ニ相成、正義相達不申御帰国相成候義ニ御座候得ハ、進退分明難有事御座候。然ル処、此度之帰国論、全君上思召ニ而、二条公（斉敬、当時右大臣）へ御相談之由ニ而、御帰国御決定ニ候由（中略）当節之形勢帰国ハ宜御座候得共、帰国之致方不宜、誠残懷と奉存候。（以下略）

周旋方沖探三が問題にしているように、政変後における池田家中では、文久政変のありかたと、藩主慶徳の帰国が問題となっていた。政変の首謀者たる薩摩藩島津家および会津藩松平家のやりかたを「不正」であるとし、本来ならこれに対して藩主慶徳は、堂々と議論・建白するべきである。徳川幕府による横浜鎖港談判開始以降、帰国を望んだ慶徳の意思は曲げることはできない。ただ帰国するにも、堂々と朝議および薩摩・会津と議論してから帰国するべきであり、そうでなければ、池田家の「名義」が立たないとするのである。

沖ら周旋方が池田家の名義を立てるために、帰国する藩主慶徳に望んだのは、第一に政変の真相を明らかにすること⁹⁸、第二に、毛利家および大和において挙兵した天誅組の処分を寛大なものとすることである。

よって、九月二五日の建白書にみえる慶徳の毛利家擁護の意図は、慶徳主導の鳥取藩池田家の政治運動に正当に位置付け、さらに、政変の不透明性とそれに関わる薩摩・会津の「不正」な政治運動に対してアンチテーゼを唱えるためであり、毛利家に対する切なる同情心からでたものではなかった。

2 長州処分をめぐる政情と政治運動の変容

横浜鎖港談判を開始した幕府の攘夷問題への対処と、十月十一日の池田慶徳の帰国は、鳥取藩池田家の政治運動のありかたに変化をもたらした。

一つめに、前述の通り、幕府により横浜鎖港談判が開始されたことにより、形式的にも徳川將軍主導の攘夷問題への対応をめぐる政治運動が成立しなくなったことである。「攘夷問題の解決」は、藩主慶徳が主導する池田家の政治運動のメインテーマであった。この必要性が暫定的にもなくなってしまったことは、藩主慶徳が京都において国事に参加する意味を喪失させた。文久三年十二月、慶徳と時を同じくして帰国し、藩地にあった岡山藩主池田茂政は、兄で

ある慶徳に宛てて送った書翰において次のように述べる。

（前略）只今上京候ても、薩・越勢甚敷様子、加之ニ会藩も同様にて、専ら因循説を主張致し候趣故、御同様ニ只今上京候ても、迎も右之説ニはあひ不申、又乍失敬、貴兄・小子等之力にて、薩越会之説を破り候儀は、千万六ヶ敷と奉存候。又、只今攘夷は不宜、開港は宜敷と申候ては、名義も相立兼候様ニ奉存候。夫と申も、是迄は攘夷之处主張致居候事故、今、されハとて考も付兼候（以下略）⁹⁶

政変後の政治秩序の回復を目指し、十月三日、島津久光が上京してきた。「永世不拔之御基本相立」で、「列藩上京之天下之公議御採用、大策御決定」すること、つまり、新国是樹立のための諸侯衆議による政治体制の構築実現を議論するのである。十月十八日、松平春嶽、十一月三日、伊達宗城がそれぞれ上京。加えて、久留米藩有馬家・熊本藩細川家ほか九州諸大名には、同年七月に国是樹立に向けて島津家と申し合わせが成立していた。久光ら諸侯は、徳川政権をなかば、ないがしろに国是審議機関の樹立を急ぐ。これでは、池田家の政治運動の「名義も相立兼」、成立しえない。「是迄は攘夷之处主張致居候事故、今、されハとて考も付兼」との茂政の見解は、まさに、鳥取藩池田家の政治運動の限界を意味したのである。

二つめに、島津久光らの上京が相次ぐなか、池田家中から、それまでのように、藩主慶徳の上京周旋が要求されなくなった点である。文久三年十一月二十七日、京都留守居安達清一郎は、武家伝奏飛鳥井雅典より藩主慶徳の上京を求める達書を受け取る。これまでなら、安達はすぐさま慶徳に上京周旋を求めるところであるが、十一月二八日、藩地側役に宛てた書翰では、以下の判断のもと、慶徳の上京の否を論じた。

まず、朝廷から、慶徳の他、池田茂政、蜂須賀斉裕・茂韶父子、浅野長訓に上京が命じられたが、「当地時情之儀ハ

同人（京都目付河崎政之丞）ヨリ委細御承知可被遣、兼而御談合申上候通り、此度ハ御不快ニ而御断被仰上候方可然と奉存事ニ御座候」と、將軍上洛を控え、慶徳の上京は京都支局でも問題になっていたが、病を理由に断るべきとの見解に達しており、その理由として、「当時、会・薩・越・土・宇和島・久留米・肥後同盟ニ而、諸事周旋有之、結局之處、航海論ニ押し詰メ候見込みと相見へ」、「今と相成候而ハ却而先達而之疎暴過激之議論床敷相覚候事」と、当時の政情は、会津松平、薩摩島津、福井松平、土佐山内、宇和島伊達、久留米有馬、熊本細川の大名家が同盟を取り結び、「航海論」つまり開国論を主張し、勢力を拡大しており、はなはだ「歎息之至り」と書き送っている。¹⁰⁰

これを受け、藩政府は、十一月三日、藩主慶徳が「足痛、痔疾」であることを名目に上京を断念することに決する。これ以降、慶徳の上京周旋はおこなわれない。彼自身、持病の「癰鬱瘰癧」で健康不良であったことも事実¹⁰¹だが、たとえ健康で上京したとして、池田家にとって有益な政治運動はできるはずがない、と安達ら京都支局は判断した。藩主による上京周旋に見切りが付けられたのである。以後、藩主慶徳が藩地を動かないのは、藩主の上京に政治運動の意義を求めなくなった京都支局の政情判断によるもの大きい。

一方、久光らは、朝議執行部に働きかけ、「朝議参与」となり、国是樹立を目指した。しかし「参与會議」は、その成立当初から、大名の政治運動に介在する朝議との政治的癒着傾向を嫌う幕府により危険視され、在京老中が一橋慶喜と、朝議執行部を取り込み、元治元年（一八六四）三月、久光らの諸侯衆議による政体創出の構想は崩壊をみる¹⁰²。

この結果、大名による上京周旋を旨とする政治運動が、幕府により完全に否定されることになった。「参与會議」の瓦解は、大名家の政治運動を大きく変容させ、藩主自身は藩地に止まり、中央政治の有り様を政治情報のみによって察知し、政治意思の決定をしなければならなくなったのである。

さて、「参与會議」においても議せられた重要案件には、毛利家処分問題があった。処分を嚴重化させ、毛利家側が要求をのまない時には、即時征討も辞さないと主張する久光ら参与諸侯と、もう一つの案件として、依然未決であっ

た横浜鎖港問題の方針確定を先決とするため、毛利家処分を暫し棚上げにしたい徳川慶喜を含む徳川幕府の間で議論が割れたが、文久四年正月末段階において、毛利家分家の当主および本家の家老、それぞれ一名を大坂に召喚し、在京老中一名が大坂において毛利家の行状について糾問し、山口に「落ちた」三条実美ら「七卿」¹⁰³をすぐさま朝廷に差し出すよう命じ、これに応じなければ征討に移ることに決した。また征討の布陣についても、將軍名代に紀州藩主徳川茂承・副総督会津藩主松平容保・差添老中有馬道純・討手に鳥取・阿波・薩摩・熊本・安芸・岡山・小倉・福山・龍野の西国諸大名が任じられた。これは三月初旬、参与會議が破綻しはじめると、幕府および天皇の意向で決議し直すことになるので、あくまで暫定的なものであるが、在国中の藩主慶徳および岡山藩主池田茂政は、この決定に危機感を抱いた。

文久四年正月二十三日、慶徳が茂政に宛てた書翰には、その危機意識がうかがえる。

（前略）五侯朝議参与、且、長討之儀、備・芸・因え被仰付候様ニと会より申出候事等、実以御同意驚愕之事ニ御座候。如貴殿示、迎も上京候とて、周旋の道ハ無之（中略）当今之形勢攘夷は外に相成、専長討之説ニ相成候段は、痛哭之次第、実以正義主張可仕義は申迄も無之故ニ、進退困苦仕候（以下略）¹⁰⁴

慶徳は、政変後、藩地に留まり、毛利家擁護の姿勢をとってきた。だが、参与會議が「毛利家征討」を方針とする以上、重ねて毛利家擁護を唱えることはできない。参与會議が、政変後のあらたな政治秩序を創出し、国是を審議する機関として成立している以上、朝議参与ではない慶徳らに国事執行に対する発言権はない。さらには、前出の茂政書翰の通り、久光ら参与諸侯を論破することはおろか、対抗することすらできない。政治運動のために「攘夷」が使えず、「毛利家擁護」の要求も通らない。加えて、隣国長門・周防において毛利家処分をめぐる内戦が勃発する可能性

が高まってきた。池田家はこれに討手として加わるばかりか、藩地因幡・伯耆にまで戦火が及ぶ危険性が生じてきたのである。

慶徳は前出の正月二十三日付、茂政宛て書翰において、また以下のように述べる。

（前略）国家浮沈之時、傍觀致候て、徒ニ社稷を倒候迎、忠孝之両道相立候共難申、又一時之権道も相用、時を待て謀候ニ不如と奉存候。只今天疑幕疑を蒙候ても、於一身可恥義ハ無之候得共、又為社稷に不謀ては、祖先へ対シ不孝之罪免（以下略）¹⁰⁵

自らの政治運動の限界を悟り、隣国において戦争が勃発するかもしれない危機的状況において、慶徳は「社稷」への影響を考慮しはじめた。ここにおいて「社稷」は、「祖先」への「孝」との関わりから、「藩国家」をさし、大名家における個別領主権の伝統をも想定されている。書となつてうかがえる鳥取藩主慶徳の政治意識に、「社稷」維持・「祖先」への「孝」が表れたのは、管見の限り、これが初めてであり、以後、徳川将軍家による毛利家への征討、つまり長州戦争が現実味を帯びてくるにつれ、慶徳は因伯二国の大名として、池田家が徳川将軍から預かった領地と、祖先からの伝統を頑ななまでに守ろうとする意識をあらわにしていく。この慶徳の「家」守護の意識が、長州戦争に対する池田家の政治動向を規定していくことになる。

3 長州戦争に対する「家」存続の論理

長州藩毛利家の隣国諸大名家へのアプローチは、攘夷行動の応援要求から、政変を経て、自らの政治運動の正当性

を主張し、賛同を求めるものと転化した。政変直後から、家老根来上総を上京させ、縁戚で毛利家執奏の勧修寺家を仲介として、免罪のための歎願をおこなおうとしてきたが、朝議はこれを容易に聞き入れず、免罪歎願運動は空振りに終わっていた。隣国諸大名家へのアプローチは、朝議への直接歎願だけでなく、朝議の関わりが深い大名家の理解を得ることにより、免罪成就のための「外堀を埋める」作業であった。

文久三年十一月、毛利家は家老井原主計を上京させ、毛利家執奏の勧修寺経理に、毛利家の政治運動に対する孝明天皇の勅問に答えた「勅問奉答書」と、政治運動の正当性を証明するため同家の政治運動の履歴を綴った「奉勅始末記」に提出するとともに、藩士国重徳次郎を阿波藩蜂須賀家・津藩藤堂家へ、藩士木梨平之進を安芸藩浅野家・岡山藩池田家・津山藩松平家・鳥取藩池田家（いずれも訪問順）に派遣、「奉勅始末記」の写しを差し出し、自らの政治運動に対する理解を求めた。

これへの応答として、藩主慶徳は、長州藩主毛利慶親に対し、「当八月十八日以来、不慮之御事、於小子も乍憚致痛哭」していると遺憾の意を述べ、「攘夷遅延ニ及候段、不被堪御憂慮旨御尤千万、御同意」すると、幕府の攘夷に対する消極的姿勢を咎めて、毛利家の攘夷姿勢を肯定し、「攘夷之叡慮貫徹之期を得、尊藩御忠節著明相成候様、不堪祈願候」と、攘夷のさらなる貫徹を期待し、不慮の罪が晴れることを祈るというものである。¹⁰⁰率直に言って、極めて社交辞令的な応答である。自らが正しいと主張するものを、無下に批判・中傷するほうが困難であろう。また、池田茂政や、津山藩主松平慶倫らとの間で、毛利家からの申し出への対応につき足並みを揃えようと、書を往復し、意見交換をしていることも事実である。¹⁰¹

ただ、毛利家に対する形式的な同情心も、参与会議において暫定的にも毛利家征討のプロセスが提示され、かつ免罪要求が聞き入れられないことに憤った毛利家臣中の急進勢力が京都政界における復権を企て、家老三人（益田右衛門介・福原越後・国司信濃）を頭目に上京・挙兵し、元治元年七月十九日、御所周辺および市中において、京都守護

職会津藩松平家・薩摩藩島津家を中心とする在京大名家連合軍と交戦して敗退し（禁門の変¹⁰⁸）、「朝敵」の汚名を被り、藩地に撤退すると、内乱勃発の可能性は高まり、もはや「対岸の火事」的な思考では済まされない状況となった。

禁門の変以前から、池田家は探索方を長州方面に派遣し、彼らがもたらす風聞情報を手がかりに長州藩内の政治動向に細心の注意を払っていた。毛利家中においても、免罪を訴えるために率兵上京すべきと主張する急進的な家臣グループ（禁門の変の主体となる）と、時機をうかがい、処分の決定を待つ藩政府との間に確執が生じ、混沌としていた。同時に、毛利家征討に関する情報が伝えられると、毛利家内のもめ事がさらにエスカレートするとふんだ鳥取藩池田家着座荒尾但馬・荒尾駿河は幕府老中水野忠精に毛利家征討を中止するよう建言し¹⁰⁹、使として周旋方松田正人を毛利家に派遣し、家中における急進論の鎮静化を求めている¹¹⁰。

このような、池田家からの働きかけに対し、長州藩主毛利慶親・定広父子は感謝の意を表し、元治元年五月、同家老清水清太郎を派遣し、毛利家のための池田家の周旋を謝するとともに、藩主父子より慶徳宛ての書状を差し出した。内容は、毛利・池田がよしみを結び、「神州之正氣御維持」ため「万事同心戮力、御互ニ尊攘之大義貫徹」を求めるというこれまで同様の内容である。ただ、清水との折衝において毛利家側から、有事に備えて、「密用聞せ家來の者一人、乍御厄介、尊藩に定居として差出置度、尊藩よりも御一人御差越被置被下候」¹¹¹と、両家間において、内々に家来一名ずつを交換、住居させることを求められたが、これには次にみる応答書をもって、池田家側は断固拒否の姿勢を貫いた。

（前略）諸事密用為聞候家來之者、御互ニ一人ツ、易地定居為致候義、情実貫徹ニ於てハ極て宜候得共、二藩相党て陰ニ事を謀候様、他ニ漏泄致候ては、幣藩、為皇国、区々尊藩之周旋仕候も、嫌疑ニ涉り、却て成功有之間敷と被存候。（以下略）¹¹²

毛利家は、冤罪をはらし、政治運動の正当性を得るため、つまりは毛利家の「私」のために、池田家との共闘を申し入れた。確かに池田家は、毛利家に対して助けの手を差し伸べたが、それは隣国における内乱を未然に防ぎ、その戦火が自領に及ぶことで、祖先より受け継いだ「社稷」を傷つけないための、「私」の論理から発せられた行為であった。

毛利家からの共闘の申し出に対し、徳川將軍家および朝廷から嫌疑を被ることで、「家」の伝統を汚される危険性がある。だからこれは断固拒否する。その「家」の有する伝統と、自らに仕える臣の暮らしを安堵するために、主君として、または、大名として取るべき至極もつともな判断なのである。当該期の書翰、日記中には「天下のため」、あるいは「皇国のため」など「公」のため文言が頻出するが、これは「私」の存在および動向を正当化するための手段として用いられた虚飾にすぎない。

元治元年七月、禁門の変を前にして、在京の池田家臣から、同家の政治方針につき、異議申し立てがなされた。それは、同年六、七月、率兵上京してきた毛利家臣の政治運動に対する池田家の政治方針についてである。藩主慶徳は、元治元年七月十二日、禁裏守衛総督徳川慶喜に書を送り、京都を戦場としないよう、毛利家使者の入京を認め、同家の粗暴な行為を説諭し、鎮静させるべきとし、長州一国を討つのはたやすいことだが、そこで内乱がおこったという事実、全国の「人心」がたちまち不安に陥るので、征討は回避すべきと主張した¹³⁰。このような毛利家を擁護し、徳川將軍家に迎合するといった慶徳の政治スタンスが、在京家臣にとっては甚だ曖昧で、因循な姿勢として認識された。

毛利家に同調するのは、本圀寺事件を起こした家臣（「因幡二十士」）を中心とする周旋方からなるグループで、彼らは事件後、京都屋敷預かりの身であり、特に首領格で、元伏見留守居河田左久馬は、役を免じられた後（安達清一

郎が伏見留守居兼任）、再び周旋方を命じられ、毛利家急進グループとともに、有栖川宮熾仁親王を擁した宮中政変を画策していた。

毛利勢の動向を察知した藩政府は、元治元年七月十五日、藩主慶徳の名代として、分家（西館）の当主池田徳定を、さらに着座鵜殿主水介の率いる一備をこれに加え、幕府が命じていた京都守護（「上賀茂御警衛」）の名目で上京させ、毛利勢暴発による不測の事態に対応しようとした²⁴。

また、在京家臣の軽挙を未然に防止するため、学校奉行堀庄次郎を目付に任じ、七月八日、上京させた。堀は、河田ら毛利家擁護を図る周旋掛と、有事における池田家のスタンスにつき討議した。

同日条の堀の日記に見える堀の論説は、同家の政治運動の方向性を示している。毛利勢に加担して、在京の会津勢力を討ち、「我大君（慶徳）ノ為メ、大姦（会津）ヲ清フヘシナリ」と主張する周旋方（河田左久馬・中野治平・松田正人ら）に対し、次のように諭した。

（前略）（会津の）迂愚ハ予モ知レリ。然モ勢力彼姦ヲ圧倒スルノ見込アラハスル迂策ハ出スマシ。今聞会津国ヲ傾ケテ此地ニ在リ、彦根ハ苗字付以上皆在京、桑名亦或ハ然ラン。其外薩・越・加・肥外小諸侯幾十家ヲ知ラス。我邸中ノ兵百五十二満タス。之ヲ以テ彼ニ抗ス何等ト正義トイエ共、卵ヲ山ニ投スルノ譬ヘナルヘケレハ、逆モ防遏スヘカラス。（中略）此挙唯必敗スルノミナラス、必賊名ヲ取ルヘケレハ、此迄助勢セシモノ迄其路ヲ絶ユル様ナルヘシ。（中略）我藩積年長（毛利家）ト同志ノ際ヲナセトモ、斯ル疎暴ノ挙ニ応シテ共ニ事業ヲ敗ルハ、我不同意ナリ（以下略）¹¹⁵

堀は、周旋方の気持ちを察し、毛利家への同情心を述べるも、現状において、「正義」の心で、毛利家に加担したと

して、その「正義」が池田家にもたらす益など無い。この無謀な戦いに、毛利家は必ず敗れる。志をともにするなら、ここで共倒れになることはない。よって、毛利家の「疎暴ノ挙」に対する加担は、その一切を認めないのだ、と。

堀は、文久二年八月、藩主昵近として、藩政に対する発言権を得てからは、池田家の「社稷」を維持するため、いかなる政治運動をおこなうべきかを常に考え、主張してきた¹⁰⁰。堀は、毛利家との連携に、池田家にとっての「私」的な有効性を見い出すことができなかったものであり、また、この判断には、内乱を回避し、領内の保全を目指す、主君慶徳の主張と軌を一にする予定調和的な政治意志決定があった。

ともかくも、禁門の変に際し、池田家は「私」のために、京都における政治および兵事への非介入方針をとった。この池田家による「私」の選択は、長州戦争、つまり隣国における戦争勃発に際し、同家の政治動向を強く規定していくことになるのである。

4 長州戦争をめぐる池田家「日和見」の論理

禁門の変に際し、池田家をなかば代表して、在京家臣の行動を制した目付堀庄次郎は、翌八月一九日、帰国する。元治元年七月二三日、関白二条斉敬を首班とする朝議から禁裏守衛総督徳川慶喜に毛利家追討が命じられた後、京都支局に入ってきた長州征討に関する政治情報と、情報を得て「出兵やむなし」と判断した京都支局の見解を携えての帰国であったが、堀自身、長州出兵に傾く池田家の方針に疑問を抱き、池田家の今後の政治方針を問いたさべく、以下の建白を藩主慶徳に提出している。

（前略）今日長州人疎暴相働候に付而は、如何様の名目を付候而も致方無之、人心も一時に離散仕候筈に御座候。

京摂の間は不及申、道中迄誰なりと長州を悪ミ候もの無御座、却而氣之毒、勿論因伯御兩國に而も末々迄、長州征伐と承り候へは、是非御断申上候杯申候もの十之八九に御座候。(中略) 此迄天下にひゞき、何方ニ而も因州様々々と唱へ候事、全く人心向ふ所也。攘夷之御尽力被遊候故之儀ニ御座候へ共、下方ニ而は左様の節合は存不申、只最肩の長州を見殺しに被遊候様に他所御国共氣をあせり候様子ニ御座候。然るに今日摂海之夷寇之大変を其俣被遊、一廉之御尽力不被為在候へは、最早御家には天下の人心望を絶候(中略) 何卒早々御人数御繰出し摂海へ御警衛被遊、御前にも親しく御上京被遊、是非此度摂海へ参居候夷賊を空敷御返しニ不相成、勿論交易勅許等之儀は死を以て御諫争被遊度奉存上候(以下略) 二二

堀は帰国中に感じた民衆の「長州最肩」の風潮に、池田家の政治運動の行く先をみた。長州への出兵は断り、今こそ大坂湾の警備に力を入れ、幕府および諸大名が顧みなくなった攘夷問題に取り組み、安政五年、幕府による通商条約調印以来の懸案である条約勅許に際しては、身命を賭して断固反対すべきとし、そうすることこそが池田家の「社稷」を維持し、繁栄させていく最良の手段であると主張するのである。

だが、堀の建言もむなしく、慶徳および藩政府は、朝廷および徳川家の命に従順であることに、「社稷」維持の方法を見出していた。堀が帰国する前に、旧来からの同志であり、かつ毛利家擁護を主張していた、側役土肥謙蔵、国事周旋掛景山龍蔵、同正垣薫、元京都留守居山部隼太、政治加談田村貞彦らを、朝幕双方からの無益な嫌疑がかかる前に、藩政要路から排除したのである^{二二}。理解者・同志を失った堀は、藩政府の長州出兵方針と、人事に憤り、藩政への関与を断念した。ただ、京都における堀の言論は、在京周旋方および少壮家臣に、「奸物」であるとの印象を抱かせ、彼らの不信感は、九月五日、周旋方沖剛介・増井熊太による堀庄次郎暗殺事件を引き起こすことになった。堀の死により、池田家の政治運動を軌道修正できうる人材はいなくなったといつて過言ではなく、以後、池田家は朝幕双方か

らの命令への遵奉を、政治運動のテーマとし、「社稷」を守る「私」の論理のもと、ただやみくもに石州方面へと兵を進めることになった。

長州戦争の経過および幕府と毛利家および隣国の諸大名家をめぐる政治状況については、長州藩毛利家に対する豊富な研究蓄積があり、鳥取藩池田家の出兵状況に関しては、『鳥取県史』三巻によって整理されているので、ここで改めて論じる必要もなからう。

ただ、先述の通り、文久政変以後の鳥取藩池田家の政治運動を、隣国における内乱を未然に防ぎ、その戦火が自領に及ぶことで、祖先より受け継いだ「社稷」を傷つけないための、「私」の論理から発せられた運動である、とあらたに定義した以上、二度にわたる長州戦争に際して、「家」を守る責任者としての藩主慶徳がいかなる政治意識を抱き、行動したのかを検討しておく必要がある。

元治元年八月十九日、鳥取藩池田家では、長州出兵の命に対応するための藩是を決するべく、三つのケースを想定し、家中に対しどの方策に決するべきか諮問した。①朝幕双方の命に従い、長州へ出兵し、同時に幕府に対して攘夷問題への早急な対応を求める。②長州への出兵を断り、たとえ池田家の「社稷」に傷をつけても、あくまで毛利家擁護の姿勢をとる。③長州出兵の準備は整えておき、諸大名家の動向を見極めたうえで、出兵する。同時に幕府に対し、攘夷問題の解決を要求する。

藩政府は、政治方針につき、家臣による衆議に聞いたうえで決しようとしたが、実は形式的なものであり¹²⁰、なすべき方策を藩主慶徳は決めていた。慶徳が選んだのは①である。長州出兵が決定してから、中国諸大名はその足並みを揃えようと、書信をもって、大名家それぞれの今後の行動につき申し合わせをおこなう。慶徳は、浜田藩主で実弟の松平武聡の質問状¹²⁰に対する答えとして、「長州え救援之儀は、乱臣之国柄故、長（州）亡候上は、為神州ニ候間、速二人数繰出し、夷狄と及戦争候覚悟ニ候得共、毛利家存在之上は、援兵人数は不差出候心得ニて、下地は及掛合置

候得共、此儀は堅く断、手切」、長州へは出兵、幕府へは「攘夷之儀」を建白するとし、それは「万一長（州）荷担等之名を蒙り、違勅等被申候ては、国家（藩）之大事」となるからであると主張した¹²¹。ここにおいて、毛利家は「乱臣之国柄」と評され、池田家に「大事」をもたらす、すぐにも「手切」るべき存在として認識されている。池田家は、この藩主慶徳の意思に従い、元治元年十月以降、長州への「討手」として参戦した。

最初の長州戦争は、毛利家側が早々に「伏罪」を表明したため、同年十二月二十七日には、征長総督徳川慶勝から「討手之面々陣払」が申し渡された。慶徳自身、十一月二十九日、米子城に着陣し、同地に約一ヶ月間滞在したが、京都から水戸藩徳川家の内証情報（武田耕雲斎一派の動向）が伝えられるや、実家の水戸への対応にも苦慮し、また禁門の変後、家中の危険分子として領内黒坂に幽閉された河田左久馬らの処遇¹²²についても頭を悩ませており、毛利家の動向にさしたる対処もできなかったというのが事実であろう。

さて、中国諸大名家の間でそれぞれの政治方針が問題とされるのは、慶応元年四月、第一次長州戦争における毛利家処分を不服とし、かつ毛利家が軍備増強を図っている状況に鑑み、長州への「再征」を触れ、閏五月に、再征の勅許を得るために、將軍家茂が進発、上洛の途についた際であった。

幕府による長州再征と將軍家茂の進発の報に触れた岡山藩主池田茂政は、閏五月七日、兄の慶徳に宛てて、將軍進発の事態に如何に対応すべきか問い合わせている。

（前略）大樹公にも御進発ニ相成、実ニ不容易儀、為皇国憂苦此事ニ御座候。且又伐長ニ弥相成候時は、長（州）のみニては不相済、夫より東西ニ動兵候様ニ可相成、加之、外患も又起り、弥宇内之擾乱と相成候ハは、実に叡慮不被安候場ニ至可申、又一ツニは、御互ニ徳川家余流之身分、徳川家ニて天下之擾乱とて、此俚傍觀致居候ては、東照宮ニ対し候ても不相済候儀ニ御座候。御採用は兎も角、若登坂（大坂）之幕令有時は登坂致し、飽迄も

赤心申上、召も無之候ハは、以家老建言致候考ニ御座候。(中略)昨年と違、極て討長ニは可相成哉、歎息之至ニ御座候。何分にも御承知之国柄故、討手御断も立兼候事と存候。又御断を強く申立候時は、直様違勅とか何とか申なし候程も難計、身体(ママ、進退)極り候儀ニ御座候。(中略)御良考も被為在候ハは、相伺候度奉存候。実ニ一家之浮沈此時ニ御座候(以下略) ¹²³

茂政は、將軍家茂が進發して、大坂城に出向いてくることを非常事態ととらえ、再度、長州戦争が始められれば、今度ばかりは毛利家のみの問題ではなく、その戦火は自領におよぶことは間違いない。両池田家は、徳川將軍家と縁の深い家柄であるので、自ら大坂に赴いて、なんとか戦争を中止するよう建言をおこなうべき、と主張する。だが、藩主である自らの立ち振る舞いが、そのまま岡山池田家への罪とならないか危惧しており、兄慶徳に身の振り方は是否を問うている。

かかる茂政の問いに対する慶徳の応答(慶応元年閏五月九日)は、これまでであろうはずもなかった將軍進發という非常事態における鳥取藩池田家のスタンスを如実に示している。

(前略)大樹公も存外之御儀にて、遂ニ御親(ママ、進力)發被為候由、実以不容易、御同情苦痛此事ニ御座候。(中略)伐長(州)之幕議は、確乎不拔之様子にて、中々逆も建言も何も届き候模様ニは無御座、此上及建白候とも、徒ニ招災難候計にて、万々効驗も無覺束様ニ存候。夫より先時節相待、此上之進退可有之か、元より如示御採用之有無ニかゝる訳も無之故、登坂之幕令御座候得は登坂、飽迄赤心言上は申迄も無之、(中略)此上ハ、朝議次第、從朝廷も幕議之通伐長との事ニ被為在候得は、不得止事候間、夫迄之儀、万一にも、從朝廷伐長之儀御差留メ出候得は皇国甚幸と、最早自然ニ任せ候外異論無之、(中略)朝廷之危急之時ニ当り、粉骨仕候は藩屏之本

任故、其時は兼て之御誠忠被為尽候御事故、当時伐長之為ニ御利運被仰上方、万一御国家損亡之端緒を被開候ては、護国公（両池田家祖、池田信輝）以来之家と申、日光（徳川家康）之余流、徳氏と之論ニて、廢墜致候ては不相成候間、尊考之通り、一時之小恥は打捨られ、幕兵え御随従より外、他有間敷（以下略）¹²⁴

慶徳は、茂政の主張する上坂建白に反対し、長州再征に関する幕議に訴えかけても「徒ニ招災難候計ニて、万々効驗も無覺束」からであるとする。なにも怠慢心から、そう主張するのではなく、まずは時機を見極め、幕府から征長の方針を問われたならば、「飽迄赤心言上」すればよい。「自然ニ任せ」、「藩屏之本任」に当たることこそ、「家」を存続させるための道であり、長州戦争の対応に奔走して、「国家損亡之端緒を被開」、家祖以来の伝統を有する「家」を「廢墜」させてしまつては、もつてのほかである。よつて、鳥取藩池田家はしいて動かない。これが將軍進発と長州再征という切迫した政治状況において「家」の存続を重視し、「日和見」と評された政治スタンスである。

慶徳に目立つた政治運動を制止された茂政であつたが、開戦も目前となつた慶応二年（一八六六）三月、行動をおこした。時に、在坂の老中によつて、毛利家処分案（「朝敵」撤回、十万石減封、藩主父子の隠居など）が確定され、これをもとに広島において老中板倉勝静・同小笠原長行と毛利家側が交渉の最中であつた。茂政は、安芸藩浅野家世子茂勲に書翰を送り、毛利家処分を穩便な形にするため、浅野家が諸大名の「盟主」となつて、これに阿波藩蜂須賀家、鳥取藩池田家を参画させ、四大名家「合従」により、在坂の幕議、さらには朝廷・天皇に対し、異議申し立てをおこなう計画を持ちかけたのである¹²⁵。この計画は、広島に滞在中の老中小笠原長行に漏れ聞こえ、小笠原から浅野茂勲へ上坂中止勧告があり、立ち消えとなるが、四大名家上坂計画にみる茂政の決意は、やはり長州戦争によりもたらされる危機から、「不時登城」を禁じる法度に背いてでも、自領を守ろうとする「私」重視の意識から発せられたギリギリの選択であつたといえよう¹²⁶。

慶応二年五月二十九日、広島における徳川幕府と毛利家との交渉が決裂すると、老中小笠原長行・同本莊宗秀は、諸大名に対し、六月五日を期限に、長州へ向け出兵するよう命じてきた。鳥取藩池田家には、石州口方面へ出兵せよとの命を伝える奉書が六月四日に届いた。これを受け、藩主慶徳は、家中に次の諭告を下す。

（前略）以勅命被仰出候儀ニ候得は、必しも、幕府之御私戦ニは無之、今日之台命は、則勅命ニ候。其上、当家之儀ハ、何レも兼て承知之通家柄。況哉、以勅命之御進発ニ候得は、奉命出勢可致は勿論之事ニ候。（以下略）¹²⁷

慶徳は、長州戦争は、単に徳川將軍家と毛利家との「私戦」ではなく、天皇の意思（＝「勅」）から発せられた「朝敵」との戦争であると論じた。それは、「朝敵」と干戈を交えるということに正当性を見出し、「家」の伝統と「社稷」を守り抜くために藩主慶徳が決断した、鳥取藩池田家生き残りのための「戦い」であったのである。

小 括

以上、文久三年八月の文久政変から慶応二年六月の第二次長州戦争開始に至るまでの鳥取藩池田家の政治運動について、長州藩毛利家の処分問題との関わりをふまえ論じてきた。

特に心がけたのは、政治に関わる人々の意識を抽出することである。本節において、その対象となったのは藩主池田慶徳や堀庄次郎ら家臣が抱いた政治意識であったが、鳥取藩池田家について考えると、文久二年十月、藩主慶徳主導の国事周旋開始から、本節で検討した慶応二年（一八六六）、第二次長州戦争まで、ひいては明治維新にいたるまで、その政治意識の根幹にあるのは、自らが先祖から受け継いだ「家」の存続を願い、戦争勃発の危機的状况に「社稷」

が傷つくことを嫌う意識である。そして、このような政治意識により展開される運動は、あくまで「私」のための運動であり、それは「皇国」「天下」のためのものではなく、「公論」である必然性はないのである。

当然ながら、政治状況が異なれば、大名家側の政治運動の方法も異なってくる。鳥取藩池田家において、それは、政治運動の端緒となった徳川将軍家に対する「攘夷」問題の解決要求から、文久政変後の毛利家擁護建白、そして「日和見」と評された政局非介入方針へと転化された。これまで大名家の政治運動を推しはかる際に検討されたのは、政治運動の方法の部分であり、なぜ政治運動をおこなうのか、というその本質を問うものではなかった。このことが、先行研究において、鳥取藩池田家が「尊攘翼霸」と解された所以である。

第四節 大名家における「国事」対応と組織・構造

1 「御側」の政治的拡大

第一章第一節においてみた大名「御側」が、本章で述べてきた鳥取藩池田家の政治意思決定にどのように機能しているのかを考えていく。幕末期における「御側」は、大名家政にとどまらず、あらたな政務としての「国事」に対応していく。ここでいう「御側」の「国事」への対応は、実際の政治行動の主体となっていたということの意味し、現実の国事対応を支える活動について、たとえば、経済面でいえば、御勘定所に、あらたな予算執行および管理業務が発生するなど、家中諸機関にも影響を及ぼしたといえる¹²⁸。ここでは、「御側」が実際の「国事」に直面した際にどの

ように対応したのかを考えていく。

鳥取藩池田家の「国事」への対応は、文久二年（一八六二）五月、一年間の在府期間を終え、鳥取へ帰国の途次、京都および伏見において起こった「ある事件」がきっかけとなる。「伏見事件」、または「京都素通り事件」とも呼ばれた、この一件は、藩主池田慶徳ら一行が、文久二年三月中旬から四月にかけて、京坂地域に生じた政情不安を感じた公家衆からの上京および暫時の滞京要求を受理せず、当初の予定通りに帰国したことにより問題視され、紛糾した事件である。

ここで、事件当時の大名周辺を固めた人員について見ていく。本来、大名の供揃には、供家老（月番制における非役の着座）の随行が必然とされたが、この折の行列には家老の存在が確認できない。おそらくは、安政六年の職制改革により非役の着座が形式上いなくなっており、供の任務からはずされたと推察され、供揃編成の任には中老の田村図書があたっている。以下、大名の「御駕」廻りに詰めたおもな人員である。なお、前章で述べた「昵近」が認められるものには（※）印を付した。

中老田村図書（※）、大小姓頭国府平兵衛、御側御用人高沢省己（※）、

江戸留守居御側御用人助役兼帯伊丹甚太夫（※）、御小姓頭御勤役兼帯岩越次郎太夫、

御側役二宮奎之助（※）、御側役御道中勤役兼帯戸次半兵衛、御目付和田隼太、同山川安左衛門、

御側役土肥兵太夫（※）勘定吟味役伊藤平録

この人員のなかで政治対応に差異が生じるのであるが、それは、国元家老荒尾駿河・鶴殿大隅・荒尾但馬連名によって認められた一通の書状に起因する。彼らは、京・大坂屋敷より報告された京坂における政治不穏に対応するべく、

江戸よりの帰途にあった供揃の代表者である田村図書に対して書状を送り、対応の是非を問うたのである。京坂における政治不穏とはすなわち、島津久光の上府行動に連動した大名家臣および浪士による「義挙」計画からくるものである。文久二年四月二十二日付で認められた書状には、京坂屋敷からの報告は「風説」であろうが、容易ならざる状況にあるのは確かであるので、「御途中迄御迎として旗頭・番頭共罷出候儀も可有之哉」と率兵にて出迎えに赴く意思があることを報じるものであった¹³⁰。近世大名家臣団において、「備」（組）を編成できうるという着座家老の職掌に忠実な対応であり、また「藩治」職の彼らにおいては「国事」対応については想定の外であることが特徴的である。

この後、非役の着座であった和田邦之介が「備」を編成し、美濃国垂井関まで出迎え、護衛をおこなっている。

着座家老によつて、大名の安否を優先した対応がなされる一方で、中老白井重之進と先述の堀庄次郎、正牆薫はこれとは異なる政治見解を有した。同年四月二十四日、白井、堀、正牆の三者が会談した内容を白井がまとめ、田村図書に送った書状である。彼らはこの政治不穏の状況を機会として、上京し、国事周旋の任につき、「幕府御補佐之御教訴不被為在ては不相成」と徳川幕府の補佐にあたるべきとし、この見解については同じく中老で「昵近」の田村貞彦も同意しており、「政老中始御同役方、其外有志之面々」においても合意に至っているというのである。白井の書簡よりわかることは、白井が、大名による国事周旋について、「御櫓」の家老衆においても一定の合意を取り付けているということである。藩主の国事周旋に対する政治的見解をもつて家中は政治分裂するというイメージが強いが、その際の分裂は「御櫓」の家老衆との間で生じているのではないことがわかりえる。また、文久二年五月以降、学館関係者による大名への建言が多く見受けられるが、これは「御側」と「学館」との政治的連係と、「昵近」による大名との密なる関係よりもたらされたものと考えられる¹³⁰。

国元から寄せられた国事周旋主張に対し、供揃の責任者たる田村図書は、大名のとるべき政治行動について文久二年五月十七日、伯爵国会見郡出身で、当時、輪王寺宮家に勤仕した今小路範成（大蔵）との対話のなかで次のような

見解を吐露した。まず鳥取藩祖池田光仲が、池田輝政と徳川家康の次女・督姫が生んだ池田忠雄の子であるという事実から「家康」の孫であると理由づけ、鳥取藩池田家の成立と徳川將軍家の確固たる関係を主張するとともに、「越前」（福井藩松平家）・「越後」（津山藩松平家）・鳥取藩池田家は「元日登城御相伴」う格別の家柄であるので、「外藩ニ先立テ進ミ出ル」ことは、徳川家との関係に疑念の生じさせることとなる。よって、公儀によほどの心得違いがないかぎり、国事に立つことはない。さらに薩摩藩・長州藩・鳥取藩が「勤王頭」を争うこともない。大事なことはないよりも「家々ニ因テ道義ノ守ル処異ナルヘシ、欲情ニ因テ道義ヲ失フハ、後世ノ恥辱ナルヘシ」と、大名家にはそれぞれ「道義」があるから、その道義に従い行動せねばならない、という¹³¹。田村図書判断は大名の政治行動を抑止するというものであった。このような見解のもとに大原重徳の使者荻野主鈴への対応がなされた。

五月二十日、鳥取藩大坂屋敷に到着した一行は、同日、荻野主鈴の訪問を受けた。御側御用人高沢省己、江戸留守居御側御用人役兼帯伊丹甚太夫（※）、御側役二宮奎之助（※）が応対し、大原家からの国事周旋要求を御側御用人の高沢が即刻却下した。以上の大名の国事周旋不介入方針は、「御側」内において決定された。

国事周旋を図る学正堀庄次郎、学校吟味役正牆薫らは、「御側」の政治的見解を変えようと会見し、進言をはかるも却下された。この後、同年八月に至るまでは、学館関係者と「御側」との押し問答にも似た政治対立が続く。ここでみるように家中における政治的対立は「御側」において生じている。このことは、「国事」への対応が「御側」によってなされていることの傍証となろう。この対立は、大名を危機にさらすことを回避しようというような「藩治」職が呈する意図ではなく、「御側」に参画した学識者と、彼らの政治的登場に賛同しない人間との間の確執によってあらわれている。この対立を具体的に示すものが、先述の今小路大蔵と田村図書の対話のなかに存在する。池田家の上京と国事周旋を説く今小路大蔵に対し、傍聴していた二宮奎之助が堰を切ったかのように激怒したという。「右等之儀ニ御乗り合可有事ナラズ、例ノ公家衆ノ賄賂取ナラント」と、公家衆が賄賂を求め、大名家を誑かしにきているのである

というのである。これに今小路は憤慨し、「右等之人君側ニ在ルハ如何ナル事ヤ」と不信感を露にすると、田村はこう答える。「彼ハ文学ノ相手ニ側近ク出、政事ニ加ルニ無シ」と述べ、「学者風情」の側役は、あくまで大名の勉学の「相手」であって、政治に参加することなどできない、というのである¹³²。学館と「御側」をつなぐことは、大名の意思によって実現したものであった。しかし、あきらかに譜代門閥層の家臣に、「御取立」出身の学者層の「御側」出入を軽視する意向が存在し、学館関係者たちにとっては、この状況を改善することこそ急務となったといえる。

文久二年八月二十三日、堀庄次郎は、藩主池田慶徳への講義の機会を使い、伏見事件の失態を弁じ、池田家の国事への対応姿勢について建言をおこない、同年九月五日、池田慶徳によって国事周旋を決意される。この大名の決断により、学館関係者の議論を重視した国事への対応を容易におこないうる、あらたな「御側」の形成が必然となったのである。

2 「御役替」と国事対応システム

文久二年の鳥取藩池田家中において、国事に対応しうる職制の構築はもはや必然のこととなった。それは安政六年に目指された「大名直仕置」を志向するシステムの構築ではなく、大名と「御側」、そして「学館」へとつながる国事対応システムの刷新へと向けられた。そこで執られた策とは、中老職の政治要職への配置と、「御側」の人事刷新であった。

まず、国事多端になるにおよび繁多となる軍事、教育などの諸機関に中老を配備した。文久二年六月、「武器製造方根取」に非役の着座の和田邦之助をつけ、「勝手方当時普請方町方請持」に中老田村図書を、「御軍式方船方」に中老津田上総、「学校方刑法方当時寺社請持」に中老白井重之進をそれぞれ任命した。本来、家老の補佐としての中老

が、多くの職務を兼任している。中老職の要職兼務は、これまでの藩治および家政を担ってきた要職者たちへ批判となった。

文久二年九月九日、大々的な「御側」刷新のための「御役替」がおこなわれる。この「御役替」はその名目として、先述の伏見事件の関係者を処置し、家中に生じた政治矛盾を解消することが目的であったが、大名にとってあるべき「御側」を再構成するという意義を有した。すなわち、現職の家老とともに、現任の御側御用人、御側役を罷免し、学館関係者を現状にとどめて、あらたな「御側」と学館との連携のもと、スムーズな国事周旋を展開できる体制の構築が目指されたのである。加えて、国事対応の専任ポストとしてのあらたに「周旋方」が置かれ、また「学校奉行御側役兼帯」という学館と御側の職をあからさまに兼任するケースが登場してきたことも特徴の一つであるといえよう。

3 「御側」・「学校」・「京坂支局」による国事周旋システムの成立

文久二年九月、国元に誕生したあらたな国事対応システムは、国事対応の場としての「京坂支局」を組み込む形で拡大してゆく。京都支局を国事に対応するための適切な機関とするためには、大名をふくめた「御側」においては、家中のあらたな才能を国事対応システムに取り込み、これを京都に派遣することが急がれた。堀ら学館関係者から特別な推薦があつたのが、安達清一郎であつた。安達については、旧稿において論じたのでここではくりかえさないが、家中のみならず、江戸、水戸への留学を経験し、藩外にも聞こえのある人材であつた。安達は家督相続にともなう召し抱えと同時に、京都留守居としての京都派遣と「昵近」を命じられる。安達は知行三〇〇石取（うち、十〇石は蔵米として預かり、のちに米および金にて支給）と、格式「馬廻」が与えられ、留守居役とともに、大原家への陳謝のため、京都へ向かうようにとの命があつた。「昵近」である安達の京都滞在と国事対応は「御側」と京都支局とが、「国

事」という政治テーマのもとに直結されたことにほかならなかった。幕末京都の政治都市化の問題は、武士の上京とそれにともなう人口増加にのみ、その論拠を求めてきた感があったが、大名家中における国外機関である京都屋敷の職制的位置づけを問い直すことにより、大名京都屋敷の政治拠点化、幕末京都の政治的性格を明らかにできるのでないかと考えている。

4 「上京」にみる命令系統

京坂支局を取り込んだ、鳥取藩池田家の「国事」対応システムにおいて、国事に携わる家中の人間、特に「御側」および学館関係者による「上京」が重要な職務となる。国事対応を旨とする正規の職務であるから、いつ、いかなる場合でも、職務を執行する人間に対して然るべき命令がくだる。前出の『家譜』には、人事（昇進、罷免）の他、その人間が受けた主要な政治的命令が記載される。国事に限られるが、鳥取藩池田家の場合、その意思決定において大名が占める割合は著しく高い。よって発せられる命令は概ね大名がその起点となる。以下、文久二年末段階、すなわち「上京」が国事対応として当然の職務となった際、国事に関与した学館関係者、「御役徒」への命令系統を分析すれば、おおよそ次のようなケースが導き出せる。国事に関する命令は基本的には大名より御側御用人を経て発令される。

- ① 学館御用懸を兼帯する中老白井重之進を経由するケース
- ② 御側役を経由するケース
- ③ 直接に職務執行者に下るケース
- ④ 京都留守居役を経由するケース
- ⑤ 御側御用人を介さずに、中老白井重之進を経由するケース

①について、その対象は学館関係者であり、「昵近」ではない。②については、学館以外で、御側御用人支配をうける「昵近」で「御側」に属するもの（たとえば近習など）、③の対象となるのは、大名「昵近」で、かつ侍講の職務にあるなど、個人的に懇意な関係を有している学館関係者（たとえば、堀庄二郎・正牆薫ら）。④の対象は、上京した後の藩士一般で、京都に出た者はすべて、基本的には京都留守居の差配を受けた。これは京都留守居役が、「周旋方頭取」を兼帯したからに他ならない。⑤の対象となる学館関係者一般については、国内外に関わらず学館御用懸の白井重之進の差配下にあった。

以上の命令系統は事態の緊急性の是非が問われる特別な場合¹³³でないかぎり機能した。この命令系統は、大名家が国事に向き合う際の根幹的な機能であった。この「国事」に関する命令系統には、たとえば家中のなかにおいて高い権威を誇る着座家老においても、国事に関する命令系統に関わることはなかった。前述のとおり「国事」と「藩治」が、基本的に分職されているからである。ただ、例外的に着座家老が国事に介入するケースがあった。これには大名からの許しが必要であった。着座池田式部は文久二年九月十八日、大名の居間に呼ばれ、池田慶徳より国事に対する意見を求めた際に、着座家の「家柄」ではあるが、気にかかる政治案件があれば「不容易時勢に付、折々登城」して、「腹藏なく加談に及ぶ」ように大名より直々に命じられている¹³⁴。池田式部が命じられたのは「政治加談」であり、「昵近」以上の政治的意義を有する。「昵近」のものが、「政治加談」を命じられることは、すなわち大名と「御側」において形成される政治意思に対して、私論を呈することになりえた。しかし、「政治加談」を許されるケースは極めて少なく、着座家老や中老職経験者で、かつ長きにわたる政治行政に携わったものに限られた（たとえば荒尾駿河・田村貞彦など）。

5 「周旋方」の成立と「国事」対応

「周旋方」が幕末期に固有のあらたな職であることは、先にも述べた。国事が多端となるにつれ、大名家は「周旋方」（国事周旋掛、国事掛とも）を増員し、対応にあたった。鳥取藩池田家において、「周旋方」という職を専任あるいは兼任しているもののなかには、その格や職務に異同があった。

たんに「周旋方」とのみ、呼称される職に就任するのは、学館関係者の「家業家」で、「御側」において士分以上の者が特定の職をもたず、国外へ赴くことに一定の理由付けが必要なものが就任する。たとえば、景山龍造は学館に勤め、御側出入りが許されるも、定職はなく、国事対応に当たるにおよび、「周旋方」に就任することとなった。また御側において「御側役」などの職にあり、周旋方を兼帯するものは、「御側役周旋方頭取兼帯」として、「周旋方」の差配に当たった。また城内にも「周旋方」の職務は存在し、学館関係者で国元に届けられる御用状を書き写し、政治情報をもとめる人間の職を「記録方周旋方兼帯」といった。周旋方は、「御側役周旋方頭取兼帯」に差配され、「御側役周旋方頭取兼帯」・「記録方周旋方兼帯」は御側御用人の支配を受けた。「周旋方」の成立によって、「御側」を中心とする国事対応システムの政治力および情報収集能力は高まり、これを後盾として、文久二年下旬以降における大名家の政治運動が展開された。

6 家老の在京制度と「国事対応システム」の変容

鳥取藩池田家においては、文久二年九月以降、大名と「御側」、学館、そして京坂支局へと広がる国事対応システム

によって、朝廷および徳川幕府の求める国事周旋運動を展開した。藩主池田慶徳の二度の上京は企画され、サポートされたのである。また大名が在国中は、国政のニーズを京坂支局が看取し、国元に多くの政治情報がもたらされた。

ただ、元治元年（一八六四）二月、国事対応にある変化が生じる。着座筆頭で、当時非役であった荒尾但馬が上京し、「名代」として京都に滞在することになった。この時期といえば、将軍徳川家茂が上洛し、朝廷内の「朝議」に、薩摩の島津久光や越前福井の松平春嶽らといった諸侯が参与し、内政・外交に関する審議がなされている参与会議の最中であつた。池田慶徳は前年十月より在国し、京都からは距離をとる形となつていた。大名の国政への積極的関与を避けたのは、京都支局による政情判断とこれを政治意思決定の情報として「御側」が決済したことによる。元治元年より、同様の「名代」着座による在京が散見されるようになる。朝廷から大名への上京要求や、また京都において禁門の変などの戦乱状況が生じたときには、非役の着座が交代し、「名代」としてこれに対応した。

「名代」着座の在京は、慶応二年末、大名池田慶徳の健康状態の悪化にともない「御側」と「周旋方」による国事対応が不能の状態に陥るに至って、恒常化していく。「名代」着座の荒尾但馬が「京都詰大奉行」として、京坂支局を差配するあらたな指揮系統が生み出されるのである。これによって在京の徳川幕府要職者や朝廷への対応を「名代」であることを理由に遂行し、かつ政治方針を臨時決済できうるシステムが生成された。

慶応三年十月、徳川幕府より朝廷に対する大政奉還を受け、翌十一月、「名代」として在京中であつた着座荒尾駿河は、大名「御側」の判断に傾倒しない独自の国事対応をおこなつた。それは、翌十二月、明治新政府によって「王政復古」が宣言されるや、独自の判断をもつて新政府側への賛同と軍事協力を決意し、「官軍」として、鳥羽伏見の戦いに赴いた事実からもうかがえよう。

第五節 幕末維新期の「農兵」と軍事動員―鳥取藩領の事例を素材に―

1 幕末政治史と「農兵」

本節は、幕末維新期の日本における「農兵」の軍制上の位置、政治的位置、特に農民による兵事参加の意味について考察するものである¹³⁵。幕末・明治維新期の「農兵」の成立と展開を、政治史の観点から検討するに当たり、気づいたことがある。幕末・維新期の政治史は、明治新国家の形成にかかる過程の解明をその問題点として、数多くの研究が積み重ねられてきている。政治状況の推移に関する実証的な考察から明らかにされる研究（原口清・宮地正人・佐々木克・家近良樹・青山忠正ら¹³⁶）、政治変動の背景にある前近代的なナショナリズムを問う研究（三谷博¹³⁷）、政治変革に関わるマクロな分析とともに、政治世界に直接関与しえない人物によって作成された情報を活用して紡ぎだされた社会的政治史研究（宮地正人¹³⁸）が、現在の当該研究の主な潮流であるといえよう。そのなかで、「軍事」・「軍制」にかかる研究は、幕末・維新史研究の根幹にかかわる研究成果を提示できてはいない。事実、「海防」と呼称された国家防衛手段が近世後期の対外政策における論点となり、ペリー来航の後、西洋諸国への対応が徳川政権の主要な事業となり、軍備増強、軍制改革がなされ、その概要を問う研究は、軍事史の観点から原剛らによってなされてきた¹³⁹。しかし、「軍事」・「軍制」の面から維新変革をとらえようとした研究は、三谷博、保谷徹らによる幕末期の徳川政権内の軍事制度にかかる研究の他、なされてこなかった。すなわち、幕末維新期の政治史と軍事史は、なかばパラレルに研究が進行されてきたのである¹⁴⁰。

筆者もこれまで、政治のなかにみえる個人および組織の主張を点とし、これを複数つなぎあわせることで、政治状

況を考えるとという作業をとりおこなってきた。そのなかで抛りどころとなる史料に「農兵」の文言が現れるのは、既存の政治体制をとりあえず批判するために、領国に所在する海岸の警備の如何を指摘し、現行方針の見直しを求めるといったものであり、現実の政治に反映されない策案であることが多かった。その意味でいえば、今回の作業は「海防」を見直し、政治上に正しく位置づける試みでもある。幕末・維新期の鳥取藩池田家の事例を取り扱い、「農兵」とはなにかを考えたい¹⁴¹。

2 幕末期の「軍事」

幕末期における西洋諸国の日本進出によって、徳川政権および大名家は既存の軍事機構の再編を迫られることになった。その詳細については、先行する軍事史研究に委ね、ここでは、その概略についてのみ述べたい¹⁴²。

天保期～嘉永期（一八三〇年代～五〇年代）においては、沿岸警備のための砲台建設、大小砲の製作・試作、鉄砲を含む砲術稽古の奨励などを中心とする改革が推進された。未だ、戦術や軍隊編成などについての革新はなされることはなかった。

嘉永六年（一八五三）、ペリー来航後、軍事の見直しに拍車がかかる。徳川政権は、講武所・軍艦操練所・蕃書調所など、軍事教育にかかる機関を設置した。嘉永七年（一八五四）七月には、軍制改革掛が任命され、安政二年（一八五五）六月、旗本・御家人に対して西洋流砲術調練が命じられた。洋式銃砲の製造についても湯島製造所においてなされるようになり、安政三年（一八五六）、講武所が築地に移設されて、西洋砲術を中心とする調練が積極的におこなわれた。

「安政の改革」と呼ばれる徳川政権の軍事改革における調練では、翻訳書に依拠したオランダ陸軍の歩兵調練が重視

され、蕃書調所において翻訳された書籍がテキストとして利用された。西洋砲術の調練を命じられた旗本・御家人は、番頭のもと、砲術および銃隊訓練を受けたが、これは彼らにおいては番方への登用、すなわち立身出世の端緒と解され、積極的に展開された¹⁴³。一方、足軽クラスの砲術調練は、その動機付けの低さのためか、困難を極めたとされる。安政六年（一八五九）、大老井伊直弼の判断によって西洋學術の導入が消極的なものとなり、同年、長崎海軍伝習所における海軍伝習も中止された。万延元年（一八六〇）には、講武所においても、軍事、兵術の復古がなされ、弓術、柔術などの調練がなされた¹⁴⁴。

井伊直弼の死後、再度、軍制が見直されはじめた。西洋諸国への対抗が主眼とされ、西洋技術の積極的採用と大規模な海軍、陸軍を創設しようと試みられた¹⁴⁵。文久元年（一八六一）、軍制取調掛が任命され、翌文久二年より、同役によって軍制改革が着手された。ここにおいて集権的な大海軍建設が目指され、軍艦組の設置、洋式海軍が組織に組み込まれる形となったが、方法論先行の大海軍計画はたちまち挫折を見、これを批判的に継承するべく、軍艦奉行勝海舟によって、元治元年（一八六四）、神戸海軍操練所が設置され、短期間ではあったが、幕臣および諸藩出身者に航海術が教授された。また幕臣で陸軍奉行、勘定奉行を歴任していた小栗忠順も横須賀製鉄所を設立し、海軍の創設を国家政策の一環として育成しようとした。

戦術・軍隊編成の面では、文久二年、オランダ式の洋式装備と「三兵」すなわち、歩兵、騎兵、砲兵の編成からなる陸軍が、従来の幕府兵の他に組織された。また同年、旗本御家人に「兵賦令」が出され、旗本知行地もしくは代官支配地から軍役として石高に応じた人数の兵賦（農民）が徴発され、歩兵組としての調練を受けることになった。士官、下士官を命じられた武士が統括した幕府直属の常備軍化が目指され、年齢（一七〜四五歳）、給料（上限一〇両）、勤務期間（五年）などが設定されたが、農民による忌避意識も存在して不調となり、兵卒の不足に悩むこととなった。慶応期（一八六五〜一八六七）には、大規模な軍制改革がなされた。旧来の幕府の軍制である「番組組織」が解体

されて銃隊へと再編成され、兵賦雇用の方法が変更され、農兵、町兵、海軍兵卒の徴発が広範囲においておこなわれた。さらにオランダ式「三兵」訓練を転換し、イギリス式、のちにフランス式の軍事技術および方式の導入がなされはじめた¹⁴⁶⁾。

3 「農兵」とは

ここで、「農兵」の辞書的な定義を確認しておく。

①平時は農事に従事し、事ある時は、武装して戦う者。屯田兵。

②農夫をもつて組織した軍隊。また、その兵士。江戸末期、幕府・諸藩で実施。

この解説は、『広辞苑』（岩波書店）¹⁴⁷⁾のものであり、その他、辞書類もほぼこれにならう解釈を採っている。①は、中世的な非支配者像、すなわち兵糧自弁・自力救済の論理が否定され、武装、非武装を問わず、所領内のすべてが「軍団」の構成要素となりえて、支配者によって軍事動員される農民であり、②は、近世的軍役において、農民にかかる負担として、農事以外の労働をとりおこなうもの（「農夫」）であり、これに軍事的要素が加わり、銃卒、輜重など士分以外が担う労役に携わるもので、「民兵」とも呼称されるもの、と理解できよう。戦後における日本近代史を牽引した井上清氏は、「農兵」の形態につき、おおよそ以下の四つに分類した¹⁴⁸⁾。

（a）武士が農村に居住しているもの。郷士やそれに似たようなもの

（b）領主が、農民町人らを軍事的に訓練し、武士の補充部隊とし、有事に動員するもの

（c）領主が農民を徴集し、居住地や生業と分離させ、兵営に入れ常備軍に編成するもの

(d)農民が領主や外敵に対抗するために武装した革命的民兵

(a)は近世中期の帰農論によってなる形態。(c)は、長州藩の奇兵隊などにみられる近代軍隊の萌芽ともいえる存在。長州藩諸隊、なかでも奇兵隊は、かつてハーバート・ノーマンが、幕末日本における「革命的民兵」への発展の可能性を問うた存在である¹⁴⁶。(d)は、大塩平八郎の乱に見られるような反政府的運動体である。本節で問われるべきは、前出『広辞苑』の定義、②の「農兵」の実態であろうが、井上の分類でいえば、(b)もしくは(c)であり、幕末期の「農兵」の典型的形態となる。

近世日本の支配構造は、兵農分離を前提とし、武士が兵士となって働き、農民一般の武装化を抑制するものであったが、徳川幕府や大名家の財政悪化が深刻化し、城下町で住まう武士が奢侈を好み、士風を忘れて無力化すると、武士を農村に居住、土着させる武士の帰農論が唱えられた。熊沢蕃山『大学或問』は、武士の帰農が、武士による貨幣支出を減少させ、かつ生産者として自立でき、かつ有事における確実な軍役動員が期待できるとしたし、荻生徂徠『政談』は、商品経済が前提となる社会をあえて拒否し、自然を前提とする経済・社会への回帰を求めた。だが、これらの議論は、貧窮する大多数の武士の経済を立て直すという命題のもとに掲げられた理想的方法であるかもしれないが、理念の枠を出るものではなく、ついには議論のみで実行に移されることはなかった。

4 海防問題と「農兵」

「農兵」の存在が、現実味を帯びてくるのは、中国におけるアヘン戦争の情報をもたらされ、外的な危機感が表面化してくるようになった一八四〇年前後のこととなる。フランス艦の琉球来航情報を受け、海防の必要性を感じ、海

国日本における「農兵」の必要性を幕臣筒井政憲が上申したのは、弘化三年（一八四六）であり、これを老中阿部正弘は、農民の本分を重視して却下した。

嘉永二年（一八四九）、伊豆菰山代官の江川太郎左衛門英龍は、一六歳から四〇歳の男性一〇〇人に一人の割合で「農兵」を取り立てるように幕府当局に勧めた。平時には農業に従事し、諸高掛りを持高二〇石に限り免除し、「農兵」従事期間は、苗字帯刀を許すというものであったが、採用されなかった¹⁵⁰。

「海防」気運が高まるなか、「農兵」は封建制社会のなかにおいては、簡単に許容されうるものではなかった。ただ、近世社会における褒美・褒賞のありよう、特に苗字・帯刀を許されて、褒められることへの民衆側の意識をふまえた江川の案は、幕末日本の「農兵」制度の根幹部分に大きく関わりと考える¹⁵¹。それは、攘夷主義の成立と展開から、倒幕、維新へとつながってきたこれまでの幕末維新史研究では、注目されてこなかった事象でもある。

嘉永六年（一八五三）六月、相模国浦賀沖にあらわれた四隻の「異様の船」。その大きく、黒い船影を水面に映し進みゆく様は、言葉どおり「黒船」そのものであった。アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官兼遣日特使のマシュー・カルブレイス・ペリーの艦隊の来航によって、確実に「農兵」の必要性は増した。

水戸藩徳川家では、安政二年（一八五五）、藩主徳川斉昭の主導で、郷士や村々の名望家層から精選して、「農兵」の組織化がなされ、庄屋、組頭層から取り立てた新規郷士や献金郷士よりそれぞれ五〇〇人、沿岸の農漁民より五〇〇人、計一五〇〇人の組織を目指し、農兵には苗字帯刀を許し、郷校を中心に軍事訓練や教育をおこなった。

長州藩毛利家では、嘉永六年十一月より、相模国鎌倉、三浦両郡の海岸警衛に携わる藩士二〇〇人と、相模国より徴発した農民二〇〇人以上の「農夫」によって警備の任に当たろうとした¹⁵²。

この他、農民の兵事動員は、幕領、代官支配地に顕著に見受けられる。文久元年（一八六一）、前出、江川英龍の子、江川英敏が建議した「農兵」は、村落の治安維持に重点が置かれたものであったが、この後に執行される文久期の徳

川幕府の軍制改革における施策に反映されることとなった。

江川英敏の案によれば、その多くを豪農層の子弟から身体壮健を条件として選出し、二十五人を一小隊、小隊には頭取二人、什兵組頭二人、差引役一人、計五人の役方を置き、残る二〇人を五人ずつ四つの伍卒組に編成し、組ごとに一人の小頭役を置いた。隊は複数の村からなる組合村ごとに置かれ、男子一〇〇人につき、一人の割合で徴した。「農兵」設置の費用については、地主、豪農層の献金によって賄い、鉄砲の他、諸々の物品の購入に際しては、献金によるが多かった。一般の小前百姓は、組織から排他されていき、構成員は、村役人や地主、豪農の子弟、三〇歳以下の強壯の者による編成へと変化していった¹⁵³。

5 幕末「農兵」の導入と実情―鳥取藩領の場合―

鳥取藩領における「農兵」導入は、藩主池田慶徳による京・大坂への政治関与が契機になった。文久二年（一八六二）四月、薩摩藩島津家による率兵上京と国政介入をめぐる政治運動によって、大名自身が、領国を出でて、京や江戸に赴き、江戸では幕閣への政治的助言をおこない、京では天皇を取り巻く政治混乱の渦中に身を置くことこそ、政治運動の真のありようであるとの認識がなされた。

さて、鳥取藩池田家においては、藩主池田慶徳による文久二年十一月、翌文久三年六月、の二度に渡る上京を経て、「国事」周旋に当たった。ここで求められた「国事」とはすなわち、朝廷への政治対応と京・大坂湾の警備にかかる藩兵の指揮にあつた。池田慶徳は、朝廷から文久三年（一八六三）二月二十一日、「摂海守備総督」（大坂湾の海防責任者）を任命されると、すぐさま警備場所となった大坂天保山へ赴き、京において天皇の攘夷祈願のための行幸に供奉せよとの命が下ると、同藩兵とともにこれに従った。

京・大坂における藩兵をともなう軍事対応を求められたことによって、自領の海岸警備に対する危惧が生じてきた。実際、池田慶徳は領国海岸に加え、警備を任されている隠岐島への対応を理由として、同三月十六日、帰国の途にっている。

池田慶徳が、文久三年四月二十四日付で、岡山藩主池田茂政に宛てた書状には、幕府によって命じられた対応してきた京都警衛に加え、朝廷によって創設される「親兵」（禁裏守衛を専務とする軍事組織）への兵士提供、松江藩松平家とともに担っている隠岐警備、および大坂の天保山、尻無川付近の警備があり、これまでの方法では、満足に軍務を遂行できないとし、自領海岸の警衛が如何にあるべきかを問うている¹⁵⁴。このような事態を契機として、「農兵」動員が期待されるようになったのである。

文久三年四月二十日、徳川幕府によって諸外国に対する強硬路線への転換期日が、「五月十日」と決まる。これは通常、「攘夷」期限の決定と解されるが、内実は、外国船より領国海岸を警備するための応戦を正当化するという内容であった。

これに対応して、鳥取藩では「攘夷」決行に備える臨戦体制の一環として、五月一日、「民兵」の取り立ての方針が発表された。領内の東部の浜坂、中部の鹿野、西部の境（現、境港）の三ヶ所に民兵稽古場を設置し、農民を「民兵」として徴発し、大砲、小銃の教練に当たらせ、藩内に欠けていた兵力の増強をはかった¹⁵⁵。

鳥取藩における「民兵」取り立ての主導者は、郡代助役を勤め、地域社会の情報にあかるかった神戸大助なる人物であった¹⁵⁶。神戸はすでに、嘉永七年段階において領内海岸警備に関する諮問がなされた際、西洋式の歩兵編隊方法と、「民兵」の取り立てを建言していた。神戸の議論は、二〇歳から三五歳までの者で、在方・町方を問わずに召集し、身体強健の者約一〇〇〇人を歩兵として取り立て、邑美郡浜坂村と気多郡鹿野宿、あるいは久米郡江北村という藩領の東部（浜坂）、中部（鹿野）、西部（境）に操練場（「稽古場」）を設けて教練しようと考えた。また、歩兵について

は、通常の大名家中の役負担としての勤めではなく、給米八俵を与えて、藩の常備兵力に加えるという方針であった。藩当局は、この神戸の主張を受け入れ、「民兵」取り立てを決断した¹⁵⁷。

神戸は、文久三年段階で、「民兵」を「農兵」と改め、その意義を次のように説明する。

万一夷船襲ひ来り候や否速に人数御指向被成へく候へとも近來三都の御警衛等にて当時御人少の折がらに候処、御両国四十里海岸御戒備の御結構容易ならざる次第此等の儀日夜御配慮遊され今般海防御策御立被成候に付ては古昔農民とも事あれば兵となりて軍事に携わり事なければ農となりて耕作を業とす、是を農兵と云う¹⁵⁸。

ここにおいて、「農兵」は、本来、武士においてなされる業務の補填人員と捉えられている。鳥取藩のみならず、京および大坂湾警備に対して大名家より提供される兵数は増加していた。ましてや、幕府からの要求（京都守衛、大坂湾警備）と朝廷からの要求（親兵の提出）と、二方向から出される政令への対応に困惑していた大名家も多かった。そのなかで、神戸の方策は至極具体的なものであった。

先に示した領内三か所の操練所に五〇〇名ずつの「農兵」を配備し、毎月、その一割に当たる五〇人に銃砲術を学ばせ、豪農層より選出された「小頭役」によって、差配される方針であった。神戸が藩当局に提出した書付には、「邑美郡西尾勘兵衛・西尾柳右衛門・井口稻次郎・林次郎左衛門・田中甚兵衛・西尾甚三郎」というように、各郡における在地有力者の名前が列記され、その数は一三六名に及んだ。兵には、一年で米四斗入一俵を支給し、農民にかかる「諸役」は免じられるものとした。

6 藩領内の知識人層による「農兵」主導と蹉跌

文久三年八月五日、中本軍太夫・富山敬藏なる人物が、「農兵」が使用する銃の調達と「稽古場小屋」を在方役人よ

り受け取るように命じられた。中本軍太夫は、藩医中本柳朴の子であり、幼少の頃から洋学に学び、西洋砲術の知識を有したとされる¹⁵⁹。

中本の例にみるように、藩内においては、藩医やその関係者のような知識人による在方主導が見受けられる。鳥取藩においては、近世後期に奉行職、役人クラスの業務が繁多となるにおよび、士分を持たない人間の「一代限り」雇いが恒常化していた。いわば任期付きで雇用して、急場を凌ごうとした。武士による担当がままならない領内の警衛業務は、対応するべき「急場凌ぎ」の対象となったのである。

文久三年九月三日、浜坂に稽古場が完成し、藩当局より稽古の開始が申し渡された。翌四日には、軍式方頭取助役であった岡崎平内・郡代助役の神戸大助へ「台場手配・民兵訓練諭し方御用」が命じられ、藩内における農兵訓練はスタートした。

神戸大助によって主導された「農兵」策とその他のための教導には然るべき時間が必要であった。藩当局は、藩領海岸に設置された台場（浜坂・浦富・橋津・赤崎・由良・淀江・境）建設と大砲の利用、活用を急務としていた。この内、藩領西部の伯耆国分については、同地の郷士・大庄屋に人員配備、運営を引き受けさせ、城下より出張してくる藩役人に砲術訓練を受けさせて、そのまま台場警備に充てるというものであった。

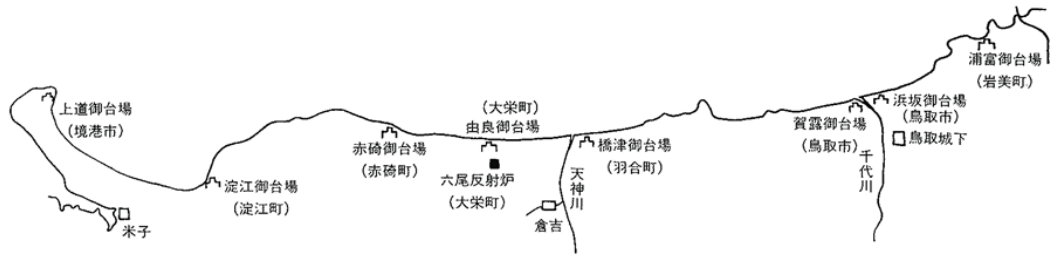
七カ所ある台場のうち四カ所は、藩領の海岸付近に主として点在した「藩倉」とその位置を同じくする。「藩倉」とは、年貢米を収納する倉庫的施設であり、鳥取藩領では、鳥取、倉吉、米子の町と、海岸に所在する主要な港九カ所（岩本・浜村・青谷・橋津・由良・大塚・赤崎・御来屋・淀江 ※ゴチック太字は台場が建設された地所）に置かれ、「灘御蔵」と呼ばれた。「藩倉」は無論、御蔵奉行によって統括される藩の行政施設であるが、年貢米の収納という藩と地域社会とをつなぐ施設として解された。新規に建設された台場への対応は、「藩倉」同様、民衆において役として務めねばならないという心性を生み出した。

さて、神戸による「農兵」の常備兵化にかかる構想は、その即効性の点、また、あくまで近世村の役負担として動員とする点においても齟齬が生じた。藩領西部、伯耆国の「農兵」教導については、農民による台場警備担当という形でうやむやなものとなってしまう、実際に教練がなされていたのは、藩領東部の浜坂のみであった¹⁶⁰。

以後、主導者神戸大助の役替えによって、「農兵」教導策は動揺していく。文久三年十一月、神戸自身が、長らく携わった在方御用から離れ、大名の側役（小姓頭側役兼帯）として務めることになる、「農兵」教導がおこなわれなくなった。元治元年（一八六四）四月、神戸が再び在地任務（郡代農兵奉行兼帯）を命じられると、神戸に三人の郡奉行が附属する形となり、再度、機能しはじめたかに見えたが、同年六月、ふたたび神戸が御側御用人に転じると、その職務を果たせずにその案自体も消滅した¹⁶¹。

神戸によって提起された「農兵」という言葉も、藩の公文書のなかから消え、あくまで台場の業務を預かる農民として「農夫」という文言が使用され、台場周辺の郷村から、農閑期に限り動員して、小銃の練習に当たらせるというものになった。また、この折には、領内海岸一里（約四キロメートル）以内の村々に、銃砲術教師が巡回して庄屋、百姓頭などに小銃の操作を教え、庄屋らが農民に口伝し指導に当たった。稽古のための鉄砲の保管は、庄屋がおこない、警備の大半が在地社会に委ねられることになった¹⁶²。

図 鳥取藩領の台場と藩倉（鳥取県立博物館編『鳥取藩二十二士と明治維新』掲載図を加工）



藩当局の施策転換は、「農兵」の創出を後退させたが、台場警衛を地域社会の任務としたことにより、郷士・大庄屋層など「中間層」身分のものにおいて、軍事への志向を高めることになった。その傾向は、藩庁が置かれた鳥取城下町から、遠方の藩領西部、伯耆国領において積極的であった。なかでも、汗入郡妻木村郷士の松波徹翁なる人物による農兵指揮は顕著な例である。松波が担当したのは、藩領西部の淀江台場であり、基本的には大砲とその設置個所周辺の世話で事足りるものであったが、松波は動員された農民に対し、自ら大坂にて買い付けた小銃二〇挺を宛がって練習をさせた。この小銃二〇挺は、鳥取藩領内で最初に購入されたミニエー銃であったとされる¹⁶³。

さらに、松波は、彼自身が農民二十四人に給与をあたえ、台場の守備に当たらせた。これが称賛され、文久三年十一月、松波徹翁は、同じく郷士の武信佐五右衛門、同潤太郎とともに「土着士」として取り立てられた。武信佐五右衛門は、伯耆国八橋郡赤崎・由良の両台場において、「小銃稽古」や台場警備詰を分担主導した人物である¹⁶⁴。彼らが命じられた「土着士」とは、安政六年、鳥取藩政改革の折、家中に存在した二男、三男坊といった家督相続権を持ちえない人びとに、久米郡真野原の山野を開拓させる目的で設置された¹⁶⁵。

以上のような「農兵」創設に対する消極的ともいえる藩の方針が、変化してくるのは、元治元年、慶応二年の二度にわたり勃発した幕長戦争の折である。

7 長州戦争への参戦と「農兵」

元治元年八月、鳥取藩池田家では、長州出兵の命に対応するための藩方針を決した。池田家としては

朝幕双方の命に従い、長州へ出兵し、同時に幕府に対して攘夷問題への早急な対応を求める。一度目の長州戦争は、毛利家が早々に「伏罪」を表明したため、同年十二月二十七日には、征長総督徳川慶勝から「討手之面々陣払」が申し渡されて、講和となった。

中国諸大名家の間でそれぞれの政治方針が問題とされるのは、慶応元年（一八六五）四月、徳川幕府内部から毛利家の処分内容が曖昧となっていることを不服とする意見が噴出し、かつ毛利家が軍備増強を図っている状況に鑑み、長州への「再征」が幕府の方針となり、閏五月に再征の勅許を得るために、將軍家茂が進発、上洛の途について際であつた¹⁶⁶。

慶応二年（一八六六）七月二十三日、鳥取藩京都留守居役の安達清一郎（のち清風）が、老中稲葉正邦に大坂城へ呼び出され、長州再征の際における但馬国に所在すると想定される「浮浪」の取り締まりが命ぜられたことにつき、「農兵」の取り立てが図られている¹⁶⁷。この際の「農兵」取り立ては、その費用を幕府生野代官所が支弁し、その訓練、兵器製造を鳥取藩は受け持つというものであった。これに大名をはじめとする藩当局は、領内警備もままならない状況と、石州口への出兵を理由に辞退を表明し、取りやめとなった。

第二次長州戦争での鳥取藩の戦況は、決して芳しいものではなかった。長州藩領に攻め込む幕府軍の使用する兵器が旧式で性能に劣り、戦意を欠く寄せ集めの諸藩兵であったのに対し、長州藩諸隊は、イギリス製の近代兵器で装備がなされ、農民・町人が参加して、「挙藩一致」、まさに「総力戦体制」にも似た組織ができあがっていたのである¹⁶⁸。

鳥取藩が長州戦争によって得たものは、結果として機能しえた「農兵」隊のみであった。石見国の浜田城は、長州勢によって落城させられたが、それを伝えた藩当局への報告内容においても、小銃への高い評価がなされており、長州勢の高性能なミニエー銃と訓練の行き届いた農兵卒が相手では、勝ち目が無い旨が報告されている。「農兵」の有用性が再確認されたのである。

「土着士」松波徹翁の洋式銃の購入と、農民への自主的な調練の話題は先にもみたが、第二次長州戦争に際して、「農兵小銃隊」としての従軍を願っていた¹⁶⁹。

一、松波徹翁儀、近年淀江御台場御用被仰付、以来右御台場之応援、近辺陸地警衛之心得ニ而、野戦大炮式挺製造致し、右炮手之もの、二十四人自分雇ニ而農兵姿ニ取立、大小炮并剣術之稽古為致、其外小銃始器械之用意等迄致し居申処、此度討長之御人数御操出し相成候趣、致伝承候ニ付而は、老年病氣不束之身分ニ候得共、御先手御人数之端ニ御差加被為下候ハ、右農兵之者共引連罷出、身分相応之御奉公申上度旨、尤出陣中一統兵糧御上賄、農兵江は帯刀御免、玉薬・着具持運人夫御渡被為下候ハ、農兵并人夫員数之儀は、追而可申達旨、奉願趣、尤之心得方ニ付、小銃一隊壺番手江御差加へ、出張中野間鹿蔵支配被仰付、願之通兵糧等御上賄被仰付、右出張中、農兵共江帯刀御免、玉薬・着具持夫等被成御渡、用意次第出足被仰付旨、被仰出、其段郡代を以申渡之、右ニ付、宜取斗候様、左之面々江申渡之

御軍式方頭取

武器奉行

御勘定吟味役

内容は次のようになろう。松波徹翁は、近年淀江御台場御用を命じられ、それ以来、同所における業務および警備にあたるとともに、「野戦大炮」二挺を製造し、この撃ち手二十四人を「農兵」として雇い入れて、大小炮ならびに剣術の調練をさせ、その他小銃を始め、兵事にかかる器械の用意を整えていたところ、わが藩が長州への出兵することとなった。松波は病身の年輩、不束な身分ではあるが、従軍人数に加えていただきたく、その折は、「農兵」を引き連れ、身分相応の働きをしたい。出陣中の兵糧米は上納する。「農兵」へは帯刀を許していただき、玉薬・着具を運搬す

る人夫をご用意願いたい。

松波らの従軍にかかる動機は、「苗字・帯刀」などの近世的な褒美・褒賞、すなわち身分の上昇を目論んでのことであるといえる。第二次長州戦争には、鳥取藩でも多くの農民、商人が動員されたが、それらは基本的には「夫卒」として徴され、輜重任務に当たるものであった。「農兵隊」としての任務を帯びたのは、結果的には松波の隊のみであり、浜田落城の折、撤兵成功のための「殿備」を任されたことは、正規藩兵からも認められ、藩内における軍備を洋式化するとともに、それを使いこなす農兵調練の必要性が確認されることになったのである。

8 慶応二年の兵制改革と「農兵」

長州戦争における負の経験は、遅まきながら、藩当局に軍制改革の開始を決定させることになった。その眼目は、軍備の西洋化と「農兵」の積極的な取り立てである。慶応二年十一月二十四日、「農兵」五〇〇人の取り立てを決定し、その内実について郡代に触れ渡している¹⁷⁰。

一、此度非常為御手当、農兵番人斗御取立被仰付候ニ付、御両国在中壯健之者相撰、最寄場所々ニ而、炮術手続打方足並御調練等被仰付、右ニ付而は、右農兵之者江年中御役料四斗入四俵宛御渡し被遣、万一他国江御差出し相成候節は、相応之御渡物被遣、且又始メ二ヶ月之間は、終日教場ニ而稽古致し、仮成熟練致し候得は、村方江差返し、月々兩度宛教場江罷出稽古致候様、尤最寄二ヶ月之間教場辺江止宿為致、御賄被遣候様、其後為稽古月々罷出候節は、持弁当ニ而罷出、右為締組頭之者、郡中ニ而身元相応之者式拾人ニ屯人或は三十人ニ屯人宛被仰付、苗字帯刀御免、給料は御銀ニ而も被遣、尤右民兵稽古并組立方ハ御軍式方引請ニ而、取扱等は在方申談候様被仰

付、且又教場之儀は、御軍式方談合ヶ所取極、仮成之稽古所取立、御入用銀は追而可申達旨申達之趣、勘定所取調之上、給料年内四斗入四俵宛御渡し被遣、他国江出張被仰付候節は、其節之模様ニ寄相応之御渡し物被遣之儀、承届候旨、郡代江申渡之

内容は次のようになる。このたび、藩内の非常事態に際し、「農兵」・番人を取り立てることになった。因幡・伯耆両国の壮健なる者を選出し、それぞれの最寄りの場において、大小砲銃の打ち方、編制足並調練など命じることになる。「農兵」の者へは御役料四斗入四俵ずつ支給し、もし他国へ出兵することになれば、相応の物品を贈ることになる。最初の二ヶ月間は、終日教練場において稽古し、熟練したならば、帰村させ、一月に二度ずつ教練場へ出させて、稽古させる。二ヶ月の間、教練場あたりに止宿する際には、食糧・宿代は負担するようにする。その後、月々の稽古については手弁当にておこなうように。農兵の取り締まる組頭については、郡中で身元よろしき者を選び、組頭一人に農兵二〇人、あるいは三〇人を統括させる。組頭については、「苗字・帯刀」を許し、給料は銀で支給させる。農兵の稽古については、藩の「軍式方」が担当し、人事などについては「在方御用場」がとりおこなう。

これに準じて、慶応二年十二月、奥日野郡の郷士緒方四郎兵衛らに、「民兵頭取」として鉄砲猟師、その他壮健の者を選出し、指図するように求められたこと。慶応三年二月、農兵隊に装備する洋式銃（ミニエー銃）五〇〇挺、アームストロング砲二挺の購入計画が立てられ、総額一万両の特別予算が組まれ、藩士日笠庄輔が横浜において購入することに決した¹²²。

鳥取藩においては、長州戦争をきっかけに、「農兵」教練の段取りがようやく整ったといつてよい。しかしながら、それが機能するには然るべき時間が必要であった。

9 「農兵」の終焉 ―「農兵」から「歩兵」へ―

慶応三年（一八六七）八月、藩領でも西部、伯耆の農兵隊の編成がなされた。鳥取城下からほど遠く、文久年間における自主的な海防活動によって、農兵隊編成の素地はできあがっていた。藩政指導が行き届かない藩領周縁部で、民衆一般における軍事意識は形成されたのである。

それぞれの郡に一小隊を基本とし、人口の多い会見郡の三小队を含め、八小队からなり、一小隊の人員は、組頭一人、隊員三十四人とされた。前述、長州戦争で活躍した松波玄之進らの「撤兵隊」は、この八小队とは別立てで解された。十月には、藩の歩兵頭、銃頭が、藩領内の各所を巡回し、農兵隊の編成と訓練の度合いについて視察、確認した。また、幕末も最末期の軍制改革によって、「農兵」の軍事的必要性が看取されるに至り、公文書上においても、「民兵」「農兵」と統一されてこなかった呼称が、「歩兵」に統一される。ここにおいて民間より動員された兵力は、藩の兵制に正式に位置づけられたといえる。

慶応三年十一月、伯耆方面に遅れて、因幡方面の歩兵も編成されていた。その内訳は、邑美郡一四人・法美郡一人（小頭田中甚三郎）、高草郡一五人・八東郡三〇人（小頭大山官兵衛）、八上郡二〇人（小頭木下莊平）、気多郡三人（小頭原田治兵衛）、岩井郡一人（小頭中島四郎左衛門）である。因幡方面からの歩兵は一三三名で、伯耆のそれよりも規模が小さい。伯耆方面で文久年間からおこなわれてきた武器操練にかかる素地がなかったこと、慶応の末年に至っても、統括者として地域の豪農層が任命され、いわば「素人任せ」になってしまっていたことなどがその理由となろう¹⁷³。

戊辰戦争における「農兵」利用は、長州戦争での経験を契機として、慶応二年秋以降に本格化し、選抜された農民によって歩兵銃隊が編成されるようになり、歩兵頭と歩兵銃頭によって指揮がなされた。鳥羽・伏見の戦いに呼応し

て、慶応四年（一八六八）正月八日、因幡分の歩兵組頭と歩兵に、浜坂歩兵屋敷への集結が命じられ、伯耆分の歩兵には八橋郡大谷村、汗入郡淀江村への参集が命ぜられた。正月二十一日、歩兵頭助役河嶋源輔の率いた歩兵が、銃隊二小隊とともに姫路方面へ出発した。翌二月の東山道軍出陣の命に対しては、二月九日、歩兵組頭渡瀬槌之助らが率いる歩兵銃隊四小隊が京都へ向け、城下を発した。二月十三日、京を発った東山道軍内の鳥取藩兵は、旗頭和田壱岐の隊のほか、銃隊八小隊からなったが、そのうち、士分以上の属する隊は一隊であり、その他は、足軽銃隊四小隊と農兵隊三小隊からなった¹⁷⁴。

農兵隊のうち、一小隊は、丹波国山国郷の庄屋、農民によつて組織された有志隊、山国隊であつた¹⁷⁵。明治新政府軍務局の指示によつて再編成された部隊であるが、洋式銃を使用する近代的戦争となりはじめた戊辰戦争は、足軽・歩兵に大きく傾倒していた。足軽・歩兵は一小隊三二人で構成され、そのうち銃頭を含めて士分の者四人、小頭二人が指揮官となつた。

慶応四年（一八六八）閏四月十九日、明治新政府は陸軍編制法を制定し、政府直属の常備軍を作り出そうとした。これは、各藩における徴兵を前提としたものであり、「陸軍編成法」によれば、保有する領地高一万石につき、兵員十人（当分の内、三人）を京都、禁裏御所周辺に常備し、高一万石につき兵員五十人を藩領に在留させ、さらに一万石につき金三〇〇両を上納させる。京都への常備兵が徴兵であり、十七、八歳から三十五歳までの強壯の者を選出し、同年五月一日までに差し出すように命じられた。鳥取藩では、足軽身分の銃卒経験者九十七名を、出張中に限り「苗字」を許し、徴兵隊として編成し、急遽イギリス式の訓練を受けさせ、六月五日に、軍務官に引き渡した。鳥取藩徴兵隊は一二番隊と命名され、京都寺町御門の警備に当たつた。

この徴兵隊は、新政府軍における越後口から会津若松方面の本格的な進軍が開始されると、越後口総督軍として出兵した。十二番隊の出兵人員は一一〇名、越後沼垂での戦争、新潟への進撃、越後鷹巣・榎木峠への進撃に参加し、

戦死者四名を出した¹⁷⁶。

10 近世的「歩兵」の終焉と「国民皆兵」

藩内では、同年六月から七月にかけて、軍式の編成替えが進められた。六月十八日、あらたな銃隊として、「敢撃」・「震撃」・「義衛」・「忠衛」・「神衛」の五大隊の編成に取り掛かった。「敢撃」・「震撃」の両大隊は足軽銃卒隊で、一大隊は四小隊、一小隊は小頭、足軽ともに八十六人で構成された。足軽銃隊の編成が円滑に進むなか、士分以上によって組織された「義衛」・「忠衛」・「神衛」の銃士三隊の編成は遅々として進まなかった。士族層の積極的な参加が見られなかったからである。結果、足軽銃隊を主とした編成で、出羽方面を転戦しなければならなかった。結果、戊辰戦争は、幕末期に組織された「農兵」・「民兵」を基盤として組織された「歩兵」が、足軽銃隊を組織しえたことになる。士族による参戦が低調であったことも、結果として歩兵卒の戦功を際立たせることになった。

戊辰戦争後、「歩兵」の重要性が再認識された鳥取藩領内では、「新国隊」と呼ばれる隊が編成された¹⁷⁷。中心となつたのは、文久年間に大名側役を殺害して、急進的な政治主張をおこない、なかば長州に亡命する形となっていた佐善修蔵、清水乙允、大西清太ら十三名であり、彼らの藩への帰参が認められ、彼らに歩兵編成の意思があつたことによつて、戊辰戦争へ参戦している隊とは別に、隊が結成されたのである。慶応四年三月二十一日、佐善らに歩兵取り立てが命じられ、京都に駐屯した歩兵三十人が引き渡され、新国隊が組織された。同年六月、鳥取に帰着した新国隊は、浜坂に築かれていた民兵屋敷を兵舎とし、藩からは定額の給金（一日、玄米一升、月金一両ずつ）を支給され、常備兵たる待遇を受けた。このような新国隊に対して、入隊を望むものが多く、明治二年（一八六九）七月に作成された「新国隊簿」によれば、鳥取、米子、倉吉の城下町からは九八人、因幡国からは八九人、伯耆国から四三二人、

総計六一九人に及んだ。新国隊は、鳥取藩領における近代軍隊創出への試金石的な存在ではあったが、農民出身の入隊者における奢りや顕著な威張り、立身したとの認識から来る怠惰を生みだし、刃傷事件などが複数おこった。やはり、地域社会においては、軍隊が身分上昇の装置と見なされ、権威を笠に着る状況が横行していたのである。

このような状況に対応し、在方業務を取り扱った役所である民政司が動き、日頃の素行に不良が見受けられるものの入隊を許可しない、厳重な取調べがおこなわれた。結果、農民出身者の入隊を拒み、士族・卒族以外の入隊希望者を信用しない姿勢となつてあらわれた。明治三年三月、兵部省の編隊規則に従い、新国隊を母体として第十大隊を編成するに及び、「農兵」的性格が払拭されはじめた。おりしも、長州藩では、藩兵の脱退騒動が喧しい時期であり、脱走した彼らは、大西たちとの合流をはかったことから、隊のなかの動揺ぶりが見て取れる。

戊辰戦争の際に編成された藩兵へは、イギリス式の練兵がなされていた。明治三年（一八七〇）正月二十八日、東京在留の鳥取藩兵に対し、兵部省から兵式天覧への操練参加が命じられ、士官五人、兵隊六十二人が参加した。諸藩連合によってなされたこの兵式天覧は、イギリス式、オランダ式と、その練兵法はそれぞれであったが、鳥取藩はフランス式練兵によって参加した。これは、政府によるフランス式の奨励に、鳥取藩が応じたものであり、政府の奨励に応えて、藩兵を主導したのは、大隊指令として指揮した原六郎であった。原は、この後も鳥取藩におけるフランス式練兵を指導した。原による指導は、大坂に設置された兵学校（後、兵学寮）における士官養成とその目的を同じくするものであり、中央軍隊における藩兵の主流化を目論んでのことであろう。

明治政府は、明治三年閏十月、大坂兵学寮の士官募集の方針を変更し、従来の長州、鳥取、岡山の中国諸藩からの人材によらず、広く諸藩から集めることとし、同年十一月には、徴兵規則を制定した。一万石につき五人、士族・卒族・平民の身分を論ぜず合格者を選出するとして、「国民皆兵」主義による徴兵制が目指されたのである。しかしながら、それは、従来、大名家中においてなされてきた、封建制秩序のなかにおける身分制の枠を超えるものであったた

め、完全なる実施を見ずに終わった。徴兵制の施行は、士族の特権を否定するものであり、多くの藩権力において容易なことではなかった。ゆえに、明治四年（一八七一）二月、政府は鹿児島・山口・高知の三藩兵を徴して「親兵」とし、この親兵一万人を背景として、廃藩置県を断行してゆくことになる。

近世身分制を踏襲しつつ、存続していた維新の軍隊は、「国民皆兵」を掲げるあらたな軍隊創出における矛盾となり、廃藩置県に際して、「農兵」・「民兵」に端を発する「歩兵」は、解体されるに至る。近代軍隊の礎にならんとした、幕末の「農兵」は、国民皆兵の理念のもと、その意義を否定されることになったのである。

小 括 — 軍事への自主性と政治的辺境に生まれた意識について —

近世日本における「農兵」は、疲弊した武家社会を助けるために生じた理念であり、現実性をともなうものではなかった。またそれは、アヘン戦争の情報によって「海防」意識が高まった十九世紀になっても変わるものではなかった。「農兵」が現実味を帯びてくるのは、ペリー来航以降、外国船への対応が恒常化してからである。

鳥取藩領内においては、文久年間、大名による国事対応が頻繁化し、かつ京・大坂への兵事動員が繁多となったことによって、藩領内の警備の手薄さが再認識され、これへの対応として「農兵」による補填が図られたが、軍事インフラの充実に重きを置いた藩当局の判断により、「農兵」教導は挫折を見た。この折、建設した軍事インフラである台場への対応が、在地の民間に委ねられたことは、民衆における軍事志向性を生み出した。藩政の中心たる領内東部地域において、その志向性は低調であったものの、領内西部、遠隔地において顕著であった。この民間より動員された兵力は長州戦争における活躍によってその正当性が確認され、鳥取藩内においても、「農兵」教導とあらたな「洋式」軍事編成が模索されるようになった。

輕装の洋式「歩兵」は、戊辰戦争において活躍し、その後の訓練次第で藩の常備兵化が期待されたが、入隊する兵が抱いた志向は、近世的身分制における褒賞と特権を重視するものであり、そのことが隊内外において混乱が生じさせた。「国民皆兵」主義の実現を目指し、あらたな軍隊の創出を目指す政府は、旧武士層たる士族の特権を否定し、幕末に生成された「農兵」をも否定したのである。

補節 日本近代における「維新」観と近世秩序

1 鳥取の維新観

ここでは日本近代からの視角、すなわち「日本近代における明治維新認識において、なにが有用とされ、捨象されたのか」について、近代の鳥取における明治維新観から考察、展望したい。

戊辰戦争への参加の可否は、日本近代の人物評価に大きく関わるものであった。鳥取藩においても同様であり、断で戊辰戦争へ参戦した先述の荒尾駿河ら京詰の藩士は早々に新政府に登用された。幕末政治に絡んだ鳥取藩関係者において、戊辰戦争への参加によって、その評価を著しく高揚させた人間がいる。河田左久馬（のち景与）である。河田家は代々、伏見留守居を世襲し、勤める家柄で、左久馬においても留守居を勤めたが、文久三年（一八六三）八月、京都の本國寺で大名側役を殺害し、謹慎の日々を過ごした後、脱藩して山口に奔り、慶応三年に至って、京都に入り、薩摩藩京屋敷に潜伏し、政治活動に当たっていた。池田家より赦免されたのは慶応四年（一八六八）二月。その後、東山道先鋒総督参謀を命じられ、北関東、東北と転戦した。明治二年（一八六九）正月、版籍奉還に際して、

旧大名池田慶徳を知藩事として、あらたな藩制構築が目指されたが、性急な禄制改革など、旧体制を一変させる政策は藩内において著しく不満を高め、藩政要職者への殺害謀議となって顕れた。藩政は確固とした統率力を保持しえな
いまま、明治四年七月、廢藩置県が実施されるにいたる。

初代の県令となったのは、戊辰戦後、兵部大丞、京都府権参事、福岡藩大参事を歴任し、キャリアアップを遂げた河田であった。鳥取の「近代」は河田景与からはじまったといつて過言ではなかった。『鳥取県再置秘史』の編者吉村撫骨は「因幡藩」の「大立物、維新前、討幕急進派因幡二十士の統領」として讃え、「薩長士の元勲に伍して毫も遜色のない」と評した。維新後、河田と彼をとりまく人びとは、鳥取という地域のプライドとして、人々に認識され、語られてゆく。取り巻く人物とは「討幕急進派因幡二十士」、すなわち河田と幕末期を共にした二十人の青年たちであった。

2 「二十士」の顕彰

「因幡二十士」あるいは単に「二十士」と称される彼らの大名の側近を殺害し、鬱積した政治状況を打破し、幽閉、脱走の後、殺害された側近親族の敵討ちを甘んじて受けるというエピソードは、維新时期における「忠義の美談」として語られ、これを「鳥取の維新史」としようと、数々の冊子、稿本が認められた¹⁷⁹。掲げているのは、「二十士」が主題に掲げられているもので、『郡誌』など郷土誌の類を含めると多数に及ぶ。この事業を推進し、明治維新における鳥取の正当性を証明しようとするのは、鳥取中学や県下小学校教諭および「二十士」に縁のある地、日野郡（「二十士」の幽閉地）の神職会の人びとであった。

大正五年（一九一六）に記された稿本『二十士事件』は、明治二十年代、鳥取旧城下、大工町ほか十二か町の連合

戸長であつた山本村夫の談話を筆記したものである。

世人口ヲ開ケバ維新ノ勢力ヲ薩長土肥ト称シテ因州ナドノ事ハ頓ト知ラナイガ、焉ンゾ知ラン、当時ハ薩長因土ト唱ヘテ恐シク勢力ノアツタモノダ、之レハ一ツハ藩主慶徳公ノ声望ニヨッタノデ慶徳公ハ実ニ水戸烈公ノ子デ慶喜公ノ兄デアル、ソシテ勤王ノ志ガアリ、大藩デアルカラ自然勤王家ノ興望ガ之レニ帰シ朝廷ニ重キヲナシテ居タ（以下略）¹⁸⁰

世間一般における「維新」の記憶に「因州」の存在が薄れ、消えつつあることを危惧し、鳥取の人びとの誇りとなる歴史事項を挙げ、「勤王事件」としての「二十士事件」と「勤王家」としての旧大名池田慶徳を鳥取の誇りとした。山本はここで、慶徳の正当性の根拠として「水戸烈公」つまり徳川斉昭の子であることを強調するが、この強調は、日本近代における水戸藩および徳川斉昭を正義とする評価が決定したことを示し、慶徳の水戸出自を強調するのは後付けイデオロギーの産物にほかならない。「二十士」と大名池田慶徳の存在を理由付けとし、その「勤王の志」を強調することで、正義と意義付けている。

昭和六年（一九三一）に日野郡神職会が刊行した『因藩勤王二十士問題に対する主張』の「序説」には、「所謂二十士問題とは、勤王を勤王とし佐幕を佐幕とすれば何等問題も起らぬのであるが、従来佐幕派と定つて射たるものが勤王家となり、勤王派の挙動を義挙と認めず暴挙と見做し、動もすれば、畏き辺りより御贈位ありし志士の行動をも云々し、喧々諤々」とした歴史認識が存在するからであるとしている。彼らにとって「勤王」であり、そのおこないこそ正義の「義挙」である、「二十士」に対する理解の徹底を主張する。ここにおいて懸念されているのは、さまざまなレヴェルで展開された歴史および人物顕彰によって、歴史観にブレが生じてきていることであろう。

3 維新史の基準と近世秩序

地域における歴史観のブレには、然るべき申請を、然るべき手順でおこなえば、その人間は「贈位」されるという明治末年から昭和初年の社会現象も影響した。さらには、明治末から大正期にかけて、藩閥系の維新史が編纂され、既存の太政官系の維新史編纂物、『復古記』や、宮内省系の三条実美、岩倉具視の伝記、『孝明天皇紀』と相俟って、王政復古史観²²が形成され、明治維新という歴史に対する基準が設定された。すなわち、国史編纂事業において藩閥系の維新史が正当づけられて、いわば〈長州基準〉ともいえる評価ポイントが設定されたことである。以後、全国的な『郡誌』編纂事業や、旧大名家の事蹟調査が進展してゆくなかで、これに準じた叙述が生まれた。昭和初年において、地域の「誇り」は藩閥的な「勤王」史によってのみ説明されるものとなったのである。

田中彰は、官製の歴史編纂が藩閥や民間の歴史観を巻き込んだ近代天皇制維新観の形成と国民への浸透の過程を論じた。そこでは、「上からの維新観（「王政復古」論）が下からの維新観（「御一新」論）を内包して、近代天皇制は説明付けられた。近代天皇制と明治維新の関係を説明するにおいて、藩閥的勤王理解は必然のものとなり、先述の〈長州基準〉ともいえる枠組みが機能することとなる。日本近代において、幕末政治は長州のそれを基準として、それに上下することに対し評価が決まった。

池田侯爵家史編纂者梶川栄吉は、〈長州基準〉によってのみ解釈される鳥取藩池田家の政治動向に対する見方に嫌悪観を露にする。元治元年の禁門の変に触れた梶川は、長州との関係性を重視して鳥取藩池田の政治動向を論じ、元治事変に際し、長州との「密約」に背いたのか、否かについて問われ、低い評価がなされる鳥取藩池田を擁護し、「因州反覆などと公言さるゝ事は不穩当の次第と思ふ」¹⁸²と述べ、その時点でのみ鳥取藩を評価せずに、全体性を重視した

評価を求めた。梶川は、〈長州基準〉で決済される維新史に疑念を抱き、鳥取藩独自の「勤王」的政治史を構築する必要性を感じた。このことは彼が編んだ稿本、『贈従一位池田慶徳公御伝記』へ反映され、長州藩の政治動向に容易に組み込まれなかった鳥取藩池田の政治スタンスが示される。ただ、それが「勤王」であることを強調し、「地域社会と天皇制との位置取りが模索」¹⁸³され、人物評価や歴史観を構築している以上、「勤王」の名のもとに「郷土」が包摂されてゆくことに他ならなかった。日本近代において設定された基準に沿うものを適切な維新観と定めた。これ以降、歴史的表象として、「尊攘」的であり、「志士」であるなど、包摂された「郷土」の歴史観は、有意であり、残すべきであり、伝えるべきであると認識され、本節において取り扱った日本近世の政治秩序は、維新をめぐる歴史の評価対象と認識されず、捨象されていた。現在における幕末維新という時代を見る目も、日本近世の忘却のもとに形成されたといっても過言ではない。

小 括

本節では、日本近代において生成された後付けのイデオロギーが込められ、妥当な理解の枠組みとはいえない従来の政治派閥によりみる幕末政治史のありようを否定し、近世の政治秩序との関わりのなかから、あらたな捉え方を提示しえた。大名家の格式、職制に見合う形で、人びとは考え、行動する。当該期は、既成秩序の崩壊が強烈なイメージとして存在するが、そのことはそのまま社会が無秩序化し、自由な政治活動が推奨されたということではない。鳥取藩池田家中においていえば、家政を司った「御側」が大名の政治志向にそった、人事がおこなわれて学館と結びつき、「国事」というある意味、特殊ジャンルの政治に対応しうるシステムが生成された。特殊なジャンルとはいえ、天皇、朝廷に絡む「天下」の職務を担うことが「藩屏」（藩輔）の任であるのならば、大名自身が政治志向を強めるの

は必然的なことなのであろう。この枠内において、人びとは、職に規定された役目を遂行する形で行動したといえるのである。

明治維新の潮流は多くの人間によって生み出されたものである。そのなかで評価される対象は一握りの人びとである。その際に彼らの多くは「志士」であると評された。郷土の誇りとなった彼らは、日本近代において、有事には戦意鼓舞のテキストとなり、平時にはあるべき県人と解され、「伝記」的な顕彰媒体が生み出された。そこでは前近代においては、至極当然であったはずの政治制度に関する理解は捨象され、先人顕彰的な側面のみが浮き彫りとなるかたちとなった。このような歴史観を基礎として明治維新史は創られ、今日までの理解の礎となってきたのである。

無論、このような歴史観には地域性が大きく関わる。鳥取県については、明治九年（一八七六）より、島根県に合併されたことで、行政面において主体性が欠如し、また日露戦後には他の地域と政治経済および交通の他、あらゆる面で格差が生じ、「裏日本」と認識された。明治維新観とこれらの事実との関わりを含めて、考察することを今後の課題としたい。

第二章 第一節 注

¹ 『改訂肥後藩国事史料』四、国書刊行会、一九七三年、三九頁。

² 『鳥取県史』三、近世政治（鳥取県、一九七九年、以下、『県史』と略。）

³ 「田村図書勤中不忘備記」嘉永三年七月条、県博蔵（以下、県博と略。）

⁴ 殖産は『県史』四、五一―五二五頁。学制は『鳥取藩史』三、学制志二（鳥取県立図書館、一九七〇年、以下

『藩史』と略。）を参照。『藩史』は、明治四十二年（一九〇九）から昭和八年（一九三三）に池田侯爵家が旧藩士湯本文彦を長として編纂され、浄書稿本（県博蔵）のまま伝存したものを鳥取県立図書館が刊行したものである。

- 5 『徳川諸家系譜』二、続群書類従完成会、一九七〇年、一六九頁。
- 6 同右、一八〇頁。
- 7 松尾美恵子「大名の殿席と家格」（『徳川林政史研究所紀要』昭和五十五年度、一九八一年所収）、笠谷和比古「武士の身分と格式」（『日本の近世』七、中央公論社、一九九〇年所収、のち同著『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、一九九四年所収）など。
- 8 鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』一、一九八八年、六六二～七一頁（以下、『慶徳伝』と略。）
- 9 文久二、三年の鳥取藩の政治動向については、断らない限り『慶徳伝』二を参照した。
- 10 湯本文彦『堀敦斎遺稿』一、「文久二年八月廿二日謁見を請ひ上りし建議」、県博蔵（以下、『堀遺稿』と略。）
- 11 『慶徳伝』二、一五八頁。
- 12 「文久二年八月廿三日謁見を請ひ上りし建議」（『堀遺稿』一）
- 13 「文久二年九月六日謁見を請ひ上りし建議」（『堀遺稿』一）
- 14 「高浜正彰上書」、県博蔵。
- 15 「大塩則誼上書」、県博蔵。
- 16 『慶徳伝』二、一四六頁。
- 17 『慶徳伝』二、二四六～二四七頁。
- 18 日本史籍協会編『鳥取池田家文書』一（東京大学出版会、一九八六年復刻、以下『鳥取池田』と略。）四～一〇頁。
- 19 『慶徳伝』二、一六三～一七〇頁。
- 20 『慶徳伝』二、一八四～一八六頁。
- 21 「関東へ建白」、県博蔵。
- 22 「備」は家老および一門衆を「旗頭」（或いは「武将」）として差配、統括される軍事単位のことである。複数の「備」により大名家の軍制は編成される。笠谷前掲著書を参照のこと。
- 23 日本史籍協会編『岡山池田家文書』一、東京大学出版会、一九七八年復刻（以下、『岡山池田』と略。）一四～一八頁。
- 24 『県史』三、六〇八～六一五頁。
- 25 『慶徳伝』二、三三七～三三九頁。
- 26 『慶徳伝』二、三三二頁。
- 27 『慶徳伝』二、三六四頁。

- 28 「文久三年五月三十日謁見を請ひ上りし建議」（『堀遺稿』三）
29 『慶徳伝』二、四〇七〜九頁。
30 『鳥取池田』一、四九八〜九頁。
31 広沢安任「鞅掌録」（日本史籍協会編『会津藩庁記録』三、東京大学出版会復刻、一九六九年）四九九頁。
32 『岡山池田』一、三二〜三頁。
33 『因州藩京都詰家老日記』、県博蔵。
34 『鳥取池田』二、三二九〜三三頁。

第二章第二節 注

- 35 鎌田道隆「幕末京都の政治都市化」（『京都市歴史資料館紀要』一〇、一九九二年所収、のち同『近世京都の都市と民衆』思文閣出版、二〇〇〇年所収）五四三〜五四五頁。幕末京都を論じた先駆的な仕事だが「刷物」の情報に依拠するあまり、事実誤認が見られる。
- 36 服藤弘司『大名留守居の研究』創文社、一九八四年、笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、一九九三年、同『江戸御留守居役―近世の外交官―』吉川弘文館、二〇〇〇年など。
- 37 母利美和「近世大名と公家―公武間の交際における「由緒」と「通路」―」（『あたらしい歴史学のために』六三〇、二〇〇六年所収）
- 38 藤井譲治「平時の軍事力」（『日本の近世』三、中央公論社、一九九三年）、同『幕藩領主の権力構造』（岩波書店、二〇〇二年）など。
- 39 服藤前掲書、八七四頁。
- 40 『藩史』二、二九四〜七頁。
- 41 「河田景与家譜」（県博蔵、No.九一七五）、『藩史』一、三四二〜三五二頁。
- 42 『藩史』二、「職制志」一、五〜四五頁を参照。
- 43 「安達清風家譜」県博蔵、No.九九五五。
- 44 『慶徳伝』二、一九一頁。なお随行着座の「備」の規模については、安政五年（一八五八）八月に、池田慶徳の命により改正された軍式による。（『藩史』三、軍制志、一七五〜一七七頁。「備」の概念については、笠谷前掲

『近世武家社会の政治構造』一六七～一七六頁を参照のこと。

⁴⁵ 「御行列之控」(県博蔵、No.七二七六)。「慶徳伝」二、三八七～三八九頁に記載があるが、供揃後部の情報を欠く。また、一つの武家道具を数名による交代で運んでおり、実数の割り出しは難しい。

⁴⁶ 『慶徳伝』二、三〇七～三〇八頁。「和田信敏家譜」(県博蔵、No.九一五九)

⁴⁷ 安達の日記は、日本史籍協会編『安達清風日記』東京大学出版会、一九六九年復刻(以下、『安達』と略。)が公刊されている。安政元年(一八五四)から明治元年(一八六八)まで収録された日記には部分的に欠落がある。筆者は二〇〇五年、安達清一郎の子孫にあたる安達満郎氏、西野功氏ご夫妻より、日記欠落部分の稿本(複写)および所蔵の貴重な資料をご提供いただいた。特に「日記」稿本は安政六年から翌七年における水戸藩徳川家と安達清一郎を取り巻く政情が具にうかがいうる好史料である。安達満郎氏は『因州安達家』(私家版、一九八四年)を刊行されている。

⁴⁸ 堀庄次郎「埃後編」(『堀敦斎遺稿』三、県博蔵)。

⁴⁹ 『安達』二八七頁。

⁵⁰ 前掲「安達清風家譜」。「安達」二九九～三〇〇頁。

⁵¹ 同時に堀庄次郎も、「学校吟味役」(格式、馬廻)から、「文場学正学校奉行兼帯昵近」(格式、諸奉行)に昇格している(『慶徳伝』二、一八八～一九〇頁)。

⁵² 『安達』三〇五～六頁。「慶徳伝」二、一九五頁。

⁵³ 『慶徳伝』二、二一三頁。

⁵⁴ 「十四藩へ内達書」(『孝明天皇紀』四、平安神宮、一九六八年、一九八頁、以下『孝明』と略。)

⁵⁵ 「自筆状控」(『改訂肥後藩国事史料』三、五四〇～五四二頁、国書刊行会、一九七三年)

⁵⁶ 『安達』三〇〇頁。

⁵⁷ 同右、三九六～八頁。相国寺内塔頭の使用权につき安達は、薩摩藩京都留守居本田弥右衛門(親雄)と交渉をおこなっている。

58 「探索記」(県博蔵、No. 一三〇八四)

59 『安達』三九六〜三九八頁。なお「上屋敷」については「京藩邸図」(県博蔵、No. 一一四一)より、その構造がうかがえる。

60 「島津家文書」(『孝明』四、一二四〜一二六頁)

61 『安達』四七五〜四七九頁。

62 『慶徳伝』二、五八四頁。

63 原口清「参預考」(『名城商学』四一別冊、一九九二年所収)。佐々木克『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館、二〇〇五年)。

64 『慶徳伝』二、五七三頁。

65 「朝議参与」制執行期における徳川慶喜の政治意識について、家近良樹『徳川慶喜』(吉川弘文館、二〇〇四年)は「慶喜自身のなかに、幕府と有力諸藩の同列化を嫌う思いが根強くあったことに加え、薩摩藩に政治的・経済的な野望があるのではないかとの嫌疑を払拭できなかったからである。」(六四頁)とする。

66 『慶徳伝』二、五七五頁。

67 『慶徳伝』二、五九九頁。

68 『県史』三、六三二〜六三六頁。濱崎洋三「維新史料の紹介―慶徳人物像再検討のために―」(『鳥取市史研究』三、一九七八年)。

69 日本史籍協会編『伊達宗城在京日記』(東京大学出版会、一九一六年、一九七二年復刊)三三八頁。

70 原口前掲「参預考」。三谷博『明治維新とナショナリズム』山川出版社、一九九七年など。

71 この時期の徳川慶喜の政治基盤に「壮士」が想定されていた問題について、腹心原市之進らによって丹波、摂津など京近郊の郷士が糾合せんとされたことにつき付言しておく。

72 例えば、「禁中并公家諸法度」中の「諸家昇進之次第」には「其家々守旧例、可申上、但学問、有職、歌道令勤学、其外於積奉公劳者、雖為超越、可被成御推任御推叙」とある。

73 『慶徳伝』二、五九九頁。

74 『慶徳伝』二、六三七〜六三九頁。「千葉一胤家譜」(県博蔵、No. 九〇三六)。千葉重太郎は江戸京橋桶町千葉定吉の嫡子。父、定吉が鳥取藩池田家の剣術師範を勤めた縁で、「家業家」として召抱えられ、周旋方を任じられた。

戊辰戦争の折には鳥取藩歩兵頭として参戦。明治四年に家督を継ぎ、鳥取県官吏として出仕、開拓使権大主典として北海道開拓に尽力した後、京都府官吏となり明治十八年(一八八五)没。坂本龍馬と関係や、勝海舟斬殺未遂のエピソードばかりがクローズアップされて語られるが、あくまで小説のなかの人物像にすぎない。

75 『慶徳伝』二、六四八～六五一頁。

76 『安達』四九〇頁、『慶徳伝』二、六九〇頁。

77 末松謙澄『防長回天史』上、柏書房版、一九六七年（以下、『防長』と略。）三八六～三八七頁。『慶徳伝』二、六一三頁。

78 上京が求められた池田家の分家当主は、「東館」と呼ばれ、因幡国鹿奴を領する池田仲達であったが、率兵上京を無益と判断し、藩主慶徳を諫言したのち自害する。『慶徳伝』二、七〇四～七〇五頁。

79 「京坂書通写」二（県博蔵、No. 一三〇八六）。『慶徳伝』二、七二二～七二三頁。この建言書案は二本松藩丹羽家留守居増子現蔵による。なお薩摩藩島津家は、「長州討伐」方針について対立し、会合途中に留守居本田弥右衛門が「拒絶」、退席している。

80 『慶徳伝』二、七四〇～七四六頁。

81 「久光上書案」（宮内庁蔵版『孝明天皇紀』四〈平安神宮、一九六八年〉一二四頁）、以下、『孝明』と略記。

82 青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、一章二節「和親・通商・攘夷―十九世紀東アジアの言語として―」を参照。

83 津山藩松平家の政治運動については、笹部昌利「津山藩と幕末政局―中央政治と〈攘夷〉への対応の一形態―」（『佛教大学大学院紀要』二七、一九九九年）を参照のこと。

84 「六藩建白」（『孝明』四、八一八～八一九頁）。日本史籍協会編『鳥取池田家文書』二、（東京大学出版会、一九六八年復刊）二五四～二五五頁。以下、『鳥取池田』と略記。

85 「毛利敬親事蹟」（『孝明』四、一四二頁）。『防長』上、三二七～三二八頁。

86 『山口県史』史料編幕末六、山口県、二〇〇一年、同書別冊『長州藩諸隊一覽』。

87 東京大学史料編纂所蔵版『維新史料綱要』四（東京大学出版会、一九八三年復刊、四五九頁）は、山縣半蔵、長嶺内蔵太両名の派遣日時を六月八日とするが、毛利家老国司信濃が久留米藩周旋よりの帰国した日付が六月八日であり、山縣らは国司の周旋報告を受けて派遣されたと考えられるため、『防長』上、四二八頁の記載に依拠し、六月九日とする。

88 『防長』上、四二八頁。『慶徳伝』二、三九六～三九七頁。以下、『慶徳伝』と略記。「堀敦斎日記」一五巻、文久三年七月三日条（県博蔵、No. 一〇四一一）。

89 日本史籍協会編『安達清風日記』（東京大学出版会、一九六九年復刊）四一五～四一六頁。以下、『安達』と略

記。『県史』三では、安達の見解と断定するが（六〇八頁）、文末の「相国寺内」との作成者の所在を示す記載から考えて、文久三年六月以降、親兵として選出され、屯所となった相国寺にいた在京周旋方が安達に差し出したものと判断する。

⁹⁰ 『慶徳伝』二、三八四～三八五頁。

⁹¹ 同右、三九七頁。

⁹² 「周旋方」は、近世大名家の職制には存在しなかった職であり、これには、藩政に対する発言権を持たなかった無役の下級家臣、鳥取藩では、「馬廻」や、士分以下の「徒」、儒者・医者などの「家業家」という格式の家臣のなかで有能な者が任命された新設ポストである。その多くは、江戸および京都留守居の差配により、外交や情報収集に携わるが、あくまでサポート役としての活動に従事する。

⁹³ 秋良敦之助の人物史的考察として、岸本覚「秋良敦之助と海防―萩藩陪臣の幕末―」（佐々木克編『それぞれの明治維新―変革期の生き方―』吉川弘文館、二〇〇〇年所収）がある。

⁹⁴ 『防長』上、四二八頁。

⁹⁵ 文久三年九月二二日付、朝議宛て建白（『慶徳伝』二、五一七～五一八頁）。

⁹⁶ 周旋方沖守固の政治動向については、福井淳人「沖守固―御用絵師から男爵へ―」（霞会館編『岩倉使節団 内なる開国』同館資料一七、一九九三年所収）が参照。

⁹⁷ 沖家文書No.一九〇三九（県博蔵）。

⁹⁸ 慶徳もこれについては問題視しており、たとえば文久三年九月八日付、慶徳より朝議宛て建白書中「十八日前之勅は真偽不分明、以来之勅は真之歟慮之趣ニは候得共、前後真偽之弁愚昧之徒未得瞭然、却疑惑之心を生」（『慶徳伝』二、五〇四～五〇五頁、『鳥取池田』二、一九一～一九五頁）じるとの文言は、政変直後の慶徳の問題意識を示す。

⁹⁹ 『鳥取池田』二、三二九～三三三頁。

¹⁰⁰ 『安達』四七五頁。

¹⁰¹ 『県史』六三二～六三六頁。濱崎洋三「維新时期史料の紹介―慶徳人物像再検討のために―」（『鳥取市史研究』三三号、一九七八年所収、のち濱崎洋三著作集『伝えたいこと』定有堂書店、一九九八年に再録）

¹⁰² 参与会議については、三谷博『明治維新とナショナリズム―幕末の外交と政治変動―』（山川出版社、一九九七年）第七章「（公議）制度化の試み」。原口清「参預考」（『名城商学』四一別冊、一九九二年）を参照。

¹⁰³ 「七卿」のうち、沢宣嘉は文久三年十月に脱走。ゆえに文久四年正月段階では六名。同年四月、錦小路頼徳は病死。これ以後五卿移転問題へと転化される。青山前掲書二章一節「元治内乱をめぐる政治状況」を参照のこと。

¹⁰⁴ 『慶徳伝』二、五八四頁。

¹⁰⁵ 『慶徳伝』二、五八四頁。

¹⁰⁶ 『慶徳伝』二、五五六頁。『防長』上、五五九～五六二頁。

¹⁰⁷ 『慶徳伝』二、五五三頁。『鳥取池田』二、三二九～三三八頁。

¹⁰⁸ 禁門の変については、原口清「禁門の変の一考察」一および二（『名城商学』四六～二および三、ともに一九九六年）を参照。

¹⁰⁹ 「子三月荒尾但馬上京中建白書類」（県博蔵、No. 一三〇四七）。『慶徳伝』二、六一五～六一六頁。

¹¹⁰ 『慶徳伝』二、六二三～六二五頁。『防長』上、三八六～三八七頁。

¹¹¹ 『慶徳伝』二、六五二～六五三頁。『防長』上、六〇五頁。

¹¹² 『慶徳伝』二、六五六頁。

¹¹³ 『鳥取池田』二、八五～八九頁。『慶徳伝』二、七三三～七三六頁。

¹¹⁴ 『慶徳伝』二、七四〇～七四八頁。

¹¹⁵ 堀庄次郎「京都詰中日記」（県博蔵、No. 一〇四一一）。同「京都詰中三論」（湯本文彦『堀敦斎遺稿』三、県博蔵、No. 一〇四〇四所収。以下、『堀遺稿』と略記。

¹¹⁶ たとえば、堀庄次郎「文久二年八月二三日謁見を請ひ上りし建議」および「文久二年九月六日謁見を請ひ上りし建議」（ともに『堀遺稿』一、所収）など。

¹¹⁷ 元治元年九月下旬、堀庄次郎より慶徳宛書翰。湯本文彦は『堀遺稿』一のなかで、文久三年九月頃と推定するが、内容から考えて明らかに元治元年のもの。

¹¹⁸ 『慶徳伝』三、二一～二二頁。

¹¹⁹ 諮問がなされた時期から判断し、家臣の政治意識調査をおこない、同月二四日の「役替」の資料として利用されたと考えられる。実際、毛利家擁護を痛切に論じた側用人助役神戸源内および同見習河崎政之丞は、「御役御免」を申し渡されている（『慶徳伝』三、三二頁）。

¹²⁰ 『鳥取池田』三、一五一～一五二頁。『慶徳伝』三、二六～二七頁。

¹²¹ 『慶徳伝』三、二八～三〇頁。

¹²² 河田左久馬ら「二十士」の、禁門の変後の動向（黒坂幽閉および脱藩）については、『県史』六五七および六六四～六六七頁を参照のこと。

¹²³ 『岡山池田』二、三～五頁。

¹²⁴ 『鳥取池田』三、四〇七～四一一頁。『慶徳伝』三、三一四～三一六頁。

¹²⁵ 橋本素助・川合鱗三編『藝藩志』八巻（文献出版、一九七七年復刻再刊）二六二～二九四頁。『岡山池田』二、七三～七五頁。

¹²⁶ 長州戦争期の岡山藩池田家の政治運動に関する研究には、『岡山県史』近世Ⅳ（岡山県、一九八九年）の他、北村章「幕末期岡山藩の政治過程」（『岡山県史研究』五、一九八三年）、西村晃「幕末岡山藩における国事周旋方針と藩論」（『史学研究』一八四、一九八九年）久住真也「長州戦争期の政治運動と公論」（『日本史研究』四四三、一九九九年）がある。

¹²⁷ 『慶徳伝』三、五九八頁。

第二章第四節 注

¹²⁸ 文久二年以降、元締役であった石原節之丞が国元、大阪蔵屋敷、京都屋敷へと移動して各部局との予算交渉に追われている。元締役の政治的動向については、笹部昌利「京よりの政治情報と藩是決定―幕末期鳥取藩池田家の情報収集システム―」（家近良樹編『もうひとつの明治維新』有志舎、二〇〇六年）で触れた。なお、幕末期の大名家の国事周旋にかかる予算に関する考察として、伊藤昭弘「藩財政再考―萩藩を事例に―」（『ヒストリア』二〇三、二〇〇七年）が、「藩主御手元金」の存在を分析し、藩政一般以外の政務の予算として活用されていたことを明らかにしている。

¹²⁹ 「御用部屋日記」No.四七六三（県博蔵）

¹³⁰ 藩士の建言については、磯田道史「幕末維新期の藩校教育と人材登用―鳥取藩を事例として―」（『史学』七一、二・三、二〇〇二年）でも分析がなされている。

¹³¹ 「田村図書勤中不忘備記」No.一〇三九六（県博蔵）

¹³² 同右

¹³³ 池田慶徳は事態が、重大かつ緊急を問うと判断された場合、対象となる家臣を寝室に呼び、命令を直接伝達することがあった。

¹³⁴ 「御用部屋日記」文久二年九月十八日条、『慶徳伝』二、一七六頁。

第二章第五節 注

¹³⁵ 「農兵」を考えるきっかけになったのは、二〇一五年七月、早稲田大学において開催された国際シンポジウム「革命と軍隊―明治維新・辛亥革命・フランス革命の比較からみえてくるもの―」での報告であった。同シンポジ

ウムは、日本近世史研究者の谷口眞子氏を中心に、西洋史、東洋史の専門家によって組織された軍事と社会の相关性を問う研究グループによって主催され、筆者には明治維新期の軍事、ことに「農兵」に関わる研究報告が求められた。

¹³⁶ 幕末の政治過程を緻密に考察する政局研究については、原口清著作集編集委員会編『原口清著作集』全五巻（岩田書院、二〇〇七、八年）、宮地正人『天皇制の政治史的研究』（校倉書房、一九八一年）、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』（吉川弘文館、一九九五年）、青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、二〇〇〇年）などが、代表的な先行研究として挙げられる。

¹³⁷ 三谷博『明治維新とナショナリズム』（山川出版社、一九九七年）

¹³⁸ 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会、一九九四年、同『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九年。

¹³⁹ 原剛『幕末海防史の研究』名著出版、一九八八年。

¹⁴⁰ 三谷前掲書。保谷徹『幕末日本と対外戦争の危機』（吉川弘文館、二〇一〇年）。なお、これまでの「農兵」に対する視角をまとめた業績として、デヴィッド・ハウエル「農兵の歴史的意義―暴力の連続体への位置づけをめぐって―」（『市大日本史』一六号、二〇一三年）を挙げておく。右は、同氏の講演録のリライト版であり、「農兵」という存在を歴史のなかの暴力発動の装置として捉え、近世と近代の連続性を問うものである。

¹⁴¹ 「農兵」の大名家中における位置づけを問うた研究に、上田純子「幕末期萩藩における給領取立農兵―寄組浦家を事例として―」（『史窓』五八号、二〇〇〇年）がある。

¹⁴² 幕末期の軍事については、高橋典幸・山田邦明・保谷徹・一ノ瀬俊也『日本軍事史』（吉川弘文館、二〇〇六年）を参照。他、吉良芳恵「幕末維新期の軍制と英仏駐屯軍」（福井勝義他編『人類において戦いとは』三、東洋書林、二〇〇〇年）二二五―二三二頁における整理を参考にした。

¹⁴³ 幕末期の旗本の出世に関して、奈良勝司『明治維新と世界認識体系―幕末の徳川政権 信義と征夷のあいだ―』（有志舎、二〇一〇年）、平良聡弘「勝海舟―「開明派」幕臣の実像―」（笹部昌利編『幕末維新人物新論―時代をよみとく16のまなざし―』昭和堂、二〇〇九年）を参照。

¹⁴⁴ 保谷前掲書。

¹⁴⁵ 三谷前掲書。

- 146 宮崎ふみ子「幕府の三兵士官学校設立をめぐる一考察」(『年報・近代日本研究―三 幕末・維新の日本』山川出版社、一九八一年)。
- 147 『広辞苑』第六版(岩波書店、二〇〇八年)。
- 148 井上清『日本の軍国主義 一卷』(東京大学出版会、一九五三年)。
- 149 E・H・ノーマン『日本における兵士と農民―日本徴兵制度の諸起源』(白日書院、一九四七年)
- 150 仲田正之『江川坦庵』(吉川弘文館、一九八五年)、同『近世後期代官江川氏の研究―支配と構造』(吉川弘文館、二〇〇五年)。
- 151 近世日本の褒美・褒賞にかかる研究は、吉村豊雄「日本近世における評価・褒賞システムと社会諸階層―一九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録「町在」の成立・編成と特質」(吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編『熊本藩の地域社会と行政―近代社会形成の起点―』思文閣出版、二〇〇九年)の他、幕末から近代の褒賞・表彰を問うた岸本覚『褒められた人びと―表彰・栄典からみた鳥取―』(鳥取県、二〇一三年)を参考にした。
- 152 原前掲書。
- 153 仲田前掲『近世後期代官江川氏の研究―支配と構造』。
- 154 『岡山池田』一、三二一―三三三頁。
- 155 『慶徳伝』二、三三二頁。
- 156 神戸大助については、『慶徳伝』別巻(一九九二年)、六四頁、「神戸晁家譜」No.九二一五、県博蔵。
- 157 「海防策愚測」一三〇三三―二、県博蔵。
- 158 「農兵勧誘に係る意見」一三〇三三―一、県博蔵。
- 159 「中本直久家譜」一〇二九四、県博蔵。
- 160 『県史』三、六一―二頁。
- 161 「控帳」元治元年六月二十二日条、県博蔵。「控帳」は、家老のもとで御帳奉行によって記録されていた執務日記である。明暦元年から明治二年四月まで二三八冊が存在し、藩政の基幹史料である。
- 162 『県史』三、六一二頁。
- 163 「在方諸事控」文久三年十月四日条、県博蔵。
- 164 赤崎・由良の台場警衛については、同地に伝存する「御墓場御用簿」「御墓場入用帳」(個人蔵)よりその内容がうかがえる。同史料の情報については、坂本敬司氏(前鳥取県公文書館県史編さん室長)よりご教示いただいた。

た。なお、赤崎台場は近年発掘調査がおこなわれ、琴浦町教育委員会編『赤崎台場跡発掘調査報告書…鳥取藩台場跡』（琴浦町埋蔵文化財調査報告書第一三集、二〇一五年）が発表された。

¹⁶⁵ 『県史』三、六一四頁。

¹⁶⁶ 長州戦争について先行研究は多数存在するが、青山前掲書、久住真也「長州再征と將軍畿内滞在問題」（『日本史研究』四七八号、二〇〇二年、のち同著『長州戦争と徳川將軍』岩田書院、二〇〇五年収録）、三宅紹宣『幕長戦争』（吉川弘文館、二〇一三年）を参考にした。

¹⁶⁷ 日本史籍協会編『安達清風日記』（東京大学出版会、一九六九年復刻）六一三～四頁。

¹⁶⁸ 「控帳」慶応二年六月十七日条。

¹⁶⁹ 同右、同日条。

¹⁷⁰ 「控帳」慶応二年十一月二十四日条。

¹⁷¹ 「控帳」慶応二年十二月七日条。

¹⁷² 「控帳」慶応三年二月二日条。

¹⁷³ 『県史』三、六七四～七頁。

¹⁷⁴ 同右、七四二頁。

¹⁷⁵ 水口民次郎『丹波山国隊史』山国護国神社、一九六六年、仲村研『山国隊』学生社、一九六八年。

¹⁷⁶ 鳥取藩における戊辰戦争との関わりについては、『鳥取県史』近代一卷、（鳥取県、一九六九年）、鳥取市歴史博物館編『因州兵の戊辰戦争』（同館、二〇一一年）を参考にした。

¹⁷⁷ 新国隊については、阿部裕樹「新国隊の動向と岸本辰雄」（『大学史資料センターグループ報告』第二九集）同「鳥取藩軍新国隊をめぐる諸問題―創立者・岸本辰雄の周辺―」（『大学史資料センター報告』第三五集）のほか、

前掲『因州藩兵の戊辰戦争』に詳しい。参考にした。

¹⁷⁸ 『県史』三、七六九～七七二頁。

第二章 補節 注

¹⁷⁹ 「二十士」関係の冊子を列記すれば次のとおり。鈴木徳治『壮烈二十士』（一九一三年）、山本村夫談・山本春彦編「二十士事件」（稿本、一九一六年）、檜柴重恕（竹造）「勤皇烈士因幡二十士美談」（稿本、一九二五年）早川睦造「本國寺事変並に手結浦復讐顛末聴取書」（稿本、一九三〇年）、青木寿光『因幡二十士伝』（一九三〇年）、青木寿

光『因藩二十士伝附録』（一九三一年）、青木寿光『義士のほまれ いなば二十士』（一九三一年）、日野郡神職会『因幡勤王二十士問題に対する主張』（一九三一年）田淵應次郎『鳥取二十士概念』（一九三四年）

¹⁸⁰ 山本村夫談・山本春彦編「二十士事件」（稿本、一九一六年、鳥取県立図書館蔵）

¹⁸¹ 大久保利謙「王政復古史観と旧藩史観・藩閥史観」（『法政史学』一一、一九五九年）

¹⁸² 梶川栄吉「元治甲子禁門事変に於ける因州藩の態度」（維新史研究会『維新史研究会講演集』分冊第三輯、一九二八年）

¹⁸³ 高木博志『郷土愛』と『愛国心』をつなぐもの」（『歴史評論』六五九、二〇〇五年）

第三章 幕末期における薩摩藩島津家の国事運動と京都

第一節 薩摩藩の国事運動と島津久光

1 島津久光の率兵上京に対する見方

文久二年（一八六二）四月、島津久光が主導する薩摩藩島津家の率兵上京は、それ以後の大名家の「上京」をともなう政治運動の端緒となる事件として認識されてきた。たとえば、一九八〇年代以降、明治維新史研究に影響を与えた宮地正人「幕末過渡期国家論」においても、久光の「上京」とそれにからむ政治運動を「幕政史上、前代見聞の画期的大事件」とし、それが「幕府の武力・威光の急速な衰退を正しく推計し、自ら全勢力をこの局面転換の一点に集中したところの、薩藩あげての政治的投機」であった、と評された。宮地氏は、久光の率兵上京から慶応元年（一八六五）十月、孝明天皇の条約勅許にいたる政治過程を論理的に解明することに主眼を置いた。しかし、そこで提示された枠組みは釈然としないいくつかの問題をはらんでいる。

一つには、大名家による国政への進出過程や、徳川將軍権力をなかば圧倒してゆく朝廷権威という対抗関係を分析の軸として当該期の政治史を論じようとするあまり、運動の受け手となった人間の意味が議論に反映されていない。二つめに、先行研究全般にいえるが、近代国家像を問うための素材として幕末政治史が描かれ、そこにおいて「割拠」あるいは「私」という近代国家創出過程に対する「逆コース」の可能性が考慮の対象とされていない。三つめに、政治派閥のせめぎあいの構図を重視するあまり、「大名家」と「朝廷」という組織対組織のマクロ的構図で捉えられており、そこに属した一個人の政治に対する心性と言動を踏まえた検討がなされていない点である。

本節では、文久元年末から同二年中旬までの約半年間を中心に、薩摩藩島津家の政治運動および、近衛家の政治意思を素材とし、大名家の政治運動と公家の意思の間に存在した相互関係を導き出し、それぞれの政治的言動の意味について考えていく。

2 島津久光論

幕末という時代を代表する政治勢力である薩摩藩島津家。同家の政治を主導した島津久光は大名のようで、大名でない。権威の所在は曖昧なのだが、その権限は大名家のトップである大名を軽く凌駕する。なぜこのようなことになったのか。薩摩藩島津家における島津久光の政治権力の形成について考えていきたい。まず、前程となる幾つか考えられる理由がある。

大名家という組織の頂点に位置するのは、言うまでもなく「大名（＝藩主）」である。この大名を頂点とするタテ型の序列、すなわち家格が形成され、それに応じてあてがわれた職務を遂行することは、至極当たり前のことであつた。ただし、確固として存在した制度には、時にイレギュラーな事態が存在した。

一つめに、家督および家職の継承についてである。江戸時代の大名家督の継承は、概ね当主が健全な身体状況である間におこなわれる。年老いてからの家督相続が避けられるのは、「武家諸法度」の規定上、「末期養子の禁」（当主が死ぬ直前の養子縁組の禁止）に関わるといふ族生的な理由や、徳川幕府より大名家の存続を認めない処分（「改易」）や、大名座を巡る家中の党派対立により生じる「御家騒動」への処罰から生じる政治的理由など、さまざま考えられる。そもそも前近代において「家」は先祖代々から伝わる土地所領を維持継承していく存在として生成され、このためにできるだけ良好な早いタイミングで当主の座を継承した。当主を退くと、基本的には「隠居」として一線を退い

た形となるのであるが、大名の「後見」として政治参画し、「老公」などと呼ばれ隠然として權威を持ち続けることがあった。

二つめに、近世後期において生成された政治状況がかかわる。大名家において大名は、平常は大名家が所有する領地支配のトップとして藩内統治に関わっていく。実際に、統括的に差配するのは幾人かの家老などからなる上級家臣であるので、あからさまに「大名親裁」がうたわれた政治状況でないかぎり、大名が統治に関わる頻度は低く、政策決定の際には稟議の形で決裁を与えるか、大名が最終決定の際の会議（いわゆる御前会議）への出席の形で参加が一般的であった。そんななか近世後期において、領内支配への参加のみならず、領国を越えた業務が生じてきた。

それは「国事」である。当時において「国事」とは、国家レベルの施策を意味し、天皇に奉仕する「王事」または「勤王」として読み替えられることがあるが、ここでは双方ともを含む。この業務は、形式的に「国事」は、徳川將軍や天皇に対して勤められたので、大名が主として勤め、それが困難なときにはあくまで大名の使者や代人が勤めた。むろん幕末期でなくとも大名を筆頭におこなわねばならない「国事」業務はあった。それは「軍役」である。戦国期といわれた時代、すなわち戦いが恒常的におこなわれていた時代においては、その勤めは大名を主体とする軍事行動によっておこなわれていたが、江戸時代に入りこれが発動される機会といえ、將軍上洛に際する警備（供奉）と参勤交代に伴う上府程度であった。

しかし、アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官ペリーの来航を受け、徳川幕府がそれまでになかった政策方針を打ち出した。大名に対する政治諮問である。これを主導したのは当時、老中首座であった備後福山藩主の阿部正弘で、公論衆議の要素を幕政運営に組み込むことで、難局の打破を試みたが結果的に、この公論衆議を是とするスタンスは、大名家において大名領獄の垣根をこえた「政事」と認識され、結果的にそれは幕政参画という形態となった。大名家において「国事」は大名を代表として担われた。国事に対応するという理由づけこそ、「朝臣」たる大名の職掌であっ

たからである。よって、大名家において国事は、通常の一般業務としての「藩治」とは別の次元で発生し、家老より形成される藩治業務の政務系統とは別系統の業務となった。「国事」に携わっていく大名家臣が、大名の側役に多いのは、そのためである。後に触れるが、薩摩藩島津家でいえば、小松帯刀や大久保利通、西郷隆盛は、本来的な藩治行政の職としてではなく、大名の御側から出てきた政治主体であった。従来的に近世の大名家に存在した大名の継承と、近世後期により偶発的にも成立した政事参加を旨とする国事によって、大名家中という組織において大名、あるいは「老公」はさらに大きな政治主体たりえた。幕末維新といえば、大名家の家臣や、大名家という枠組みから出でた存在（浪士）に眼が行きがちである。それは、ドラスティックに展開してゆく現象面のみ考察に留まっているからである。薩摩藩島津家の幕末を捉える際、西郷、大久保よりも、島津久光に焦点を当てなければなるまい。

さて、久光は「老公」とは呼ばれたことがない。越前の松平春嶽や土佐の山内容堂は、隠居して後、「老公」たる威厳をもって政治権力を固持しえたが、久光は大名経験者ではなく、必ずしも「老公」ではない。彼の主張や行動が、薩摩藩島津家という組織のなかでいかに機能し、その組織を主導できうるまでになるのか、評伝と史料をとおして考えていこう。

島津久光は、文化十四年（一八一七）十月、島津斉興の第三子として鹿児島城内に生まれた。幼名を普之進という。母は斉興の側室「由羅」。正室「周子」との間に生まれたのが、八才年長の世子、斉彬である。文政元年三月、種子島久道の養子となって文政八年（一八二五）三月まで養育された。史料から久光はその呼称を度々変えたことがわかる。「普之進」から「又次郎」へと改めるのが、文政八年四月。文政十一年には「忠教」を諱とする。それから勝手名乗りで天保十年十二月に「山城」を、弘化四年十月に「周防」と、擬似的な官途名を名乗り、文久元年四月に勝手名乗りに「和泉」、諱を「久光」と変えた。通常、名乗ることを避けた実名である諱を変えるというのは、彼自身の特徴であるとともに、これを変えた文久元年（一八六一）四月という時が彼にとって特別の転機であったといえる。

文政八年四月の本家復帰のち、同年十一月、今度は島津家の領邑重富島津家に養子に入り、天保十年（一八三九）、そのまま重富島津家（以下、重富家とする）の家督を継いだ。重富家は、島津家中の格式において、「御一門家」と呼ばれ、宗家の庶子に入る家で、重富のほか、「加治木」・「垂水」・「今和泉」の四家がある。嘉永六年（一八五三）に薩摩藩主・島津斉彬の養女となり、安政三年（一八五六）摂関家近衛忠熙の養女となり、同年十一月に將軍徳川家定の室として江戸城大奥へ入った篤姫の生家は、「今和泉」島津家であった。これら四家は島津家中において「格別之家柄」とされ、格別に高い格式を有し、重富家はそのなかでも筆頭の格を有した。よって久光の待遇は「格別」であり、他の一門より一段高く位置付けられたのである。

嘉永三年（一八五〇）八月には、実父斉興の「特旨」により、「御家老座」（＝家老格）を与えられており、加えて大名直々に「政務加談」を命じられている。このことはすなわち、藩治政務を稟議する場に立ち会えることのみならず、大名の執りうる藩治の枠を越えた政事にさえも、「加談」すなわち意見ができるようになったことを意味する。混同するところであるが、この「政事加談」が許されずして、職分を越えた政事関与は、たとえそれが家老であるといってもありえなかった。その意味でいえば、島津久光は藩政にも「国事」にも関わりうる条件を備えた人物であったといえる。

しかし、嘉永四年、父、斉興が隠居し、代わって兄の斉彬が藩主となると、久光はその前々年十二月よりおこった朋党事件（「高崎崩れ」「お由羅騒動」）へ関与を自責し、重富屋敷に退隠し、書物を読みふける日々を送ったといわれる。

斉彬の急死によって斉彬政権が約七年間で終わると、安政五年（一八五八）十二月、久光の実子又次郎（のち茂久、忠義）が藩主の座につき、斉彬・久光の父で前々藩主の斉興が藩主の後見役となった。しかし、安政六年九月、斎興が死去すると、久光は実子である藩主茂久の政治補佐に当たった。ただし、久光の政治補佐は、近世期に島津家に存在

した「藩政後見」の慣習としておこなわれたものではない。あくまでも非公式な藩政への関与であつたのである。

研究史一般において、斉彬死後の島津家による政治運動が、斉彬の遺志（「朝権伸張、幕政改革、公武一和の為に奔走」せよ）を動機付けとして展開されたと、一律に評され、この理解のもとに、斉彬と茂久・久光の時代の治世を線として見ようとしがちである。斉彬の遺志とその後薩摩藩島津家の政治動向を関連づけるのは、甚だおかしい。むしろ、なぜ久光が島津家の政治的主導性を持ち得たのかを、斉彬との個人的な関係だけでなく、薩摩藩島津家における藩政執行の枠組みに位置付けて考えるべきであろう。

さて、久光は、島津家の政治執行および運営にいかなるビジョンを持っていたのか。斉彬存命中、表立った政務への関与はなかったものの、兄の斉彬に対しては書信によつて自らの藩政に対する見かたを示していた。たとえば、斉彬の諮問に答える形で書かれた安政五年（一八五八）四月二十日付の書状においては、加治木領主島津豊後（久宝）の進退問題に関する私見が示されている。久光は、島津豊後について、前藩主斉興の官位昇進に尽力したため、「恩赦」を受け、重用されているが、「同役（家老）中御用談整兼候儀も有之、且世情人望を失」い、「御用筋混雑之基二も相成」るので、相応の禄を加増し、島津豊後を「諸掛り御免」とするべき、と主張し、また島津豊後を含め、他の島津一門による藩政運営に否定的な見解を有した。

ここにみえる久光の政治ビジョンは、「御一門」・「家名方」といわれた門閥層による政務運営の伝統を、斉彬の治世において断ち切り、島津宗家による宗家のための政治体制を志向するものである。それは、八代藩主島津重豪が明和年間の藩政改革において執つたような、限りなく大名親裁に近い体制の樹立を意味した。ゆえに文久元年、久光により執行された人事刷新において目指されたのは、家中に複数存在する政治的権威を島津宗家に一元化することであり、既存の政治組織・枠組みの再編を意図するものであつたのである。

大名家における政治運営の主体は、藩主（大名）、あるいは家老・重臣（＝藩政執行部）である。政治主体となりう

る家が複数あるなかで、個々により目指されるのは、藩の政治意思決定に対する発言力および影響力の拡大であり、これが大名家内の藩内対立の要因となった。ただ、文久二年以前にこれを解決し、大名に政治的権威を集中させることに成功した大名家は、島津家のほかに見出せず、これにより同家は文久二年以降、国事参加を旨とする政治運動を円滑に進行しえたのである。

文久元年（一八六一）四月十九日、諱をかえ、一般的に知られる「久光」となった。重富島津家の当主から、その所属が宗家へと変わったからである。当然、大名としてではない。大名の政治参加を補佐する立場であった。ただそれは従前の「後見」としてではなく、新たな敬称によつて呼称される地位であった。「国父」という、それは島津家中に存在しない当時としても聞き慣れない肩書きであった。「薩摩国の父」・「国主の父」など、さまざまの意味にとることができる曖昧かつインパクトのある名称をもって説明される存在となった。まさしく「異例の権威」である。「国父」と久光が呼ばれるようになってからは、藩主茂久の公的な場における言動に規制がかかり、国父への発言の際に「被仰上」との一段上位のものへの対応が義務付けられた。

「国父」として、藩主茂久を軸とし、島津家の権力を維持、専制的な政治体制へと増強しようとはかった。文久元年（一八六一）十月における島津一門の家老衆を藩政要路から退け、かつ、先代の斉彬によつて登用されていた才能を、茂久の側に参入させる形で、大名「御側」の政治力の拡充をはかった。小松帯刀・大久保一蔵（利通）・堀仲左衛門（のち伊地知貞馨）らは、前藩主斉彬を支持し、かつ藩政改革を求めた藩士グループ（誠忠組）が、藩主茂久の「御側」となり、これを久光が編成する形で展開されてゆく。

久光が目指したものは、島津家中が宗家主体に運営しうる体制を築くことであった。それは従前のおり、藩内統治によつて秀でた功績を上げることよりむしろ、国外で如何にインパクトのある政治を展開し、これを理由付けとして家中における権威を獲得しようという方法にでた。方法として選択されたのは徳川日本の政治体制の改編に尽すこ

とであり、これは斉彬の遺志に沿うものであり、安政大獄を経験した後、国事運動に携わった大名家に共通するテーマである。

その先駆けとなることこそ、島津家における「国事」目標となった。この実現のために見出した道筋とは、第一に、宮廷社会の最上層に位置するはずの縁戚近衛家への入説であり、第二に、孝明天皇に島津家の「国事」方針を認めさせ、政治運動の許可証となる「勅諭」の獲得であった。

上府をとまなう国事運動は、「異例の権威」である久光が家中においてにその権威を見せつける機会でなければならなかった。それは「上府」することを理由づけとしてなされた久光が、文久二年二月二十四日、鹿児島城二ノ丸に転居に際して執行された「慶賀ノ式」において、藩主茂久が、「国父」久光に藩政参与を「懇請」し、それを島津一門、家老、重臣一同が目目の当りにしたことにより、島津家中の最高権威がどこにあるのかを顕示するものとなった。

鹿児島城に入った久光は、寸前にせまった発駕に先立ち、家老と、随行する島津家臣に対して諭達を申し渡した。この際、久光の「上府」に呼応して、義挙を企て、京坂地域に屯集していた「浪人・軽率之所業」に関わりを禁ずるものであるが、注目すべきは、これに背いたものに対して、「無遠慮罪科可申付」と述べていること、すなわち島津家中における裁断権の所在が久光にあることを意味した。「異例の権威」たる久光が島津家の事実上のトップであることは、同家において疑う余地もない事実と解された瞬間であったのである。

「異例の権威」たる島津久光の政治は「勅」すなわち天皇の意思によって保証された。この獲得こそ、久光のおこなうべき政治の正当性たりえた。そして、島津久光のポリシーは、文久二年四月の率兵入京のち、勅使大原重徳にともなうて江戸に向かい、一通りの幕政改革要求を終えたのち、同年閏八月、再度上京した島津久光が、武家伝奏・議奏に提出した文面に見える「匹夫之論激烈ニ過キ、且己力名利ノ為ニスル事多ク御座候得者、猥リニ御採用不被為在様奉存候事」、すなわち浪人を含めた軽格の者の議論は、きわめて利己的であるの

で、採用されないほうがよいとし、完全なる差別化を図っている点である。久光はこの点についてはさらに明確な主張を持っていたようで、同じく建言書案文には、「朝議確乎トシテ不被為動、匹夫之激論一切御採用不被為在」と、その一切を聞き入れるなどしていた。

久光は輕輩の政治的言動をあからさまに否定し、浪士・大名家臣層による下からの言路を断ち切り、大名家の政治運動は、あくまで大名が主体となり、その名義のもとに展開されるべきとの方向性を示した。この方針のもと藩内において生じかけた藩士による暴発を裁断することによって未然に防いだのが、文久二年四月におきた伏見の船宿、寺田屋における惨劇であった。

浪士・大名家臣の積極性を認めない、大名主体の国事参加こそ、久光の政治姿勢であり、この姿勢は文久二年下半期には全国大名に波及し、文久年間の政治思潮を生み出したといつて過言ではない。このことは、すなわち文久二年末から、翌三年にかけて、大名か、それにかわる名代が上京し、朝廷への政治対応を軸とする政治運動を展開されたことからもうかがえよう。

「国事」専管ともいえる島津久光の政治姿勢は、他の大名に比して中央政治において際立っていた。新たな政治は大名の連携からなる衆議によってなされねばならない。下々のものの意見は採用しないという確固たる政治姿勢を持っていたから、シュチュエーションが整わなければ、強いて「国事」に打ってでないのもまた久光の政治手法であった。

文久三年（一八六三）三月、前年より朝廷の推奨する京都守護職に就任が取り沙汰された後に、二度目の上京を果たした際には、「攘夷」を理由に、天皇自体が、一部の急進派の公家や大名家臣によって動かされ、「尊王攘夷」の熱病に侵されているかのような京都において「暴説御信用之堂上方、速かに御退き、浮浪藩士の暴説家は幕（幕府）より処置これ有るべく事」「主命の外藩士へ御面会無き用の事、浮浪はもつとも然るべからざる事」と、前年と変わらず、

下々の人間の主張を信用することなく、脱藩者、浪人を遠ざけるように主張し、在京わずか二日で帰国である。

久光が待望した大名衆議の実現を軸として「国事」推進できうるシュチュエーションは、文久三年八月十八日の政変の後に訪れた。それまで政治主導をした長州藩勢力と朝廷改革を目論む公卿が政治の場から遠のいたのである。文久三年（一八六三）十月三日、上京してきた島津久光は、あらたな政治体制の構築を試みる。その体制は新たな国是を大名による衆議によって決定する機関の設立であった。福井前藩主松平春嶽は、文久二年より政事総裁職に任じられて、曲折はあるものの「国事」に積極的に携わらんとする人物であるが、雄藩合同による政体一新はまた彼の持論でもあった。政変後における島津久光の構想は、十月十五日、中川宮朝彦親王に述べた所見より明らかである。久光は、朝廷に対し、「永世不朽之御基本ヲ相立候様遠大之御見識相据」ることを要求し、そのためには「列藩上京之天下之公議御採用、大策御決定被為在」ことが先決であるとして、大名の衆議を含めて形成された「公議」政体樹立の必要性を説く。

具体的には十月十七日付、松平春嶽宛ての建言において次のように考える。すなわち、徳川慶喜を中心とし、「賢明諸侯方」を会同させ、方策を論議し、その議決と政策施行は徳川幕府に委ねる。ただし徳川幕府の運営は一部の譜代大名からなる閣老に委ねてしまうことなく、雄藩大名もこれに参加する。朝廷内においても摂関家および武家伝奏、議奏といった両役に運営執行を委ねるのでなく、皇族方にその権限を持たせ、積極的に政治参加させる。これまでの久光の国事への関わりは、他者の政治参加を推奨する形で進められてきたが、政変後においては自らがその主軸を担うとしている。すなわち近世全般にわたり徳川幕府の専管事項であった京都守護と外交業務を、雄藩大名を含めた衆議によって担おうとし、その実現の場を、宮廷社会の存在する京都に求めたのである。

3 島津家と近衛家

前に見たように、文久元年（一八六一）十月、島津家では「御一門」・「家名方」の家老衆を藩政要路から退けることで、島津宗家による専制的な政治体制が創り出された。以後、同家の政治は、藩主茂久・久光の主導により、小松帯刀・大久保一蔵（のち利通）ら、前藩主斉彬を支えた家臣グループを差配する形で展開されていく。目指されたのは、「斉彬の遺志」を継承し、満足に機能しえなくなった徳川日本の政治体制の改編である。

ただし、声を荒げてでも、譴責をこうむることはあきらかである。破綻をきたしながらも、いまだ全国諸大名を統括する徳川將軍家に申し立てをおこなうには、政治運動にあらたな筋道をたてることが先決とされた。そのため、文久元年十一月以降、家臣を京都へ送りこむ。斉彬以来その才を買われ、茂久・久光の側に仕えた小納戸役中山中左衛門と、同役で、家臣有志組織「精忠組」のリーダー格、大久保一蔵である。

島津家が見出したあらたな筋道とは、第一に宮廷社会の最上層に位置するはずの縁戚近衛家への入説であり、第二に孝明天皇に、「志」の証しとして「波平行安の御剣」を献上することであつた。また、政治工作の一環とし一門の加治木領主島津久長の娘直子（貞姫）を、一旦、島津宗家の養女とし、その後近衛忠房に嫁がせ（婚儀は元治元年二月）、近衛家との縁戚関係をより密にしようとはかったのである。

藩主茂久より命を受けた中山中左衛門は、初めての上京に際し、日記を残している。次の史料は、中山の日記、文久元年十一月二十六日条である。

（前略）大納言様【近衛忠房】御居間へ被召出「八条敷御座也」、是非共御膝元迄参候様、度々仰下事ニテ、ス
ト進出候処、御国許御左右被聞召上（中略）左府様【近衛忠熙】へ御目見被仰付、直ニ是へト御沙汰御座候へ

トモ先御口上ノ趣申上畢テ、自分ノ御礼モ申上候処、是非々々ト被仰付、直ニ御膝元迄参上、段々御意頂キ（以下略 ※以下、引用史料中、【】内は笹部、「」内は原文のまま。）。

十一月二十四日、伏見に着いた中山は、すぐさま京都四条錦小路の薩摩藩京都屋敷へ赴き、翌二十五日、近衛家諸太夫今小路刑部権少輔を訪ねて、近衛家訪問の段取りを決めた。中山は近衛家訪問の折、忠房に薩摩藩内の政治状況につき述べ、忠熙には藩主茂久・久光から託された「口上」を伝え、前藩主斉彬に遺志に基づく国事周旋への協力と天皇からの「勅諭」降下へのとりなしを求めた。これへの答えとして、十二月十一日、近衛家から中山に対し、次に見る二通の書状が手渡された。

（a）文久元年十二月十一日付島津久光・茂久宛て近衛忠房書状

書取ニテ内密巨細申入候勅諭願之儀ニ付、段々熟考心配仕、（中略）去ル二十七日ニ参内、正親町三条エ内談ニ及候へ共、何分辛酉御祈、於内侍所廿七八九三ヶ夜御神樂被行候御神事中故、他事之儀ハ言上モ難成、日合仍空敷退朝ニ及候。（中略）其後正親町三條儀出仕被致、段々心配内談ニ及候後、密々正親町三条言上ニ被及候処、何分ニモ不容易儀其上当節御抛無御次第ト相成、和宮御縁約御整ト相成、頃日御入城も可被遊御時節ト相成候御次第柄、（中略）当節ニテハ御縁組辺モ被為濟御一貫之御趣意、且夷賊之儀ハ速ニ被皇国安全之良策可在様被仰立中故、旁外道へ勅諭ハ難被出御模様ニ伺取候（中略）此儀和泉【久光】御一分限り深被相含、先他エ不洩様、偏ニ御頼申入候事。（以下略）。

書状 a から、忠房が島津家からの申し出を受け、早速朝議に働きかけをおこなっていたことがわかる。忠房は議奏

の正親町三条実愛に相談を持ちかけようとしたが、神事の職務で多忙であり、会話する機会を得ず、「空敷」帰宅している。このような忠房および近衛家が置かれた朝廷内の政治状況については後述するが、ともかくも十二月一日、忠房が聞いた正親町三条からの応答は、皇女和宮の將軍家茂との婚儀の条件としての「攘夷」、つまり安政五年諸外国との通商条約により現出した対外関係再編の要求が、朝廷から徳川政権に対して出された今、しばらくは事の成り行きを見守るべきとし、「外道（外様大名）」に勅諭を与えることなどもつてのほか、と切り捨てるものであった。島津家の求めに対する当該期の朝議としての見解は、忠房が聞いた正親町三条の見解とおおよそ一致しよう。ただ、近衛家あるいは忠房個人としての見解はこれとは異なる。

（b）文久元年十二月十一日付島津久光宛て近衛忠房書状

（前略）抑、尚之介【中山】上京ニ而、御伝言共具ニ承知仕、御尤々ニ存候。何卒御上京ニ而面謁も申入度、御心易御互ニ隔意等無之、御咄共申入度待入存候事。

朝議は、島津家の国事周旋を認めなかった。だが、書状bで忠房は、久光に上京をすすめている。社交辞令として上京、面会を求めているのではなからう。然るべき理由付けがあり、島津家の上京を待望しているのである。近衛家が示した朝議の見解と背反する意識には、現行の朝議運営に対する不満と批判がうかがえる。

かかる近衛家よりの二通の書状を受け取った島津家は「京都手入れ」の第二段として、大久保一蔵を上京させて、再度、同家による国事周旋の正当性をアピールしようとはかる。領国を出る理由はできたが、「上京」、「上府」して政治運動をおこなう理由はいまだない。よって、あくまで朝廷の権威の表象としての「勅諭」にこだわった。

大久保は、文久元年十二月二十一日、鹿児島を発ち、翌二年正月十三日に入京。翌十四日、近衛家を訪問し、島津

家の政治運動の意義と目的につき述べ、そして、久光から託された書状^②を差し出した。その要点につき、詳しく見ていく。

①「異人殺害・水府（水戸藩徳川家）之混乱・其外浪人奔走」など、国内の政治混乱を意に介さない徳川政権を「国家ヲ乱ス賊臣」とし、皇女和宮と將軍家茂の婚儀が成立すれば、徳川家は「主客之勢」（將軍と天皇の立場）を履き違えてしまう。

②朝廷権威を確立するには、「一挙」を決断すべきで、そのために然るべき数の兵力が必要。兵力なくしては、「戊午ノ覆轍」を引き起こしかねない。

③「一挙」には、島津家の兵力が必要。近日に島津久光が海路五五〇名（十分以上）の藩兵を引き連れて上京予定。そのうち一八〇名を島津家江戸屋敷に配備する。

④久光は入京後、近衛邸を訪問し、朝廷へ建議をおこなう。その際に「滯京守衛可仕候間云々」の勅諭降下の斡旋を請う。また徳川將軍家に勅使を遣わし、一橋家主徳川慶喜を將軍後見に、前福井藩主松平春嶽を大老に任じ、かつ尾張徳川、長州毛利、仙台伊達、鳥取池田、土佐山内など有力大名家に、国事周旋の勅諭を与える。

⑤関白九条尚忠を退職させ、代わって近衛忠熙を関白とし、青蓮院宮尊猷法親王（のち中川宮朝彦親王）の幽閉を解いて、朝議に参画させる。

⑥徳川將軍家に対し、「干戈ヲ用」いるべきとの見解があるが、「干戈ヲ用ヒス、国体ヲ傷ハス成就候策ヲ立」てゐるつもり。これは前藩主島津斉彬の遺思である。

①と②は、現行の徳川政治体制批判である。「和宮降嫁」を安易に考えていては、徳川政権が朝廷の立場を誤解するばかりか、近衛家が忌み嫌う「安政大獄」同様の事態を招きかねないと、警鐘を鳴らすのである。③では、②で述べた「戊午ノ覆轍」を防止するための兵力の必要性と、④でそれを島津家が担うために「滯京守衛」を命じる勅諭降下

の幹旋が求められている。⑥で、干戈の矛先を徳川家に向ける急進論を批判しながらも、兵力の必要性を主張するのは、策論が矛盾しているようにもとれるが、「滯京守衛可仕候間云々」との曖昧な表現から、勅諭の趣旨は「禁裏守衛」に限定されていない。趣旨はどうあれ、権威の「表象」としての勅諭を得ることを第一に考えているのである。

ただし、島津家サイドの利点ばかりが主張されているのではない。⑤で、関白九条尚忠を廃し、近衛忠熙を関白とすることを計画に入れ、近衛家サイドの「心」への配慮もなされている。また④で、勅諭とともに求められている、徳川慶喜・松平春嶽の政治要職への就任は、翌年において実現し、また尾張藩徳川家など有力諸大名の国事周旋を求める見解は、諸大名による「衆議」を主体とした、あらたな政治体制の構築を目指す、以後の久光による政治運動の根幹となってゆくものである。

先行研究においては、①と②、そして⑥の解釈から、島津家の政治運動を「公武合体」運動と意義づけ、当該期の政治体制再編と徳川將軍家と朝廷との関係性の保全が求められた運動であることに集約された議論がなされてきた。ただ、③と⑤、すなわち島津家と近衛家の利得をふまえた点については捨象された。それは、幕末維新期の政治運動を、明治国家建設のため、「公」・「天下」のための運動とする思考の枠組みがあらかじめ設定され、そこに介在する「私」的な論理が重視されなかったからである。

島津家からの「手入れ」を受けた近衛忠房は、当該期の宮廷社会とそこにおける自らの政治的位置を如何に考えていたのか。久光に宛てた文久二年正月十四日付書状には、宮廷社会において、近衛家が置かれた現実とそれに対する不満が吐露されている。

（前略）公武御一貫と申表ハ御詔故、唯今他向ヘ勅諭忤被出候御場合ニ而ハ決而無之哉ト被伺候。朝廷御模様柄、殊ニ於忠房右等之義商量毛頭致かたく、実以当惑仕候。就而ハ朝廷之御力ニ茂相成候程之御警衛も在之候ハ、

勅・詔・も・可・被・出・哉・ト、種々御遠察之御誠実、当然之義至極御尤、仮令・数・千・万・之・衛・護・周・備・在・之・候・共、即・今・之・処・只・無・益・之・騷・ニ・相・成・候・而・已・之・義・ニ・而、遠察符合之時節ニ無之、唯今達而取行候而は志願之筋ハ不相通、かへつて事之破ト相成、忽、御膝元及混乱候義ハ眼前之事ニテ、天朝之御為ニも不相成、被悩宸襟候一ツト相成候而ハ、是亦容易恐入候次第ト存候。(中略)朝廷御政事ニ不抱、忠房杯へ重キ勅詔ヲハ被出候様可取計被申越候共、所詮其義ハ不能義、何分御政事向商量難致義、撰家ト申せハ大小トナク、朝廷之御政事ニ可抱ト一通り被存候処ハ至極御尤ニハ候へ共、何分撰家ハすへて太政官之事ハ勅問ニ從商量仕候事ナカラ、今日之御政事向万端ハ撰家之内ニテ関白・唯一人事ヲ執候義、仮令左大臣・右大臣タリ共内覽宣旨無之ハ御政事ニ不預義、既ニ當時之左大臣始ハ内覽ニ無之候故、更ニ商量難致義、前左府ニハ内覽之被蒙宣旨候事故、專御政事ニ抱り候御事故、是迄すへて言上モ出来候義、何分内覽ニ無之大臣、始ハ當時之处商量難致義ニ候。尤前左府御勤仕中元来、天朝之御大事ヲ被存候ヨリ事起、終ニ不量之御隠栖ト相成候次第ニ而、今以参内モ不被許、(中略)前文之通御政事商量不仕身分、逆モ言上杯其義ニ不能、正親町三条ニモ役人ナカラ新役、殊ニ彼是ト九条関白へ随從之役人中夥敷在之候事故、逆モ度々御前へも難被出次第、何かく六ヶ敷候事共故、甚痛心候。何分御政事向すへて之事商量難致義故、右之辺御推察勘弁之程厚頼入存候事(以下略)。

徳川將軍家に憚る手前、「他向へ勅詔」など出せるはずが無いというのが朝議の一定見解であり、忠房はこれを覆せず当惑している。そして、島津家が勅詔獲得の名目とする「禁裏守衛」は、かえつて「無益之騷」ぎがおき、「膝元」が混乱に及び、天皇を悩ませることになろう、と否定的にとらえている。ここまでが、先行研究において、島津家の国事周旋・勅詔獲得要求が近衛家に拒否されたとする史料の根拠となってきた。ただし、この後に書き綴られる島津家の要求を拒否する理由については、意外にも捨象されてきた。

島津家の要求に答えられない理由として、議奏、武家伝奏、左右大臣、内大臣を含めた「勅問御人数」による、限定的な合議制でおこなわれてきた朝議運営が否定され、「万端ハ撰家之内ニテ関白唯一人」によりなされている。よって、左右大臣であっても「内覧」でなければ、政治に参加できない。本来なら、「内覧」の宣旨を受け、政治に参画できた父、忠熙が、「不量之御隠栖」の身で、参内も許されない。九条関白専制というべき現今の朝議において、近衛家から発せられた言論が受け入れられないとするのである。

このような忠房の見解には、個人の妬みと偏見が反映されていよう。よってそのまま事実とは考えられない。ただ、注目したいのは嫉妬や偏見を抱いた忠房の「心」である。廷内で最高のステータスを有するはずの家が、朝議運営に関わることができない。これは近衛家にとって、屈辱以外なものでもなかった^二。九条関白が宮廷社会をも独占する当該期の政治状況において、頼ることができうる存在はもはや朝廷内には存在せず、もっとも縁深い武家、島津家の外からの力に依存するほかないのである。

近衛忠房には、幼少から、慶応四年閏四月まで書き綴った日記中、文久期における九条家に関する興味深い記述がある。九条家士で、九条尚忠政権において権勢をふるい、「今太閤」と呼ばれた島田左近（左兵衛）暗殺事件（文久二年七月二十日条）について（a）と、九条家士宇郷玄蕃暗殺事件（文久二年閏八月二十三日）について（b）の記述である^三。

（a） 一、此日、九条家々来嶋田左兵衛、浪人共、誅伐ス。希代之珍事、可祝こと也。

（b） 一、九条家家来宇郷玄蕃殿義、昨夜狼藉物四、五人はかり殺害ニ及、萬快之趣也。

九条家の不幸に対する忠房の感情が非常にクリアに表現されている。島田の死を「誅伐」による、祝うべき「希代

之珍事」と喜び、また宇郷の死を「萬快之趣」と評する忠房の「心」には、現行の政治体制への批判のレベルを超えた、九条家に対する私怨的な感情が見える。

また、忠房は、大久保に託した島津茂久・久光に宛て書状に、次の文面を添えている。

市藏より承候御趣意御尤ニ候。兎角ニ不穩時節御参府ニ而、何卒、天朝之御為、徳川家之御為、誠忠之程良策可然哉ニ被存候事。¹²

一見、意味のない文章に思えるが、前にみた近衛家の状況をふまえると解釈は異なろう。島津久光が江戸に赴き、幕政改革を要求し、かつ朝廷内における九条政権を廃し、近衛忠熙が政治復帰することと、「家」の復権を望む忠房の切なる思いである。大久保による「京都手入れ」の結果を待たず、島津家では政治運動をスタートするための準備にとりかかる。むろん、勅諭は下ってはいない。だが、近衛家から内々ながら上京は薦められた。加えて、御剣献上を受けた孝明天皇より「世をおもふこゝろのたち（太刀Ⅱ性質）としられけり、さや（鞘Ⅱ彩）くもりなき武士濃太満」との宸筆御製を得たことも、政治運動への積極性を高めたと考えられる。

文久二年正月七日、久光の「上府（江戸に上る）」が島津家臣一般に布告された。同時に、二月二十二日午刻に「首途」、二月二十五日巳刻に「発駕」することが報じられ、「上府」に際し、必要な用品・献上品について、早急に準備するように命じられた¹³。「首途」とは、一般に「旅立ち」をさすが、ここでは旅立ちに際し、神仏への祈願や大名が国許を離れる際に、無事を祈るため家中でおこなわれる儀式を意味する。

同時に決定された久光一行の道中プランは、鹿児島―小倉（陸路・十二日間）、小倉―室津（海路・二日間）、室津―大坂（陸路・四日間）、大坂（逗留・二日間）、枚方（逗留・二日間）、伏見（逗留・五日間）、大津―江戸（陸路・

一五日間）である¹⁴。京坂地域の逗留期間が、九日間と長めに設定されたのは、朝廷サイドの予期せぬ勅諭降下の動きを想定してのことであろう。さらに随行人員の「供立」がおこなわれる。正月十七日、久光の供備は、「太守様御参府御供被仰付置候面々、都テ被召列」¹⁵、つまり藩主の参勤行列と同様に構成するよう家中に達せられた。久光の「上府」は、その目的がどうあれ、藩主茂久の代行としておこなわれるからである。実際、文久元年四月十九日より、久光は島津宗家に復帰し藩政を補佐する立場にあり、藩主が国父に発言する際、「被仰上」との文言が使われるなど、藩主より国父が一段上位として認識されている。

また島津久徴を「国老職」（国許詰の家老）に補すことで、久光の行列には参加させず、藩主側役であつた小松帯刀に随行を命じ、また「御家老方御用吟味ニモ可相加旨、拜命」し、家老の職務の補助および遂行をおこなう「家老格」を与えている¹⁶。これは本来、政治的発言権を有した一門家を、島津宗家を主体とする政治構想の枠組みからなかば排除し、島津宗家のための人事が執行されたことを示す。

以上のように、文久二年正月段階では、島津家では、二月二十五日の発駕に向けて着々と準備がすすめられていた。ここまでの準備において「上京」は二次的なものであり、朝廷側からの不測の呼びかけに応えることを想定しつつ、前提はあくまで「上府」に置かれている。文久二年二月、近衛忠房から藩主茂久宛て書状でも、勅諭降下はやはり困難であり、徳川家との関係を考慮する朝議の見解を報じられていたからである¹⁷。

これに従い、一旦決定された発駕の予定は延期され、暦者勤水間喜藤太の申し出により、「首途」は三月一日巳刻、三日午刻、六日午刻、「発駕」は三月九日午刻、十三日巳刻、十六日巳刻が吉時吉日であるから、いずれかを選び執行することになった¹⁸。

延期された発駕日時が決まりつつあるなか、「上府」の代表たる久光の宗家への完全復帰がおこなわれた。文久元年四月、「国父」の尊称を付与された久光は、形式的には、実子である藩主茂久の治世を、重富から鹿児島城へ日々出城

し、扶助してきた。ただ、前述の島津宗家主導の政治体制が図られるなか、これを主導する久光が、重富郷に居住してはつじつまが合わない。茂久は、「国父」久光に対し、「為子ノ礼ヲ取テ孝道ヲ尽シ、臣子ニ先シ度」ことが「以前ヨリ之宿意」であるが、「順聖院」斉彬の三回忌以前に、久光が宗家に戻ることは、「孝義」に背くことになると考えていた²³。つまり、然るべき時には久光が宗家に復帰し、茂久の実弟にあたる島津又次郎（のち珍彦）が重富領主となる了解はとられていたのである。

宗家への復帰にともない、「国父」久光は、文久二年二月二十四日、鹿児島城二ノ丸に転居する。同日に執行された「慶賀ノ式」において、藩主茂久が、「国父」久光に藩政参与を「懇請」し、それを島津一門、家老、重臣一同が目当りにしたことにより、島津家中の最高権威がどこにあるのかを顕示するものとなったのである²⁴。

鹿児島城に入った久光は、寸前にせまった発駕に先立ち、家老と、随行する島津家臣に対して諭達を申し渡した。諭達の趣旨は、久光の「上府」に呼応し、義挙を企て、京坂地域に屯集していた「浪人・軽率之所業」との交際を禁ずるものであるが、注目すべきはこれに背いたものに対して、「無遠慮罪科可申付」と述べていること、すなわち島津家中における裁断権の所在が久光にあることを意味した²⁵。久光が島津家の事実上のトップであることは、同家において、疑う余地もない事実と解されたのである。

4 宮廷社会のなかの近衛家

文久二年三月十三日、小松帯刀の代行により首途儀礼を終え、同一六日、久光一行は鹿児島を発った。この時点においても、「勅諭」を得ることができない久光の動向に「上京」の要素は希薄である。島津家の政治運動の最終目的は、「上府」して徳川將軍家を説得し、政治体制の修正を求めるものである。だが、これには多大なリスクをとまなうの

で、文久二年初頭から案じられてきたのは、江戸における「国父」久光の身の護衛であった。同年二月、家老島津登（久包）から、物頭種子島嘉次右衛門・同肥後五右衛門以下の「備」に対し、変事に際する行動と人数の割り付けがなされている²²⁰。

だが、久光一行が中国路を進んでいる最中、事態は急変する。それは文久二年四月八日付の近衛忠房より久光宛て書状からうかがえる。

（前略）過日は堀治郎【仲左衛門、のち伊地知貞馨】入来ニ而面謁、何力関東次第具ニ承、珍重々々之義と存候、其方上洛候ハ、入来之事と待入候。中山尚之介、大久保市蔵等へハ、其方入来之義留置候得共、最早当時之模様ニ成行候ハ、御上洛候ハ、必御入来之様存候、尚面謁と待入存候事、何分即今穩便ニ御誠忠有度存候、仍何も申入置度存候事。（以下略）²²¹

堀仲左衛門から江戸および久光一行の動向について聞いた忠房は、これまで容認できなかった久光の来訪を心待ちにすると述べ、「最早当時之模様ニ成行」状況が変わったというのである。「当時」がいつをさすかが問題となるが、文久元年暮れ、島津家が求めた勅諭斡旋が可能になったことを意味すると考える。では、どのように朝廷をとりまく政治状況が変わってきたのか。また、近衛忠房がどうして政治状況が変わったと認識したのか。これには当時、宮廷社会あるいは京都で流れた噂・風説が影響する。

一つめに、京坂地域に結集した急進派の動向に関する風説である。京都所司代酒井忠義は京坂の不穏な状況に鑑み、文久二年四月十日、武家伝奏・議奏に宛てた達書において、「西国筋之浪人共、多人数、兵庫・大坂辺へ参り、彼是不容易暴論を唱」えるが、禁中並公家諸法度により公家と大名家のあからさまな交際は禁止されているので、「行違之廉」

がないよう注意をうながしている²⁵⁴。幕府サイドとしては、このような浪士暴発の可能性が「午年八月八日之覆轍」つまり、安政五年八月八日に朝廷から水戸藩と幕府に下された、いわゆる「戊午の密勅」降下からむ政治混乱を再び生じさせかねないとの危惧がある。そして、この所司代からの達書は、「決而表立申上候義ニハ無御座」、「両役限り内々申上置」と、あくまで機密文書とされた。しかし、四月二十六日付で朝廷から島津家京都屋敷に廻達されたことから考えても、この達書がもたらした情報はすぐさま公家の間に流れたとみてよい。

朝廷側にとって、幕府側からの達書はいわば正規の情報であり、家士・地下官人ら宮廷社会の下層人脈から入ってくる風聞は規格外の情報である。忠房は、正規ルートの情報を聞き、家士らから入ってくる情報に確証性を持たせた。ここから形成された忠房の世相観は、文久二年四月十四日、すでに伏見に到着していた島津久光宛て書状における、「御膝元人氣立、騒々敷」、「帝都戦場地と相成候而は不容易大乱」との文言や、久光にこれへの「良策」を問う行動となつて表れる²⁵⁵。京都が戦場と化すとの予測は、浪士の暴発を嫌う幕府サイドからの情報により形成されたと考えられる。

周知のとおり、久光は四月十六日入京し、近衛邸において忠房、中山忠能・正親町三条実愛の両議奏に面会し、朝廷権威の振興および幕政改革に関する建白をおこなう。これを受けた朝議は、懸案となっていた浪士沈静の勅諭を久光に与え、浪士に対する肅清がおこなわれる。ただ、「寺田屋事件」と呼ばれるこの肅清において「上意討ち」にあったのは、島津家臣のみである。訓戒に背いた家臣を、久光の有する最高裁断権を行使し、家中の秩序を守るために執行されたといえる。結果的に、寺田屋事件により、久光の存在や政治方針が、朝廷・幕府および諸大名家に示され、以後、同家の政治運動に正当性が付与されたことは、願ってもない「偶然」であったのである。

二つめに、浪士の動向との関わり、文久二年四月、老中久世広周上京の情報が廷内に伝わったことである。実際には、久世自身が早々に失脚し実現しなかったが、それはうわさとして、公家社会に少なからず影響を及ぼした。文久

二年四月、京都所司代酒井忠義は、京坂地域の不穏状況への対応と和宮降嫁以降の朝幕関係を保持するため、大老井伊直弼亡き後、幕政執行部の首班となった老中久世広周の上京を企てた。四月一六日、酒井は、武家伝奏に久世の上京を申入れ、同日、九条関白より上京の内命を得る²⁹⁶。忠房が久世上京の情報を得たのは、四月十四日。正親町三条実愛が来訪し、九条関白の意思を伝えている²⁹⁷。さて、忠房は久世上京の報に触れ、何を思ったのか。

次の史料は同日付で、久光に伝えるよう在京中の小松帯刀に与えた口述書である。

（前略）久世和州上京之上、叡慮御旨趣被仰出候ニモ、何分酒井若州在役ニ而ハ、甚何か如何之事と、呉々心配仕候。唯今從禁中退役之義被、仰出候事ハ難相成候へハ、大ニ都合ト存候。呉々若州ニハ、不容易姦曲者故、実々懸念仕候。其元達之賢考ニ而、何卒和州入洛迄ニ退役之様、勘考在度候。此義決而岩倉少将杯へ不洩様、呉々極内々申入置候（以下略）²⁹⁸

忠房が老中久世の上京を嫌うのは安政大獄のトラウマである。九条は大老井伊直弼と結託して、朝廷内の反対勢力を蟄居・辞官させた。また当時の京都所司代酒井忠義が、九条関白と久世を抱きこみ、いかなる行動にでるかわからない。ゆえに、久世の上京までに九条の退役を望み、その良策を「呉々極内々」に久光に尋ねるのである。

当該期において、関白九条尚忠に対して批判的な見解を抱いていたのは、忠房のみではなかった。九条および周辺人物は、他の公家においても徳川幕府との過度の癒着と多額の賄賂を理由に、朝廷内における政治腐敗の表象と認識された。文久二年八月、三条実美ら一三名の公家による内大臣久我建通の弾劾建白²⁹⁹はその表れであり、立場こそ違うが、朝政運営の現状を変えようとする意思がうかがえる。

では、近衛家としては、久光を迎えることで、具体的になにを望んだのであろうか。つぎにみる島津家宛て「近衛

殿」書状により明らかである。

同書状には年月日が付されていないが、書状の追書（「辛酉十二月比来嶋津和泉ヨリ、文久二正十六日陽明亜卿ヨリ正三へ内々被見」と、前述の忠房による正親町三条への周旋状況が書かれていることから、筆者は近衛忠熙であり、文久二年正月に書かれたものであろう。

（前略）九・条・関・白・其・余・ニ・モ・彼・是・ト・姦・賊・多・端・ノ・事・故・、
迎・モ・上・ヨリ・被・仰・出・候・義・ハ・御・六・ケ・敷・、
中・山・大・納・言・、
正・親・町・三・条・兩・人・ト・シ・テ・、
叡・慮・ヲ・伺・取・計・候・
ハ・誠・実・ノ・人・体・、
乍・去・新・役・の・義・迎・モ・姦・賊・ノ・人・体・出・頭・ノ・折・柄・、
中・山・大・納・言・、
正・親・町・三・条・兩・人・ト・シ・テ・、
叡・慮・ヲ・伺・取・計・候・
義・ハ・所・詮・相・成・間・敷・、
正・親・町・三・条・ニ・モ・深・心・痛・被・致・候・様・子・、
何・分・関・白・ニ・ハ・関・東・一・体・ノ・了・簡・、
且・随・從・ノ・人・多・端・ニ・候・ヘ・ハ・、
迎・モ・関・白・ヲ・取・退・ケ・候・義・ハ・如・何・ニ・モ・相・成・間・敷・義・、
吳・々・モ・痛・心・ニ・迫・リ・候・次・第・候・。何・卒・、
薩・州・、
長・藩・、
仙・台・、
土・佐・其・余・
有・志・ノ・向・、
諸・藩・幕・府・ヘ・上・書・ニ・テ・具・ニ・御・申・望・、
且・又・閣・老・ヘ・モ・右・之・次・第・被・示・、
其・上・御・採・用・無・之・候・ハ・、
表・立・諸・藩・ヨリ
叡・慮・ヲ・被・伺・候・事・ニ・ハ・相・成・間・敷・哉・ト・察・上・候・。何・分・公・武・姦・賊・ヲ・退・ケ・ネ・ハ・、
叡・慮・不・被・為・立・何・モ・恐・入・候・事・、
（以下略）³⁰

落飾・謹慎中の忠熙は、九条政権を因循、「姦賊多端」の状況と考え、やはり九条関白を更迭するべきとする。勅諭降下に固執せず、島津家を含む諸大名が幕府に朝議の因循を申し立て、幕府が聞き入れないのなら、大名家が直接天皇の「叡慮」をうかがうことができないかと考えている。大名が直接、天皇に問うことは、無謀な行為であるが、これは「公武姦賊」を退けるべきとする近衛家サイドの正直な気持ちであった。

急進的な大名家臣および浪士の結集にともなう京坂地域の不穏と久世広周の上京予定が、和宮降嫁によって形成された徳川将軍家との穏和な関係を憚り、島津家の政治運動に否定的であった公家の気持ちを変化させた。ゆえに、朝議は、四月十六日、近衛邸における久光の建言を受け入れることができた。

また、久光の朝廷への建言は、徳川慶喜・松平春嶽・前尾張藩主徳川慶恕（慶勝）ら諸侯の慎解だけでなく、近衛忠熙・鷹司政通・輔熙父子・青蓮院宮尊融法親王の慎解をも示唆するなど、反九条関白の風潮が存在した廷内の二一ズに合ったものであった。徳川政権は四月晦日、被処罰者の慎を解き、九条関白に辞職をすすめたが、これも島津家の政治動向を察し、朝廷との穏和な関係の保全するための判断であった。文久二年五月、老中久世の上京を待たず、朝廷から勅使を江戸に派遣するべきとの久光の建議は、朝議において採用され、勅使大原重徳が、久光以下島津家臣の護衛により江戸に下向することは周知のとおりである。

久光の存在によって勢いづいた近衛家は、九条関白体制を宮廷内からいっきに駆逐した。文久二年七月以降、九条関白を支え、和宮降嫁実現に尽力した公家、内大臣久我建通・岩倉具視・千種有文・富小路敬直が、「四奸」と評され、宮廷内外からのバッシング的になり、九条尚忠の関白辞職後、相次いで辞官落飾した。忠熙はこの排斥運動に直接的には関与していないが、七月二十四日付で江戸の久光に宛てた書状において「各罪状相糺シ可然屹度取計」うつもりであると、久我ら公家を厳罰に処することを主張している³¹⁰。

九条政権の崩壊により、「大獄」以来、辛酸を嘗めてきた近衛家は、一応の目標を達成できた。のこるは朝廷政治への復帰であるが、すんなりと実現した。忠熙は、六月一日、鷹司輔熙とともに還俗が許され、六月二十三日、参内して、九条尚忠の後任として、関白内覧の宣旨を受けた。「実二旧年中以来之事、恐悦之事也。百年来ノ御当職、実ニ々々恐悦之事也」³¹¹と日記に記した忠房の念願は叶ったが、あらたな問題が生じてきた。忠熙の体調不良と政治への意欲低下である。九条尚忠在職中から、関白職後任人事は廷内でも取り沙汰されていた。五月十日、忠房より久光宛て書状を送り、忠熙の様態を報じている。

（前略）前・左・府・【忠熙】兎・角・御・逆・上・強・、唯・今・二・御・平・臥・と・申・様・成・御・事・。当職辺之御沙汰、段々在之候得共、兎角御

所勞、自然弥御逆上強御発ニ而ハ、中々御用御伺被成候事も難相成義、(中略)何レ二三月ト申処、屹と正親町三条辺へ其之御出座ニ而、御歎願之程幾重ニも御頼申入置度(以下略)³³

文化五年(一八〇八)生まれの忠熙は、文久二年(一八六二)当時、五七歳。謹慎時期の心労もあつてか、体調を崩していたようである。明治三十一年(一八九八)、九三歳まで生きるので、命に関わる病気ではないが、度々起こす「御逆上」を、忠房は危惧している。忠熙の政治復帰を願っただけに、複雑な心境であろう。だが、健康であるならまだしも、病体の忠熙に強要できまい。ただ、当時の宮廷、とくに摂関家には、関白となり朝議をまとめる人材がない。文久二年正月、忠房が久光に宛てた書状では、九条尚忠の辞職が早くも想定され、一条忠香は「柔弱之性質」のため、二条斉敬は然るべき人物ではあるが、「九条家親族之義旁全付合」と九条家との関係が深いことを危惧している³⁴。

安政大獄以来の近衛家の復権を期した忠房であったが、父忠熙が、政治への意欲を喪失していたことは誤算であった。これ以後、朝議に有能な「長」は存在せず、その方向性は「国事御用掛」「国事参政」「国事寄人」といった文久二年下半期に出現したあらたな政務審議機関による衆議に委ねられ、関白の言論が無視、却下されるばかりか、衆議が天皇の意思すらも操作しうようになってゆき、まさに廷内の政治秩序は混乱化してゆく。安政五年から文久二年の約四年間、九条尚忠の専断に悩んできた近衛家。以後は、これまで聞こえるはずもなかった公家たちの衆議の「声」への対応に心悩ませることになるのである。

小 括

薩摩藩島津家と近衛家。この2つの家の政治に対する意識と運動を素材に、幕末期大名家と公家の相互的「私」の関わりについて考察してきた。久光の「上京」に関わって形成された大名家と公家の相互関係は、これ以後、展開される大名家の政治運動、または公家が自らの意思を主張するためのモデルとして認識された。

これまでの明治維新史研究は、それぞれの政治局面にみえる「私」の相互関係を捨象し、大名家の政治運動において目指された「天下」のための「公」的政治秩序の創出過程を論証することに終始し、政治運動の本質的な意味が検討されてこなかった。

政治の「場」においては、武家と公家、それぞれが「私」の保全と「利」の獲得を目指し、その実現のために政治的・経済的リスクを負いながらも、不測の未来における「家」の繁栄と存続を志向したのである。たとえば、島津家と近衛家。本節で素材とした2つの「家」が相互的な関わりのなかで目指したものである。島津家においては、島津宗家繁栄のための領国支配体制の構築と、支配体制を磐石なものとするための徳川日本の改編であり、近衛家においては、廷内における格式相応の政治権利の獲得と、それを保証する廷内秩序の改編であった。

第二節 薩摩藩二本松屋敷の政治的意義 ―島津家の「国事」と京の拠点―

1 序

本節は、幕末期における大名家の政治運動の端緒となりえた薩摩藩の島津久光の政策と京との関係性を問い、幕末期に新設された薩摩藩京屋敷の政治的意義を考察するものである。文久二年（一八六二）四月、薩摩藩島津家においては、藩領外にかかる政治行動、すなわち、外交業務の重要性が顕在化した。薩摩藩主島津茂久の実父、島津久光による率兵上京が画期となって、それより約二年間にわたり、大名家の上京によってなされる政治運動の指標となったことは、多くの先行研究において問われてきた。しかしながら、薩摩藩の政治運動が、いかなる背景をもつて志向され、いかなる段階を経て、現実化したか否かについては、久光自身や久光周辺の政治論を取り上げた業績³⁶⁰（毛利敏彦、佐々木克、芳即正ら）の他には、検討対象とはされていない。幕末期の政治史研究が、政治の局面において、主体的に動いた人物を中心に考察、描写されてきたことが、その大いなる要因であろうと考えられる。

本節においては、その対象を島津家によって営まれた京屋敷、なかでも文久二年よりその造営が開始され、翌三年より暫定的に活用され始めた、現在、同志社大学今出川キャンパスとなっている地所に存在した屋敷を取り上げる。同地は、旧内裏空間の北に位置し、今出川通を隔てて、禁裏御所に程近く、縁家の近衛家とは直近の「二本松」と呼称された。以下、同屋敷を「二本松屋敷」と呼称し、薩摩藩島津家が有した従前の京屋敷と分けて考察することにする³⁶⁰。

幕末期、特に文久二年下半期以降、京の町は、上京してきた大名家が、大名の仮住まいを探し求め、また、あらたな政治の拠点となる空間生成に伴う屋敷地造営をめぐって、まさに不動産取得ラッシュの状況と化していた。京の街

中に適当な地所を購入し、利用したケース、洛中をあきらめ、鴨東、洛外の地に広大な下屋敷を造営したケース、その事情はさまざまであった。以下、文久二年以降の京の政情を踏まえつつ、島津久光の政治路線の確定と、二本松屋敷造営の關係性について論じていきたい。

2 近世の大名京屋敷

大名京屋敷は、三代將軍徳川家光までおこなわれた「上洛」に随行するために、二条城周辺や木屋町高瀬川沿いの地所が「預地」として大名に与えられたことに始まり、以後、必要に応じた私的な買得が恒常化されたとされる。研究史上の解釈においては、京屋敷は、大名上洛の際の宿所としての性格を有し、京を中心とする儀礼典礼・学術文化を国元に波及させるターミナル、かつ、京の工芸品の買い入れ、京都町人への金融依頼をおこなう役所としての機能を持ちえたと解され、江戸屋敷と同様の業務をおこなう施設と解されてきた。なお、屋敷地の取得や運営にさまざまあることは、藤川直樹の他、建築史研究によって論及がなされている²⁰⁾。

大名京屋敷は、宿泊施設として一時的な寝泊りのできる「宿」と私的な所有が認められ、長期間の滞在にも堪える「屋敷」に分かれる。「寛永平安町古図」(『洛中絵図・寛永後万治前』)によれば、江戸初期の屋敷の形態としては、暫定的な拠点としての「宿」二十六例を基本形態とし、「屋敷」は三例であったとされる。大名家における京への滞在が必然化していくともない、「屋敷」の所有が増えていく。

「寛永後万治前洛中絵図」²¹⁾は、寛永年間以後に存在した「屋敷」を網羅した地図情報であるが、そこには①洛中の町人地から独立したもの、②屋敷地が隣接する町屋と近接し、街路に面しているもの、③屋敷地が街路からみて町屋の奥に所在するものが存在する。

將軍上洛への供奉および公務遂行の利便性から考えれば、町中に大きく立地するものが理想であろうが、二条城および洛中の要所は、幕府要職者への拝領屋敷として付与されていたことが多く、またその家族や与力、同心といった家臣が多人数で常駐するには、手狭と判断されることが多く、幕府の京都支配にかかわるものは、町人地から独立した比較的広大な地所に複数の書院棟や奉公人用の長屋を建設し、役務に従事した³⁹。

町屋の奥に所在する空間は、豊臣秀吉による京都改造の際に未着手であった町割に多く、それは街路に面して短冊状の細長い、いわゆる「うなぎの寝床」と呼称された京町屋の奥側に面した、元来、町の共有スペースであった空間である。このような地所は、徳川幕府が必要に応じて買得し、京都の公的な役向にあたる大名に「拝領屋敷」の形で付与するケースが多かった。これに加え、拝領した土地の周りの町屋を重ねて買得することにより、街道に表長屋を設置した間口の大きな京屋敷が創出された。

では、薩摩藩京屋敷の場合どうか。薩摩藩が洛中に屋敷を構えた起源については、管見の限り、史料が見当たらず不明であるが、貞享二年（一六八五）に編まれた『京羽二重』には、「諸大名御屋敷所付」に「松平大隅守殿」の屋敷が、「室町通四条下ル町」とある⁴⁰。

薩摩藩の屋敷として知られているのは、錦小路通東堂洞院に所在した京屋敷で、その所在かた「錦小路屋敷」と通称される。その成立は史料上、明らかではないが、享保年間に成立した『京都御役所向大概覚書』には、「松平薩摩守」の項に「錦小路通東洞院東え入町（中略）表口三拾三間余、裏行四拾六間余、右地続東洞院四条上ル町にて表口拾九間、裏行拾五間四尺所後買足」⁴¹とあるので、おおよそ一八世紀初頭、一七一七年以前の成立と推察される。また、同書には室町四条の屋敷は記載されず、それ以前の京屋敷の有した機能は、錦小路屋敷に移されたと考えてよい。同屋敷は、薩摩藩用達の京商人、大橋金左衛門、藤本彦右衛門を代理人として購入にかかる作業がなされ、街路に面した地所が次々に買い足されて幕末に至る。薩摩藩は、この錦小路屋敷を京における役務の拠点とし、伏見に広大な屋

敷（現、伏見区東堀町）を構えて、大坂土佐堀通に所在した大坂蔵屋敷との連携に当たった。

3 島津久光の外交体制

前節で見たとおり、島津久光は文久二年（一八六二）四月、率兵上京を遂げた。「久光公御上洛ニ就而布告并御行列書」によれば、兵卒五三七名^三を率いて上京したとされる。この上京は、江戸に赴き、島津斉彬が実現しえなかった幕政改革の実行を徳川幕府に働きかけたのち、京にとどまり、宮廷社会の後ろ盾のもと、「外交」を旨とする政治行動を推進していくための布石であった。

久光は、斉彬の「御側」に形成されていた人材を、大名ではない自らの「側」に置き、島津宗家を外から主導しようと図ったのである。ゆえに、その拠点となる京の住居は、殊に重要であった。久光主導の政治体制の構築には、いくつかの条件がある。まず、島津斉彬の政策であった「幕政改革」の実現を表立った方法論としたことに伴う政治体制の整備である。具体的には、江戸、京都において「国事」対応のための人材の確保と組織の整備、地勢的、人脈的にも最良の条件における拠点形成などであった。このことが外交を旨とする島津久光の政治活動を有意義なものとするのであった。

文久二年四月、島津久光が最初の入京を果たした際、錦小路屋敷がその宿所とされた^四。久光上京の後、諸大名の上京が頻繁化すると、大名家においては、概ね、藩が役務執行のために所持する屋敷に、大名の居所を置かないことが通例であった。国元の城内同様、役務空間と大名の私的空間が分けられていたことと理由を同じくする。その意味でいえば、久光の上京はそれらの先駆となる事例であった半面、手探りの状況が否めないものであったのである。図は、文久三年段階における大名京屋敷と本陣（旅宿）の所在を示したものである。洛中に近世初期より所在した京屋

敷に加え、洛外、殊に東山の寺院が「本陣」化していることが見てとれる

久光は四月十六日に入京し、内裏空間の北西に位置した近衛邸において、近衛忠房、中山忠能、正親町三条実愛の両議奏と面会し、朝廷の権威の振興および幕政改革に関する建白をおこない、また不貞浪士による政治行動を沈静させることに理解を求めた。

久光は、一貫して下級武士層および浪人身分の者から出た政治変革にかかる要求と運動をことごとく否定する。幕末期における上下の別なく意見を交えることを是とする「言路洞開」的な風潮を全否定しているようにもとれよう。久光は、自身の判断、決断によって「国事」対応をおこなう意思が強い。自らの意図しない層からの政治行動は、その行動の質がどうあれ賛意を示さない。これを受けて朝廷は、京坂に屯集していた浪士沈静の勅諭を久光に与え、浪士に対する粛清がおこなわれる。久光は藩の枠を越えて、命に応じ、浪士を処分することもできたが、この粛清において「上意打ち」にあったのは、薩摩藩島津家臣のみである。久光がおこなうべきは、前述のとおり、大名ではない久光自身に外交専管の「御側」を作ることであった。文久二年二月、久光は、京での政治行動に先んじて、鹿児島城二の丸において島津家臣一同に対し、他大名家臣および浪士と一切の関係をもつことを禁じる訓戒を示した。「寺田屋事件」と呼ばれる久光の浪士粛清は、訓戒に背いた島津家臣を、久光が藩主茂久より許された裁断権を行使して執行された。その意味においていえば、京における公家社会への対応や、江戸に赴く道中の久光周辺の警護や、また江戸城登城の段取りなどは、久光における最良の「側」がおこなう予定であった。

京においては、縁家である公家、近衛家への動線を確認することであった。京における島津家の外交には、近衛家は欠くべからざるものと認識されていたのである。文久元年（一八六一）十一月から、大名の側に仕える小納戸頭取中山中左衛門と、その下役であった大久保一蔵（のち利通）が近衛家に働きかけ、久光による外交体制の素地を形成させた。

中山、大久保により政治工作がなされていた折、相国寺内の林光院住持大川梵圭に対し、島津家からの働きかけがあったとされる逸話がある。久光の人脈に薩摩国、大隅半島の東部、志布志の大慈寺の石沢柏州が、本山である妙心寺へ法要で赴く際、相国寺との関係を取り持つように久光に依頼され、薩摩藩京都留守居役の本田弥右衛門とはかり、梵圭と会話し、境内地の借用と、政治行動への助力を願ったものである³⁵⁾。適切な史料情報が欠けるので、その詳細はわからないが、明治二十三年（一八九〇）、林光院の大川梵圭が島津家に提出した歎願書によれば、島津家が明治の寺務運営、殊に経済的に困窮した寺院から多額の資金援助を請われたことがわかる。維新後になされた大川梵圭よりの請願内容も、久光の外交体制の京都受け入れに一役買ったことへの代償とも考えられるのである。

4 相国寺境内の政治的登場と二本松屋敷の成立

近衛家との非常に頻繁な通行があり、島津久光の外交体制が機能しえた。久光に従う多くの供の輩は、近衛家で交渉にあたる久光をただ付近で待ち、また久光が宿所に帰着するまで警護をしなければならない。相国寺と薩摩島津家の関係は、久光が近衛邸に参殿する際の供の輩が利用できる控え所の必要性より始まったのである。

京都屋敷に勤仕する藩士で、元来、大名の「御側」に勤めた伊勢勘兵衛は、文久二年四月、久光の近衛邸参殿の折、次の書状を出している。

松平修理大夫使者 伊勢勘兵衛

陽明家等え参殿之節、当寺御境内林光院え控所相頼来候得共、間狭二有之、雨天之節致混雑候付、御本寺末廻り二而も宜候間、控所え兼而御頼申上置度御座候³⁶⁾

文久二年四月以前においては、久光の入京、参殿に際し、林光院が窓口となり、控所の依頼がなされてきた。しながら実際の供立てを考えるに、やはり林光院だけでは狭いと判断されたのであろう。また雨天には事態混乱が予想されるので、相国寺内の別寺へ控所の利用ができないかと問うものであった。伏見屋敷詰の藩士田中仲右衛門が文久二年五月十四日に出した書状は次のとおりである。

林光院様 田中仲右衛門

以手紙得御意候、然は三郎殿於明十五日午半刻近衛殿え参殿被致候付、先日参殿被致候節之通、家来之者休息所毎々乍御面倒貴院え御頼申上候、決而何も御構被下間敷候、此段御頼可得御意、如此御座候、以上 五月十四日

島津久光の近衛家参殿は、四月十六日から頻繁になされ、五月十一日には、朝廷より、それまでの勝手名乗りであった「和泉」から「三郎」と改称するよう命じられた。「三郎」は「島津家嫡統」を指す通称であり、朝廷が、大名ではない久光を「嫡統」と認識したということになる。無位無官の久光が、宮廷社会において島津家の代表としての認識だけでなく、信頼すべきとの評価を得た証左であった。五月十四日の参殿は、数日後に控えた江戸行きの挨拶や、老中久世広周の上京にかかる問題などが議せられたであろう。この折も休息所の利用が求められている。必要以上のもてなしを断っている部分においても、林光院への度重なる逗留が窺える。

文久二年六月八日、京都留守居役で伏見留守居役を兼帯する本田弥右衛門は、次の書状を相国寺塔頭光源院に出している。

覚

一、幕 一張

右二付為持差上候付ハ、方丈入口之処え為打置下候、可然様御下知可申候

宿札十一枚為持遣申候、借用之塔頭義惣御門え打方等、白石圓藏と申者より御引合可申候、宜御案内等之儀御頼
申上候、右用向御掛念申上度如此御座候、以上

六月八日 ヤ

本田弥右衛門は、昌平鬻書生寮（大名家からの留学生専用の寮）の舎長として、その優秀なる才知をもって、昌平鬻修学者の信頼と憧憬を集めた人物であった。大名が居城や江戸屋敷以外の場所に駐留する際、屋の内外を問わず基本的に家紋の入った幔幕を張り、その場所における存在を示した。それは、そこにとどまる人間の名称と用途を記した「宿札」を掲げることについても同様である。すなわち、久光が滞留するときに必要となる幔幕や宿札を適当な場所に置かせてほしいという依頼で、この段階で、相国寺内の塔頭は、島津久光の宿所として利用されていたと考えられる。史料中、白石圓藏は、薩摩藩が取引した業者であろうと考えられ、宿札十一枚という数から考えても、相応の利用回数が想定されていたと推察される。ただし、五月二十二日に、久光一行は、勅使大原重徳を警護して、江戸に向かつて京を発っているのだ、久光自身は京には不在であるが、その直後から久光の帰京と政治活動が想定されていたということとなる。近衛家を通路とし、近隣、相国寺内の塔頭を宿所とした京における久光の政治活動は、江戸からの帰京後、具体的に展開していくはずであった。

その意味でいえば、およそ二カ月半江戸に滞在し、八月二十一日、武蔵国生麦村において横浜在留のイギリス人リ

チャードソンを殺害、いわゆる生麦事件が勃発したことは大いなる誤算となった。翌閏八月八日に帰京した久光は、関白職に就任した近衛忠熙と連携し、安易な攘夷主義のみに傾倒しようとする京の政情の刷新をはかったが、生麦事件に端を発するイギリス側ニール代理公使と幕閣の間での訴訟状況や、薩摩藩の異人殺しに感銘を受けた公家の外国人への迫害意識の高揚を察し、同二十三日には京を発って、帰国の途につくことになった。イギリスとの戦闘状況を想定した帰国と解されるが、文久二年の京を拠点とする久光の政治体制は一旦、休止することになった。

これまでの研究においては、久光における京を拠点にした政治活動が途切れると解されたが、久光サイドにおいては、中長期的な展望がなされ、それに沿った動きが京屋敷の関係者を中心に展開されたのである。その表れこそ、相国寺内二本松の地への屋敷造営によって証明されよう。

文久二年九月、島津久光の鹿児島への帰国直後、相国寺内の境内地の一部を、屋敷地として借用できるよう、請願がなされる。

借用地証状

一、御塔頭鹿苑院・瑞春庵両敷地合二千七百二十五坪余、此借地米一箇年分五十四石

一、御境内大門町・鹿苑院前東西両町・石橋町・九軒町、合五町之敷地四千二百二十一坪九分、此借地米一箇年分六石

地坪数合六千九百四十六坪九分余

借地米合六十石は例歳当寺領銀納之和市を以、十二月十九日限無相違可相納候事

今般前文之地面え修理大夫屋敷致造立候付、大橋小兵衛・鈴木祐次郎両名代を以、当壬戌年より行辛巳年迄二十年限借地之儀御頼申候処御領承忝存候、然る上は向後御寺門仕来候条令之廉、聊無違背為相守可申、就而は御門

前町儀、出錢公役等、すべて於当方可相弁候、尤年限中掛役名代之者品替等有之節者、跡役之者え屹度申伝、証状面弥無相違様取計可申候、為後念借地文券仍如件

文久二年壬戌九月

松平修理大夫内 屋敷造営掛役

内田仲之助 印

横田鹿一郎 印

村山下総 印

伊勢勘兵衛 印

同借地名代

大橋小兵衛 印

鈴木祐次郎 印

相国寺 御役者衆中あに

ここでは、相国寺内の一部地所、境内の西南部に位置した鹿苑院、瑞春庵の西側の藪地が二千七百二十五坪余を対象とし、藪地を整地して屋敷地とする。借地料は一年間、米五十四石を支払うというものである。加えて境内地内の大門町、鹿苑院の門前東西両町、石橋町、九軒町の敷地四千二百二十一・九坪については、借地料が年間六石、総じて六千九百四十六・九坪余りを年間六十石の代価で借り受けるという。支払いは、毎年十二月十九日を日限とし、その年の銀相場に換算して納付するというものであった。加えて、門前町については「軒役」という間口税がかかったが、すべて薩摩藩が弁償するという内容である。

この借地は、文久二年（一八六二）から二十年間、すなわち一八八二年までの契約であり、島津家が雇っていた代

理人、大橋小兵衛（薩摩屋、室町通一条下ル）、鈴木裕次郎（越後屋、新町通六角上ル）に契約中の交渉にかかる諸事を委ねる形で仲介させている。彼らは「用達」と呼称される京の商人であり、大名家中の人間に成り代わり取引や京における補佐的な業務を展開した。基本的に政治活動はおこなわないが、彼らの営利目的の行動は、大名家の政治活動を円滑化させた。同月に、相国寺塔頭、却外軒の他五ヶ寺によって条約書が取り交わされ、境内・伽藍における守衛、門前町の公役負担を条件に、島津家からの申し出が概ね承諾され、詳細は担当者間で交渉することとなった²⁶。

5 島津久光の「国事」運動の限界

幕末期の京都における薩摩藩京屋敷の組織について述べておく。近世の大名家における京屋敷が、比較的少数で切り盛りされていたことは、これまでに論じた²⁷。史料中、屋敷造営掛役として記名された人員より説明すると、内田仲之助は当時の京都留守居役で、「政風」という号が知られた人物であり、島津家の側役を務める家を出自とする人物である。明治維新後も久光にその創立が許された玉里島津家の家令として、同家の家政運営に当たった人物である。村山下総は、通称の「斎助」を名乗ることが多く、京都留守居添役である。横田鹿一郎については、人物情報が把握できないが、伊勢勘兵衛とともに、当該期に発給された史料には、その名が頻出する人物である。この他、伏見留守居役の本田弥右衛門においてもいえるが、彼らは、領内の民衆支配にかかわるような藩の正規業務を担う人間ではなく、大名の「御側」で大名と直接的関係を持って動いている人材である。このような京屋敷関係者と、前出の大橋小兵衛（薩摩屋）や鈴木祐次郎（越後屋）といった「大名用達」との連携によって、京におけるさまざまな事案への対応がなされることになる。

次の史料は、文久三年九月二日に書かれた京都留守居添役村山斎助により相国寺内に宛てて出された書状である。

各様御揃、倍御清穆欣杯之至奉存候、然者毎度御面倒動之議申上兼候得共、此度御用召ニ而島津三郎近々出京之筈ニ御座候処、二本松屋敷座之間取建ニ付、御山内境目之場所塀拵長屋廻り等いたし掛り候処、鹿苑院敷地之所今少し拝借不致候而ハ何分不都合ニ有之重疊御迷惑ニハ候得共、是迄之御因縁を以、是非御承引被成下候様、偏ニ奉頼候、左候而当月末比ニハ無相違京着ニ可相成と存候間、急速ニ御評議被成下度、右御願申上度、如斯御座候、以上

九月二日 ⁵¹

島津久光は文久二年の国事周旋を終えた後、再度、文久三年三月に上京し、京都の政情が面白いものではなかったのか、宿舎とした東山の知恩院へ数日滞在し、帰国の途に着く。二本松屋敷は普請中で、久光が滞在はおろか、政治拠点たりえなかったことも帰国の原因となったと推察される。しかしながら、文久三年九月、久光の三度目の上京を翌月に控え、久光の居住空間の充実化を図るために相国寺に要求がなされたのであろう。史料中、「座之間」は、すなわち「御座の間」といって、大名もしくはこれに代わる家中の権威者が通常住まう部屋であり、「御納戸」は大名側近が詰めた部屋である。写真は、「京都二本松藩屋敷絵図」であり、二本松屋敷について伝存する唯一の屋敷図（差図）である⁵²。西は烏丸通、南は石橋町通に面して、長屋が存在し、大門町通に表御門が確認される。前出の「御座の間」は図中央に所在する。部屋数や確認される施設名称から、久光が長期に居住するスペースが十分に確保されていると考えられる。

村山斎助の任務は、久光の居住スペースを十分に確保することであつた。「座之間」を拡張するために、鹿苑院の敷地をもう少し借用できないかと願い出ている。

文久三年九月段階において、次の島津久光の上京は、長期の滞在期間が見込まれていたであろう。この折の上洛は、文久政変後、方向性を見失ってしまった京都政界に、新たに公家たちと連携できる体制とあらたな国の方針（国是）を決議していこうと考えていた。そのため、久光自身に加え、島津家の「御側」に存在した若き人材、小松帯刀を京都に在駐させようということになった。在京の家老が常時存在することは、二本松屋敷に、大名および久光の宿所機能（「本陣」）と役務機関としての役所機能の両面を兼ね備えた屋敷として成立したと考えられる。文久三年十二月に取り交わされた契約内容をみると、用水の整備がなされ始めており、ようやく二本松屋敷が住環境として整い始めていることがうかがえる¹⁵³。

さらに屋敷の充実、京屋敷関係者の責務として想定され、相国寺へ要請がなされていく。

三度目の久光の入京と政治運動は、元治元年（一八六四）三月、宮廷内において催された久光ら大名諸侯らの朝議への参預制度¹⁵⁴が、徳川幕府によって否定されて瓦解すると、終局を迎えることとなり、翌四月、久光ら大名諸侯の帰国へと帰結してしまう。久光による外交を旨とする政治運動は、これによりほぼその成立の可能性を失い、国政の局面に大名諸侯の参加が見られなくなっていく。徳川幕府と天皇、宮廷社会の政治的融和が実現し、中央政局と化していた京から大名による「国事」運動が意味を消失させていく。京屋敷の存在意義から、大名の宿所としての意味合いが徐々に失せていくものの、薩摩藩京屋敷の場合は、在京の家老による差配のもと、京屋敷の関係者がこれまでどおりの京の事案対応を、軍務に関わって、大名側役の才能が京に派遣され、二本松屋敷を拠点に、政治対応がなされていく。文久年間に久光に逆鱗に触れて、沖永良部島に流されるも、帰還後、すぐさま京の軍賦役（軍の総指揮官）に任じられた西郷隆盛は、転換期の京屋敷の制度にふさわしい人事であったと考えられる。西郷はこの後、藩主側役として、京屋敷自体を主導していく立場の人間となっていくのである¹⁵⁵。

6 久光退京後の二本松屋敷

薩摩藩は、西郷隆盛を中心に、元治元年（一八六四）七月におこった京の争乱に対応していくことになった。元治元年七月十九日未明に、伏見方面でおこった彦根、大垣両藩兵と長州藩毛利家勢の戦闘は、同日の午前中には、禁裏御所周辺へとその場を移し、南方から御所を目指す長州勢に、西方からこれへの遊撃を試みる長州勢が加わり、禁裏を守護した会津藩松平家、薩摩藩島津家、津藩藤堂家を中心とする大名家勢力と激しい交戦がなされた。戦火により生じた火災は甚大な被害を出したが、戦乱は十九日中にはおさまり、以後、長州勢に対する残党狩りで民家、寺院に被害が出た。⁵⁰⁾ 相国寺の記録「役者寮日記」元治元年七月十九日条、内裏付近の戦乱状況についての記載がある。

朝七ツ頃より御所近処騒立、砲声甚敷相聞、依之列総出勤、曉天より弥甚敷相成、一向何事か不相分故、遠見遣候処、天龍寄寓長州人并山崎・伏見・洛中処々寄寓之者一同蜂起、御所へ押寄、既ニ及戦争、薩藩・会藩其外諸藩防御士夥敷出陣、九門之内、中立売御門前而戦争相始り、市中上下共大騒動也（中略）衆評之上、御判物并宝物之内大切之品斗、先岩倉へ移可置治定、宝物并寺中之荷物は是心庵・洞雲庵へ預置、僧堂衆二人つ、詰切、御判物并御朱印ハ靈徳庵へ預、其上而上方岩倉へ立退（以下略）⁵¹⁾

午前八時頃から、御所近辺が騒がしくなり、夥しく砲声が鳴り響いたので、使いを派遣し状況を見に行かせたところ、天龍寺や山崎、伏見に駐屯した長州勢が蜂起し、御所近辺では薩摩・会津他諸藩兵と交戦し、「市中上下共大騒」である。寺内では、緊急に会議を開いて「御判物并宝物之内大切之品」だけを、岩倉村に避難させることに決め、その他宝物の類は大徳寺の塔頭是心庵・洞雲庵、判物や朱印の類は靈徳庵へ預けることに決している。

七月二十二日条には、「今朝火未止」と依然として残党狩りの際に出た火はやまないとあり、「焼ヌケ、河原町より東堀川迄、悉焼失」し、「実ニ応仁同様之事乎」と評している。このような記録が残っていることからわかるように、禁門の変による戦火は、相国寺および二本松屋敷には及ばなかった。大方の大名屋敷が被災、類焼の状況にあったが、二本松屋敷は無事であったことも、文久期から慶応における薩摩藩の政治行動に連続性と円滑性をもたらしたと考えられる。事実、薩摩藩の錦小路屋敷は、戦火による類焼に遭い、機能不全の状況であり、前出の薩摩藩士村山斎助からは、相国寺に対して、藩士、兵士の避難所として塔頭の利用が求められている⁶⁸⁰。禁門の変を境にして、薩摩藩における京への対応業務を担ってきた錦小路屋敷においては、従前よりの業務がなされなくなり、京における業務の一切が、二本松屋敷に移管されていく。

次の史料は、多数の藩士の上京と滞在が想定される役務機関としての二本松屋敷の環境維持を図るため、あらたに水を引こうとした際に作成された「契約書」である。

契約書

- 一、此度御総門内蓮池通水樋口より分水之儀及御熟談候処、夫々御領諾被下、別而仕合ニ御座候、就而者万一分水之儀二付、以来故障之儀差起候節者、急度当方より引受、一切御山内御心配ニ不及様可致候
 - 一、蓮池常平通水之儀為方不宜候間、水留之樋垣内え別段取設可申旨、委細致承諾候
 - 一、分水道筋蓮池面より直ニ鹿苑院境内え引入候二付而者、右堀下後患不相成様修理可申候
- 尤損所出来之節者、其旨為御知可被下候

右条々至後年聊無相達様、堅約相結申度、其為契条書如件

慶応元乙丑年八月

薩州留守居

相国寺 御役者衆中

吉井 幸輔（印）

内田 仲之助（印）
29

右の史料では、屋敷内で必要とされる上水の量が多分に及ぶので、相国寺が利用する「御総門内蓮池通水樋口」より分水して、二本松屋敷に引き込むことが要請されている。屋敷に引き込む際、「鹿苑院境内」を通さねばならないけれども、普請によって破損など生じた際には、島津家の責任で修理することが申し送られている。この折の京都留守居吉井幸輔は、大名の側に生成された有志集団「誠忠組」の中心的人物で、文久二年以降、島津久光の「側」において、その外交運動の要になって動いた。吉井がいよいよ京屋敷詰となって、久光不在の京においても主体的に政治活動を展開しうる状況を作っていることがうかがえる。慶応元年（一八六五）八月にも、二本松屋敷は政治拠点としてもはや完成形となり得ていたといえる。

慶応二年（一八六六）正月、島津家と長州藩毛利家との間で、島津家が毛利家をどのように援護、支援するのかをめぐって、業務提携がなされる。いわゆる薩長同盟であるが、この提携には両家中の人員以外に、多方面の大名家臣および浪人が関与した。関与の大小を問わず、薩摩藩二本松屋敷には、大名および島津久光の居住、逗留が、慶応三年（一八六七）四月までなかったため、外部者の出入が比較的旺盛になされるようになった。土佐藩を出て、長崎亀山に結社をつくり、薩摩藩の代行業者として物資運搬を旨とする業務を指揮していた坂本龍馬は、その代表的な人物の一人として数えられよう。

7 薩摩藩二本松屋敷の政治的意義

薩摩藩二本松屋敷の政治的意義は何であったかを考えていく。大名京屋敷には、先述した京の町の空間利用のありようの違いや、大名家自体の政治的位置と「国事」に対する方向性の面から考えて、その存在意義はさまざまにある。まず、幕末の京都には、大名京屋敷と「本陣」がある。前者は大名家の所有になるものであり、後者は寺院からの借用であることが多い。元来、京における大名家の業務は、宮廷社会と京の文化への対応であり、大名家一般は、数名の人員配備のみで遂行してきた。

幕末期における日本社会の混沌は、文久二年以降、島津久光が先鞭をつけた大名家による「国事」運動を引き起こした。国元にいるはずの大名あるいはそれに代わる人間が上京し、居を構えて滞在する。そこでは、国元の住空間に近い居住性、利便性が求められ、行政の場たる京屋敷とは異なるものと解釈された。居城以外の大名の居場所、すなわち、「本陣」である。「本陣」には、概ね大きな寺院が宛てられ、その塔頭を借用して仮住まいとした。あくまで旅館の利用である。文久年間の大名家の政治運動が、大名の上京と滞在を基本的な条件として進められたので、京には大名の「本陣」がひしめき合う状況が生まれた。

一方、屋敷については、洛中、殊に近世初期から求められた二条城周辺の物件は乏しく、自然、鴨川の東、すなわち鴨東地域に広大な地所を求める動きが現れた。政治主体たる大名は「本陣」に、藩士は兵卒として屋敷に、といった構図が京では成立していた。しかしながら、大名自らが政治をとりおこなうことがとがめられた元治元年四月段階以降、おのずから寺院が「本陣」となるケースが減少していく。大名の「国事」への対応の変化が、幕末期の京の空間構造を変えたのである。大名による「国事」対応から大名家臣の政治行動へ。大名外交から内乱をふまえた軍事対応へ。この文久期の政治主旨から元治・慶応期の政治主旨への転換は、鴨川以東の農村空間に、尾張藩徳川家、土佐藩山内家など大規模な大名家の下屋敷地を成立させ、常時、藩兵がプールされていくようになる。

薩摩藩二本松屋敷は、幕末期に存在した大名京屋敷、寺院境内の塔頭を利用した「本陣」とは、異なる性格がある。

まず一つめに、二本松屋敷は大名でない主導者、島津久光の長期滞在を想定されて建設された「本陣」的性格を有すること。島津久光という、異例の政治主導者が滞在し、同じ敷地内において居住する家臣とともに、政治業務をおこなう施設であった。

二つめとして、その立地状態である。文久二年下半期以降、洛中の物件を探索する大名家が数多くあった。相国寺についても「本陣」としての利用が請われ、鳥取藩池田家、岡山藩池田家、姫路藩酒井家、尾張藩徳川家などが、家中の担当者が相国寺を訪れ、塔頭利用の請願がなされてきた。内裏空間への対応によってなる文久年間の大名家の政治運動において、最良の立地であったと考えられる。結果、相国寺における塔頭利用は、島津家の意向が重視されて、岡山藩池田家の利用のみとなったが、内裏真近い地所に屋敷が所在したことは、久光による政治に効果的に働いた。大名が上京することによる国事のスタイルが、徳川幕府において否定された元治元年下半期以降、二本松藩邸には「志士」と呼ばれる人々が訪れるようになった。幕末期における「志士」の活動の場は、その存在をあからさまにすることのない、繁華な京、具体的には鴨川周辺、木屋町、河原町であった。同地の有する繁華で猥雑な性格が、彼らの非公式な政治意識と行動を隠蔽しえたからである。同地に所在した長州藩毛利家、土佐藩山内家の京屋敷は、彼らの非公式な政治行動の庇護する場となりえた。すなわち、「志士」の正義は、木屋町・河原町という町に保全されたといえるのである。

徳川幕府が京の治安維持、守衛に大きな力を注ぎはじめるのは、大名の京都守護が見直された元治元年上半期である。浪士集団新選組、あらたな幕府兵、新徴組によつて京でおこる政治犯罪が取り締まられると、「志士」はその行き場を失うこととなる。そのようななか、二本松屋敷が受け皿となり、この周辺があらたな「志士」の場となった。内裏の北側にある、いわゆる京都の「表」の空間に、二本松屋敷が存在したことは、彼らの非公式な政治意識を、公式な「国事」へと近づけたのである。

小 括

本節においては、およそ以下の二点について考察し、論点を提示しえた。

まず、島津久光の政治主導性についてである。久光については、かつて文久二年四月の率兵上京について、幕末史における政治的意義を問うたことがあった。本節では、「外交」を久光の唯一の専管業務であったと解し、その方法論上に、京屋敷は存在し、国元ではなく、京を拠点として外交政策を推進せんとしたことについて、考察した。このような久光の政策は、彼自身が大名ではなく、大名たる島津茂久の父であり、「国父」という稀有な尊称によって称えられた、大名家中のなかで極めて曖昧な存在であったことも影響しよう。大名が、藩の政治施策の矢面に立つことは、日本近世においては稀なことであり、その際には「改革」と称される藩政の抜本的な見直しが図られた。

また久光には、鹿児島城にとどまる必要性がない。かつて、筆者が問うた島津久光の率兵上京の意義について、付言するならば、久光によって政治指揮がなされる場こそ、京であり、それゆえに、大久保や中山、小松らによる積極的な準備工作がなされたのであろう。京という「場」自体が、久光の政治における方法論となりえたのである。しかしながら、生麦事件によって生じたイギリスとの紛争や、あらたな国是樹立のために関与した朝議参与制度の瓦解は、京を活かしたい久光の政治における想定外の出来事であった。結果、政治の「場」と認めた京と、久光との距離を生じさせてしまうことになったのである。

次に、近世における大名京屋敷の総体を確認し、薩摩藩二本松屋敷の性格を考察したことである。大名京屋敷は、幕初において存在した將軍上洛への供奉遂行を旨とする大名家の担うべき軍役のために設置され、三代將軍、徳川家光が最後に上洛した寛永十一年（一六三四）六月以降、將軍への供奉を伴う義務的で可視的な軍役ではなく、宮廷社

会への対応を旨とする大名家の慣習的なそれをおこなう施設として変容した。財政的な問題から、屋敷の要、不要が問われ、大名家によつては、その撤収もなされたが、近世を通じて京屋敷を保持した大名家においては、通説のとおり、大名家において最早必然とされた儀礼典札、学術文化のターミナルとして機能しえた。幕末期における京の政治的浮上によつて、大名家による京への働きかけが頻繁になるに至り、大名の宿所が必要となった。大方の大名においては、京屋敷にこれを求めることなく、洛中、洛外の境内規模の大きな寺院に求めた。居城以外の大名の居所は「本陣」と呼ばれ、京のあちらこちらに「本陣」が点在する状況が生まれた。二本松屋敷には、表長屋が立ち並び、上京してきた藩士を住居させるだけでなく、中央部に建てられた御殿には大名の住居スペースも完備された。禁門の變以降は、幕末以前より存在した錦小路屋敷が兵火で類焼したことによつて、屋敷内の事務も移管されたものと考えられる。

第三章 第一節 注

- ¹ 宮地正人『天皇制の政治史的研究』校倉書房、一九八一年、七二頁。
- ² 鹿児島県維新史料編纂所編『鹿児島県史料 忠義公史料』一卷、鹿児島県、一九七四年、五三二～五三三頁。（以下、『忠義』と略。）
- ³ 「中山実善上京日記抄」（『忠義』一、五三三頁）文久元年十一月二六日条。同史料の原本は、「石室秘稿中山実善日記」（国立国会図書館蔵）。
- ⁴ 同右（『忠義』一、五三七頁）文久元年十二月十一日条。
- ⁵ 日本史籍協会編『島津久光公実紀』一、東京大学出版会、一九七七年復刊、四〇～四一頁。（以下、『久光実紀』と略。）
- ⁶ 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 玉里島津家史料』一、鹿児島県、一九九二年、二六七頁（以下、『玉里』と略。）
- ⁷ 文久元年末、島津家の京都手入れに関しては、徳川幕府と朝廷の関係を考慮する近衛家が島津家の申し出を一方的

に拒否したとの見解が先行研究において一般的であるが、これは近衛家の見解と朝議の見解を同一視することにより生じた誤解である。また、『鹿兒島県史』三(鹿兒島県、一九四一年)も、島津家の要求を拒否した度量の小さな公家と解釈する。

⁸ 『久光実紀』一、四四〇～五二頁。

⁹ 『玉里』一、三〇九頁。

¹⁰ 近衛家と九条家は兄弟(近衛が兄)の間柄。なお一条・二条は九条の分枝。鷹司は近衛の分枝。近衛家のみ天皇の直筆により名前の一字拝領ができる(下橋敬長『幕末の宮廷』、平凡社東洋文庫、一九七九年、二四八～二五三頁)。

¹¹ 「近衛忠房日記」(京都大学文学部図書館蔵)。同史料は、大正十三年に影写された和本で、形体・虫損まで忠実に筆写されており、二四冊から成る。原本は、東京大学史料編纂所の調査(一九八三年)により、財団法人陽明文庫に所蔵が確認されるも、史料の性格については明らかではない。「近衛忠房日記」は、忠房自らの感情をストレートに記した私的な覚書で、記載内容はこれまで見えにくかった公家の儀礼、家政、趣味にまでおよぶ。影写本ゆえ、その利用には注意が必要だが、公家史料公開の現状を考えると、近世後期の公家社会を検討するうえで貴重な史料であると考ええる。

¹² 『玉里』一、三十頁。

¹³ 『忠義』一、七〇八～七〇九頁。

¹⁴ 『忠義』一、七〇九頁。

¹⁵ 『忠義』一、七二八頁。

¹⁶ 「小松帶刀日記」文久二年正月一六日、同一七日程(東京大学史料編纂所蔵)。「忠義」一、七二八頁。

¹⁷ 『玉里』一、三二六～三二八頁。

¹⁸ 『玉里』一、三三三頁。発駕延期の理由として、西郷隆盛による上京中止を求める建言が挙げられてきたが、筆者は勅諭への期待と上京準備の滞りをその理由と考える。

¹⁹ 『忠義』一、三六二頁。

²⁰ 『忠義』二、一九〇～二〇一頁。

²¹ 『玉里』一、三三七～三三八頁。

²² 『忠義』二、十一一～十一三頁。

²³ 『玉里』一、三五二～三五三頁。

²⁴ 『玉里』一、三五三～三五四頁。

²⁵ 『玉里』一、三六〇～三六一頁。

²⁶ 『玉里』一、三六五頁。

27 「近衛忠房日記」文久二年四月一四日条。

28 『玉里』一、三七三頁。

29 「文久二年八月一三日付十三公卿建言」(国立国会図書館憲政資料室蔵「三条家文書」所収)。宮内省図書寮編纂『三条実美公年譜』(宗高書房、一九六九年復刻)四四〇四五頁。

30 『忠義』一、八六九頁。文久二年正月、大久保の近衛邸訪問の折、忠熙が「桜木御殿」(忠熙謹慎中の居宅)より出向き、面会している記事が「近衛忠房日記」正月一四日・同二一日条に見える。これは忠熙が久光父子への書状として大久保に託したものであろう。

31 『孝明天皇紀』四(平安神宮、一九六八年)九七〇九八頁。

32 「近衛忠房日記」文久二年六月二三日条。なお六月一日の忠熙の還俗に際し、忠房は「恐悦々々々、至極うれしい々々々」の感想を記す。

33 『玉里』一、四〇九頁。

34 『玉里』一、三〇八頁。

35 毛利敏彦『明治維新政治史序説』未來社、一九六七年、佐々木克『大久保利通と明治維新』吉川弘文館、一九九八年、同『幕末政治と薩摩藩』吉川弘文館、二〇〇四年、芳即正『島津久光と明治維新』新人物往来社、二〇〇二年など。また、比較的あたらしい研究として、町田明広『島津久光と幕末政治の焦点』講談社、二〇〇九年、同『幕末文久期の国家政略と薩摩藩・島津久光と皇政回復』岩田書院、二〇十年がある。町田は島津久光の政治的求心性に重きを置いた議論を呈する。制度面の取り扱い、史料解釈などに少しく異論がある。稿を分けて検討したい。

36 同様の観点から、相国寺の幕末史を取り扱ったことがある。笹部昌利『幕末動乱の京都と相国寺』相国寺、二〇十年。同書は二〇〇九年に相国寺承天閣美術館でおこなった講義録を出版したものである。

37 藤川昌樹『近世武家集団と都市・建築』中央公論美術出版、二〇〇二年。

38 『洛中絵図 寛永後万治前』臨川書店、一九七九年所収。

39 『京都御役所向大概覚書』には、京都代官五味豊直の屋敷が「寛永十一戌年御上洛之節五味備前守拝領自分家作」したが、死去したので後任の「小出越中守え右御屋敷相渡」されて、「御役屋敷」として利用されたことが記される。

『京都御役所向大概覚書』上、清文堂出版、一九七三年、一九二頁。

40 『新修京都叢書』卷二、臨川書店、一九六九年、二六九頁。

41 『京都御役所向大概覚書』上、一三七頁。

42 「久光公御上洛ニ就而布告并御行列書」(市来四郎「石室秘稿」、国立国会図書館憲政資料室蔵)

43 日本史籍協会編『島津久光公実紀』一卷、東京大学出版会、一九七七年復刻、八八頁。

44 「柏州日記」(『相国寺史料』十、思文閣出版、一九七七年、二五〇・二頁)

- 45 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、七四。
- 46 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、十九。
- 47 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、六二。
- 48 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、一六三。
- 49 『相国寺史料』十、二六六、七頁。
- 50 笹部昌利「京よりの政治情報と藩是決定」(家近良樹『もうひとつの明治維新』有志舎、二〇〇六年所収)
- 51 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、十七。
- 52 「京都二本松屋敷絵図」鹿児島県歴史資料センター・黎明館蔵。
- 53 『相国寺史料』十、二六八、九頁。
- 54 朝議参預については、三谷博『明治維新とナショナリズム』山川出版社、一九九七年、原口清「参預考」(『名城商学』四五、一一、一九九五年)のち原口清『幕末中央政局の動向 原口清著作集一』岩田書院、二〇〇七年所収)において、近代「公議」思想の端緒として解され、論じられた。筆者は朝議参与に大名による「国事」運動の限界として考察し、元治・慶応以降の政治潮流とは断絶していると考ええる。
- 55 西郷隆盛に関する文献は枚挙に暇がないほど存在するが、近世、家近良樹氏によって提起された西郷の健康悪化と政治判断との関係性を問う研究が興味深い。家近良樹『西郷隆盛―体調不良を視野に入れて』ミネルヴァ書房、二〇一一年。
- 56 岡彩子「燃える都と燃えない民衆―幕末維新期における京都町衆の防災意識―」(『京都歴史災害研究』七号、二〇〇七号所収)
- 57 『相国寺史料』十、三五〇、一頁。
- 58 『相国寺史料』十、三四八、九頁。
- 59 「相国寺文書」薩摩藩屋敷関係史料、一六五。

第四章 幕末政治と「志士」——政治意識形成と行動——

第一節 「人斬り」と幕末政治——土佐藩山内家の政治運動と個性——

1 幕末の志士を見直す

「土佐勤王党の勃興は殆ど維新史料中の一大奇蹟たり。」

これは幕末維新期の土佐藩山内家、なかでも武市半平太（瑞山）ら土佐有志を考察する際、必須史料としてされてきた、瑞山会編『維新土佐勤王史』其一の冒頭の一節である。天文年間、南村梅軒によって朱子学一派が土佐国に伝えられ、「南学」と称された。近世に入り、一度は潰えかけた南学を神道的解釈のもと再興させた谷秦山の信念。この信念が具現化されたものとして、土佐有志（土佐勤王党）を位置づけ、その「皇国的信念」により発せられる運動こそが、正当であるという意味づけるための一文である。

日本近代に編まれた歴史書においては、幕末維新时期における人間の言動はすなわち、それがいかに「皇国的」であるかに重きが置かれた。ゆえに土佐有志こそ、正義だと述べる『維新土佐勤王史』の叙述方法は決してイレギュラーなものではない。しかし、このような幕末維新に根ざした固定観念は、人物や組織それぞれの姿、形、動きのありようにベールをかけ、見えにくくさせてしまったばかりか、それぞれのオリジナリティーが捨象され、「尊王」「攘夷」というようなイデオロギーのみがひとり歩きをはじめ、そのような枠組みが政治の場に身をおいた存在を包括してしまいう形となった。人物や組織がイメージで語られるというのは概してこのようなことを指す。

たとえば、「志士」とはなにかと問うた際、「志士」という言葉が、日本近代から幕末維新という時代を振り返った

折に、その時を生きた人間の言動を称えるために使われたものであることなどは氣にとめられることはない。その興味はもっぱら、尊王攘夷から倒幕へと向かうとあらかじめ設定された枠組みのなかにおいて、その先駆性、急進性、そして明治維新への貢献度に向けられた。高木俊輔は、「志士」という存在について身分、出身を問わず網羅的に取り上げ、「志士」によって転回された「草莽運動」を考察することで、明治維新という時代変革のありようを問うた²⁰。

幕末維新期の「志士」について、これほどまでに正面から取り組んだ歴史学研究は現在に至るまで、管見の限り存在しない。だが、そこで貫かれる思考の枠組みは先述した幕末維新史に先天的に根ざす固定観念に沿うものであり、示される圧倒的な情報量にそぐわない解釈になっているように思う。特に、「天誅」という事象を「テロリズム」と解していることなどは、「志士」的行動をイメージで解しているところからくるものである。

ゆえに、「志士」と呼ばれた人々の行動論理を解くことが最終的な目的となろうが、そのすべてを論及することは紙幅の都合、困難である。よって本節では、「天誅」という事象について考える。素材として、土佐勤王党を名乗った土佐山内の有志の政治運動を取上げたい。幕末期に京都、大坂でおこった「天誅」という事象こそが、「志士」的行動論理の要点を示す良質なテキストであるからである。

2 「志士」の背景―庄屋・郷土と政治―

「志士」的行動を問う前に、土佐有志の歴史的変遷について触れておく。ただし、平尾道雄によるまとまった業績がある²¹ので、その概観にとどめることにする。

幕末期に土佐から出た「志」は、戦国期に「一領具足」と呼ばれた人々よりつながる。戦国大名長曾我部家に属した武士団であった彼らは、平時は農業を営み、その傍らにわらじや腰兵糧をくくり付けた槍と具足を置き、有事、合

戦となるや、それらを纏い戦場に赴くという、言わば半農半兵の人々であった。山内一豊の入封に際し、一揆を組織して抵抗するも鎮圧され、土佐国の各所に散在していった。あらたな国主となった山内家は彼らに対して宥和的措置をとり、あるものは仕官し、あるものは帰農した。仕官したものは士分を与えられることなく「郷士」に。帰農したものは、地域に根付いて「庄屋」となった。

山内家は、家臣団および地域支配に対し、他の大名家に比して強烈な身分格式の論理をもちいたといわれる。「上士」と「下士」。上下の別による格の壁は予想以上に大きく、それは郷士身分の「下士」には上昇志向すら抱かせないというものであった。

しかし、近世における流通・経済の発展はすなわち、地域と商人の富裕化をもたらした。そんななか、為政者側が施策転換をおこなうと、たちまち地域のなかに、これに対する疑念と矛盾が芽生え、そして上昇志向を生み出した。具体的には、元来、郷士は地域の庄屋の管轄化にあったが、寛政年間に指揮命令系統も藩直属となり、郷士身分を地域の豪農が取得する事態が生じ、郷士が庄屋の地域管理の枠組みから外れる傾向が生まれた。一村の管理をおこなう、地域の代表であった庄屋は、他の村の庄屋役を兼ねるか、あるいは一定期間転勤して、赴任地の管理にあたるという村役人的な存在となっていた。

このような自己矛盾に陥りそうな状況において、庄屋層は天保十二年（一八四一）、「同盟談話之条々」五二ヶ条によつて結束し、庄屋という存在が地域において、いかにあるべきかを問い直す。土佐国禰原村（現、高知県禰原町）の大庄屋を務め、のちに天誅組大和義挙の中心的人物となる志士、吉村寅太郎は、庄屋がいかにあるべきかを、「同盟談話之条々」を引用しつつ、次のように述べる。

凡そ一天四海の内、棟梁は唯一にして、当時受け継ぐ処三段に別けて姑く是を合せて四等と言うべし、其の総王

はかしこくも天皇尊、御代官は將軍、御与頭は諸大名、是を烹鮮の職と言う、小頭は庄屋にて土地人物の総宰を預り申候（以下略）^一

天皇を「一天四海の王」とし、將軍は代官として統治を代行し、これを大名が助ける。

そして、大名を助け、土地人民を預かるのは庄屋であり、このようなシステムがあるからこそ日本社会が存在しえると説く。庄屋が国政を支える極めて重要な存在であるとする彼らの自己認識は、文久元年（一八六一）八月、武市半平太（瑞山）^二、大石弥太郎らによつて起草された有志盟約書にも継承される。武市はこのとき二度目の在府。一度目は、劍術修養を主とする書生にすぎなかったが、文久元年四月、江戸到着以降、精力的に在府の他藩士と交流を持ち、土佐山内に仕える身分、それがたとえ低格であつたとして、いかに動くべきかを問うた。

堂々たる神州戎狄の辱しめをうけ、古より伝はれる大和魂も今は既に絶えなんと、帝は深く歎き玉ふ、しかれども久しく治れる御代の因循委惰といふ俗に習ひて、独りも此心を振ひ挙て皇国の禍を攘ふ人なし、かしこくも我が老公夙に此事を憂ひ玉ひて有司の人々に言ひ争ひ玉へども、却てそのために罪を得玉ひぬ、斯く有難き御心におはしますをなど此罪には落入玉ひぬる、君辱かしめを受ける時は臣死すと、況むや皇国の今にも枉を左にせんを他にや見るべき、彼の大和魂を奮い起し、異姓兄弟の結びをなし、一点の私意を挟まず相謀りて国家興復の万に裨補せんとす、錦旗若し一とたび揚らば團結して水火をも踏まむと、爰に神明に誓ひ、上は帝の大御心をやすめ奉り、我が老公の御志を継ぎ、下は万民の患を払はんとす（以下略）^三。

「戎狄」（西洋諸国）の風俗になかば泥んでゆく傾向を断ち切るべく、われわれは一点の私意も挟むことなく共同し、

国家復興に立ち上がる。この武市の呼びかけに一九〇をこえる志が集まり、土佐有志集団、土佐勤王党が結成される。そこには、こののち長州に身を置き、国事周旋に尽力する土方楠左衛門（久元）や、前述の吉村寅太郎のほか、いまだ自ら方向性を見いだせずにいた一青年、坂本龍馬の姿もあった。庄屋同盟の「同盟談話条々」で説かれた、庄屋は將軍、大名と同じく天皇の臣であり、為政者たる武家の非道に対しては、「王民圧迫」を強調して、武力行使をおこなうことを正当化する論理は、武市ら土佐有志による世情判断と動向のリアリズムとなつてあらわれる。

3 「志士」と「人斬り」

「人斬り」が政治の活路となる。これを決定づける大きな事件があつた。安政七年（一八六〇）三月、大老井伊直弼殺害事件、一般に「桜田門外の変」として知られる。周知のとおり、安政五年（一八五八）から翌年にかけて執行された、徳川幕府に反する言動をとる者を処罰肅清した「安政大獄」とよばれる弾圧政策や、それにからむ諸侯および公家の謹慎処分、さらには安政五年六月、アメリカを皮切りに西欧五カ国と結ばれた通商条約に怒りを顕わにした孝明天皇が水戸藩徳川家に送った、今後の国政運営は全国諸大名を含む衆議によるべしとの勅諭、いわゆる「戊午の密勅」の返納をめぐる問題が、それを巻き起こしたいくつかの理由とされる。直弼襲撃に参加した水戸浪士の一人、斎藤監物が、老中脇坂安宅屋敷に自首した際に提出した「斬奸趣意書」は、義挙決行の理由をものがたる。

ペリー艦隊が浦賀に来航して以来、徳川幕府の処置は、時勢の変革を標榜するものの、諸外国の虚喝に恐怖しており、通商条約を結んだうえ、領事の永住を認めることなどは、「実に神州古来の武威を穢し、国體を辱しめ、祖宗の明訓孫謀戻り候」と評し、失政の根源を「將軍家御幼少の砌に乗じ、自己の權威を振はん為、公論正義を忌憚」る井伊直弼の「所業」とし、「斯る暴横の国賊、其俟指置候は、ますます公辺の御政體を乱り、夷狄の大害を成し候儀、眼

前にて実に天下の安危存亡に拘り候事故、痛憤難黙止、京師へも及奏聞、今般天誅二代り候心得にて令斬戮」のであると。

彼らは「公辺へ御敵対」するべく動いたのでは「毛頭無」いと述べる。同じく提出された「存意書」において記される、「千古の英見卓識にて」築かれた「諸蛮夷の御扱振」を改編し、「耶蘇の術中に落入り、神州の泰否にも拘」る事態を招いた徳川幕府の政策を批判する。政務を預かった直弼は、彼らの矢面に立たされた。「専ら虎狼の猛威を以て天下を屏息せしめ」た直弼は、「北条・足利の暴横に均しく、共に天を戴かざる国賊」であり、「実に神州の逆賊」であるとされ、「天地神人同憤の時に乗じ、天下諸藩の同志と合力同心して、天下の奸賊を誅伐し、神罰」を与えるのであると理由づけられた。

彼らは、自らを、『論語』にいう「志士仁人」であると認識した。彼らのおこないは、「横議横行」（ヨコシマな議論や行動）と評され、世が世ならば、公権力の取り締まりの対象とされたが、近世後期から幕末という時代は、「横議横行」をある程度は許さざるをえない社会状況にあった。「志士仁人は求めて仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すところあり」との、あるべき人道論は、当時の社会情勢を批判するものたちが、「有志之士」として動いていく際の証し、行動を理由付けるためのタテマエとなったのである。彼らは、徳川幕府への政治不信と憤懣を、東照大権現より受け継がれた徳川将軍家、さらには「天」にまで波及させ、この責任を井伊直弼個人の政治的言動に問うたのである。

「天」とは、儒教における宇宙万物が生じる根源的存在である。人類は「天」によって、自主性を付与され万物の霊となり、生存する。「天」により「命」を被ること、為政者は真の為政者たりえた。日本における儒学、これへの対抗として生成された国学の需要は、万物の根源たる「天」の読み替えと批判によって深化された。「志士仁人」の行動は、「天」によって、公的論理を得た。たとえば、その行動が私的欲望から生じたものであっても、彼らの掲げた「天」

によって「公論正義」に転じたのである。このような「志士仁人」によって生み出される公共的論理とこれにより生成される公共空間において、政治運動は正当化されて転回され、また、「天」によって人が裁かれる論理に基づき、「人斬り」が政治の活路となりえたのである。

幕末期に生成された「志士仁人」のための「志士」的公共性は、民衆をも取り込んだ。それは「井伊掃部（いいかもん）良い鴨」と雪の寒さに首を絞め」、「井伊掃部を網で捕らずに駕籠で捕り」との戯れ歌が詠まれたことからわかりえよう。

4 土佐有志と「人斬り」

土佐においても、政治の活路が模索されはじめていた。安政四年（一八五七）から翌五年にかけて、藩主山内豊信は、十三代將軍徳川家定の継嗣問題と、安政五年六月、日米修好通商条約締結の可否をめぐる国政方針について、越前藩主松平慶永、水戸藩主徳川斉昭らと諸侯グループとともに、一橋家当主、徳川慶喜の継嗣擁立を目論む、いわゆる「一橋派」を形成し、徳川譜代第一の閥閥、井伊直弼を首魁とする徳川幕府執行部と対立した。周知のとおり、豊信らの運動は、徳川幕府執行部の推す紀州藩主徳川慶福が継嗣に擁立され、安政五年七月の家定死後、慶福の十四代將軍就任の決定にともないたちまち瓦解し、慶喜、慶永、斉昭らが謹慎処分に出せられると、徳川幕府からの内々の勧めに応じ、安政五年十一月、隠居を願い出、翌六年三月、許可され、養嗣子豊範への家督相続が認められた。加えて、同年十一月には謹慎が命じられた。

「容堂」と名乗り、江戸品川の山内家屋敷にて謹慎していた豊信は、吉田東洋の才知に全幅の信頼を置いていた。奉行職を辞して京坂に遊び、在京一流の学者と交わった東洋を豊信は用い、嘉永六年（一八五三）七月に大目付、つ

いで十二月に仕置役（参政）へと昇進させた。翌安政元年三月、藩主面前での不敬行動を罰せられ、罷免されるも、安政四年十二月、再度仕置役に登用されるや、東洋は、後藤象二郎、乾退助（のち板垣退助）、福岡藩次（のち孝弟）ら自らが失脚中に教育した門弟を登用して、律令編集、文武振興による法制・教育および大名資格制度の改革を推進した¹⁰⁰。

吉田東洋による藩政改革のありようは、教育と「海南政典」編纂にみられる法整備を二枚看板とし、藩政運営を根本から再構成するという抜け目の無いものである。ただ、実際に推進していくには、教育機関（文武館など）の建設にともなう莫大な経費と時間を有した。他藩有志との交わりのなかで多く知見を得た武市ら土佐有志は、東洋の施策を時勢にそぐわない、立ち遅れの策と見なした。武市による再三の建言も水泡に帰し、吉田東洋はいよいよ土佐有志の障害となった。薩摩藩島津久光が率兵にて京都、そして江戸へとその歩を進めていた文久二年（一八六二）四月。いまだスタートすら切れない閉塞状況において、彼らは「人斬り」を決断した。

高知城下の西のはずれ、雁切橋畔にさらされた吉田東洋の鼻首には、次の斬奸趣意書（「吉田元吉ノ罪状書」）が添えられていた。

此元吉事（吉田東洋）、重キ役義ニ有ナガラ、心俣成ル事を取行、天下不安の時節ヲモ不顧、一日モ安氣ニ暮度所存ヲ以、御国次第ニ御窮迫之御勝手ニ相成候モ乍悟、表ハ御余銀モ有之候様都合能申飾リ、既ニ先年ヨリ御囲ヒ相成居候粃米追々存分摺尽シ、御国内御宝山不残切拂、何に不寄下賤之者ヨリハ金錢巖敷取上、御国民上ヲ親ミ候心ヲ為相隔、自分ニツイテハ賄賂ヲ貪リ無類ニ驕ヲ極メ、於江戸表輕薄之小役人へ申付、御名ヲタバカリ、結構成銀之銚子ヲ相調、且自己之作事平常之衣食住弥華美ヲ極メ候事モ此俣差置候テハ士民之心弥相離レ御用ニ立候者一人モ無之様相成、御国滅亡之端トモ相成候ニ付、不肖之我輩共無余儀堪忍難成上ハ国患ヲ下ハ万民之艱苦ヲ救ン

為メ、己之罪ヲ忘レ如此取行ヒ、尚又サラシオクモノ也^二

斬奸の論理としては、井伊直弼斬殺の折と酷似している。東洋が「重キ役儀ニ有ナガラ心忸成ル事を取行」ない、「賄賂ヲ貪リ無類ニ驕ヲ極メ」と私利私欲の政治であると評し、このままにしては「士民之心弥相離レ御用ニ立候者一人モ無之様相成、御国滅亡之端トモ相成」と大名家および大名領国全体の問題へと波及させている。そして、「上ハ国患ヲ下ハ万民之艱苦ヲ救シ為メ」に斬殺し、「サラシオク」。「料理した血を見に行や初鯉、鳴てもしれぬ首打のゆきさき」^一という、詠み人しらずの落首狂歌からも世情への波及効果がうかがえる。異なる点といえば、彼らが、斬奸の主体を「天」としなかったことである。個々人の思想的な違いや、大名支配内部での出来事であつたことも無関係とはいえない。しかし、直弼が斬られた安政七年と、東洋が斬られた文久二年では、斬奸者を取りまく政情が激変していた。全国の「志士仁人」による有事への期待が、京都・大坂そして伏見を「天」の許しうる公共空間へと変えた。彼らは「脱藩」によって、既成の封建的枠組みを抜け、公共空間へと移動し、闇に紛れた。京・大坂の闇は「義挙」という命題のもと、「脱藩」という当時の大罪すらもみ消すほど公共性に満ちていた。ともあれ、吉田東洋を斬ったことは、土佐山内において武力行使による政策修正がまかりとおつた瞬間となつたのである。

5 国事周旋と「志」

吉田東洋亡き後の土佐藩政執行部は、執政、参政、側役、大目付とすべての職が総入れ替えとなつた。東洋の死によって、改革路線が頓挫したことへの引責辞任の形である。新たな執行部には、東洋に反対し要路から遠のいていた奉行職の五藤内蔵助や、同職山内下総、桐間蔵人らが復帰した。また、この人事によって、武市ら土佐有志と政治的

に共同していた山内民部（豊誉）・山内兵之助（豊積）ら山内分家門閥層の政治的発言力が増し、土佐有志と「志」を同じくした上士、小南五郎右衛門、平井善之丞らが目付職に任じられたことは、武市らの企画意図が藩政執行部に幾分通りやすくなったことを意味しよう。

ともかくも、確かなことは、「人斬り」によって、政治権力のありようが簡単に転換したこと、そして、吉田東洋亡き後の土佐藩政が、薩摩、長州など西南雄藩同様に、京都政局への対応を第一としはじめたことであつた。

さて、薩摩藩主の父、島津久光が率兵にて入京を果たす。目指されたは、大名家が国政参加できうる政治状況を徳川幕府に認めさせるという、亡き兄島津斉彬の遺志を実現させること、そして、率兵上京をおこなうことで、藩内政治を島津宗家、ひいては久光が完全掌握することであつた。そして、この久光の政治的投機が、他大名家における国政への政治的関心を高め、これにつづいて、天皇の住まう京都へといたる道のありようを提示したことも、当時の政情を紐解く上で重要なことである。

前藩主容堂の実弟で、武市ら有志の理解者であつた山内民部は、若年の藩主山内豊範を諭し、あるべき土佐藩山内家の政治姿勢を示した。文久二年六月十七日付、「存意書」²²には、藩論を「勤王攘夷」に定めるにあたり、「如何程徳川家の御恩これあり候共、徳川家を主君とは申され間敷、且又幕府天朝を蔑如し奉り候義これあり候得ば、天朝を守護し、幕府に向かい弓を引き申すべき事当然」であり、真の「君臣の大義」を結びなおすべきと述べる。そのためには、参勤交代で上府する際、「京師へ御立寄り遊ばされ、勤王攘夷の御趣意仰せ立てられ、薩長へも同様仰せ込まれ、家老中一人不時の御手当として京師へ指留められ、其上関東へ御下り遊ばされ、幕府へも同様、公武御合体、尊王攘夷の義仰せ立てられ、其上幕府御承引これ無く候えば、最早幕府への御義理も相立ち居り候御事故、早速御上京遊ばされ、薩長のごとき忠義の国と御心を合わせられ、京畿御守護遊ばされ、宸襟を御休め遊ばされ候儀、方今の第一義」と、薩長両藩に引き続いて上京し、天皇の居所である京都を守護することこそ、もつともなすべきことであると説く。

五月二十二日、勅使大原重徳とともに京を發つた久光は、六月十四日、老中板倉勝静、同脇坂安宅を訪れ、勅旨奉承に関する會議の席についていた。吉田東洋という藩政の軸を失い、政務の基本方針の見直しが余儀なくされており、藩主進發に際し、それが「上京」を含むものなのか否かが未決であった。

藩主進發が決定したのは、六月二十日。当初は、三月八日發駕の予定が、藩主豊範当人の病と東洋暗殺によって、延期を重ねていた。六月十一日には、議奏中山忠能は、山内家縁家の三条実美に、薩長両藩につづき、土佐山内家の上京周旋を孝明天皇が求めており、伏見を「いつ頃出府通行」かと問い合わせている¹⁴。縁家の三条実美は、すぐさま山内家に問い合わせたのであろう。史料が確認できないが、六月二十日、藩主豊範は三条実美に宛てて、滞京は今しばらく見合わせようと思うが、上京のうえ、詳しく直談する旨の書翰を出していることから推察される。実際に、藩主一行が土佐を發つのが、六月二十八日。「四百人ばかりの供廻り」であったという¹⁵。伊予国川之江（現、愛媛県四国中央市）から、備中国下津井（現、岡山県倉敷市）に渡って、中国路を進み、大坂長堀の藩屋敷に着いたのは、七月十二日であった。ただ、姫路からの上坂中、藩主を含めた大多数のものが麻疹にかかった。入京するか否かも未決であっただけでなく、病も武市らの思いを阻んだ¹⁶。

島津家が縁家近衛家に対し、滞京と国事周旋の勅諭降下のとりなしを依頼、これを獲得しえたように、形式的にも天皇の許しが必要であった。藩は未決の状況を憤った武市らは、随従の執政山内下総を説得、すぐさま京、江戸に使者を赴かせ、縁家の三条家に勅諭降下の幹旋を請うとともに、在府の山内容堂の承認を得る。

三条実美も「議奏衆へ談合」¹⁷しており、八月二十五日、山内下総に対し、滞京警備と国事周旋の内勅が武家伝奏坊城俊克より伝えられた¹⁸。これにより、山内家は京都における政治運動の許可証を得た。

6 政治運動の個性としての「天誅」

あらたな政治の場である京都において、だれが、そしてどの勢力が、主導権を握るのが、在京大名家臣内の興味の的となっていた。薩長土三藩の均衡並立状況と論じられる文久二年（一八六二）下半期において大名家中の人物評は絶えることなく、土佐勢においては他に比して、そういえる。

藩主に随行し、在京中の土佐有志、千屋菊次郎が、文久二年九月十九日付で、土佐の父親に宛てた書簡には、「薩長土三藩の中にも天帝には土州を一番の御見込」として、土佐勢の優位性を述べ、「墨龍などは三藩第一の謀主と相成り天下に名をとどろかし申し候」と、「墨龍」、すなわち半平太を随一の政治家であると申し送っている。また、平井収二郎も、手記に「吹山（武市）尤有力」と記す。多少の誇張こそあれ、武市は在京大名家臣を主導者の一人に数えられた。実際、文久二年下半期、朝廷に提出された藩主豊範の建言書草稿の多くは彼の手により、他藩応接役としても、他の大名家臣を牽引する立場にあった。

さて、文久二年下半期における在京の土佐山内勢および武市半平太の政治的位置を裏付ける政治行動として「天誅」を考えたい。「天誅」は、これまであまりにもイメージとして、理解された。徳川幕府を憎悪し、排斥しようとする尊王論者の遺恨的側面ばかりが強調されたすぎたのである。

「天」によって「人」を斬らせることの意味については前述した。吉田東洋を斬ったことによって、藩政を一変させた武市ら土佐有志は、先にみた「人斬り」の公共性的論理を用い、政治運動を展開した。安政大獄において同志を失った復讐心とか、怨念といった通説がある。そのような思いがないとはいえないが、彼らは政治手段として斬ることを選んだ。ただ、あからさまに斬りはしない。万物を支配する観念としての「天」に斬らせる。そして「天」の命に準じて、その首級を晒す。土佐で吉田東洋を斬った折には、「天」は用いられなかった。それは、あくまで人間の所

文久2～3年、おもな「天誅」（土佐有志の関与が想定されるもの）				
人物名	身分	日付	晒された場所	斬奸趣意書
島田左近	地下、九条家家士	文久2年7月21日	四条大橋北側の河原	「此嶋田左兵衛権大尉事、代逆賊長野主膳え同腹いたし不謂奸曲を相巧、天地ニ不可容大賊也、依之加誅戮令梟首者也 文久二年壬戌七月」
井上佐一郎	土佐藩士、前監察吏	文久2年8月2日	大坂道頓堀	無し
本間精一郎	志士、越後国郷士	文久2年閏8月20日	四条河原（胴体、高瀬川に投込）	「此者之罪状今更申迄も無之、第一虚喝を以衆人を惑シ、其上高貴之御方え致出入、倭弁を以薩長土之三藩を様々致讒訴、有志之間を離間シ姦謀を相工ミ或ハ非理之貨財を貪取、其外不謂姦曲難尽筆上ニ此僞差置候而ハ無限禍害可生ニ付如斯令梟首者也」
宇郷重国	九条家諸大夫	文久2年閏8月22日	松原河原	「宇郷玄蕃頭 此者島田同腹ニ而主家をして不義ニ令陥入、実ニ其罪彼よりも重し、依之令加天誅者也」
文吉	目明し	文久2年閏8月29日	三条河原	「高倉押小路上ル 目明文吉 右之者先年より嶋田左近え随従し種々姦謀し手伝致し、刺去ル子年以来姦吏之徒ニ心を合、諸忠士之面々為致苦痛非分之賞金貪取、其上嶋田所持之不正之金子を預り過分之利足を漁に、近來ニ至而は様々姦計を相巧、時務一翻之妨ニ相成候ニ付、如此誅戮を加へ死骸引捨ニ致し同人死後ニ至右金子借用之者ハ決而不返済此、以後ニ而も文吉同様之所業相働候者有之ニ於而ハ其身分之高下ニ不抱即時ニ可令誅
渡辺金三郎	京都西町奉行瀧川播磨守組与力	文久2年9月23日	栗田三条刑場	「年増世上ニ佞曲邪業等之者多、右は御国体之障リニ付、既ニ於京都四五輩令罪科者也、其外所業之品は替り候得共、就諸事悪業之者不少、太平之蒙御国恩安居之難有を不弁、却而私欲之邪業ニ致増長矣ニ此僞捨置候而は全国有志之時勢一新之妨ニ相成、依之嚴敷遂内索見当り次第其席へ踏込無用捨即時ニ可令刑罰もの也 戊九月」(ただし、大津市中4、5ヶ所への落文)
上田助之丞	京都西町奉行所瀧川播磨守組同心			
森孫六	京都東町奉行所永井主水正組与力		手負いにて逃走	
大河原重蔵	京都東町奉行所永井主水正組同心		栗田三条刑場	
平野壽三郎	商人、相国寺門前	文久2年10月10日	二条橋北河原 ただし、生晒	「相国寺門前 平野屋壽三郎 鞍馬口煎餅屋半兵衛 此者事、数度重々御方関東え下向ニ供内ニ加リ上長者町烏丸西入南側桶屋市蔵と心を合せ宿々ニ於而無理非道ニ莫大之金錢貪り候故容易ならざる迷惑なましめ候段不屈之至、向後は等之働致シ候者於有之ハ誅伐を加ふべし、こらしめの為此者さらしの上、免シ遣ス者也 十月十日 此者役向より食物をあたへ、明十一日申刻免し家ニ帰スべし、其後召捕者於有之ハ其者可為曲事者也」
煎餅屋半兵衛	商人、鞍馬口			
多田帯刀	金閣寺侍、母は村山可寿江(タカ)	文久2年11月15日	栗田口三条	「多田帯刀義、嶋田左近・加納繁三郎・長野主膳ト互ニ奸謀相働第一戊午年ニ至り有志之往々書翰令開封、渡辺金三郎ニ相渡候事歎欣いたし、憂国赤心之者共一時天地を拂ふニ至而其罪惡ニ天地不可容、其餘逐一白状不枚挙、仍而其一端を挙加天誅もの也」
村山可寿江(タカ)	芸妓、井伊直弼、長野主膳の妾	文久2年11月15日	三条河原 ただし、生晒(のち尼僧へ)	「村山かすへ 此女永野主馬妾として戊午已來主馬へ奸計を相助稀成大胆不敵之所業有之、不可赦罪科候得とも、其身女子たるを以面縛之上死罪一等減之、尤かすへ白状ニ依而奸吏之名目一々記之畢、尚此上其致方再応遂吟味、右奸吏共逐一可加嚴刑者也」
香川肇	千種家家士	文久3年1月28日	七条河原のち、首は徳川慶喜宿所の東本願寺へ、両腕は、岩倉、千種屋敷に投込	「此者、和宮御縁組一件ニテ諸司代若狭へ周旋之奴也、天罰可恐」 慶喜宿所への投文「攘夷為血祭献上仕候」
池内大学	儒者、青蓮院宮・知恩院宮侍読	文久3年1月23日	大坂大川難波橋	「池内大学 此もの從來高貴の御方々之恩顧を蒙り戊午之比正義之士ニ随ひ種々周旋いたし居候処、遂ニ反覆いたし、姦吏ニ相通し、諸藩誠忠之士を数多斃し、苟も自ら免れ其罪惡不容天地、依之加誅戮令梟首もの也」
姉小路公知	堂上公家(羽林家)、国事参政	文久3年5月20日	禁裏御所、猿が辻付近	無し
出典:「近衛忠熙家記」文久2年7月22日条、「万国一洗記」文久2年9月1日条、「大津詰探索田村五百代探索書」文久2年10月2日付、「編年雑録」18、文久2年10月11日条、「文久壬戌筆記」文久2年11月15日条、「万国一洗記」文久2年11月条、「隆祐卿手録」文久3年正月29日条、「文久戊亥雜記」文久3年2月2日条(すべて「大日本維新史料稿本」)、瑞山会編『維新土佐勤王史』、小寺玉晃「東西詳林」、同「東西紀聞」				

業であった。斬った人間は逃げたが、京坂の政情と雰囲気これをうやむやなものとした。衆人環視の京において、斬ったのはあくまで「天」である。感のいい市民には、晒されている首がいったい誰に斬られたのかは、ある程度の見当はついている。ただし、「天」が斬っているのだから文句はいえまい。学問の需要と拡がりによる尊王論の高揚と、天皇という伝統的権威の存在によって、京都、大坂には、日本近世において独特の「公論正義」が生成された。「天誅」とは、人々の心理や思考のなかに芽生え始めた公共的「正義」としての「天」。これに作用するように働き

かける「人斬り」を手段とした政治運動の一形態なのである。

表は、文久二年から翌三年にかけて、京都・大坂でおきた「天誅」事件につき、確認できるものを掲げ、対象となった人物、晒された場所、斬奸趣意書の内容を盛り込んだものである。管見の限り、「天誅」という名の「人斬り」は、文久二年七月、土佐山内勢が大坂にやってきてから、文久三年半ばまでのおよそ一年間、「天誅」、「斬奸」の類いが頻繁におこっている。

まず、文久二年七月二十一日、九条家家士で、「今太閤」と呼ばれるほど、京で氣勢を張った島田左近が斬られた。長野主膳との政治的連携が「天」より「大賊」と見なされたのである。閏八月二十日、越後出身の浪人で、義挙を企て、土佐の吉村寅太郎とも親交のあった本間精一郎が先斗町で斬られた。元来、弁舌に長け、口うるさい素性が裏目に出たといわれる。「佞辨を以、薩長土之三藩を様々致讒訴、有志之間を離間し姦謀」を企んだので、「天」により討たれ、「梟首」させられた。島田左近を斬ったとされる薩摩の「人斬り」で、武市と「腹中を談じ、兄弟の約」²⁰を交わした田中新兵衛が、岡田以蔵ら土佐勢に加わったとされる。翌二十一日には、島田左近と同じく、九条家諸大夫の宇郷玄蕃（重国）が「高貴之御方え了簡書も差出、平常暮し方至而奢居不審相立候程ニテ全島田一列之者ニ而不宜人物」として、を襲われ、斬殺。松原通り上る、賀茂川原に晒された。岡田以蔵が斬ったといわれるが、あくまで「天」が斬ったとされた。島田の情報源として働き、高利貸や妓楼経営で儲けた文吉（目明し文吉）が絞殺され、三条河原に晒された。文吉の「種々姦謀」から生じる「穢れ」が、斬ることを躊躇させたといわれる²¹。文吉の絞殺現場を、武市は見物した。そして、京都町奉行所が下手人探索に躍起になっているとの報を得るも、「下手人探索可笑事」と一笑に付す²²。この時期の政治に対する確信がそう言わしめるのである。

翌文久三年（一八六三）正月、大坂難波橋の上に、さらし首があった。医術を生業とする傍ら、青蓮院宮、知恩院宮の侍読を務めた京都屈指の儒者池内大学の首である。青竹三本で刺し貫かれた首に掛けられた制札には、「戊午（安

政五年）之比正義之士ニ随ひ種々周旋いたし居候処、遂ニ反復いたし、姦吏ニ相通し諸藩誠忠之士を数多斃し、苟も自ら免れ」たことを「天」が許さず、誅戮を加えるとの斬奸趣旨が記された。

池内大学（陶所）は、安政四年（一八五七）、通商条約勅許問題や將軍継嗣問題が京中において議論されるや、一橋家当主、徳川慶喜を擁立する諸侯グループ、いわゆる一橋派の側にたち、宮廷社会との人間関係を活かした積極的な政治行動をとったが、翌五年、徳川幕府による肅清が始まり、同志であった学者や志士が捕縛されていくのを尻目に伊勢へと避難するも、京都に舞い戻り、京都町奉行所に自首。江戸に檻送されたのち、一連の政治行動を供述し、安政六年、江戸、京都を所払い（追放）となった後、大坂の今橋筋心斎橋あたりに籠居していた。文久三年正月二十三日、江戸から上京途次であった土佐前藩主山内容堂より旧交を温めようと酒宴に招待され、その帰りに、自宅付近で斬殺された。この他、金閣寺侍多田帯刀、芸妓村山可寿江（タカ）、千種家家士賀川肇ら、「天誅」という名の「人斬り」の対象となった人々は、安政五年の京都にて展開された安政大獄を推進し、井伊直弼およびその腹心長野主膳との密なる関係を有した人間であるといえる。

先行研究、さらには膨大にある一般向けに書かれた幕末維新史関連の書籍においても、安政大獄において同志を奪われたことへの私怨的な復讐心であると述べる。また、「天誅」という政治行動が止むことを知らず、この後、頻発するという理解²³についても、「天誅」という名の「人斬り」と、慶応三年（一八六七）十一月の坂本龍馬、中岡慎太郎両名の暗殺などに見られる事件が同様に解されているからである。

以下、在京土佐勢の政治動向と文久二、三年の京政情と関わらせ、「天誅」が政治的にいかなる意味があり、これが政情の影響を受け、いかに変質していたのか考える。

一つ目に、文久二、三年段階での安政大獄のイメージについて。安政大獄は、大名家だけでなく、公家社会にも、ひいては町衆にも、歴史のトラウマとなってイメージされ、大獄に関与したものは、「正義」を汚す公の姦人であると

当然のごとく認識されていた。文久二年四月段階において、老中久世広周が上京予定とであるとの報は、公家社会、特に大獄で処罰された人間においては、まさに「第二の安政大獄」を予感させるものであった。島田、宇郷をはじめとする大獄関係者への攻撃はすなわち、京都で暗に形成された世論に、その政治勢力が正しいと判断させるのに十分、事足りた。

二つ目に、安政大獄の主体となり、江戸城桜田門外で死んだ井伊直弼および彦根藩井伊家の文久二、三年における政局上の位置づけについて。井伊家は、文久二年半ば、未曾有の危機に瀕する。同年に執行された徳川幕府の諸制度改革（新兵制、教育、職制）の仕上げとして、公儀側がすこぶる慎重に執行したのが、桜田事変後における公儀内諸有司の処罰と安政大獄および桜田事変関係者の大赦事業である。公儀内においては、久世広周、安藤信正両老中や、京都所司代酒井忠義に領地削減などのペナルティが課せられたのをはじめ、在職中の老中、奉行に謹慎・隠居・差控などの公職罷免措置が決定された²⁶。井伊家については、「掃部頭在職中品々不届の処置に及び、それが為今日朝廷に對して申上ぐべきようなき不都合を醸」したとして、文久二年十一月二十日には、領地十萬石の削封が決定されている（ただし、井伊家中の反対および歎願運動もあり、慶応元年段階まで未決²⁷）。

これより先、同年八月二十七日、「悪」と見なされた政治体質の改善おこなうべく、彦根藩主井伊直憲は、幽囚中であった長野主膳を斬罪、家老木俣清左衛門、同庵原助左衛門に致仕・謹慎、側役宇津木六之丞を禁固に処した。加えて、翌閏八月二十日、近世初期より同家のプライドとなった職務であった京都守護の職掌が剥奪され、職制改革ともなう新職、京都守護職に会津藩松平家の補任が決まったことは、大名家自体のポリシーのみならず、存在意義すらも否定されうる事態となった。このような、言うなれば、瀕死の大名家組織に対する世評は厳しく、井伊家を「死にかけのメダカ」にたとえ、「ヒクヒクして居る」と評され、「藩士文武ともニナシ、茶湯猿楽ヲ樂ム、又利ニフケル」と、藩政を動かす人材はなく、芸事ばかりにふけり、自己利益のみにはしるきらいがあるとイメージされていた²⁸。

このような安政大獄の「悪」評と、危機的な状況である井伊家という存在は、「志士仁人」の躍動の場としての京都・大坂という志士の公共空間においては、格好の材料となった。

それは現状の政治運動において、直接的な障害になりえるものではなかったが、政治勢力としてのありかたをより正当なものへと近づけるために、彼らに「天誅」という名の「人斬り」をほどこしておくことこそが、もっとも有効な政治手段と認識されたのである。斬殺後、衆人環視の前にさらしておくのは、すなわち、悪人とされた人間の見せしめというよりもむしろ、それをおこなった勢力がいかなる勢力であるかを、それを直接見るものに、または伝え聞くものに、推理させ、暗黙のうちに認識させるためである。それこそが、世情が認めうる政治的正当性の獲得につながる

と認識されたからにはかならないのである。

これを手がけていたであろう在京の土佐藩勢力は、文久二年半ばから、三年上半期にかけて、武市半平太を中心に公家との政治関係の面、在京大名家間における政治主導の面において抜きん出た存在となった。むろん、武市自身の政治手腕や、山内家の縁家として、宮廷社会のなかでもっとも勢いのあった公家、三条実美の存在を否定するものではない。しかし、文久二年から三年にかけての在京土佐山内勢の政治的浮沈には、吉田東洋暗殺以来、折をみておこなわれてきた「天誅」という名の「人斬り」が大きく関係したのである。

7 「天誅」という名の「人斬り」の限界

政治のなかにおいて重要な意味を持った「天誅」という名の「人斬り」は、ある暗殺事件によって、その政治的有用性を失ってゆく。

文久三年（一八六三）五月、三条実美とともに、攘夷別勅使として江戸に赴くなど、急進派公家の中心人物と目さ

れた堂上公家姉小路公知が禁裏御所の北東角、朔平門外猿ヶ辻で斬殺された。築地塀の上部には猿のレリーフがほどこされ、鬼門の方角（北東）から禁裏に入る邪氣を祓う場所であったのだが、まさしく姉小路がその邪氣をかぶる形となった。下手人は三名であったとされるが定かではなく、現場に薩摩藩士所用の鞘が落とされていたことから、田中新兵衛に容疑がかかり捕縛、憤慨した田中は京都町奉行所で自刃した。この事件には斬奸趣意書は存在せず、さまざまな憶測が飛び交うなかで、その責任は自刃した田中新兵衛に転化された。これでは「天」が斬らせたという理由付けはなりたたない。この「人斬り」事件は、姉小路公知という当時、気鋭の公家の命を奪っただけでなく、京都における薩摩藩島津家の政治的存在意義すらもうやむやのうちに奪い去る形となった。

「天誅」という名の「人斬り」は、大名家間の殺伐とした政治的駆け引きにおいて、相手を追い落とすための手段として解釈された。また、姉小路暗殺事件に際して、学習院門前に「転法輪三条中納言、右之者姉小路へ同腹二而公武御一和ヲ名トシ実ハ天下之争乱を好候者ニ付、早速辞職隠居不致おいてハ不出旬日代天誅可令殺戮者也」²²²との三条実美への斬奸予告状が貼り付けられたことにより、公家社会内における自衛意識を高まり、三条実美を総督とする親兵制度の具現化が急がれるとともに、大名家による禁裏および御所九門の警備が開始された。徳川幕府、朝廷という公権力による治安維持のための統制が加わり、「志士仁人」が抱きうる「志士」的公共性は抑圧され、「天誅」という名の「人斬り」が、あるべき政治手段として選択しえない状況となったといえるのである。

さらに、三ヶ月後、文久三年八月十八日の政変が勃発する。政局において、失脚したのは長州藩毛利家勢と三条実美ら数名の急進派公家。かたや復権したのは姉小路公知殺害により嫌疑を受け、京都警備の任を解かれた薩摩藩島津家と、京都における徳川幕府の権威を取り戻した会津藩松平家ということとなる。

政変の余波は、土佐勤王党を含む在京土佐勢にもおよぶ。長州と行動に共にするもの、また吉村寅太郎のように大和国で義挙を企て、決行するもの、藩内急進的分子の検挙・摘発を受け、帰国、入牢を命じられもの。武市は土佐有

志の代表として、藩政府の判断に対し、強行に反論するも、文久三年九月二十一日、入牢を余儀なくされた。

以後、武市半平太ら土佐有志は、長きにわたる過酷な尋問・拷問による弾圧を受ける。獄中、約一年半余。慶応元年（一八六五）閏五月、武市は、「人心煽動」「上威軽蔑」を理由に切腹を命じられた²⁹。土佐有志によって主導された土佐山内の政治姿勢は真っ向から否定され、武市らの抱いた「天」と彼らとの関係によって生成される公共性、これに政治正当性を付与された彼らの「志士」的政治運動はついえることとなったのである。

8 その後の「天誅」

文久三年八月十八日の政変後、長州毛利勢をはじめとする「志士」的政治運動が、治安維持の面から禁止された。同年九月四日、在京大名二十四家に対し、朝廷より京都市中の警備を厳化せよとの命が出た。そして、毛利勢やともに長州に落ちた三条実美ら急進派公家によって企画され、大名家の兵士提供により成立した親兵制度も九月七日に廃止された。

毛利家の退京後、同家処分の問題、諸外国との通商問題をふくんだ国是を京都において審議しようとの試みがなされた。島津久光、松平春嶽、伊達宗城、松平容保そして山内容堂と、将軍後見職の徳川慶喜は朝廷政務の運営機関たる「朝議」への参予が許可され、新たな国是審議にかかったが、元来、徳川幕府側に、諸大名勢力の政治介入を容認する意思はなく、元治元年（一八六四）三月、わずか二ヶ月あまりで解体された。徳川幕府執行部、いわゆる幕閣は、諸大名家の代表たる久光、容堂らを政治の場から遠のけて、京都政情の独占をはかったが、徳川慶喜は、三月二十五日、朝廷より禁裏守衛総督並摂海防御指揮に任じられ、京都において新たな政治的スタンスで、朝廷―徳川幕府の制度的ありようを模索していた。既存の京都警備勢力であった京都守護職の会津松平、元治元年四月、新たに京都所司

代に任じられた桑名松平を政治的に取り込み、天皇、公家社会の絶大な支持のもと、京都、大坂を徳川幕府のあらたな政治拠点にせんとした取り組みであった。「一会桑」政権ともいわれる、元治元年四月以降の徳川慶喜を首魁とする京都の徳川幕府の政治秩序は、京都市中警備の制度化、組織化の面からもうかがいえる。

鞍馬口から丸太町、加茂川から室町までの区域が徳川慶喜の一橋家が管轄、丸太町から蛸薬師、加茂川から御土居までが京都所司代（桑名松平）、松原より九条通、加茂川から御土居までが幕府歩兵組、鞍馬口から丸太町、室町から御土居までが京都守護職（会津松平）、蛸薬師より松原、加茂川から御土居までが新選組が担当することとなった³⁰⁰。新選組や幕府歩兵組を活かし、ペリー来航以来、もっとも制度化された京都守衛体制が構築された。

このような、権力の寄り戻しともいえる徳川幕府の暫時的な指導力の強化にともなって、「志士」的公共性は完全に抑圧され、「斬る」こと自体が政治手段として選択しにくくなった。「志士」的公共性によって生成された政治運動は、斬奸状を送りつけたり、門前に貼りつけたりして、その対象となっている人間を威嚇することに方向転換されたといえる。

文久三年十月、江戸において、石谷因幡守穆清への「天誅」が予告された。石谷は、嘉永五年より安政元年まで大坂町奉行を勤め、安政五年、大獄の折には江戸町奉行として、捕縛された志士への尋問、特に長州の吉田松陰の取調べにも関わったことでも知られる。予告状には、石谷が井伊直弼と通じて政治を混乱させ、京都なら、「首をも刎可捨候処」であるが、「去秋以来追々及誅罰」すでに「事済」となっている、江戸においては暫く猶予を与え、「一同之首預置」と書かれていた³⁰¹。石谷は元治二年（一八六五）正月より慶応二年十一月まで、講武所奉行を務めることになるので、実行されていない。また、昨秋より京都でおこなわれており「事済」である、もはや使い古された感も見受けられる。

「天誅」が事済になっているとされた京都においては、文久三年十月二十七日、京都守護職松平容保に対する「天

誅」予告状がしたためられ、市中に貼紙がなされた。容保が「住職を蒙居ながら正義丹心の族家臣に一人も無之」また薩摩藩による「愚弄」に甘んじ、徳川幕府の危機を醸していることは、「井伊安藤の故智を襲」うにすぎず、甚だ不届きである。有志申し合わせ、「天誅」を加えるべきところであるが、「東照宮血脈の家に有之」ので赦免する、とある。「天誅」という言葉を使った、京都守護職たる会津松平に対する現行の政治批判となっている。また、末尾には「向後改心実意を以て為皇国粉骨碎身の御奉公可有之事」と、激励ともとれる一文が添えられる³³⁰。容保自身も作成者を追及することなく、これを意に介することなかった。また、同時期には、薩摩藩京都屋敷にも八月十八日の政変以来の薩摩藩の政治動向を批判し、「中川狸宮・会津狐」と謀り、「正義忠誠之方々を相退ケ」とことを言後同断の振る舞いとし、本来ならば「天誅」を下すべきところ、「尊皇攘夷之道ヲ今一際御周旋」するよう求める投書が投げ込まれている³³⁰。

「狸」と評された中川宮朝彦親王は、当時、世評が芳しくない。文久三年十二月、邸宅への貼紙には、会津と謀る中川宮は「三千石之私欲より会津に与し、仮に兄弟の約を結び、陰謀相工」³³¹と評され、「天誅」の対象となっている。末文で、「正義之方々速ニ被遂奏聞」ように、中川宮の禁裏内における周旋を求めている³³¹。

この他、文久三年後半以降、江戸、京都、大坂においては、「天誅」予告状が作成され、徳川幕府役人や公家衆、さらには都市の富裕層に対して威嚇行為がなされる。これら行為は「人斬り」を想定したものではなく、その対象者への訴え、歎願の形態となっている。これに対し対象となった人間がさしたる策も講じていないことはすなわち、このような予告状を作成し、市中、門前に貼り付けることが、もはや世情におけるブームとなり、それが日常化、一種の娯楽化していると認識されているからである³³²。

元治元年（一八六四）四月、大名諸侯の上京をとまなう大名家のあからさまな政治運動が徳川幕府より否定され、禁裏守衛総督たる徳川慶喜の指揮のもと、治安レベルが上げられた京坂地域において、「天誅」という言葉に対する危

機意識は薄れ、言わば「バチがあたる」という身近な言葉で説明できうるような、「人斬り」・「斬殺」とは異なる次元の政治手段へと変容していったのである。

小 括

「志士」と呼ばれた人々の行動論理を解明するため、土佐藩有志の政治行動のなかにおける「天誅」という名の「人斬り」について考察した。本節で述べた「志士」的政治運動は従来、「倒幕」が想定されて考察がなされ、その内実が論じられてこなかった。論拠として使用したような瑞山会編『維新土佐勤王史』などは、武市瑞山の顕彰を意図して編まれた伝記であり、顕彰のために弊害が生じるような内容は削除されている可能性が高い。編纂意図をふまえれば致し方ないのかもしれない。ただ、土佐藩山内家に関しては、明治維新史研究における重要性に反して、史料の伝存状況に不明な点が多く、研究業績も決して多くはない。おそらくは、日本近代における土佐から出た政治家が、その政治的正当性を得るため、非常に限られた事象、事物に対する「歴史」を恣意的に編纂し、わが郷土の誇りとして、称える風潮があったためであった。このような史料的制約のなかで、これまで「志士」的政治運動の内実を解くことこそ困難極まりなかった。

ただ、そのなかで「天誅」という名の「人斬り」は、格好の素材となったと認識している。「人斬り」を要した政治運動に公共性の枠組みをもちいたことは、史料的制約と時代認識へ固定観念というベールがかけられた状況で論じる、一つの可能性であると考ええる。³⁶

第二節 「志士」と由緒 ―丹波郷士の「志」と幕末政治をつなぐ―

1 「勤王志士束簡」

湯浅五郎兵衛宗成という、名もなき「志士」を素材としようとしたのは、京都府の日吉町郷土資料館が所蔵する「勤王志士束簡」と名づけられた一幅の卷子に出会ったからである。卷子は、十二点の書状から成り、宛て名はすべて「湯浅五郎兵衛」とあった。なぜ丹波の一郷士へこれほどの書簡が送られてきたのか。本節では、「勤王志士束簡」に収められた書簡それぞれの解説、周辺史料の分析から見えてきた湯浅五郎兵衛を取り巻く人間関係を明らかにし、丹波に生きた、ある郷士と幕末政治をつなぐものとはなにか、考えていきたい³⁰。

2 人が由緒を語るとき

日本近世、つまり江戸時代には、武士、農民、商人、芸能民、あらゆる階層の人間が、自ら家の過去を調べて、自己の歴史とし、これが由緒として語られる。われわれは、このような由緒にさまざまなところで出会う。それは、近世大名またその家臣に関する史料が所蔵される資料館や、かつて地方において庄屋を務めた旧家、あるいは町方の商家の蔵のなかから。それらの名称は、「家譜」、「奉公書」、「由緒書」、「先祖書」、「過去書」など多様にあるが、すべて、武士や民衆、それぞれが有する由緒によって、その集団や個別の家の権利を主張し、自らのありかたをよりよい方向に向けようとするためにしたためられる。

近世の地域における由緒について分析した久留島浩は、近世を「由緒の時代」であると定義し、なぜ民衆は由緒を

語り始めるのか、由緒によって語られた言説が歴史的にどのような意味を持つのかなどを考察して、その地域の領主の交代による生活環境の変化を彼らは危機と考え、由緒を語り、領主とのあるべき関係を主張した³⁰⁾。

このような由緒は、十八世紀後半、寛政期ごろから散見されるようになり、十九世紀にはその作成と語りが本格化するといわれる。なぜ、由緒が一八〇〇年前後に語られるのかということについては、いまだその答えを得ないが、由緒の語りは、それを語る人間が置かれた社会状況に生じた変化に対する人間の対応であるといえる。十八世紀後半から十九世紀にかけて生じた社会的変動に対し、武士も民衆も、自己がいかなる存在であるのか、いかにあるべきかを捉えなおし、その結果が由緒として語られたのである。

3 湯浅五郎兵衛家の由緒

湯浅五郎兵衛家の由緒は十九世紀前半に調査された。旧世木村誌編纂委員会が作成した『園部藩別格上席待遇の郷士 湯浅五郎兵衛家由緒書』³¹⁾には、湯浅五郎兵衛家の由緒がつづられた「乍恐由緒荒増書之覚」が翻刻されている。

原本および写しは残念ながら伝存しない。この由緒書が作成されたのは天保十一年（一八四〇）七月で、この時期は全国的に凶作が打ち続き、東北地方で多くの飢餓者を出したほか、畿内地域においても米が平年の四割から四割五分しか収穫できず、米価が平年の約六倍にまで高騰し、天保八年（一八三七）に大坂で起こった大塩平八郎の乱に見られるような民衆運動が後をたない社会状況であった。

このような状況において、当時の湯浅五郎兵衛家の当主、五郎兵衛宗精（五郎兵衛宗成の先代）は、湯浅家代々の由緒を書き上げ、領主である園部藩小出家に提出した。

したためられた湯浅五郎兵衛家の由緒は十二世紀初頭にまで遡る。紀州有田郡湯浅荘を本拠とする武士団湯浅党、

その当主、湯浅有重の事歴を自家の歴史のスタートとする。

①元永元年（一一一八）閏九月七日、白河法皇の熊野山行幸の際に行宮を造営し、これを賞せられ天皇家の菊紋の使用を免許されたこと。

②平清盛より「猶子」たる恩顧を受け、保元の乱の際、後白河院より四代にわたり北面の武士を勤め、その功を賞し、丹波国氷上郡竹田荘の領有を許されたこと。

③梅尾山開祖として名高い明恵の実母を輩出したこと。

④建武新政の折、大塔宮護良親王の令旨を奉じて挙兵し、南北朝講和の折、神器を奉じ供奉上洛したこと。万里小路副房の推挙により、家祖有重以来の由緒を称えられ、丹波国世木荘を下賜され、明德四年（一三九三）、同地に移り住んだこと。

⑤山城国西岡および丹波国船井・桑田両郡を拝領した細川藤孝への加勢と、藤孝の子として生を受けた時哉（幼名、虎千代）が、天正三年（一五七五）十月、養子として湯浅家に入り、血縁関係が生まれたこと。

⑥近世の肥後藩細川家と密接な関係を保ち、園部藩小出家支配においては、除地（年貢諸役を免除された土地）を許された郷士上席の家として勤仕してきたこと。

それでは、この由緒書がなぜ作成されたのか。全国的に凶作が打ち続き、また打ちこわしなどの度重なる民衆運動によって世の中が混乱をきたしていた天保期、作成者の五郎兵衛宗精は、いまだ幼年の又左右（のちの五郎兵衛宗成）へ跡目を相続するに当たり、園部藩領の他の郷士とは「格別訛違」を主張し、「同列」に扱われることを黙止しがたいとし、家にとつてよりよい状況を次代の当主へと伝えるため、これが作成され、領主小出家に差し出されたのである。これらの由緒の真偽について問うことは、さして意味をなすものではない。重要なことは、この家が有するとされる数ある由緒が、ある郷士に「志」を芽生えさせ、幕末の動乱の世情に身を置くきかっけとなったことである。

4 「志士」とは

では、「志士」とはいかなる人々なのか。辞書的な解釈でいえば、「志士仁人として天下のために憂うる人」、すなわち「国家、社会が危機的な状況に瀕したとき、高い志を持ち、自らの身を犠牲にして力をつくそうとする人」となる。

近世中期、自らの領主の政治を暴政と評価し、立ち上がる人々。彼らのおこないは、「横議横行」（ヨコシマな議論や行動）と評され、取締りの対象とされた。つまり、近世後期から幕末という時代は、「横議横行」をある程度は許さざるをえない社会状況にあったといえる。『論語』にいう、「志士仁人は求めて仁を害することなし。身を殺して以て仁を成すところあり」との、あるべき人道論は、当時の社会情勢を批判するものたちが、「有志之士」として動いていく際の証し、あるいは行動を理由付けるためのタテマエとなった。

このような「志」を持った人間は当然、あらゆる階層、立場から出で、その行動形態はさまざまである。幕末維新期の草莽運動史を研究する高木俊輔の考察³を参考とすると、「志士」は、次のように類別できる。

- ① 大名家中や郷村という自らが置かれた枠組みのなかで運動する人（例、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、高杉晋作ら）
- ② 既存の枠組みをはずれ、江戸、京都など中央政局において活動する人（例、梅田雲浜、坂本龍馬、中岡慎太郎ら）
- ③ 枠組みを出て、地方で活動する人（いわゆる郷士、村役人層）
- ④ 世情に確固たる思想を持たず、在村にて活動する農民一般
- ⑤ 志士の活動を経済的に支援する人（例、下関商人白石家、長崎商人小曾根家ら）

湯浅五郎兵衛は、②あるいは③に当てはまろう。彼の「志士」的活動は、居住地である丹波国上木住村で、そして京都、伏見、大坂で、さらには長州において展開されていく。

5 「志」の形成と肥後藩細川家

湯浅五郎兵衛の幕末政治への「志」はいかにして形成されたのか。彼が、実際に政治の場に身をおくのは安政四年（一八五七）のこととなるが、語られた由緒が、いかにして政治への志を生み出すのかについて、これを裏付ける史料（日記、書簡など一次資料）が存在しない。手がかりは、五郎兵衛に関わりを持った人間によって書かれた史料、またはその人間のことを書いた編纂物ということになる。前出の「勤王志士束簡」の分析によって、湯浅五郎兵衛と肥後熊本藩士との政治的関係性の存在が明らかとなった。まずは、肥後藩士、なかでも特に親交を深めた肥後勤王党の人間の政治動向を分析することにより、五郎兵衛が幕末政治に対していかなるスタンスに立ち、いかに動いたのか考察していくことにする。

嘉永六年（一八五三）、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーの浦賀来航によって、日本には大きな衝撃が走った。圧倒的な力の差を思い知らされた徳川幕府は、旗本、全国諸大名、藩士、民衆にいたるまでその対応策を問う。加えて、徳川幕府の拠点たる江戸を諸外国から守るべく、江戸湾防備の強化をはかる。現在、「お台場」としてにぎわう東京湾ベイエリアを含む海岸地域に、海防のための「台場」工事が着工される。大名家は、この完成を前にして、近世を通じて担ってきた徳川將軍への軍役を遂行するため、江戸湾各所の警備に当たった。川越松平、会津松平、忍松平、彦根井伊の譜代、徳川家門に加え、長州毛利、鳥取池田、岡山池田、柳川立花、肥後細川の西南外様大名がこれに動員された⁴¹⁾。

永鳥三平は、細川家一門、長岡内膳（のち細川休焉）の臣、つまり陪臣で、国学を林桜園の原道館に学んだ。文武に長じた豪放の士と評される永鳥をはじめ、肥後藩内の人間には、桜園の思想に大きく影響された人が数多く存在した。林桜園は、肥後藩内における勤皇思想の源泉と評される人物で、藩内外に一〇〇〇名を超える弟子がいたといわれる。彼は国学者にありがちな、固陋な勤王家ではなく、加茂真淵、本居宣長流の国学に加え、西欧の兵学、天文学の研究にも取り組んでおり、弟子にオランダ語、英語の原書講読を勧め、それこそが有能な人材育成であると主張しており、当時の社会状況に対して非常にマッチした、現実的な教育方針であったといえ、多くの門下生が存在したことにもうなずかされる。

永鳥の時局観は、その師、林桜園の思想に強い影響を受けたものであるといえ、このことは肥後勤王党を組織する人間の政治視角に共有されるものであった。

次の史料は、江戸湾警備のため、肥後藩細川家が徳川幕府に提供する軍役のため上京してきた永鳥が、養父である永鳥繁平、肥後勤王党の中心人物で、山鹿流の兵学者であった宮部鼎蔵、藩主侍講として越前福井に赴く前の横井小楠らに宛てて出した、嘉永六年（一八五三）九月十日付の書簡である。

（前略）異船の儀、誠にもって、容易ならざる事に御座候処、異船帰帆後は又々元に帰り、諸詰込の人々上下酒色に沈酔つかまつり、歌・三味線に日を送り申し候段、誠にもって歎かわしき次第にて風前のともし火同然に御座候、（中略）太平を祝し、国中正義の士を遠のけ己が徒党を引き挙げ、恐れながら上の御目を暗居申し、海防凶荒の備えなどや、且つ士気を起こし、文武を奮うなどの筋申し候人は未熟と心得、子供狂人同様に取り扱い申し候（中略）当時天下の諸公いずれにも皆同様の事にて、これなりにては公儀よりも今暫くは御手も付申まじく、左候えば来年の合戦いよいよもって百敗に御座候て、御国二百余年之御武名一朝に消滅つかまつり候のみ（中略）御国

砲銃は如何に御座候や、とても兵制は日本刀・槍を本とし、西洋砲銃の節制を取り申し候て軍仕り申さず候ては勝算は御座なく候、然らば有志人々は一刻も早く西洋砲術稽古御打ち立てに相成り申したく、これまた神懸けて祈り奉り候（以下略）まじ

永鳥の問題意識は、幕末期の攘夷主義者に対するイメージにありがちな、ペリーを「夷狄」とみなし、これの掃攘を考えるとというよりむしろ、ペリー艦隊の帰帆後、なにもなかったかのようにうち過ぎし、「酒色に沈酔」し、「歌・三味線」に興じる怠惰な状況に対して向けられ、いっこうに士気の奮わない徳川幕府の姿勢を批判する。これを機に、肥後細川は西洋流砲術導入して軍備充実化をはかり、そのために少しでも多くの有志人材を発見、登用せよと求める。有能な人材をはぐくみ、軍備を近代化させること。この大きな目標は彼ら有志によって達成されようとし、その手段の一つとして、丹波のある郷士、湯浅五郎兵衛の名前が浮かび上がってくるようになったのである。

6 湯浅五郎兵衛の立志

肥後藩士松田重助は、藩主公子長岡澄之助（のちの細川護久）附属の人間で、明治に、京都府知事や農商務大臣となった山田信道の実兄にあたる。永鳥におくれて、江戸にやってきた松田は、分立する肥後藩内の党派（学校党・実学党・勤王党）を統一し、さらに藩主公子の澄之助を速やかに上京させることを永鳥と誓い合う¹⁾。

松田は、細川家の旧領山城国西岡地域（現、京都市西京区の桂川以西地域、および向日市、長岡京市、大山崎町）と、天皇家との由緒を有する大和国十津川郷の郷士を説いて、義挙の原動力とすること。そして、細川家当主の血統を引く湯浅五郎兵衛をその主将に擁立し、湯浅家が許された細川家紋である「九曜」紋の旗を掲げ、国事奔走するこ

とを誓い合ったといわれる。

永島と松田には、嘉永六年の段階で、湯浅五郎兵衛に関する共通認識があったらしい。

熊本大学附属図書館に委託所蔵される「永青文庫（細川家文書）」に、「丹波国湯浅左右司御助力願一卷控」と題された史料が存在する。これは文化六年（一八〇九）に細川家によって作成されたもので、「丹波国郷士湯浅左右司儀、追々御先祖様方御由緒有之候二而、先年御国え罷下り御助力筋之儀願出」たことへの細川家サイドの対応と、助力を請う湯浅家の状況を認めたものである。この史料によれば文化年間、細川家は湯浅家が主張する細川家先祖との由緒を「一向不相分候付御取上ニ相成不申」と、一旦は拒んだが、湯浅家からの度重なる歎願に対し、細川家においてもその検討を余儀なくされ、丹波国世木村の位置や、湯浅家周辺の状況などが記されており、湯浅家が語る由緒は、細川家においてもある程度理解されていたと考えられ、この延長線上に、松田重助と湯浅五郎兵衛との会同をみいだせるのである⁴⁵⁰。

安政四年（一八五七）五月、松田重助は、丹波国上木住村の湯浅家を訪れ、共に混沌とする国内政治に対し志を立て、立ち上がるべきと説得をおこなう。五郎兵衛の志は、肥後細川側の言い分によって、はなはだ受け身であるかのように見える。実際に、以後の湯浅五郎兵衛の活動形態から考え、肥後細川、なかでも肥後勤王党の代理人的存在であったことは間違いなからう。ただ、これまでの生活環境を投げうって、国事に奔走することを選んだ五郎兵衛には、その志の方向性を定める用意はできていたと考えてよい。段階を追えば、中世から近世移行期における細川幽斎との関わりが、文化年間に由緒としてアピールされはじめ、また天保年間には、細川家と結びつきが非常に深いことによって、自己を正当なものへと位置づけている。その家の由緒を知り、丹波郷士である自らが時局に対してなにをなすべきかを悟っていたのではないか、と考えたい。

国事への奔走を誓い合った五郎兵衛と松田重助は、京都に出て、当時、小浜藩を脱し、京都において望楠軒という

塾の講主をしていた梅田雲浜や、彼の門弟で、川島村（現、京都市西京区）の有力な郷士であった山口薫次郎とその行動方針につき協議する。この折、梅田をはじめとする志士は、異国船を江戸湾ではなく、大坂湾に迎え入れ、これを遊撃する計画を立てていたといわれる。これにともない、天皇が住まう禁裏に危険が生じるということで、玉座を高野山へ遷す計画が作られた。この準備として、五郎兵衛と松田は京を発って高野山に赴き、同所の塔頭西法院に滞在し、同所を拠点に入説活動をおこない、西法院の住職をはじめとする高野山関係者に同意を得たとされる。同年十二月、帰京した五郎兵衛らは、川島村山口薫次郎邸を拠点として、同志の糾合に努め、翌安政五年（一八五八）五月、丹波国世木村に帰郷する。

折悪しく、同伴した松田に細川家および徳川幕府より脱藩および隠密工作の嫌疑がかかった。松田はすぐさま丹波をあとにし、湯浅五郎兵衛と縁のある河内国富田林の庄屋越井庄助方に身を寄せる。この越井庄助などは、志士の前出の分類④または⑤に属する、後方支援型の政治運動家といえよう。同地において越井らの斡旋のもと私塾を開いた松田は同志を募り、のちに天誅組河内勢の主要メンバーとなる水郡善之助、三浦市之助、長野一郎ら河内郷士と面識を得る。五郎兵衛も、おくれて河内に入り、松田と行動を共にしたといわれる。松田重助が、知己の国学者藤本鉄石に出した書状には、「扱兼而御噂申上置候丹州湯浅五郎兵衛罷出候間、無御隔意御教示被成下候様奉願上候、未タ未熟人ニ御座候得共、性質義勇之士ニ御座候間、御難題ニ罷成候ハ、追々用立之見込御座候、何分宜敷奉頼候」と、安政大獄の折、幕吏に追われ、潜伏中の自らに代わり、五郎兵衛を用立てよう紹介している¹⁰。大正五年（一九〇〇）に発行された『船井郡世木村誌』所収の「湯浅五郎兵衛伝」のほか、五郎兵衛事績に関する説明文などからは確認できないが、松田は、富田林にとどまらず、京都の青蓮院宮尊融法親王（のちの中川宮朝彦親王）へ入説し、また、密かに熊本に帰り、藩情の確認に赴いていたことが、『改訂肥後藩国事史料』所収の史料から確認でき、五郎兵衛の行動について、松田に同じく、さらに活発化していったことが推察される。

7 肥後細川・湯浅五郎兵衛の政局観

文久二年（一八六二）、大名家の政治運動が活発化していく。文久二年四月、薩摩藩主島津茂久の父、島津久光の率兵上府をめぐる国事周旋運動はそのさき駆けとなる⁴⁸。

この久光の行動は、徳川幕府に軍事を発動した、それ自体が例外的で、歴史上の大事件としてとりあげられるが、さらに言えば、久光の行動は、諸大名家に絶大な政治的インパクトを与えた。ことにそれは、薩摩の隣国、肥後細川においては他の大名家にも増して、なおさら強いものであった。

次の史料は、肥後勤王党の中心的人物で、林桜園門下の魚住源次兵衛が、文久二年三月、藩政府宛てに提出した建言書の一部である。

（前略）此節島津和泉殿（久光）出府の儀は、容易ならざる筋もこれ有り候段承り申し候間、御近藩の儀その俣聞き捨てには罷り在りがたく（中略）いよいよもってこの節は京師において義挙これ有り候様子（中略）方今天下有志の諸大名より御当藩を概見つかまつり居り候所は、癸丑（嘉永六年）以降の御処置を根とし、彦根藩純粹の御同意と存じたてまつり候趣にて、（中略）肥後人と申し候えば、幕府の間諜同様に見なし、耆人もその国情を明かし、その内実を語り候はこれ無く、（中略）勤王は列藩のみに致させ、御当国よりは一人も義徒これ無くては、事成乱平の後、何の面目あり、天下の人に面を合わせ申すべきや（以下略）⁴⁹

魚住は、文久二年三月段階で、薩摩、長州ほか大名家による率兵上京がおこなわれるのと、時をおなじくし、京坂

において志士たちによる義挙が決行されることを前提として、藩政府に奮起を求めるも、これへの参加にあたって、細川家には大きな障害があるという。それは、嘉永六年、ペリー来航以後の肥後細川の政治方針が、安政大獄による徳川幕府の肅清行為によって志士の命を奪った当時の大老井伊直弼のそれと同様にみなされ、すなわち徳川幕府のスパイと目されており、だれ一人として胸中を明かすものがない。肥後細川からも義挙に参加し、活躍できうる人物がなくては細川家臣として、天下に対し面目が立たないと述べる。

魚住ら肥後勤王党は、一門の長岡内膳（のちの細川休焉）に「備」（大名家の軍制上の単位）を編成させ、上京を画策するも、正面から事をおこせば、徳川幕府の威光に背く形となるから、丹波国に隠密裏に兵を派遣し、湯浅五郎兵衛を首領として、挙兵することを計画する。この折、松田重助は、九曜の紋入の大將旗と兵士の着用する一〇四個の肩印を拵えて、持参し、出陣に備えたが、この義挙に同調していた久坂玄瑞ら長州勢との足並みが揃わず、計画は未遂に終わる。

この折の五郎兵衛は、なにか祭り上げられた感が否めないが、挙兵計画当初、五郎兵衛が、文久二年五月、肥後藩京都屋敷の留守居衆中に宛てて出した願書²によれば、少々、見かたは異なる。湯浅五郎兵衛は、助勢を志願するも、一八〇あったとされる家来筋の家々への手当てが滞っていることを憂慮している。また、事が起これば、すぐさま肥後藩京都屋敷へ駆けつける所存であるが、家来を含めて武備が調っていないので、相応の武具の拝借を細川家に求めている。さらに、「公武御合体神州之武威を海外ニ輝候御儀ニ相成候歟」と、長州藩長井雅楽による京都入説の成果をふまえつつも、兵端が開かれることは確実であるとし、「嶋原御陣之砌先祖時哉儀、人数召連罷下り御助勢申上候節、御意之趣も有之、代々申伝候家訓も御座候間、若非常之節ニ至候ハ、何方ニ不限御旗本ニ駆付候は勿論、家格相守申居候」と、寛永十四年（一六三七）島原の乱の際、当時の当主、五郎兵衛時哉が率兵し、細川家に加勢したことを上げ、何時でも、細川家を助けるのは、家訓であるとしている。

文久二年の志士による義挙は未発に終わったのであるが、湯浅五郎兵衛は、その由緒を根拠として、積極的に細川家に働きかけをおこなっていたのである。五郎兵衛は、兵を収めて、帰郷したが、その折、園部藩より不穩の策謀につき糾問され、捕縛、一五〇日間の入獄を余儀なくされる。

五郎兵衛の釈放に当たっては、肥後藩細川家はともかくとして、長州毛利からの働きかけがあったとされる。五郎兵衛の釈放に一役買った長州藩毛利家は、彼の政治的有用性に目をつけたと考えられる。

8 「志」のつながり

釈放後、ふたたび京都に出た五郎兵衛は、長州藩毛利家とその結びつきを強めていく。文久二年十一月、長州勢は、京都の本陣として天龍寺の借用を求め、その幹旋を川島郷士山口薫二郎と湯浅五郎兵衛に求めたとされる。『船井郡世木村誌』には、湯浅らは、天竜寺門前、嵯峨において材木商を営んだ福田利兵衛を毛利家に紹介し、天竜寺の借用を助けたと、記される。福田は当時、長州藩用達として、京都における藩業務の委託を受ける存在であったので、湯浅による仲介は必要なかったはずであるが、長州勢が、京都において自由に動き回ることができる代理人的な存在に必要性を見いだしていたことは間違いない。

五郎兵衛は当時、分家枿屋湯浅喜右衛門家を、近江出身の志士古高俊太郎²³に継がせ、同家を京都の拠点として活動を展開していた。活動内容については定かではないが、枿屋に出入りする長州、土佐、鳥取などの藩士と面識を得、その志の連携を図ったといわれる。

しかし、文久三年（一八六三）八月、長州藩を政局から一掃させようともくろむクーデター（文久三年八月十八日の政変）が勃発し、同時に、前侍従中山忠光を首領とし、土佐藩吉村虎太郎ら天誅組挙兵、前後して但馬生野でおこ

った同志たちの挙兵が鎮圧されるや、志士糾合により展開されてきた政治運動は、破綻をきたしていく。

この志士による政治運動の破綻を食い止め、くわえて政変によって、冤罪を被った長州藩の政治復権をはかるべく、翌元治元年（一八六四）六月、京都において、肥後脱藩の志士宮部鼎蔵、同じく、肥後脱藩で、湯浅の同志であった松田重助および長州勢は密議をおこない、京都において義挙決行を企てる。この折、宮部らは、禁裏に火をつけ、天皇を奪おうと画策したとされるが⁵²⁹、これがふたたび、新選組の探索によって明るみにで、京都三条の池田屋の密会現場にふみこんだ近藤勇ら新選組と乱闘（いわゆる池田屋事件）となり、宮部、松田ら志士の命が失われることになる⁵³⁰。

池田屋事件後、湯浅五郎兵衛は新選組による捜査の目を潜り抜け、伏見、堺、岡山、そして長州へと姿、名前を変えて、潜伏し、ふたたび、慶応二年（一八六六）正月、京都に戻る。

現在確認できる彼の事績のなかで、その底本となっているものが、西川太治郎編『池田屋事変殉難烈士伝』（一九〇四年）である⁵³¹。実証にもとづいて書かれた書籍とは考えにくく、記述をそのまま鵜呑みに解することはできないが、ここでは、湯浅五郎兵衛を理解するための指標として用いることとしよう。

池田屋事件の混乱のなか、五郎兵衛は、川島村革島兵庫（有尚）宅へ向った。革島家は、湯浅五郎兵衛家と同様に、肥後細川との縁故を有した葛野郡川島の有力郷士で、志士として活動を展開していた⁵³²。だが、革島家へも捜査の手が伸び、五郎兵衛は肥後藩京都屋敷へ匿われることとなる。このうち五郎兵衛は大坂へ向かい、一ヶ月ほど隠匿したのち、堺の樽屋政次郎宅、「鉄砲職人住屋栄吉」と名を変えて潜伏。約一年を過ごすも、慶応元年六月六日、樽屋に会津藩捕手十三名がおしかけるや、再び逃走する。

慶応元年（一八六五）六月八日、川嶋村革島兵庫を訪れたのち、鳥取藩士で周旋方の松田正人のとり成しで鳥取藩伏見屋敷に約二十日潜伏する。鳥取藩士を介して、備前岡山にて同藩士斎藤治部之助、同藩家老の土倉弾正と会話し、

同所に潜伏中の水口藩士豊田謙次とともに、八月、山口へ向う。同地において、笠間藩の出身で、当時長州藩校の教授を務めた加藤有隣や二見一鷗齋と会同。「攘夷先鋒摂海総督の重任」を長州藩主毛利敬親に任ずるよう、関白二条斉敬に願ひ出ることに決し、一応齋とともに、上京の途につく。「売薬商関亦蔵」と名を変えて上京した五郎兵衛は、二条斉敬と関係が深い山中法橋を通じて願書を提出に成功し、ふたたび山口に帰る。

慶応元年十二月二十八日、五郎兵衛は、長州藩桂小五郎、品川弥二郎および薩摩藩黒田了介、土佐藩田中光顕らに同道して、周防三田尻より船にて兵庫へ向い、同所通航中の薩摩藩船に便乗し、薩摩藩大坂蔵屋敷に入る。翌日、伏見にあった薩摩藩用達方において西郷吉之助、黒田嘉右衛門と面会し、のち薩摩藩京都屋敷に十日間滞在することとなる。桂ら長州勢の上京理由が、薩摩藩島津家との攻守盟約締結のためであることはいうまでもないが、盟約締結前、薩長両藩の政治的緊張関係に五郎兵衛は直に接したこととなる。

こののち、王政復古を唱えて、朝譴を被り蟄居の身であつた急進派公家鷲尾隆聚邸において、慶応三年十月まで潜伏し、政治活動に従事する。

さて、池田屋事件から鷲尾邸潜伏にいたるまでの五郎兵衛の足取りについて考えると、以下のことがいえる。まず、五郎兵衛の政治活動の幅が、以前にも増していたいへん広くなっている。肥後勤王党の政治方針になかば沿うかたちであつた彼の行動が、長州藩毛利家、鳥取藩池田家、岡山藩池田家、そして薩摩藩島津家と関係を持つことにより、当時の政情に見合つた運動へと転化している。長州毛利との関わりは、前述のとおり、本陣および藩邸用地の取り成しや、榊屋を政治拠点とする政治運動から生じたものであろう。鳥取池田家については、池田屋事件前後において、長州毛利への加勢の是非をめぐり、在京の周旋方と藩当局との間で紛糾していた。なかでも鳥取藩周旋方の松田正人（のち道之）は、毛利家への加勢を標榜し、藩当局と政論を異とする人物であり、五郎兵衛のつながりは、毛利への加勢を是とする在京周旋方との間で生じたといえる。松田によつてできた、志のつながりは、岡山池田へと続いていくこ

となる。

五郎兵衛らが唱えた、元治元年七月の禁門の変以来、「朝敵」となり、公的な処罰の対象となっていた長州藩主毛利敬親を「摂海総督」に就任させようとする主張は、当時、「禁裏守衛総督摂海防御指揮」として徳川慶喜が在京の政治勢力を統括するという徳川幕府のありかたを真っ向から否定する、急進的で、かつ固陋な攘夷主義とも解することができる。しかし、慶応元年閏五月、徳川幕府は、將軍徳川家茂が進発上京して、孝明天皇より長州再征勅許を得ようと動きはじめており、これに対し防長近隣の領主、なかでも岡山池田、芸州浅野などが止戦を唱え、大坂湾における「攘夷」行動を主張することで、内乱状況を回避しようと政治運動を展開されていた。五郎兵衛の求める攘夷行動についても、このような内乱状況勃発の可能性をふまえ、長州藩毛利家の政治的復権と攘夷行動によって諸外国へその意識を向けさせる。慶応期、長州戦争に際して唱えられる攘夷論には、外国への攻撃が想定されず、国内政治の方向性を正す時の手段として主張されることが多い。政情を自ら考え、あらたな政治潮流を生み出そうとした五郎兵衛は、もはや、肥後細川のみの特権的志士ではなく、世情が望みうる、主体性を持った志士へと転換を遂げていたといえる。

現在、確認できうる湯浅五郎兵衛に関する人物評には、長州において、薩摩藩との提携に尽力したことや、薩長盟約を締結するべく京都にやってきた長州藩木戸孝允に同行したことが強調されて記されているが、実際にこれを裏付ける史料は残っていない。しかし、薩摩・長州両藩の提携は、もはや第一次長州戦争後の政治状況においては、両者が選ぶうる有力な選択肢となっており、このことは当時、長州に赴いていた肥後勤王党出身の人間や、内乱回避を目指す防長近隣の大名家の主張からもうかがえ、五郎兵衛もこの結びつきを影から支える存在であった可能性は大いに考えられる。

慶応二年正月から約二年弱、潜伏先となり、行動をとにもすることになる公家、鷲尾隆聚との政治的関係および活

動内容は未詳であるが、「勤王志士束簡」中、五郎兵衛に対し、鷲尾隆聚を訪問したことを報じた肥後藩士上野堅吾の書簡、維新後、五条県（現在の奈良県の一部）知事となった鷲尾に対し、弟子を雇用してもらおうと、五郎兵衛に紹介を求める笠間藩出身の学者加藤有隣の書簡からも、慶応二年から翌三年における湯浅五郎兵衛と王政復古派公家の親密な関係性をうかがうことができる⁵⁶⁰。

9 「御一新」がもたらしたもの

慶応二年（一八六六）十月、肥後藩京都留守役浅井新九郎、同役井口貞助ら在京の肥後藩士によって京都守護職会津藩松平家および園部藩小出家に対し、五郎兵衛の嫌疑がはれるよう照会がなされた。前述のとおり、五郎兵衛は鷲尾邸に潜伏中であり、丹波国上木住村に戻ることでできない身であった。翌三年十一月、五郎兵衛は園部藩小出家より、寛大な領法によって裁かれることとなり、自邸へ帰宅の上、蟄居が命じられた。時すでに、將軍徳川慶喜より朝廷に対して大政奉還がなされ、約二百六十年つづいてきた徳川の世が終焉を迎えていた。

「御一新」の後、元号が改まった明治元年（一八六八）九月、五郎兵衛は、肥後藩細川家より「外向御用懸京地詰」（京都駐在の国事周旋役）就任を求められ、藩より正式な扶持を与えられた。また、翌二年二月、岩倉具視より附属を命じられ、京坂地域の政治情報収集に当たった。同職には、「勤王志士束簡」に書簡が収められる肥後藩士加屋栄太らも就任した。同年六月には、桂御所奥警衛役となり、同所の警護をおこなった⁵⁶¹。

以上のことは、大名家主体に展開された政治運動の影となってきた五郎兵衛の「志」が大名家および、明治政府により公認されたことを意味しよう。とはいえ、湯浅五郎兵衛の「志」はこれをもって成就されたのであろうか。ありがちな武士身分への上昇志向のために、彼は私財を投じ、妻子を入牢させてまでも、諸所を転々と潜伏し、渡り歩か

ねばならなかったのか。

ここで先にみた天保十一年（一八四〇）七月、先代の五郎兵衛宗精が作成し、園部藩小出家に提出した由緒書の意味を思い返してみたい。五郎兵衛宗精は、幼年の又左右（のち湯浅五郎兵衛宗成）へ跡目を相続するに当たり、藩領に居住する他の郷士とは「格別訳違」を主張し、「同列」に扱われることを嫌った。それは、家が未来永劫にわたり存在し続けていくためであった。五郎兵衛宗成においても、政情混沌の折、自家の歴史を見つめなおすことで自らの立ち振る舞い方を定め、たとえ生命への危険性があれども、「志」の赴くままに行動していくことが、彼自身を、そして家を守る手段であると判断したからではないか。家が続けていくため、由緒がしたためられ、ここからあるべき自己が確認されて、「志」が生まれる。そして、「志」によってなされた事柄が、またひとつの由緒となつて、次代を生きる人間のアイデンティティとなる。この連関構造が現代に至るまで連綿として続いているからこそ、われわれが存在しうるのである。

小 括

明治四年（一八七二）七月、明治政府は廃藩置県を断行し、旧大名家による政治分立の状況を改め、中央集権化をはかった。旧大名たる細川家より禄を受けていた五郎兵衛も、同年七月、肥後藩京都屋敷引き払いにより、その職を解かれ、丹波に帰郷する。彼は、その後、政治に一切目を向けることなく、明治四十二年（一九〇九）九月十三日、七十五歳でその一生を終える。幕末期に、彼を突き動かした「志」は、もはや彼自身の口から発せられることはなかった。

明治二十三年（一八九〇）五月、前年の市制・町村制に続いて、郡制が公布され、近代地方行政の制度的定着がは

かられた。公布されたとはいえ、旧制度の整理、転換事業との兼ね合いで、直ちに施行というわけにはいかず、京都府内の郡制施行は明治三十二年（一八九九）までずれ込む形となった。

このようにあらたな地方行政制度が立ち上がるうとしていた明治二十年代後半、丹波の地において、湯浅五郎兵衛の功績を称えるべきとの声があがる。「志士」湯浅五郎兵衛の行動を、地域の功績として称え、あらたにできあがる船井郡域、ひいては、桑田郡を含む「丹陽地域の誇り」として、その精神的支柱に据えようとするプランである。

具体的には明治二十年代、政府が推進してきた維新功労者の調査、顕彰とその証しとしての位記書・位記贈与通知書の授与（贈位）事業を、湯浅五郎兵衛にも適合させて、実現させようという動きであり、実際、五郎兵衛への従五位贈与は、大正四年（一九一五）に実現の運びとなる²⁰⁰。

湯浅五郎兵衛の例に限らず、明治二十年代後半から昭和初年にかけて、忘れ去られていた幕末期の志士を顕彰する動きが、各地で見られるようになる。「志士」の出身地では、石碑が建造されて、その事績が碑文にしたためられ、また「郡誌」、「町誌」などの書籍には、崇高な業績として説かれた。このことは、志士の行動を、国のために出征してゆく「臣民」像と重ね合わせることで、近代日本人の「あるべき」モデルを創造したことにほかならなかった。このような行為は、志士であったことに対する評価を一人歩きさせ、明治維新という時代変革そのものをも手放しで賛するという現象を生み出したのであった。

第三節 山中静逸と幕末政治 ―「柳ノ図子」がつかないだもの―

1 静逸という人物

山中静逸は、幕末の三河国が生んだ「志士」と解される人物である。彼の故郷にあたる三河地方では、維新後、政界からの離脱した後に名乗った「信天翁」の号で聞こえた人物であるが、当該期の史料と向き合うわれわれにとって「静逸」の号が親しみ深い。よって、ここでも「静逸」と呼ぶことにしたい。

静逸の事歴として明確であるのは、王政復古を推進した公家として著名な岩倉具視との出会い以降である。すなわち、青年期に政治への志を抱き、政治世界へ結びついていく様については、後年に書かれた履歴の文脈とわずかにうかがえる政治事象の点のみが事実として看取されるのみなのである。ただ、それは静逸に限ったことではなく、幕末期に政治的に動いた「志士」とよばれた人びとの大半にいえることである。ここでは、静逸の政治世界へのかかわりかたについて考えたい。

まず、その人物像について確認しておきたい。静逸は、文政五年（一八二二）、三河国碧海郡棚尾村東浦の豪農であった山中有功の二男として生を受けた。幼名は松寿、通称は帯刀・春助・俊助、のち七左衛門と改めている。山中家は、同地の素封家として著名で、天明年間以降、棚尾村が沼津藩領に編入されてからは、藩主より「永代御用達肝煎」を命じられた家柄であった。そのような経済的背景もあり、青年期より大坂に遊学し儒学者篠崎小竹の塾「梅花社」で儒学を、また伊勢で津藩藤堂家の侍講を務めた斉藤拙堂に経史を、公家の三条西季知に和歌を学んだとされる。

安政年間には京に赴き、梁川星巖・梅田雲浜・頼三樹三郎・藤本鉄石ら著名な学者と交遊し、反体制的に動いた彼らを肅清した安政五年（一八五八）の安政大獄に際しては、静逸は危うく難を逃れた。

文久三年（一八六三）、将軍徳川家茂の上洛に際して建白書を奏上して、日本の国防上の問題、人材育成の問題を主に提言したが実現しえず、文久三年八月十八日の政変以降、急進的政治運動が否定されるに至り、所在を洛北の曼殊院門跡に求め、門跡家臣に附属して修学院村（京都市左京区）に隠棲した。慶応元年（一八六五）、岩倉村の幽居に隠遁していた岩倉具視の知遇を得て、自説の実現に向けて邁進していく。本節の素材はさしずめ、この時期の静逸とその周辺ということになる⁶⁰。

慶応四年（一八六八）二月、内国事務局権判事、同年閏四月、会計官駅通司知事、十二月、行政官弁事など、立ちあがったばかりの明治新政府の実務を担当し、明治二年七月以桃生県（のち石巻県）権知事に就任して以降、戊辰戦争の爪痕残る東北地方に赴任し、明治三年十二月以降、伏見宮家、閑院宮など皇族諸家の家令を務め、明治六年（一八七三）、職を辞したのち書画、詩文に親しむ暮らしを送った。明治八年、嵯峨嵐山に山荘を築いて「對嵐山房」と称し、文人、墨客を友とした⁶¹。

2 「志士」と「草莽」

われわれには、明治維新期の人物であると聞き及んだだけで、「志士」か「勤王」か「攘夷」か、というような、当該期の既成概念への反発分子をイメージし、彼らをその旧体制を打ち崩した「正義の士」と考える一般認識がある。このような事実は歴史を重んじ、過去の事実を現在の拠り所としてきたわが国においては、至極もつともな感覚であろうと思われる。

ただ、明らかに、「志士」と呼ばれた人間に対するイメージとその実像は大きく異なる。さらにいえば、実像を捨象しても肯定的なイメージができればよいという意識が強く働いている。事実、歴史上の人物には、その見方によって多様性が存在する。日常と非日常。家内での役割（父、母、長男、庶子など）と社会的な役割（武士、商人、職人、農民など）。それぞれの状況にあった人物像が想定されて、歴史理解がなされていく。日本近代の歴史学は、先人をいかに顕彰し、その功績をいかに後世にとどめていくかにその力点が置かれてきた。それはキラ星のごとく編まれた伝記の存在によってもうかがえよう。しかしながら、人物の考察は、顕彰するのみならず、対象となる人物の歩みを正も負も、ともに受け止めて分析することにより、はじめてその深化がなされる。

では「志士」とはいかなる人々なのか。辞書的な解釈でいえば、「志士仁人として天下のために憂うる人」、すなわち「国家、社会が危機的な状況に瀕したとき、高い志を持ち、自らの身を犠牲にして力をつくそうとする人」となる。江戸時代中期、自らの領主の政治を暴政と評価し、立ち上がる人々。彼らのおこないは、「横議横行」（ヨコシマな議論や行動）と評され、取締りの対象とされた。その意味でいえば、幕末という時代は、「横議横行」をある程度は許さざるをえない社会状況にあった。『論語』にいう、「志士仁人」のあるべき人道論は、当時の社会情勢を批判するものたちが、「有志之士」として動いていく際の証し、あるいは行動を理由付けるためのタテマエとなった。

このような「志」を持った人びとは当然、あらゆる階層、立場から出で、その行動形態はさまざまである。西郷吉之助、大久保利通、木戸孝允、高杉晋作ら大名家中という自らが置かれた枠組みのなかで運動する人びと。梅田雲浜、坂本龍馬、中岡慎太郎らのように、既存の枠組みを抜けて、江戸、京都の中央政界に活動の場を求める人びと。枠組みを出るも、地方で活動する人びと。いわゆる大多数の「郷土」や「村役人」層であり、これらの人びとの行跡は、現在まで地域史研究で掘り起こされ、「身分的中間層」として研究がなされている。さらに、上記の活動を経済的に支援する人びと。例としては、薩摩藩および長州藩を経済的に支援した下関商人白石正一郎、坂本龍馬ら海援隊を支援

した長崎商人小曾根乾堂などが挙げられよう。

ここで、彼らを「志士」とひとくくりに呼称しているが、「志士」という言葉は、当該期に彼らによって慣れ親しまれたものではない。ましてや、人間の理想像としての「志士」を自称することは、奢り高ぶった人間と解されたはずである。静逸ら、後ろ盾を持たずに、政治世界を志す人びとを、長州藩の教育者であり指導者であった吉田松陰は、「草莽」と呼び、彼らの活躍を「草莽崛起」という言葉で表した。

三河国碧海において豊かな経済環境のなかで育まれたものの、家督を実弟の猗（竹寿、七平）に譲り、京を活動の場とした山中静逸は、松陰に期待され、時代に待望された、本当の「草莽」であり、「志士」であったといえる。

3 「建白」というおこない

「草莽」あるいは「志士」と呼ばれた人びとの政治活動は一樣ではない。個々人、それぞれのパーソナリティの問題もあるが、属する組織や置かれた環境の性格が行動を規定していくのである。

京の政治世界をリードするべく、政治世界のなかに害悪を探り、これを殺して首をさらす、いわゆる「天誅」という名の人斬りという暴力的行為を重ねておこなっていくもの。京に入り、志を同じくするものと密議を重ね、構想の実現を模索するもの。彼らは、書面の内容を練り上げ、幕府や大名、宮廷社会に関係するしかるべき人物に託ける。これが「建白」という知的な「志士」的政治活動であり、静逸の政治活動の典型であるといえよう。

静逸は、文久三年三月七日付で朝廷に建白書を呈している。実際、どのようなルートでこの建白書が朝廷に呈されたのかは定かではない。ただ、文久三年三月という時期は、これに先んじて、宮廷内には「国事御用掛」「国事参政」「国事寄人」というあらたな役職ができ、その格式に応じて編入され、多くの公家が「国事」に向き合う状況にあっ

た。また、禁裏御所の東側に公家子弟の教育機関として所在していた「学習院」が、上京してきた大名家臣の出入りを容認するようになり、同施設が公家と大名家臣が共有できる政治サロンと化していたことも事実であった²³⁾。ゆえに、静逸ら、政治活動の場を京に定めた人びとの思いを受容できうる環境は整っていたといえるのである。

ここに山中静逸の建白書の全文を掲げる。文久三年三月に呈されたこの建白書こそ、幕末期における静逸の政治理想である²⁴⁾。

方今言路洞開草莽微賤の者、寸衷申上候も御取上に相成、御寛大之思召難有御時節に付、不顧失礼奉申上候、誠に恐多くも日夜宸襟被為悩候て醜夷掃攘の秋に相成候て、英賊より三ヶ条過言申出、幕府にて八日期限に弥戦争に一決被及候段、此期限一日も遅滞難被遊、彼より戦争相早め候段誠天幸之至に御座候、全叡慮御至誠之被為徴、神宮を始奉り御代々様御呵復の至にて天運回復皇威四海之外照臨し給ふ御儀に奉存上候、先日松平大膳大夫殿より献言仕候、賀茂両社御参詣男山迄御親征の両際、聖意被為可候御儀候、或近日両社へ御参詣の行幸被為在候と近世の御盛典被挙候御義に奉存上候、男山迄御親征の義も是非被為行候様奉存上候、摂海へ夷艦蘭入仕候は、即時にも御鳳輦被為前候は、天下の志忠憤義烈平坐に百倍仕候、所謂運用の妙存於一心候儀に御座候、御親征の御一挙は天下の安危に係り候儀に付、御用意今日より被仰出置候様に奉存上候、公卿国事御周旋の御方、武官兼仕の御方、摂州ノ海陸地理風土一覽被遊置度候、戦争に及候節軍士と策略御商議被遊候にも地理風土御不案内にては御名謀の難被行儀も御座候に付、近日に摂海へ御賢名の御方御見分に被発候様に被仰出候奉存上候、御親兵の儀急務の至用に御座候て、此度幕府並列藩より奉貢兵と奉存上候、是迄大内御手薄に付御直臣の人数御少分被為在、御兼官にて御勤被遊御神事御礼式等も御省略勝に被為成候御儀に付、百官の内未勤者并草莽の者文道武事に心掛有之、謹慎の輩を拔擢御召仕被仰出、御親征の供奉嚴重の御備被遊、且平日は禁闕の御守衛仕、夫々の

任被仰付候様奉存上候、学習院御間狭に付御開拓被遊武備も同院中に御開被遊公家之御方にも武芸も御稽古被遊候様奉存上候、かゝる天運回復の時に御決候、御神事御礼式之御開典の分一に御再興被為在、御基本厚大に被為遊、御聖業被為行候に少も御差支被為在候様の御所置被遊度奉存上候、此後攘夷一度にて被為済候哉、又は不時に突入も難凶候、摂海は己に列藩防御有之候得共、三丹州若州辺未た守備不行届候様奉存上候、此度幕府並列藩へ献言被仰出候て十分に御衆議被為参候て万世盤石之御備被為立候様奉存上候、私頼微賤井蛙之程見を以妄言奉申上候、重々恐入候段御海涵之程奉冀上候、恐懼謹言

癸亥三月

山中静逸 献 印

国事御掛御役人中様

静逸の建白書作成のきっかけになっているのは、「英賊より三ヶ条」、すなわち、前年八月、武蔵国橘樹郡生麦村（現、神奈川県横浜市鶴見区生麦）付近において、島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人を、供回りの藩士が殺傷した事件、いわゆる生麦事件に対して、イギリスから問われた賠償要求である。早期にイギリスとの戦争に踏み切らねば、「皇威」を維持することにはならない。

また、長州藩毛利家によって呈された「賀茂両社御参詣男山迄御親征の両際、聖意被為可候御儀」、すなわち、上賀茂・下鴨両社および八幡の石清水八幡宮への行幸について、肯定的な意見を有する。「天皇親征」は静逸の政論の基幹をなすものであり、岩倉具視の「王政復古」志向と相通ずるものである。さらに、「摂海」、すなわち大坂湾に出現する異国船への対応を嚴重化するために、政治や軍事に素養のある「公卿」を大坂湾に派遣し、実地踏査をおこなわせることで、大坂湾警備の重要性を認識させるべきである。

前年、長州藩士らによって主張されていた「御親兵」の設置も急務と説き、ゆくゆくは決行されるであろう「親征」

に備えて、暫定的に禁裏守衛の任に当たらせるべきである。

「学習院」への関心は、静逸ならではと評してよい視点である。静逸は、「学習院御間狭」であることを批判し、公家への武芸鍛錬をおこなうべく、施設の拡充を求める。さらには、ここで鍛錬された公家たちを、防衛の手薄な「三丹州」、すなわち丹波、丹後、但馬、さらには若狭国に配備し、要所を固めさせることを主張している。

静逸の政論の基幹は、「攘夷主義」による日本の国防強化に置かれているが、その主体となるのは、既成の軍事力である徳川幕府や大名家の軍事力のみに限定されていない。ことに、公家の武装、武備強化に置かれているのが特徴的である。ゆえに、政治サロン化していた学習院ではなく、公家を鍛錬する機関として、改正するべきと考えたのである。

静逸にとっては不本意ながら、公家の親兵化を旨とする文久三年三月の政治主張が、具現化することはなかった。京都の政治ネットワークのただなかにいるとはいえ、自身の主張を政論として実現しようとするならば、この政論を受け止め、推進していく人物が必要であった。前年に父の遺訓を継ぐ形で宮廷政治にかかわりはじめ、九月二十一日、攘夷にかかる「特別の勅使」に任命されたのち、二十八日には、中納言へ推任され、十月七日、議奏職に就任した三条実美は、その大いなる可能性として存在した。文久三年八月十八日、廷内急進派の一掃という形で、三条実美の政治転機があまりにはやく訪れたことも、静逸らの見解の具現化を遠ざける形となった。

「草莽」における「建白」とはなにか。それは彼らの政治主張であり、さらには政治機会が保証されない彼らが、その可能性をたぐり寄せるための、「名刺」代わりのおこないであったのである。

4 「柳ノ図子」という通路

幕末の京に集う「草莽」はそれぞれ、それぞれの思いを受容しうる器を欲した。

松尾但馬は洛西に所在した古社、松尾神社の諸家の当主で、六位を叙せられて蔵人所に属し、昇殿を許されて宮廷内の雑務に当たったので、「非蔵人」の職階にあつた。また、公家山科元行の実弟である但馬は、文久元年（一八六一）、皇女和宮が將軍徳川家茂の正室となるための降嫁が議論された折に、活発に主張を展開しはじめ、廷内における降嫁推進者であつた天皇近習、岩倉具視と交誼を結ぶようになった。

しかし、岩倉が、降嫁の主導を理由に廷内の奸物と目され、文久二年（一八六二）八月、辞官落飾のうえ、九月、洛中を追放されたのちに、疎遠となつたが、岩倉村に居を定めて幽閉の身であつた岩倉からの便りが再び二人をつないだ。

慶応元年（一八六五）、松尾但馬は、同志、藤井九成と連れ立ち、岩倉村幽居の岩倉を訪問した。当時、松尾と藤井は内裏の北側、今出川上ル室町に住居していた。「柳ノ図子」と呼ばれた内裏のはずれの地所には、草莽の多くが足を運んだ。静逸もその一人であつた。岩倉と接触した面々は誰か。「岩倉具視関係文書」中の「藤井家記録写」には、松尾家および藤井家へ出入りしていた「柳ノ図子党」の面々が記されおり、長州藩の久坂玄瑞、土佐藩の武市半平太・中岡慎太郎、肥後藩の松田重助のほか、三十名以上の人名が列記される。彼らと岩倉との関わりについては、岩倉の述懐談があるので、おおよその状況がうかがい得る。

乙丑の歳、松尾・藤井二子偶然予の門に至り旧盟を續く、因て幸いに予の志を言うことを得たり、藤井子すなわち香川子を拉して至る、香川とともに肺肝を、これより陸續として来る者、山中・宇田・三宮・樹下・田中・北島・藤村・坂木・城多・原・海部の諸子なり、幕吏注視、嫌を避くるをえず諸子往々柴田子の蘆を叩き、以て予に見を求むるなり、柴田子周旋勞豈それ少からん哉。

「香川」は水戸藩出身の香川敬三である。当時は鯉沼伊織を名乗る浪人であり、香川が静逸を松尾に引き合わせた
とされる。

慶応元年（一八六五）は、岩倉が「叢裡鳴虫」、そして「全国合同策」と題された国事に関する意見書を書きあげた年
であった。文久二年、廷内急進層の批判にさらされ、洛中を離れた岩倉も、文久政変から禁門の変を経て、中央政界
における長州藩毛利家勢の減退に同じくして、急進的な政治勢力が凋落するなか、国事を思考し、関与できうる機会
が訪れようとしていたのである。岩倉にとつても、静逸らの政治サークル「柳ノ図子党」の面々より得られる情報は、
喉から手が出るほど貴重なものであったに違いない。

「柳ノ図子党」の主要な構成員で、近江国水口の草莽、城多董は岩倉具視との出会いについて記録している。

十一月中旬積雪ヲ冒シ岐路ヲ経テ潜ニ京師ニ入り、松尾相永ノ家ヲ訪フ、在ラス、会々香川敬三其家ニ在リ、互
ニ分袂以来ノ事ヲ談シ逐ニ留宿ス、翌日相永帰り来リ、留宿スルコト数日、相永余ニ岩倉前中将公ニ謁センコト
ヲ勸ム、余其世論ノ許サ、ル人タルヲ以テ相見ルヲ肯セス、相永世論ノ謬妄ヲ弁シ再三勸メテ已マス、十二月【日
ヲ失ス】余岩倉村ノ山莊ニ至リ公ニ謁ス、公己レヲ虚シテ余ニ接シ胸襟ヲ披キ談論ス、器宇識見時流ニ超卓シ、而
シテ其忠君憂国ノ至誠言表ニ溢ル、一見シテ其有為ノ大材タルヲ知ル、是ニ於テ推誠心服シ相見ルノ晩キヲ憾ト
ス

水口藩儒で攘夷主義者の中村栗園を師とする城多は、藩内保守派との抗争に重きをおいた主張と行動をとってきた
が、岩倉との対話によってこれまでの政治への関わりが浅はかなものであったことを自覚した。静逸には岩倉との出
会いを物語る史料が見当たらないのだが、松尾に紹介される形で岩倉へと導かれた彼ら面々は、「異才の器」と評され

た岩倉に心酔したと考えられる。「柳ノ図子」は、内裏の北側に位置する路地であったが、松尾らによるサークルの存在によって、政治世界へとつながる通路として機能したことになる。

5 慶応三年の静逸

幕末期、ことに慶応元年、岩倉と関わりを持って以降の静逸の書状は意外なほど少ない。岩倉とつながりがついたとはいえ、幽閉中の岩倉は未だ在野の士で、政界復帰の機会を窺う身であったことは、「柳ノ図子」にたむろする彼らとさほど変わるものではなかった。自然、静逸の主張は在野に留まる。伝存する柳ノ図子の人びとの記録には、「山中」、「静逸」との記載こそある。ただ、静逸自身の主張が見えないのである。ないものねだりで、岩倉具視関係文書に岩倉に宛てた静逸の書状がある。「丁卯合同策」⁹³とあるが、策論風でもない。

奉謹啓候、昨日は参殿御愁歎之御中をも不奉憚失敬過言何共奉恐縮候、今日中門様え参上候処、則澤卿一件御托有之、即刻罷向候処、折悪敷彼角田不仕にて遺憾千万何れ明早朝に再行多分は尽力行届可申と奉存候、

一、久々にて中門御咄奉窺候処、益御盛にて実以奉感候、大原卿兎角幕云々之臭気とて大に御歎息に御座候、鄙生よりも時勢云々、先幕長薩合して奉仰天朝ヲ候様可相成と申上候処、御沙汰には中々左様は参る間じく全幕滅之時こそ至れりと之御言確乎とて不可犯、附ては正邪合一之御策等御周旋は如何にも口を難出、且余り色々と攪交候ては一も不取、二も不取ト申様ニ可相成思記候、附て云々は余りにく迂遠之事に奉存候、実ニ於闕下守兵を以て按え御渡合に相成候一件は千載之機会と奉存候間、何共奉恐入候得共、御私情は暫御差置被成、実に三千年来之御危難を御匡正、却て万年之御基本相立候処を被思召、何卒忝忝之御頑勞を被為忍、彼の守兵を糸口と被

遊、今卷言之処、御苦勞奉祈候、鄙生も昨日之御高論に服し、直に薩人え程能位に談し候処、決して沸騰は生ず間敷候、深く一尽力仕度奉存候、竹原も固より航海に付ては同謀之事故、御前之御事等委細は不申候得共、幕中に入る一策を可運と申候処、同人も大に喜び、然は東行し暫差延べ有志中にて又如何様之異論起候節有志中之探索を周旋、乍蔭鄙生之一策を可助との事也、仍て鄙生今日之処を退くならは四五日中速方大によりしく候間、何卒乍恐御寸答奉拝顔度奉願上候、乍併於御別皇国之事は聊も御憂不被遊、只々御老身を御廻し被遊候と申外、御尊慮不被在候は、逆も於鄙生は御前ヲ除ク、別他之御堂上に奉從候て之尽力廻勤も仕候心得、更に無之候、速に他行仕度何卒乍失敬右之件に今一応被加尊慮速に一兩日中に御答奉窺候中御様之处澤卿御使丈け何れにて相勤候得共、御前之御決心次第にて是逆も再は罷出間敷候、頓首謹言

正月四日

二白 御愁歎之御中へ右様俗事申上候、奉恐入候間、鄙生進退に於て速に不相決候半ては甚迷惑之事、既に昨冬好機会も有之、退去之決心に候処、閣下之命に仍て相留候、旁深被為加尊慮候様偏奉乞候、不具

北山公閣下

静 拝

御近侍御中

「中門」は、中御門経之で、岩倉具視の妹の嫁ぎ先であり、それ故、義弟にあたる。早くから廷内改革を主張し、運動を展開していたが、慶応二年（一八六六）八月、関白二条齐敬、朝彦親王を弾刻、奏上し、これが勅勘を蒙り、十月に閉門処分となっていた。「幽閉の身」の岩倉と「閉門の身」の中御門を繋ぐ役割にあったといえる。

静逸は、中御門の議論に感服するも、元来。改革的思考の持ち主であるはずの大原重徳が、「幕云々之臭気」があるとしている。

また、「幕薩長合して」天朝を仰ぐというが、そのような状態ではなく、この際は、岩倉の「私情」は差し置かれても、新たな政治状況を構築するための「基本」を立てねばならないと述べている。慶応三年正月といえば、岩倉村の岩倉と薩摩藩大久保利通との間で、緊密関係が作られていたころであり、岩倉にとって薩摩藩は、必要不可欠のツールなのであるが、静逸が否定的にとらえる。静逸は、史料中、航海論を主張する「竹原」なる人名が登場する。幕府開成所教授に竹原勇四郎がおり、航海を是とする観点から考えると同人である可能性があるが、未詳である。ともかくも、静逸はこの機会に「幕中に入る」策を掲げ、「直に薩人え程能位に談し候処、決して沸騰は生」じないであろうとして、薩摩藩傾倒しすぎるきらいがある岩倉の政治手法に疑義を呈していることは間違いない。残念ながら、その内容が定かではないが、幕府有志と連繫をとりうるプロジェクトであると考えられる。これを岩倉に飲ませて、岩倉に主導させて実現させようとするのであろう。

岩倉には慶応元年九月に作成した「全国合同策」、慶応二年十一月に作成した「航海策」という策論がある。前者は、長州藩を上京させて、政界に引きもどし、幕府、薩摩と合同で、「王政」を支えるという内容、後者は「海軍の道を開き、人材を求め、公家といえども外夷応接に当たるべし。万国に使節を出し、宇内の形成に通ずるべし」と主張するものである。この策論は、二条斉敬関白に提出され、朝議において議せられたが、採用されなかった。静逸は、これらの策論を慶応三年正月段階で再度、議論の俎上にあげ、幕府との連携を中心に改めて具現化しようとしているのである。確かに、慶応二年五月、徳川慶喜の腹心、河村恵十郎が岩倉村を訪れ、岩倉と密議をおこなっていることが、岩倉の日記よりうかがえるので、岩倉と徳川幕府が連携する素地はあった。しかしながら、慶応三年において、岩倉と幕府有志との連携が確認される事象が存在しないので、結果として、静逸の計画は立ち消えになったものと思われる。

慶応三年の静逸は、岩倉の周辺で絶えず、政論の作成をおこない、きたるべき「王政復古」に向けての段取りに手

を尽くしていたのである。

第四章第一節 注

¹ 瑞山会編『維新土佐勤王史』九頁、富山房、一九一二年初刊、マツノ書店、二〇〇四年復刊（以下、『維新土佐』と略。）

² 高木俊輔の多くの研究業績のなかで、「志士」について論及した明治維新史研究を掲げる。『明治維新草莽運動史』（勁草書房、一九七四年）、『幕末の志士』（中公新書、一九七六年）、『維新史の再発掘』（日本放送協会、一九七〇年）、『それからの志士』（有斐閣、一九八五年）など。

³ 平尾道雄『土佐藩』吉川弘文館、一九六五年。

⁴ 平尾道雄『天誅組烈士吉村虎太郎』二二〇―二三頁、大道書房、一九四一年。

⁵ 武市半平太（瑞山）の人物史については、入交好脩『武市半平太』中公新書、一九八二年があるのみである。ただし、史料引用および解釈については参考とならない。以下、『武市半平太』と略す。

⁶ 『武市瑞山関係文書』一、三六―三七頁、日本史籍協会一九二九年初刊、東京大学出版会二〇〇三年復刊（

以下、『武市文書』と略。）

⁷ 吉田常吉・佐藤誠三郎校注『幕末政治論集』一四八―一五四頁、岩波書店日本思想体系一九七六年、維新史料編纂会編『維新史』二、七三一―七三二頁、明治書院一九四〇年初刊、吉川弘文館一九八三年復刊。

⁸ 「天」観念に関する思想史的知見については、関口順『儒学のかたち』（東京大学出版会、二〇〇三年）より得た。

⁹ 桜木章『側面観幕末史』一、三三一―三三二頁、啓成社一九〇五年初刊、東京大学出版会一九八二年、続日本史籍協会叢書として復刊。

¹⁰ 平尾道雄『吉田東洋』吉川弘文館、人物叢書、一九五九年。

¹¹ 『武市文書』一、六二頁。

¹² 同右、七一頁。

¹³ 『武市半平太』七三―七四頁。同史料は、この時期の大名家内の政治意識として極めて重要であるにもかかわらず典拠となる史料が管見の限り不明である。これは、入交氏の史料引用が不適切であることからくるものであるが、

有用と判断し、あえて引用した。今後、原史料の追求に努めることとする。

¹⁴ 『維新土佐』、一四五頁。

¹⁵ 『維新土佐』、一五一頁。

¹⁶ 平井収二郎の手記にも「文久壬戌夏六月廿八日、君上御発駕、陪従、七月十二日浪華、同十三日より八月廿二日迄在浪華、当時麻疹流行、従者三十歳以下、無不病氣矣、君上亦憂之、収（平井）幸免焉。自大臣至隸皂、疾疹者殆二千人、死者不充日」（『隈山春秋』『史籍雑纂』二、三三七頁、日本史籍協会一九一二初刊、東京大学出版会一九七七年復刊）とあり、大坂周辺地域での麻疹流行を示す。

¹⁷ 山内容堂宛て三条実美書翰（文久二年閏八月八日付、『維新土佐』一五八～一五九頁）

¹⁸ 「公純公記」文久二年八月二十五日条（『孝明天皇紀』三、一六七～一六八頁、平安神宮一九六八年）。『維新土

佐』はこの内勅が関白近衛忠熙より下されたとされる。勅諭のような朝廷内公文書の武家への授受は武家伝奏を通じてなされる。近衛関白より、天皇内々の沙汰が坊城伝奏に渡され、屋敷に持ち帰った坊城が、山内家に授けたと考えるほうが適当である。

¹⁹ 「隈山春秋」（『史籍雑纂』二、三四一頁）

²⁰ 「武市瑞山在京日記」八月十八日条（『維新土佐』付録、五頁）

²¹ 五十嵐敬之「天誅見聞談」（『武市文書』二、五四七～五五四頁）

²² 「武市瑞山在京日記」閏八月十八日条（『維新土佐』付録、一〇頁）

²³ 井上勲「開国と幕末の動乱」五〇～五一頁、六三頁（同編『日本の時代史二〇 開国と幕末の動乱』吉川弘文館、二〇〇四年所収）。

²⁴ 『続再夢紀事』一、二一九～二三五頁、日本史籍協会一九二一年初刊、東京大学出版会一九七四年復刻。

²⁵ 宮地正人「幕末彦根藩の政治過程」（佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根城博物館叢書一、サンライズ出版、二〇〇一年）

〇一年）

²⁶ 小寺玉晃『東西評林』一、一〇二～八頁、日本史籍協会一九一六年初刊、東京大学出版会一九七四年復刻。

²⁷ 小寺玉晃『東西紀聞』一、六三〇頁、日本史籍協会、一九一七年初刊、東京大学出版会、一九六九年復刻。姉小路殺害に関して情報はさまである。下手人を津藩藤堂家臣「斎田何某初三人」、指示したのは「深キ遺恨有之」滋野井公寿・西四辻公業とする風聞情報も存在する。

²⁸ 『東西紀聞』一、五四六頁

29 『武市文書』二、二五八～九頁

30 宮地正人『歴史のなかの新選組』五三～五八頁、岩波書店、二〇〇四年

31 「癸亥新聞志」文久三年十月、石谷因幡守ニ対スル張紙、東京大学史料編纂所蔵「大日本維新史料稿本」所収以下、「稿本」と略す。

32 「磐錯録」文久三年十月十八日条、「稿本」所収。

33 「投書 薩邸へ」文久三年十月、「稿本」所収。

34 「中川宮門張紙」文久三年十二月六日条、「稿本」所収。

35 江戸和田倉門に張られた老中板倉勝静への斬奸予告状には長州毛利を愚弄し、横浜開港を薦めたとして「掃除」するとあるが、「児島徳郎・名和誠太郎」との署名（偽名？）がある。（小寺玉晃『甲子雑録』一、二九三頁、日本史籍協会一九一七年初刊、東京大学出版会一九八四年復刻）

第四章第二節 注

37 湯浅五郎兵衛の人物情報については、井尻良雄編『園部藩別格上席待遇の郷士 湯浅五郎兵衛家由緒書』（船井史談会・旧世木村誌編纂委員会、一九五八年）、船井郡教育会編『船井郡誌』（船井郡教育会、一九一五年）、井川市太郎編『丹波及丹波人』（丹波青年社、一九三一年）などを参考にした。『湯浅五郎兵衛家由緒書』は、『船井郡誌』など、戦前の郷土史を参考に行っているため、事実関係はもとより、歴史認識には政治的バイアスが強く、史料としては検討を要する。

38 久留島浩「村が由緒を語るとき」（吉田伸之・久留島浩編『近世の社会集団』山川出版社、一九九五年）

39 前掲『園部藩別格上席待遇の郷士 湯浅五郎兵衛家由緒書』

40 高木俊輔『幕末の志士』中公新書、一九七六年、三三～四頁

41 原剛『幕末海防史の研究』（名著出版、一九八八年）

42 荒木精之編『巨人林桜園』財団法人神風連資料館、一九八一年。

43 『改訂肥後藩国事史料』卷一、国書刊行会、一九七三年復刻、一九二～四頁。

44 宮部鼎蔵の履歴については、戦前の書籍ではあるが、後藤是山『肥後の勤王』矢貴書店、一九三七年、一〇七～一二六頁に詳しい。後藤は、徳富蘇峰に師事した九州日日新聞社の記者である。

45 「丹波国湯浅左右司御助力願一卷控」（熊本大学附属図書館永青文庫寄託所蔵 No.八・一・一四一）なお、肥後藩細川家と湯浅家のつながりに関しては、日吉町郷土資料館蔵「湯浅家文書」中に、「諸事控」（No.三・一・

四)「湯浅家由緒書」(No.三・一・九)「家譜晰 同附録 古事談」(No.三・一・一〇)「累代粗手続書下案」(No.三・一・一一)があり、湯浅五郎兵衛家から肥後藩への要求内容がうかがえる。

46 波多野右馬介書状(藤本鉄石宛て、安政六年三月五日付)京都大学附属図書館蔵。波多野右馬介は、松田の変名。同史料は、京都大学附属図書館に維新特別資料文庫に「檜林昌建等書状」(No.尊／卷二八四／貴)として、同一の卷子に収められている。

47 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』吉川弘文館、二〇〇四年

48 『改訂肥後藩国事史料』卷二、国書刊行会、一九七三年復刻、九〇五〜九頁。

49 「尊攘録 上書類」(熊本大学附属図書館永青文庫寄託所蔵 No.一三・二・一六)

50 福田理兵衛については、京都市編『京都の歴史』七、学芸書林、一九七四年に詳しい。この他、理兵衛の末裔、福田慎吾氏よりご寄贈いただいた南部彰造『新編福田理兵衛』(私家版、二〇〇五年)に詳しい。

51 中村武生「古高俊太郎考―八・一八政変から池田屋事件に至る政局の一齣―」(明治維新史学会編『明治維新史研究』一、二〇〇四年)

52 原口清「禁門の変の一考察」一、二(『名城商学』四六・二、四六・三、一九九六年)のち『原口清著作集』二、岩田書院、二〇〇七年再録)

53 池田屋事件については、新選組による業務のありようや、業務対象となった人物理解の違いによって虚実混交の状況ではあるが、中村武生『池田屋事件の研究』(講談社現代新書、二〇一一年)が、現在ではまとまった業績であるといえる。

54 西川太治郎『池田屋事変殉難烈士伝』沢井元隆、一九〇四年。

55 革島家については、『重要文化財指定記念 革島家文書展』京都府立総合資料館、二〇〇三年を参照。

56 『湯浅五郎兵衛と幕末維新』日吉町郷土資料館、二〇〇五年。

57 維新後の湯浅五郎兵衛の事歴については、「郷土湯浅家由緒書写」(No.三・一・一三)、「古高俊太郎蔵闕所居屋敷買戻二付願控」、「上申書」、「湯浅征一郎事績概要」(以上、日吉町郷土資料館蔵)による。

58 近代の贈位事業については、石川寛「近代贈位に関する基礎的研究」(『年報近代史研究』七一・二一、二〇一五年、高田祐介「明治維新「志士」像の形成と歴史意識―明治二五・二六年靖国合祀・贈位・叙位遺漏者問題をめぐって―」(『佛教大学歴史学部論集』二、二〇一二年)を参照。

第四章第三節 注

59 山中静逸の人物情報については、田尻佐編『贈位諸賢伝』増補版、近藤出版社、一九七五年の他、浅井久夫『碧

南市史料別巻八 山中信天翁物語』（碧南市教育委員会、二〇一三年）を参考にした。

⁶⁰ 岩倉具視の人物史については、大久保利謙『岩倉具視』中公新書、一九七三年、増補版一九九〇年、佐々木克『岩倉具視 幕末維新の個性五』吉川弘文館、二〇〇六年を参照。岩倉周辺の人間の思考、行動について言及した研究は少ない。そのなか、藤田英昭「草莽と維新」（明治維新史学会編『講座明治維新3 維新政権の創設』有志舎、二〇一一年）は、岩倉周辺の状況と草莽を関連付けて論じた好論である。

⁶¹ 前掲『贈位諸賢伝』増補版、下巻六二六〜七頁、「正五位山中先生略伝」（碧南市藤井達吉美術館蔵）を参考にした。

⁶² 小林文広『明治維新と京都―公家社会の解体―』臨川書店、一九九八年。

⁶³ 「岩倉具視関係文書」京都市歴史資料館蔵

⁶⁴ 多田好問『岩倉公実記』中、皇后宮職、一九〇六年、のち原書房より一九六八年復刊。

⁶⁵ 「昨夢記」（岩倉具視関係文書）、北泉社マイクロフィルム。

⁶⁶ 「岩倉具視関係文書」京都市歴史資料館蔵

⁶⁷ 藤田英昭前掲論文。

第五章 幕末維新人物像の形成

第一節 三条実美の政治意識形成とその転回

1 「尊攘派」というイメージ

三条実美は、なぜ「尊攘激派」あるいは「攘夷の旗手」として語られるのであろうか。戦前に徳富蘇峰は、三条実万・実美父子を評して「尊攘精神の権化」と述べた。そして、実美に対する蘇峰の評価は、現在においても一様のように思える。たとえば、『国史大辞典』において三条実美は、「井伊直弼の朝廷内反井伊派の弾圧で、父実万が辞官落飾となると、実美も政争の渦中にまきこまれ、父の立場をうけて尊攘派公家へと成長していった。（中略）文久二年、朝廷政権がようやく幕権を圧するようになり、公武合体をとる薩摩藩に対抗して長州藩が反幕尊攘へと急転し、京都政局の主導権をにぎると、実美は公家尊攘派の中心的地位に立つようになった。」と、父である三条実万の遺志を継ぎ、「尊攘派の公家」となり、また尊攘派公家の中心人物として「長州藩と提携」したことが強調され、説明されている。

では、なぜ、実美が「尊攘激派」として解釈されるのか。このような実美の解釈は、半ば意図的に創造されたイメージに対する一面的な解釈ではないか。この疑問を解くことが本節のテーマである。本節では、三条実美の政治意識と、それが実際の運動としていかに転回されていったのかを次の三点に絞って検討する。一つめに、三条実美の政治意識形成の背景として、公家社会のシステム（家格、職制）における三条家の位置付けをふまえ、実美の政治意識を育んだ環境につき考察する。二つめに、実美の政治意識と、朝廷内政務機構（朝議）改革志向の関係性につき考察す

る。三つめに、実美の朝議改革運動と文久二年（一八六二）九月の「攘夷別勅使」任命の意義につき考察し、且つ「勅使」任命が、その後の実美にもたらした影響につき考察する。

2 政治意識の形成とその背景

幕末期の公家、三条実美の政治意識はいかに形成されたか。まず実美の出自、生い立ちにから見ていこう。実美は天保八年（一八三七）二月、三条実万の第四子として誕生する。三条家は、藤原北家閑院流の嫡流で、十世紀、白河院以降四代にわたり、上皇あるいは天皇の外戚として繁栄し、近世期においては近衛家などの摂関家に次ぐ、左右大臣（実際は内大臣）を官途の上限とする「清華」の家柄であった。

実美は三条家の嗣子ではなかった。当時、嗣子は第二子の公睦であった。公睦は、文政十一年（一八二八）五月、誕生後、翌十二年には従五位下に初叙、天保八年（一八三七）、正四位下中将、天保十三年（一八四二）、従三位に叙せられ、清華家の嗣子として、ふさわしい昇進を遂げるが、病弱であった。

もともと実美は三条家庶流の花園公聰の養嗣となるはずであった。しかし、嘉永四年（一八五一）、実美の教育係として三条家に仕えた儒者富田織部は病弱な公睦に鑑み、「今明公達衆之望、以少君（実美）為長君（公睦）之嗣、以順養子立、於義無害矣、且得人之歡心、非周室之比也」と、早々に実美を公睦の養子としておくよう実万に建言した。

富田ら家臣の危惧通り、公睦は安政元年（一八五四）二月、従二位に叙せられた三日後に病死したが、嗣子をすぐさま実美に継がせるというわけにはいかなかった。公睦には、死の二ヶ月前に誕生した子、公恭がおり、三位以上の家柄の嗣子決定には然るべき取り決めがあったからである。

三位以上の家の継嗣者の継嗣の条件は、まず①嫡子であること、②嫡子が無い、或いは罪者、病気の場合は嫡孫、

③適任な嫡孫がなければ、嫡子の弟ということになる。

右の取り決めに従えば、実美は嗣子にはなれない。ただ、公恭は公睦の正室信受院の子ではなく、妾に生ませた子供であった。実美を推す富田織部は、三条家諸大夫の地下官人森寺常安と謀り、安政元年三月、実美は「是迄ハ御庶流御相続御当然之御方ニテ候ヘハ、宗室（三条家）御不用之御餘子」であるが、「不図至今日候上ハ宗室御相続御当然之御子」とし、実美が家督を相続すれば、「御家政万端御所様之御志ヲ承継、百歳之後迄其御勞績」をたたえられるであろうとし、公恭については「今日全不用之御方也、然者御庶流御相続御当然之御方」であるが、亡き公睦の霊を慰めるためにも「信受院様之御実子トシテ福君様御養子ニ御立為遊」るべきと建言した。三条実万は、宮廷内の体裁があると一旦留保したが、富田らの意見を採用し、実美は安政元年四月、三条家の嗣子となった。

では、どうして富田ら三条家士は、自らが教育した実美の嗣子擁立に執拗にこだわったのか。また諸大夫層が、実美にかけた期待とは、如何なるものであったのか。ここでは、実美の思想形成に最も寄与した富田織部の論策を分析し、彼の政治視角につき考えていく。富田織部は、伯耆の出身で後藤基建と名乗ったが、江戸遊学後、京都において三条実万の目に留まり、三条家の家士となって信任を得、実万の生母の実家の姓を名乗るよう命じられ、富田と改姓した。以後、三条実万に昵近して実万の政治運動をサポートし、かつ三条家の侍講として、実美の目付役として教育にあたった。

富田の論策は「故蝶のゆめ（夢）」と題し、安政五年に三条実万に宛てて提出したものである。その冒頭から、「方今の時勢、殊に歎息に不堪御次第、開闢已来未曾有之衰運哉」と、アメリカをはじめとする諸外国との折衝に頭を悩ませ、ついには条約（通商条約）を取り結んだ徳川政権を非難するとともに、これを機に日本の政治体制の「大変革」すべきと、一九条に渡り述べる。その基本をなすのは、「復古」の理念である。「先、大復古して時とともに大変革する」ことがすなわち「自然」であり、このことが「洋夷の舌頭に懸り、彼に心酔して彼か邪法に欺かれ、皇国の基本

を誤ま」らないための手段であるとし、彼は「大復古」のために、変革すべき点を以下のように述べる。

①有名無実の官爵を整理し、全国諸大名には、然るべき官職（守）を授け、また家老には「介」を授けて、それぞれの領地において「藩鎮」の任を徹底させる。②「征夷大將軍」の定期的（二、三年に一度）に上洛させ、参内させ、京都および大坂湾を巡視させる。③「鎮守府」「鎮西府」を復活させ、諸大名の中から選出して、「七道」に一人の「將軍」を置く。④大名を上京させ、白馬の節会など朝廷儀礼への参加させることで、文化的水準を向上させる。⑤衛士および仕丁制度を復活させる。⑥江戸における大名の勤務期間を減らす。⑦江戸に滞留する大名家の家族を帰藩させる。⑧有力大名家を京坂地域へ常時滞在させ、警固に当たらせる。⑨神祇官を再興し、諸外国の風俗への傾倒を防ぐ。

富田の主張に、必ずしも徳川政権の打倒を目指す、いわゆる「討幕論」的発想はない。それは、②で征夷大將軍の存在を認めることからわかる。ただ、全国諸大名のあり方を変革しようとする意図は多分にあり、徳川政権を打倒しないまでも、既存の徳川家を頂点とする政治体制を、「京都」「天皇」という権威を組み込むことで変革しようとするのである。また論策の随所に見うけられる諸外国に対する見解には、「打ち払い」の意識はない。それは「洋夷の舌頭」を鵜呑みにし、わが国の伝統たる「皇国の基本」が損なわれることに対する危機意識である。大名を上京させて、朝廷儀礼に参加させるのも、神祇官を再興するのも、「夷人の為に我良俗義風を替えられ」ないようにするためと説く。実美は青年期に、富田の主張をたたき込まれたと考えられる。

また、富田は、三条家に雇われてはいるが、宮廷社会のしがらみにその動きを縛られることがなかったので、自由な人的交流と政治への対応をとることができた。学識だけではなく、政治に必要な広い人脈と大名家臣および地下官人、諸大夫層との連携による行動力が、三条実万に買われたのであろう。もともと伯耆出身の富田は青年期、同郷の儒者景山（木島）立硯に学んでいる。立硯の子で、藩校尚徳館教授に就任し、文久期以降、国事周旋掛となり、鳥取

藩池田家の政治運動において重要な役割を担った儒者景山龍蔵^二や、諸大夫として冷泉家に仕えた今大路範成とは同郷の同窓生として政治向きの連携をとっている。よって、富田は、景山を介した池田家との交流、今大路ら諸大夫・地下官人層との連携はもちろん、池田家を介した諸大名家臣との広範な人的ネットワークを有し、富田の主張や人的交流は文久二年（一八六二）以降の実美の政治視角、動向を規定するようになったと考えられる^三。そして、富田らは、その幼年期から教育してきた実美が、言路を封鎖されている自らの主張を代弁できうる存在へと成長することを望んだのである。

実美が政治に目を向けはじめるのは、將軍継嗣擁立への関与者の肅正、いわゆる安政の大獄にからんで、父実万が落飾し、京都の郊外上津屋村（三条家領）に隠遁して安政五年十二月以降であると考えられる。実美は、幽居中の父を足繁く訪ね、京都および江戸の政情を報告するとともに、自らの勉学の状況を伝え、教えを請うていたことが、実万の「幽居日記」¹³中に見ることができる。幽居中の実万は、朝政に対して物を言うことができなかったので、実美が代弁する形で、朝議に建言書を提出している。ここでは「賢輔御撰用」つまり有能な人材の登用、下からの言路洞開、「叡慮（天皇の意志）天下に通達」¹⁴できうる朝廷政治の体制構築を望む実万の主張は、それをしたためた実美の朝政への視角として形成され、安政六年三月、父実万の死を境に、実美自身の政治意識として成立していく。

「人材登用」・「言路洞開」の実現と天皇の意志をクリアに朝廷内だけでなく徳川家および全国諸大名家に通達できる体制を構築するには、すなわち自らの置かれた宮廷社会のありかたを問い直す作業が必要となった。この政治意識の成立が、文久二年以降の朝議刷新を求める運動へと転回されていく。

3 宮廷改革へのまなざし

安政六年（一八五九）十月から文久二年（一八六二）初頭に至る三年間、実美の動向を追うことができない。根本的な問題として、国立国家図書館憲政資料室蔵「三条実美関係文書」中にも三条実万の死後、約三年間、史料が存在しないことがあるが、周辺史料を紐解いてみても、確認できるのは、除服出仕後の実美の動向としてあるのは、洛西嵯峨の二尊院にある父実万の墓前への参拝と、「踏歌節会」、「御樂始」などの儀礼に参加した事実のみである¹⁵⁰。

ただ、この間、朝廷においては、和宮降嫁が一大問題となっていた。その経緯については触れる余地はないが、ここにおいても実美は関与していた形跡はない。徳富蘇峰編述『三条実美公』では、「公と和宮降嫁問題」との節が立てられ、「公（実美）は実万公の遺志を奉じ、幕府の奏請を不可なりとし、之に反対した。」¹⁵¹と述べられるが、その史料の根拠はまったくない。そもそも和宮降嫁に関する朝廷内における会議は、関白・議奏・武家伝奏の朝議構成員に限られ、その役儀にはない実美にはその発言権がなかったのである。

実美が朝廷政治と関わりを持ち始めるのは、文久二年半ばからである。その引き金となったのは、文久二年四月の薩摩の島津久光の率兵上京および幕政改革を求める国事周旋運動であり、これに関わる朝廷側の対応として、五月十日、和宮降嫁を推し進めたとして、朝廷内から反発を受け、辞意を表明していた関白九条尚忠（同年六月二十三日に辞職）に建言書を提出する。久光の率兵上京は、諸大名家の政治意識、関心を高めただけではなく、これまで政治への関与がなかった、実美ら朝議外の公家にもインパクトを与えた。

実美不顧非分、朝廷之政務ヲ議候者、誠僭踰之至、深不堪戰慄候得共、心情切迫之餘、難默止候間、不憚恐寸心内密申上候。此度島津和泉上京言上之次第、委曲之義者不存候得共、勤王之志ハ感賞仕候。建策之事件被為適叡念候ハ、何卒以英邁之聖斷御採扱被遊無御疑念御信任被為在条々、迅速ニ被仰出候ハ、国内一致人心協和之場ニモ可至被宸襟候様可相成ト存候。方今之形勢を考候処、朝廷之御所置、神州之安危国家存亡ニ係り候間、

偏ニ正大之公論を被立、剛直之御所置ニ相成候様奉仰候。(中略)蛮夷難測、有志失望候而ハ、暴発之程不被量候。於京中動干戈之事ニ相成候而ハ、国内潰乱ニ可及候。(中略)当今朝廷之御急務ハ以賢良之人執柄輔弼と被遊候義堅要存候。当殿下御辞表ニモ相成候由承候。何卒以非常之御処置不拘先規旧格、速以叡慮被聞食、他之大臣ヲ以被補当職候ハ、国内人心モ協和ニ可相成ト奉存候(以下略) 二

本来なら、自分には朝廷の政務に対する発言権がない。そのことを認識しつつも、建言書をしたためた心情が冒頭の一節から読み取れる。久光の率兵上京は「委曲之義者不存候得共」としながらも、「建策之事件被為適叡念候ハ、何卒以英邁之聖断御採扱被遊無御疑念御信任」あるべきと、好意的に受けとめている。また、朝廷の急務としては「賢良之人執柄輔弼」させ、「先規旧格」にこだわらない処置を迅速に行うべきと、暗に既存の朝議運営に対する批判を述べる。

先述のとおり、三条家は、「清華筆頭」を自負し、三条実万が嘉永元年(一八四八)三月、武家伝奏就任の折、伝奏の職は「卑職」とする議論があつたほどの家柄である。しかし、実万は、家柄・格式に関わらない朝議運営を望んだ。文政七年(一八二四)、実万が議奏に初めて就任した際に作成した「当役心得十一箇条」^二の随所に見られる「上下、互ニ無遠慮」の文言は、まさに家柄・格式のしがらみを脱した朝議運営のありかたを求める意識を表すものであり、この主張は実美の主義主張にも踏襲されているといえる。

当該期には実美だけでなく、阿野公誠、滋野井実在、河鰭公述、姉小路公知といった少壮の公家も連署で、「今般島津久光上京内々言上之次第、巨細之儀者不承候得共、風説伝承候处、実国家之大事」であり、「何卒此上者万事島津申上候通、迅速御処置専要之儀ト存候」^三と、関白九条尚忠に建言している。朝廷内の雰囲気は怠惰に流れていくなかで、久光の政治運動は、実美ら公家の目を開かせ、既存の朝議への改革意識を形成させた。

朝議のありかたに対する疑念を持っていた実美は、島津久光の政治運動と同様に刺激的な思想に出会う。福岡藩黒田家臣の平野国臣の論策「培覆論」（皇国の基を「培」い、徳川政権を転「覆」させることの意）である。これは、文久二年正月二日、王政復古を唱え、熊本、薩摩を遊歴していた平野が薩摩藩島津家臣柴山愛次郎、橋口壮助両名に宛てた書翰である。これを実美は入手し、筆写している。

（前略）一橋侯を將軍とし越前侯を後見とし其外可然人材を撰ミて有司とし幕府を扶て、以て外敵を攘ふと申候説は去年来堀・大久保両兄よりも拝承仕候。（中略）幕府之犯罪を正し、天朝を尊奉し、内政を整へ、御攘斥被成度御了見に被為在候得とも、若し然する時は却て内争を引出し、外寇に隙を窺はれ、終に恢復も攘夷も行れ間敷哉との御懸念より止事を得す権道御用被成との御趣意、一応御尤に相聞へ申候得とも、其説は癸丑年砌、幕威未た衰へさる時の事にて、（中略）幕府をいかに扶け候とも、徒骨折にて、とてもかくても行れ間敷迂論窮事といふへし。（中略）畢竟天下の大勢を知らざる僻事ともいふへし。唯形を以て御覽被成たる上よりの事に可御座候。総して、大小衆寡ハ形にて、書画にても見られ候ものにて、約る所死物にて御座候。人心の合離、強弱張弛ハ勢にて、辺陲に居なから見られ候ものにてハ無之、極めて活物に御座候。（中略）天下の勢ハたとへハ、帆船の河水を沂るか如く、風帆ハ台令の陽形にて、水流は綸命の強勢ニ御座候得者、一度順風を止しむる時ハ、忽ち水勢に隨而流レ下り候儀は必然之勢ニ御座候（以下略）³⁰

「培覆論」はもともと書翰であるため、平野の他の論策よりも平易かつ簡潔にまとめられている。「公武合体」を旨とする薩摩藩島津家による政治運動の限界性および無意味さを指摘し、徳川政権を打倒し、王政復古するほか道が無いとの急進論を説く。

実美が「培覆論」をどのような経緯で入手したかは、詳らかではないが、おそらくは富田織部ら家士を通じて三条家に差し出したものであろう。富田は諸藩士との交流が広く、実美の父、実万の功績を称え、かつその子の実美への期待もあって、文久二年七月ごろから三条邸には、富田を頼り、諸藩士の出入りが多くなっていた。²¹

実美は平野の主張に感銘を受けたようであるが、ただ実美のこれ以降の動向から考えて、平野のような「幕府転覆」志向はない。徳川政治体制の転換を求める平野と、朝議のありかたに疑念を抱き始めた当時の実美とは、それぞれの置かれた立場が違ひ、かつ視角も異なる。しかし、平野の強調する既存の体制を変えるための「勢」についての議論は、実美が抱く朝廷の刷新意識を活性化させたと考えられる。

さて、実美の政治視角は、文久二年七月ごろから、朝廷内の組織としてのありかたへと向けられる。当時、和宮降嫁に関与し、安政の大獄の現場責任者たる京都所司代酒井忠義と交流を持つ公家を宮廷から排斥しようとする動きが出てくる。その槍玉にあげられたのは、久我建通・岩倉具視・千種有文・富小路敬直の四名と、今城重子・堀河紀子の二名である。「四奸二嬪排斥」運動²²といわれる、この朝廷内の人事刷新運動は、在京の大名家臣をも巻き込み、当時、閑白であった九条尚忠をも辞職に追い込み（六月二十三日）、かつ九条家士で尚忠のブレーンであった島田左近が暗殺される（七月二十日）と、岩倉・千種・富小路ら近習らも宮中から退いた（辞官蟄居、七月二十八日）。

しかし、実美が問題としたのは、内大臣久我建通の処分であった。岩倉らの追放後も、「我、閑せず」の姿勢をとっていた久我建通の排斥を求め、八月十三日、実美の他、廣幡忠礼、正親町実徳、庭田重胤、柳原光愛、豊岡随資、長谷信篤、阿野公誠、滋野井実在、河鱒公述、正親町公董、姉小路公知、壬生基修の十三名の連署により建言書が、安政大獄に関わる処分から復飾し、九条尚忠に代わり、閑白に就任した近衛忠熙に提出される。

（前略）内府公儀者議奏第一二而前殿下と同服被致候事、抑朝廷御多難ヲ醸候濫觴ニ而、其後追々関東違勅の所置

に相成、終に太閤并二三公落飾、青門幽黜等の御混雜に相成候節、内府公、專所司代酒井若狹守え被内応、右等之御變動ヲ座視傍觀被致、(中略) 関東益々暴政ニ相成、毫釐モ朝廷尊奉之道不相立事ニ被惱歎慮候時節、機密無大小、千種少将岩倉中将等ヲ以悉皆若狹守江相通シ朝廷之御失体相成候ヲ不顧、偏ニ関東江阿諛而已ヲ被為主と候心底、專奸惡之巨魁と相唱候。衆口難遁哉ニ存候。先達て内府公以下増祿之沙汰有之候儀も、全く從関東内応之廉、則増祿之多少にても周旋之輕重、自ら分明ニ有之候。(中略) 既ニ若狹守当役不任之趣を以、所司代退役被命候上は、右若狹守え内通被致候内府公已下、阿党の人々、速に嚴重の御沙汰に不相成候ては、乍恐朝憲も不被為立哉と奉存候。(以下略)²³

久我建通を弾劾する建言書は、結城秀伴・村井政礼ら地下官人によって、その案文が作成され、実美あるいは三条家士の誰かが、これに訂正を加え提出されたものと考えられる。ここにおいて、久我は、安政五年の通商条約勅許の折、和宮降嫁の折にも、中心となって立ち回り、また岩倉ら近習衆を扇動し、幕府と内通させた「奸惡之巨魁」と評されている。「尊王攘夷」を標榜する在京の大名家臣(薩摩、長州)や、彼らと軌を一にする地下官人らの久我に対する弾劾行動に、実美ら公家十三名が賛同した形となる。

この後、実美と行動を共にすることになる東久世通禧は維新後、この件につき回顧し、「三条家(ママ)の村井修理、結城筑後守、大に奮激して広橋以下の堂上を説廻り、十三人連署させた」²⁴と、この運動の主体を地下官人と、彼らが堂上公家を扇動したとしている。だが、案文の末尾の連署の人員を決めたのは、その書体から実美である可能性が極めて高い。実美以外の人名には〇〇卿または□□朝臣と記されていることも特徴的である。

三条家と久我家はともに、「清華筆頭」の格式を自負する家柄であり、当時久我は、清華家の極官とされた内大臣にあり、天皇の絶大な信頼を受けていた。実美にとって、まだ年少とはいえ、同家格の当主としてのプライドとジェラ

シーがないとは思えない。つまり、岩倉ら近習衆の処分よりも、久我の弾劾を重視する意識と行動として理解できるのである。また、弾劾に連署した公家は、これ以後に設置される「国事御用掛」および「参政」「寄人」の構成員とおおよそ一致し、この弾劾行動が、実美ら朝議改革を求める公家グループ形成の端緒となったとみてよい。

結果的に、朝廷の政務運営ラインの一角を切り崩すことに成功した朝議改革派の政治運動は、さらに政務の具体的な内容について向けられるようになる。

文久二年（一八六二）五月、島津久光により幕政改革の実現を早急に促すよう求められた朝議は、別勅使派遣を決し、大原重徳を勅使として江戸に派遣した。この折、勅使派遣の前に朝議において決議された勅諭（「三事策」）を徳川將軍家に伝えることが大原勅使に課せられた任務であったのであるが、随行した島津久光のアドバイスで、「三事策」のなかの一つ、一橋家主徳川慶喜および、前福井藩主松平春嶽の幕府要職への就任を要求する薩摩藩島津家が提示した論点に終始し展開され、和宮降嫁以来の政治案件であった「攘夷断行」に関する議事が蔑ろになったことが改革派の批判点となり、大原勅使および島津久光に江戸での周旋の手落ちにつき、その責任を追求せよと迫ったのである。

さて、島津久光は江戸を発ち、再入京した際に、文久二年閏八月九日に両役（議奏、武家伝奏）宛て、大原勅使の周旋に対する幕府側の対応についての報告書を提出し、「朝議確乎トシテ不被為動、匹夫之激論一切御採用不被為在、関東之处置静ニ御觀察被遊度」と、自らの国事周旋のありかたのみを肯定し、その他を「匹夫」の所業として、取り合うべきではない、と論した²⁵。この島津久光の言動は、長州藩毛利家および土佐藩山内家の政治運動を否定したばかりか、朝議改革派の公家からも反感を買った。

それぞれの反感は、同年閏八月二十七日、長州藩による「破約攘夷の叡断なりと窺ひ奉れば、（中略）断然独立にて尽力」²⁶するとの攘夷藩是の決定、加えて、天皇から廷臣に対する攘夷に関する諮問に答えるべく、閏八月二十日、実

美が出した所見となつて現れる。

(前略) 抑夷狄之禍ハ不容易大患ニ候間、攘斥之御処置不被為在候ニテハ邦内之人心貪利之洋風ニ推移礼儀廉恥ヲ忘候テハ、国家存亡ニモ拘候儀ト深慷慨仕候。既癸丑以来十歳ニ相及候処、国力益及衰弱、人心弥不協ニ相成、方今切迫之時勢ニ至候間、攘夷之叡念更ニ関東へ被仰下、断然決策有之候テ、天下諸藩ニ布告有之、変革之政令富強之術ヲ被施、整軍実励士氣候テ、上下一心攘夷之志怠慢無之候ハ、雪国辱、耀武威候儀モ可相成ト奉存候
(以下略) 27

この際、一条忠香、青蓮院宮(のち中川宮朝彦親王)、熾仁、熾仁両親王らも所見を述べているが、將軍家による早急な攘夷の処置を期待するといった漠然としたものである。これに対し実美の所見は、「邦内之人心貪利之洋風ニ推移礼儀廉恥ヲ忘」れないためにも、「癸丑已来」、つまりペリーの浦賀来航以来、十年を経ても、腰を上げることのない徳川將軍家に対して、「攘夷之叡念更ニ関東へ被仰下」べきと、勅使派遣の必要性を述べており、具体的、且つ説得力のあるものであった。この折、実美が勅使派遣を求めるため提示した議論は、諸外国に対する、いわゆる攘夷論であり、先にみた富田織部の主張が色濃く反映されている。この諸外国の風俗に左右されない確固とした国家のありかたを望む実美の主張を、従来のように「尊攘急進」の言葉で説明することはできない。

朝議は、実美の主張に注目した。朝廷内の政務に関して、はじめて実美の存在が表出したのは、まさにこの機会であった。実美にまつわる伝記史料などには、実美を顕彰する性格があるため、父実方の死後まもなく、朝政に対する確固とした主張を有したように書かれている。この実美の建言についても、勅使派遣の決議に多大な影響をもたらし、その勅使には実美をおいて他にいなかったように書かれるのだが、これは個人の伝記にありがちな、過大評価された

解釈である。次に、実美の勅使拝命の条件と、勅使である事実が以後の実美に何をもたらしたのかについて考えていく。

4 攘夷別勅使の政治的意義

まず、三条実美の勅使任命の過程について見ていきたい。あらかじめ断っておきたいのは、文久二年閏八月の段階で、実美と攘夷勅使の関係性はまったくくないことである。勅使を何のために派遣するのかも、先にみた実美の建言がなされた時点では決まっていなかったからである。「攘夷」を促すための勅使を江戸に派遣すべきと建言書を出した翌日、実美は左近衛権中將に任ぜられる。安政三年（一八五六）に正四位下、右近衛権少將に叙任されてから、実美の官位に移動はなかった。建言書を提出した直後の中將への昇任ということで、実美の昇進が勅使任命への予定調和として行われているようだが、この昇進はあくまでも実美の祖父三条公修の中將昇任の先例によるものであった²⁸。

公家の官位叙任および昇進については、その家格によってある程度の上限および順序がある。下橋敬長『幕末の宮廷』によれば、三条家の家柄である「清華」は初叙が従五位下、それから従五位上、正五位下と進み、侍従に任官する。しばらくして従四位下となり元服し、昇殿が許される。官は近衛権少將を経て、中將に進む（「三位中將」）²⁹。ここから、参議を飛び越し、権中納言に任官し、帯剣を許さる。その後、正二位に叙任され、権大納言（兼近衛権大将）、大臣へと進む。ただし実美は、嗣子ではなかったため、青年期の官位叙任に差異があり、少將から中將に昇進する際、七年間をおいたのは、三条家の先例によるものと「三条家伝」には説明されている。

さて、九月八日、朝議において、勅使の江戸派遣が一旦、決定をみる。実美は、青蓮院宮に宛てて、「攘夷を督促せんとならば、急に勅使を関東へ遣はさるべし、其勅使は正副二人とし、一人は官柄・家柄を選び、一人は応対に長じ

たる者を選ぶべし。而して先づ薩長土藩へ謀議し、勅使東下の際には、松平土佐守をして随行周旋せしむべし、阿・芸の両藩へも勅使警衛の人数を差出さしむべし」³⁰と、勅使派遣の具体的な方策を提示した。

しかし、一旦、決まった勅使派遣を覆そうとする見解が出てくる。反対したのは、実美に方策を示された青蓮院宮および関白近衛忠熙ら朝議構成員であり、彼らは大原勅使の直後で、徳川將軍家の対応も待たずに、再度、勅使を派遣しても徳川將軍家内に疑念を生じさせ、無駄足になるだけ、とするのである。

本来、朝議は関白と議奏・武家伝奏（関白―両役体制）によって、運営されてきたが、そのありかたは、安政五年の条約勅許問題が紛糾した時期から、左右大臣および内大臣をも含むものとなり、文久二年、青蓮院宮の復飾後は、宮までも朝議において大きな発言力を有するようになっていた。彼らに反対されれば、実美らはなすすべがなかったのである。頓挫した勅使派遣問題を、再度活性化したのは、実美ら公家ではなく、在京の島津、毛利、山内の三大名家であった。実美は九月二十一日の勅使任命、その後、十月十二日、勅使東下に至るまで、勅使派遣の必要性を主張するような建白行動をとっていない。

では、いかなる条件、状況のもと、実美の「勅使任命」となったのか。第一に、在京大名家において土佐山内家の動向が活発であり、それにとまなう朝廷向に発言力を有したことである。一度、頓挫した勅使派遣案を再度決行させるにあたっては、九月十八日に薩摩島津・長州毛利・土佐山内の三藩から、藩主の連署によって出された建言書によって「此度勅使御東下ニ付テハ屹度関東へ被仰出、攘夷之御決議早速被聞召候様被遊度」³¹と要求されたことが大きい。連署建白だけを見ると、薩摩、長州、土佐の三藩の勢力が均衡し、勅使派遣に向け、合同して政治運動をおこなっているかのように思えるが、三藩の在京状況はそれぞれ異なる。

薩摩藩島津家は、島津久光が入京し、その後、大原勅使に伴い江戸に赴いていた時期、すなわち文久二年四月から八月にかけては、確かに大名家の政治運動を主導する存在であったといえる。しかし、久光が、徳川將軍家の「征夷

之任」をないがしろにし、「無謀之論」を主張するような「諸大名家上洛」を禁止させ、かつ、大原勅使とともに、自らが江戸に赴き「条約御取替シ」たのだから、「無故攘夷被仰出候テハ、於関東御受有」³³る筈がないと言い残して、帰国してしまい、京都には、京都留守居役の本田弥右衛門の他、少数の家臣が在留するだけであった。また、政治運動の対象も、縁戚のある近衛閑白家や、久光が朝政の中心と青蓮院宮への入説を主として展開されている。そのことは青蓮院宮の日記に「(九月)十日、薩藩本田弥右衛門召ニ遣入来。申含之趣意ハ別勅使之儀、今程之所ニテ被遣候テハ可及不容易儀ニ付、此度之处ハ坊城一卿ニテ叡慮之旨ヲ可申通方可然旨、愚考ニ付、同人ヲ以閑白へ申入候事。(中略)十八日(中略)藤井良節○薩摩人入来。攘夷之御使、正使副使之所被止、姉小路一人ニテハ如何之旨、閑白ヨリ申来、先々其辺可然ト申置(以下略)」³⁴とあることからもうかがえ、在京薩摩藩士の政治運動が近衛閑白、青蓮院宮寄りに進められていることがわかる。

在京の薩摩藩士は、近衛閑白と青蓮院宮という朝議における実力者に近づき、朝議の内情に踏み込んでいっている。しかし、効率的とも思われる島津家の運動も、朝議に政治意志決定の能力があれば得策であるのだが、当時の朝議には、外からの主張に惑わされ、勅使の派遣の是否も決めかね、朝議のあり方自体が問い直されている状況にあった。こうなれば、本田、藤井両名の奔走も無駄足になりかねなかったのである。

この時期、在京の三大名家のなかで、土佐藩山内家の政治運動が理に適っていた。土佐山内勢の在京状況は、土佐藩の平井収二郎が「吹山、尤有力」³⁴と記しているように、土佐藩の武市吹山(瑞山)が、在京諸大名家臣を主導できる位置付けにあり、かつ、大名家の看板である藩主の山内豊範が実際に在京していることも朝廷向きにインパクトを与えた。長州藩毛利家がいかに、「断然独立ニテ」一藩による攘夷周旋を宣言しても、これを述べたはずの藩主が京都にいないと、説得力に欠けるのである。

また、土佐藩山内家には、三条家との縁戚関係がある。文久二年以降、諸大名家が上京する際、縁戚のある公家が

朝議との窓口となり、入京および禁裏への参内の手続きなどを行う。実美の母紀子は、前々土佐藩主山内豊策の三女であり、実美には山内家の血が入っている。よって、土佐藩山内家にとって、実美は動かしやすい存在であったし、かつ実美が勅使となり、それをサポートすることができれば、島津久光がそうであったように、天下に対し山内家の国事周旋の功績をアピールできうるチャンスとなる。

加えて、三条家には、実美が勅使となる条件が揃っていた。勅使を派遣するなら実美がいうように、「官柄・家柄を選」ばねばならなかった。前回の大原勅使の家格は「羽林」で、今回はそれより以上の格、つまり「清華」「大臣」、あるいは「摂関」家ということになる。「摂関」家の面々は様に勅使派遣には反対であったし、勅使となる先例もない。三条家には武家伝奏として江戸に赴いていた実万の先例もあり、「清華」筆頭である。家柄、先例とも申し分ない。

九月十五日の「関東二下ル特別ノ勅使ハ、賢ニシテ人望ニ帰シタルモノヲ選フヘキ」³⁵との内命が朝議より下ると、これを受けて土佐藩山内家臣の平井収二郎は同日条の日記に、勅使には「朝廷攘夷之詔之議、而撰其所使之人。三条卿正使、以中将若年之故、副使撰老練、而三藩推姉小路殿。議未決。」³⁶とあり、正式に任命されたわけではないのであるが、実美が勅使とする朝議の意向が漏れて、在京の土佐藩士には伝わっていたことがわかる。九月二〇日、正式に朝議において、今回の「特別ノ勅使」の趣旨が、徳川將軍家への攘夷の早期断行要求に決まる（この時点ではじめて攘夷別勅使と呼称）。そして翌二十一日、少し前から漏れ伝わっていた実美の勅使任命が決定する。

しかし、当事者たる実美には、自らが勅使となり、江戸に赴くという意志表示を一度もしてはいない。朝議改革を目指す実美および改革派の公家にとって、自らが勅使になること自体にメリットを見いだせないのである。ただ、実美には勅使となり、江戸に赴くことで、予期しない付加価値が備わった。朝廷内におけるステータスの上昇である。

実美は、勅使任命前の九月十五日、従三位（官は中将のまま）に叙せられ、さらに同月二十日、議奏加勢を命じられ、その翌日の勅使任命となる。一見すると、勅使任命に至るまでの帳尻合わせのようにもとれるが、この時点で両

者に関係性はない。通常「清華」家の官位は四年に一級上昇する決まりがある。実美が正四位下に叙位されたのは安政三年（一八五六）であるから、この際、従三位に叙せられてもおかしくはない。ただ、議奏加勢を命じられ、朝議の一角に与することができたことは、朝議の外から、その刷新を論じていた実美にとって大きな前進となった。

九月二十三日、実美は、所労を理由に勅使と議奏加勢の辞任を申し出る。朝議のなかで、実美の勅使任命を嫌うものがいるなら、この時点で実美からの申し出を聞き入れ、勅使の人選を再度おこなうはずである。しかし、この際、朝議がこれを却下し、同月二十八日には、勅使に中納言に昇進する。この際は、「格別叡慮」により「推任」³³されている。加えて、久世通熙の辞職によりできた議奏職の欠員を埋める形で、十月七日、実美は議奏に就任する。

官位上昇は、実美の意志で行われたものではない。当然、朝議によって然るべき話合いがあり、決議されているはずである。これまでの研究において、勅使派遣をめぐる朝廷内の状況を、三条実美を筆頭とする「尊攘急進派」公家と、それを嫌う近衛閑白、青蓮院宮ら宮廷上層部の対立とせめぎ合いの構図で理解してきた³⁴。しかし、それは三条実美の伝記的な理解に引きずられた解釈であるといえよう。実美自身も、朝議改革を求める公家のグループの一人にすぎず、近衛閑白らが、三条勅使に「呉々激烈」³⁵にならないように命じたのも、実美個人に対する危惧の念ではなく、攘夷を促すことで徳川將軍家に疑念が生じさせないように勅使任務の穏便化を求めたものであった。

また朝廷上層部も対徳川將軍家との折衝、および対外問題をめぐる政治案件に対する処理能力が欠如していることを自覚しており、青蓮院宮らが朝議組織の拡大をもつて難事を乗り切ろうと「国事御用掛」は設置され、この組織に、朝議改革派が取り入れられことは、結果的には、改革派にとって「偶然の産物」であると同時に、これまでの政治運動の成就となったのである。さらに、朝議改革派のなかの一公家であった実美は、「偶然」にも勅使任命により朝廷内のステータスを上昇させ、徳川家および全国諸大名にとって、もっとも「見える」存在になった。このことが、次に見ていく三条実美イメージの創出に大きく影響していくことになる。

5 三条家と草莽

三条実美の政治運動を輔翼する人材について見ていこう。天保五年（一八三四）、鯉江村福田市右衛門家の二男として生まれ、卯之助と称した男で、のちに丹羽正雄として国事に奔走することになる。卯之助は、青年期、福田家を出て、近江国蒲生郡中野郷（現、滋賀県日野町）において農業に勤しんだが、適応できずに鯉江へ帰村した。少年期より、八日市町金屋の医者、馬淵俊斎より受けた学びが、在地社会に留まる自らの保守的なありかたを嫌ったのである。そのまなざしは京都へと向けられ、在地社会からの飛躍が志されたのである。京に出た卯之助は、遠祖であることを理由に「佐々成之」の名乗りを好んで使用した。織田信長の臣、佐々成政と同姓ということになるが、没年まで佐々氏との関係を示す系図を所持したとされるが、その確証はない。卯之助は、公家の愛宕家に医師として出入りした海野貞吉に医術を、小浜藩酒井家を脱し、京において私塾望楠軒を主宰していた梅田雲浜に儒学、谷森種松に国学を学び、在京の学者、知識人との人的関係を築いた。

京において生成された知識人との人的関係は、京の宮廷社会における求人条件となりえた。二十一歳の時に上京し、海野貞吉の門をたたいたといわれるので、安政二年（一八五五）頃から京都で学び、活動していたことになる。在京の学者は、生計をたてるため、公家や官家を出向き、諸学の講釈をおこなうことが常であった。宮廷社会との関わりが、学問継続の条件となっていたのである。卯之助は京において、三条家関係者の知己を得ることとなる。

6 安政大獄と政情

安政五年（一八五八）の秋より、京都において徳川幕府によって大肅清が展開された。事の経緯に触れておこう。嘉永六年（一八五三）五月、ペリー来航と翌年の和親条約締結に際し、徳川幕府は全国諸大名に対して政治諮問をおこない、挙国一致的立場によって未曾有の西洋諸国への政治対応を試みた。これを主導したのは老中首座であった備後福山藩主阿部正弘で、公論衆議の要素を幕政運営に組み込むことで、難局の打破を試みたが結果的に、この公論衆議を是とするスタンスは、大名や大名家臣、および公家社会における政治志向の誘発につながり、以後の政治混乱を引き起こす原因となった。

安政元年から同五年までの国政においては、和親条約によってなかば決定づけられた西洋諸国に対して譲歩せざるをえない関係を維持し、貿易を想定したもつと踏み込んだ関係性を構築するのか（いわゆる開国論）、嘉永六年以前の国際関係に立ち返り、旧来的秩序のもとで独自の国際関係を維持しつづけるのか（いわゆる攘夷論）の二つが検討すべき案件として存在した。政治参加を志向しはじめた大名家は、当初、後者、つまり、政体の維持を目指し、諸外国との関係性を断ち切るという論理のもと、主張を展開した。

十二代將軍徳川家慶が死去し、子の家定が十三代將軍に就いたが、元来病弱であり將軍宣下の前より將軍継嗣の人选が取り沙汰されるや、彼を意思を代弁しうる才能を持つ人物の將軍就任をはかる。彼らの公論形成の布石となったのは、水戸徳川家に徳川斉昭の子として生まれ、徳川御三卿の一橋家当主となっていた徳川慶喜で、この人物の擁立に、雄藩大名家の諸侯が精力を注ぎ、江戸に、京都に、武家、公家の別なく、賛同者の輪を拡げた。

慶喜を楯になかば理論武装しようとした彼らは「一橋派」と呼ばれた。薩摩藩主島津斉彬、越前藩主松平慶永を中心に議せられた慶喜擁立は、宇和島藩主伊達宗城、土佐藩主山内豊信を取り込んだ国政参加の動きは、公論を重視し、旧態依然とした老中制度を嫌う老中阿部が主導する政治状況において、活かされた。特に島津斉彬は自らの養女敬子を、將軍家定の御台所として、大奥をも政治的に取り込まんとした。島津家より、一旦、摂関公家の近衛家の養女と

なったのち、將軍家定との婚儀に至った篤姫（のち天璋院）の例は一橋派による工作の典型であるといえる。

一方、幕初以来、徳川政権運営の屋台骨を担ってきた譜代大名、特に江戸城本丸「溜間」をその殿席とした有力譜代の筆頭、彦根藩主井伊直弼は外様および家門の大名より主張される公論主義を否定し、紀州藩主徳川慶福を將軍継嗣に擁し、「一橋派」の思惑を阻んだ。現行の幕政運営に関わる直弼ら譜代大名勢力を「南紀派」と呼び、基本的には非政治的空間である大奥も含んだ江戸城内そして、京都を取り込んだ政争となった。

西洋諸国への対応の緩急と將軍継嗣問題、卯之助はこの二つの政治課題によりもたらされる政争うずまく安政年間の京都に身を置くこととなった。卯之助が家臣として身を寄せる三条家の当主で、内大臣として朝議の加わっていた三条実万は、島津斉彬・松平慶永と政論を同じくし、条約勅許に反対し、徳川慶喜を將軍継嗣とすることに奔走していた。大名家と公家との政治的連携は当人同士による交渉よりもむしろ、その思いを託された家臣によるものが大きい。越前藩松平家を主導するのは橋本左内であり、薩摩藩においては、西郷吉之助（のち隆盛）であった。

三条家においても、実万がその信頼を寄せる家臣がいた。三条家雇いの諸大夫で「地下」の森寺常安と同じく丹羽正庸、前出の富田織部、飯泉喜内らがそれに当たる。彼ら「地下」は、京都において存在した人的関係を用いて、少しでも政治に関与しやすい状況をつくろうとした。具体的に、まずは徳川慶喜の將軍継嗣就任を共通利害としたのである。このような彼らの連携により、阿部の後を受けた老中堀田正睦の上京と条約勅許申請は破綻し、京都政界における慶喜支持は動かざるものように思えたが、譜代筆頭の井伊直弼が大老に就任し、その権限をもって政治に当たるようになる状況は一変した。

大老井伊直弼による関白九条尚忠との政治連携は、一橋派公家の主張に対して傾倒せんとしていた孝明天皇の意思を南紀・慶福に一変させたばかりか、慶喜擁立に動いた人間を反政府的な行動をおこなった政治犯として、京都を中心として肅清運動を断行した。いわゆる安政の大獄である。

慶喜を支持した三条家は肅清の対象となった。当主である「隠居・落飾・慎」に処せられた三条実万はもちろん、諸大夫・家士もその対象であった。諸大夫丹羽正庸は、安政五年十二月、捕縛され、翌六年三月、江戸に檻送後、十月、中追放となった。中追放とは、武蔵、山城、摂津、和泉、大和、肥前、下野、甲斐、駿河、東海道筋、木曾路筋、日光道中という政治的に主要な空間への立ち入り、居住が禁じられる中位の追放刑であり、これによって、正庸は丹羽家の当主として在京し、三条家に仕えることが不可能となった。家の断絶は命じられなかったので、養子を入れて諸大夫丹羽家の存続することが急務となった。その際、正庸との知遇を得ていた卯之助に白羽の矢が立ったのである。

卯之助は安政六年中に養子となり、万延元年（一八六〇）五月、丹羽家の家督を得、丹羽正雄と改めたとされる。万延元年五月二十五日付で、鯉江村の実弟福田栄吉に送った書状に「去廿一日（五月二十一）筑前介返上仕り出雲守蒙宣下」とあり、養子に入った際に任官した筑前介を返上し、当主としての官「出雲守」に任官したことを報じ、福田本家をはじめ、親類一同に伝えるよう求めている。

7 丹羽正雄の政治行動

丹羽正雄が三条家の家臣としての活動を始めたころ、主である三条実万と養父正庸を処罰した大老井伊直弼が江戸城桜田門外で斬殺された。正雄を育んだ近江国の村落において書かれた記録には「安政六申三月節句之事 一、御殿様において江戸表桜田ろうせき者二御相被成候而、終二命終被遊候」と記される。大老井伊直弼の横死は、特に彦根藩領内においては、同年四月の触にみられるように、「今般井伊中将当三月三日上巳之規式（ママ）麻上下御着用二而御登城被遊候処、俄二御病氣二付為御名代と南部丹波守殿登城二相成、右二付思召も被為在候二付、御大老職御役御免」⁴³というように、事実が伏せられるのが常であった。江戸桜田門外における事変を受け、彦根藩領内に「悪党者」

吟味のため、夜番が立ち、街道の辻には番小屋が設置され厳戒態勢をとった。四月二十五日には、彦根藩代官が領内村落を巡見し、宿場町および峠など、交通の要所には見張番が設置され、各村から番人を一人ずつ差し出すよう命じられた。

これより先、安政六年十月、落飾謹慎中の主、三条実万は一乗寺村で病死した。三条家は嗣子実美に継承されたが、公家として、政治主体として活動をおこなうには、父実万の死による忌明けを待たねばならず、今しばらくの時を有した。前述のとおり、三条実美の動向が目に見えてあきらかとなるのは、文久二年（一八六二）五月あたりからである。家格に寄らずとも、下から発せられる意見を汲み取ることができる「言路洞開」を認める朝議体制の構築を望んだ発言していくことになるが、このような実美の政論の実現は、正雄ら「地下」に位置した人びとにとっても願ってもないことであつた。

以後、正雄は朝議の改革への主張をはじめた実美に従って、政治工作をおこなうことになる。実際に、幕末期における三条実美のおこなった最大の公務といえる文久二年十月の攘夷別勅使としての江戸行きにも、家士として随っていることが、三条実美が記した覚書「東向要録」からもうかがえ、土佐藩山内家、長州藩毛利家などの随行大名家の人びとや、幕府役人と勅使三条実美との対面の際のサポートにあたっている¹⁾。そして正雄は、翌、文久三年には三条実美と大名家との間に立ち、政治交渉をおこなう。

文久三年三月から四月にかけて、三条実美ら改革志向を有する公家衆の衆議が著しく強まる。それは、文久二年末に成立した朝議とは別の国事審議組織における議論が活発になるにつれ、宮廷社会の維持・強化していくという方向性を生み出し、宮廷社会に存在するさまざまな人びとの経済的要求となって生まれた。献上金、献上米に関する件であり、地下と呼ばれた身分の人間がいかに政治介入をおこなったのかうかがいえる事象である。

丹羽正雄の交渉相手は、尾張前藩主徳川慶勝の側近で奥儒者の水野彦三郎であつた。文久から元治期における尾張

藩の国事運動は、大名を退いた慶勝によって担われたといつてよく、水野はその手足となり国事運動に尽力した人物であつた。正雄は文久三年三月二十七日、水野彦三郎に宛てて、「乍御苦勞早々御参殿御座候様可申上旨、中納言殿より被申付候間、早々御参殿可下」^{一〇}と、三条実美よりの面会希望につき報じる。書状中に希望の内容は書かれていないが、同晦日付で三条家に宛てて出された応答より、昨年より企画され、同年に徳川幕府より内諾を得ていた禁裏「御守衛兵」制度および同制度の延引のための俸禄「新增」の件である。水野は次の書付を認め、翌四月一日、三条家へ持参する。

諸大名家より「御守衛兵を被召候制度御延引」の補填策として、献上によつて生じた「御新增之内」から「無禄之官人江贈俸」し、これを「御守衛ニ被充」ようとしていることにつき、これが許されれば「御賄料并堂上方江御加増無禄之官人え贈俸之様十五万俵」となる。大名家においても同案の採用は願つてもなく、「尾国疲弊」を免れるばかりか、国力不足を補うにたる制度であると述べる。守衛兵を献上米にて代替させようという計画である。この企てに、將軍後見職一橋慶喜と中川宮朝彦親王にも関係した。慶喜は、將軍家茂を江戸に帰らせて、権力のありようを確認しようとしていた。幕府にとつては、守衛兵のありよう自体がうやむやなものとなれば、「渡りに船」であるから、尾張から出た代替策に乗り気であつた。「御守衛兵之儀尾州ニて異存」があるが、異存の理由が何かを問うべく、水野に面会を求めている。

一方、丹羽正雄は、守衛兵編成の中心的人物となる三条実美の側に控えつつも、尾張の水野からの申し出にかなり好意を示している。朝議への臨席に際し、参内を控えた実美の面会の機会を「中納言殿今日参内前ニ御咄被申入度義御座候ニ付、已刻頃迄ニ乍御苦勞御参殿可被下」^{一一}と、詳細に伝え、水野の周旋を後押ししている。水野の示した増俸案は次のとおりである。

米千六百俵 五撰家方親王家三軒え貳百俵ツ、新增之積

米壹万三千貳百俵 堂上方百三拾貳軒百俵宛新增之積

米壹万俵 御所并親王様准后様御初御局以下惣女官共

米貳千四百貳拾八俵 非蔵人八十五軒壹軒拾石宛増之積

米壹万四千四百貳拾八俵 口向士分以下四百五拾軒程壹軒八九石程宛増之積

米五万七千四百拾貳俵 無禄官人千人程壹人貳拾石程宛之積

ノ 米九万五千七百九拾八俵

これによれば、九万五千俵余りの俸給の新增が示されるが、地下層も増録対象に含まれている。個々人に割り当てられる俸給は微少ではあるが、「無禄官人」の政治への動機付けを高めようとするものである。結局、四月三日、三条実美との面会の際、「五万俵新增」の件は了承され、「御賄料并御加増等二相成」が確認されるも、「十万石以上諸藩より差出候御守衛兵御延引難相成」、十万石につき「士分五人同心五人之割」で選出することが決まった。

また「諸藩より貢献米之儀ハ先ニ御見合之事」となり、大名家からの献米はなくなり、「幕府よりハ新規御守衛兵差出ニ不及」と、守衛兵は幕臣より徴発することがなくなった。

このように丹羽が期待した、京都守衛を名目とする地下の政治主体化は実現しなかったが、これが企てられたという事実は、彼ら公家の家臣たちが国事に対し、非常に積極的な志向を抱いていたことの証左となろう。

丹羽正雄の政治志向は、主である三条実美の動静と連動し、浮沈する。実美が「改革派公家の首魁」として朝廷内外からのまなざしを受け、際立つ存在となると、正雄の政治活動もその頻度を増し、実美が「暴烈」と評され、その急進性を批判されて、文久三年八月十八日、宮内省クーデターによって宮廷社会から遠ざけられ、同時に、武家政治において急進と見なされた長州藩毛利家ともに京を離れることが余儀なくされると、正雄を実美に従い、京を発つこととなった。以後、正雄の任務は、罪を被った主君、実美の免罪であり、これを実現するべく山口と京の間を密に往来、周旋することとなる。三条実美は、長州毛利家の免罪を補償するためのなかば、人質として長門湯田にとどまった。実美といえ、不自由な人質生活であり、同所において、なにをしたのかといえ、相変わらず観念的に「攘夷」を主張して、長州藩主毛利慶親（のち敬親）父子に対し、攘夷を促し、これが聞き入れなければ、他大名家に応援を持ちかけ、祈願と称して社寺への祈祷をおこなうという日々を過ごしていた。身動きのとれない実美に代わり、従者として山口に同行した正雄はもともと活発な政治活動をおこなう。

文久三年九月、山口に着後まもない実美は、正雄に肥後細川および久留米有馬という九州雄藩へ奮起を促すための使者を命じる。任務は、熊本藩主細川慶順および藩主実弟で、京都政界においても才人として聞こえた長岡良之助に対し、「貴国兼々勸諭御遵奉之事ニ候得は順逆御察急度御尽力有之度」と、身動きのとれない自らに代わり、攘夷の義挙を実行せよとの要望書を手渡し、その委細を述べることである。正雄は熊本において、実美の胸中、具体的な企てを詳らかに説いたが、大名家を預かる責任ある対応のもと、丁重に「御断」された。

文久三年下半期、正雄は同様に実美の意思を伝達する任務を帯び、西日本を往来する。結果的に、実美の求めは非現実的なものと解され、賛同を得られぬままであった。このような任務に危機を感じたか、正雄は郷里の師、馬淵駿斎に書に、所有する佐々氏の系図を送って、「此者佐々系図ニ候間下官もし討死後者乍憚栄吉へ御渡し置可被下候、大切可納置旨御申含可被下」と自らが亡き後の保存を託した。『近江愛知郡志』においては「国に殉ずる覚悟を為」した

と評されるも。

文久三年十一月より、正雄は「七卿落ち」以降の京都の政情を探索するために隠密裏に上京していた。元治元年（一八六四）正月十一日、正雄は周防国三田尻に戻り、同地において正雄は、宮部鼎蔵、加屋栄太といった肥後藩勤王党関係者に京都の政情を報じるとともに、今後の政治連携を約束したのち、実美の待つ山口へ向かう。宿願である攘夷義挙の実行は、宮部ら大名家臣および浪士に託し、正雄の役割は、主である実美ら長州に滞在中の公卿の復権へと方針転換がなされる。宿願実現のためには、実美が低頭謝罪をして、まずは政界へと復帰することが先決であると判断したのである。正雄の報告を聞いた実美は元治元年正月十九日付、共に山口に赴いていた三条西季知、東久世通禧、壬生基修、四条隆謨、錦小路頼徳と連署した歎奏書をしたため、正雄と三条西家の家臣河村季興に授け、京都における入説を命じた。その内容は、「外夷掃攘」の即時断行を促すものであるが、「勅勘犯罪之身」である自らの文久三年八月十八日以前の政治的正当性を主張し、冤罪を晴らそうとするものであった。この後、正雄は実美らの復職歎願をおこなうとともに、京都においてみられた長州藩士および肥後藩士との政治連携によって「義挙」実現を目指すこととなる。

元治元年六月、京都における隠密裏の政治行動に対して、徳川幕府が対応の徹底化をおこなうようになる。散見される義挙への動きを未然に防止するべく、禁裏守衛総督に就任した徳川慶喜、京都守護職の会津藩主松平容保を頂点とし、京都の治安維持が図られたのである。多摩出身の郷士近藤勇らによって組織された浪士集団である新撰組によって、長州および肥後有志の密会現場となった京都三条の池田屋が洗い出され、同所での乱闘によって義挙を目指した人々が肅清されたことからもうかがえよう。正雄も同月、その煽りを受け、伏見の三栖院にて潜伏中に捕縛され、六角の獄舎へ収監された。翌七月十九日、政治復権を望む長州藩毛利家と徳川幕府と薩摩藩島津家といった京都守護勢力による交戦が勃発し、長州側がたちまち劣勢となるや、義挙を企てた人物は、「残党狩り」の対象とされた。政治

悪と介されたのである。七月二十日、正雄は幕吏の手により斬殺された。

9 増幅される三条実美像

ここで、三条実美の人物像が、どのような政治的、社会的条件によって生み出されたのか、考えていこう。文久二年（一八六二）十月、「攘夷別勅使」として江戸に向かい、將軍徳川家茂から攘夷奉承を受け、十二月二十三日、帰京した実美は、全国諸大名からその存在を知られるようになる。これにより、大名家とのつながりは、もともと縁戚のある土佐山内家だけでなく、その他の大名家、特に長州藩毛利家との関係が密になる。

実美の「勅使」任命前、在京の長州藩士久坂玄瑞・前田孫左衛門らは、実美と直接接触をとっていない。三条家との交流は専ら在京の山内家臣によってなされていた。では、この後、運命をともにする毛利家と実美の相互関係はいつ生まれたのだろうか。実美の「勅使」派遣問題が文久二年九月二十一日、完全決着した後、勅使が徳川將軍家にもたらす勅書の内容につき、朝議において論議された。勅書の内容が、近衛閑白、両役、勅問御人数の面々で議せられたのは、管見の限り、十月七日および翌八日の会合のみである。十月七日の会合では、閑白から参加者一同に対する「今度別勅使関東へ被差向ニ付、攘夷之辺御沙汰御疑惑之辺モ被為在」るので、腹藏のない意見を求めたことにつき、左大臣一条忠香らが「公武御一和ト申者、攘夷一件之事故、早々打払之様被遊度、速ニ御請申上」るか、あるいは「近々刑部卿（慶喜）上京、其砌力、又ハ明春將軍上洛之節御請ニ相成」るように要求すべきとの意見が出された。翌八日、一条左大臣らの意見書のなかの前項、すなわち公武一和の基本としての「攘夷」を即時断行すべきとの見解が採られ、「醜夷拒絶之期限議定、早々言上可有之、猶策略之次第、武門へ被任候者、衆議治定次第可被聞召、尤攘夷弥一定之儀、速ニ諸大名へ下知可有之御沙汰ニ候事」と、攘夷の期限を早期確定して、朝廷に報告することを求め、

その策略については、「武門」に委ね、具体的な要求を盛り込まない内容となった。⁵¹⁰ただ、十月八日の会議には、前日、議奏に就任した実美も参加しており、実美もその決議に関わっているところからみると、この時期の朝議の「急進・漸進両派の対立」は見当たらない⁵¹¹。

しかし、同会議において、朝廷から將軍家に対する要求が、勅書の別紙として添えられることが決定した。そのベースとなったのは毛利家から提出された親兵設置の建言書（「中略」京都ハ神器之所在、列聖山陵之所在ニ候得ハ、早速御親兵トモ申ヘキ御人数御置（中略）諸藩ヨリ身材強幹忠勇氣節之徒ヲ令撰募（中略）」）である。この具体的な親兵設置要求は、朝議で認められ、文言を少し変えた形で勅書の別紙とされ、勅使実美の口達により、將軍家に示されたが、禁裏守衛はあくまで將軍家の職掌であり、諸藩は外夷掃攘のため藩鎮の任に当てるとの理由で拒絶された。

長州藩毛利家が、同家の政治運動の円滑化要素として、「勅使」たる三条実美を見いだしたのは、親兵設置の建言書を提出した、その時であった。実美が江戸滞在中に記した「東向要録」⁵¹²という覚帳がある。ここには、文久二年一月二八日に江戸に到着してから、同年十二月七日に江戸を発つまで、訪問を受けた老中、高家および慶喜、春嶽らに府中の諸侯や、土佐をはじめとする諸大名、大名家臣の名と、その面会状況や、京都から送られてくる政治情報などが、メモ書きされているが、このなかで頻繁な訪問が目立つのが長州藩毛利家の面々（毛利定広・周布政之助・中村九郎・木村又兵衛・久坂玄瑞）である。彼らは副使姉小路公知に随行したが、正使である実美に日々接することで親密度を増していき、実美の帰京後、それまでの土佐と同様に、三条家に入入りし、京都において、堰を切ったかのように上京してくる大名家を主導する立場をとったのは周知の通りである。

京都における長州藩毛利家の政治的主導性を確固たるものにしたのは「親兵制度」への執拗なこだわりであった。一旦、拒絶され、立ち消えになったかに見えた親兵設置案も、文久三年（一八六三）二月、將軍上洛を目前にして、長州藩毛利家が、藩兵を精選して、「親兵」と称して朝廷に献上し、未決の親兵制度に対し、既成事実を作ろうとした。

この毛利家の行動に、「国事御用掛」および「国事参政」、「国事寄人」という朝政審議機関

が動かされる形で、「親兵設置」議論が沸き上がり、そのありかたに関しては据え置きされたものの、三月十四日、將軍家茂とともに上京してきた在京幕閣にその設置を求め、名称を「御守衛兵」とする無意味な条件付きで、設置を見たのである。

京都において、長州藩毛利家が主導権を掌握していくのと比例して、実美も、改革派公家による衆議に後押しされ、朝廷内における発言権を拡大し、さらにそれは、親兵を監督する「京都御守衛御用掛」⁵³となると、その命令一つで大名家の精選兵を操る軍事的権限を得たことで、実美は「攘夷の旗手」として、「改革派公家の首魁」として朝廷内外からのまなざしを受ける、際立つ存在となっていたのである。

しかし、実美の政治運動は長くは続かなかった。実美ら改革派公家の行動は、下からの言路洞開を嫌う中川宮（青蓮院宮）、前関白近衛忠熙ら勅問御人数（朝廷上層部）の面々にとって、また「三条初暴烈之所置」⁵⁴と述べた孝明天皇にとっても、打つべき「出る杭」となっていた。同時期に長州藩毛利家を政局から追い落とし、再度、政治運動の主導権を握ろうとしていた薩摩藩島津家は、宮、近衛および京都守護職たる会津藩松平家と連携し、クーデターを成功させた。文久政変により、長州藩毛利家は中央政局から一掃され、政治運動の正当性のより所とした三条実美をなにかば人質として、藩地に向かう。

幕末期、天皇を「玉」と表することがある。「玉」のありかたを、どのように規定するかが、政治主導権の保持のための絶対条件とされた。実美は、まさに毛利家にとっての「玉」となった。毛利家にとって、実美は、山口に赴いた他の公家とは、まったく異なる存在であった。実美らの護衛についても、実美は、湯田に滞在させて、毛利家政執行部がこれを管轄し、その他の公家⁵⁵については、三田尻に滞在させ、毛利家臣佐世八十郎がこれを管轄し、その待遇には明らかな別があった⁵⁶。

元治元年（一八六四）十一月、長州藩処分を断行するにあたり、征長総督徳川慶勝の名をもって、実美ら公家の移転が要求されたが、その際にも、毛利家は断固拒否の姿勢を貫こうとした。その理由としては、同月、毛利家諸隊長より、家政執行部に宛てた願書に、「今日の所置、一意に之を衛護し、之を極救し、之か為に其復職を周旋するに在るのみ。たとへ其事を果さすとも、豈他藩に送致するの理あらんや。若し人公卿を売て国難を遁ると謂はゞ、則ち名義地を拂ひ、公明正大の心事、翻て曖昧模糊の私計と為らむとは痛惜すべきことにあらずや」と、毛利家の目的は実美らを「極救」「復職」させることであり、これを手放せば、毛利家の「名義」が立たず、これまでの政治運動が「曖昧模糊の私計」となってしまうと言及される⁵⁷⁰。

また元治元年十二月、高杉晋作らが徳川慶勝に宛てた願書では、「若し公卿方御引渡仕候而は、七月之事を御詫申上候儀にも不相叶、却而寡君父子之罪と相成可申、一国之臣民手足之措処無之奉存候、且今日国内情実異論比党之弊有之、紛乱仕居候へハ、寡君父子信義を失ひ、公卿方を見離し候ハ、国内忽揺動、干戈を動候様相成、尚更天幕ニ奉対恐入候」と、実美らを引き渡せば、同年七月に毛利家の一部の家臣の主導により断行された禁門の変の罪状を詫びることができず、そのまま毛利敬親父子の罪となるばかりか、家臣、領民の「人心」を同様させかねないから、毛利家の「名義」を立てるためにも、実美ら公家を山口に留めたいと願うのである⁵⁷¹。

山口に留まることに對し、実美自身がどのような見解をもっていたかは定かではない。結果的には慶応元年（一八六五）正月に福岡に移転、二月十二日、太宰府延寿王院に所在を移した。慶応三年（一八六七）十二月十九日、京都に向かうまでの約三年間を太宰府において過ごすことになる。

毛利家にとっての実美は、家の名義を保つために創られたアイデンティティであり、朝廷との間に繋がれた生命線的存在であった。実美の福岡移転により、「名義」を失った毛利家は徳川幕府との武力交戦（長州戦争）へと、その矛先を向けざるを得なかったのである。

小 括

本節では、幕末公家の政治意識がいか形成され、それが実際の運動に転回していったかを明らかにするため、三条実美をひとつの素材に考察してみた。

三条実美の政治意識は、三条家士富田織部と父、三条実万の体制改革意識の影響を受けて形成され、その意識は、文久二年、朝廷内の人事要求や、勅使派遣要求という朝廷政務のありかたを問い直す運動へと転回された。

また、文久二年九月の「勅使任命」が朝廷内における実美の政治的位置付けに如何なる規定性を有したのかという点に焦点を絞り、検討した。勅使任命が朝廷内の政治的位置の上昇（従三位中納言）と、朝議に対する発言力の増大（国事御用掛、議奏就任）をもたらしたことは、朝議改革を求める実美の政治運動において有益であった。

ただ、この勅使が幕府に対して「攘夷」を求めることを任務とした事実は、朝廷内外に、実美を「攘夷の旗手」とする認識を生じさせた。「京都御守衛御用掛」としての実美は、攘夷断行を志向する長州藩毛利家の政治運動によって、より急進的性格を付与され、本来的な実美の政治意識・運動とは異なる存在となった。

さらに、文久政変により、京都を追われた毛利家に伴い、山口に赴いた実美は、毛利家の「名義」を保つアイデンティティとされた。近代以降、三条実美が「尊攘急進」とともに論じられたのは、毛利家の存在が結果的に時代の「正当」となり、幕末期の毛利家の政治論理である「尊王攘夷」主義が「正当」と認識されたことが起因すると考える。

われわれは、近代以降の実美イメージをアプリアリに想定し、そのイメージの枠のなかで、幕末期の三条実美を解釈してきた。ゆえに、実美自身が抱いた問題意識（朝議改革）の検討は捨象され、「尊攘急進的」立場ばかりが、クロージアップされるにいたった。徳富蘇峰が「尊攘精神の権化」と評した三条実万、実美父子への解釈は、その後の派

閥閥争的な明治維新史研究において生き続けることになったのである。

第二節 勝海舟の軍事構想と日本型華夷意識

1 『氷川清話』のなかの思想

日清戦争はおれは大反対だったよ。なぜかつて、兄弟喧嘩だもの犬も喰はないぢやないか。たとえ日本が勝つてもドーなる。支那はやはりスフィンクスとして外国の奴らが分からぬに限る。支那の実力が分つたら最後、欧米からドシドシ押し掛けて来る。ツマリ欧米が分らないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なり鉄道なりやるに限るよ。一体支那五億の民衆は日本に取っては最大の顧客サ。また支那は昔時から日本の師ではないか。それで東洋のことは東洋だけでやるに限るよ。

おれなどは維新前から日清韓三国合従の策を主唱して、支那朝鮮の海軍は日本で引受くる事を計画したものサ。今日になって兄弟喧嘩をして、支那の内輪をサラケ出して、欧米の乗ずるところとなるくらゐのものサ。(以下略)⁵⁹⁾

右は、勝海舟が、日清戦争を評して語った著名な一文で、彼自身の中国観、アジア観を示す根拠とされており、晩年に吉本襄によって編まれた談話集『氷川清話』に収められている。中華人民共和国との外交上の問題が取りざたされている昨今、ウェブ上にもこの一文はしばしば掲載され、称えるべき中国観として紹介される。晩年の海舟が語ったこのような対外観、アジア観の本質とはなにかを考えることを本節のテーマとしておこう。

さて、海舟の談話集である『氷川清話』は、吉本襄がそれまで新聞や雑誌に掲載された海舟の漢文体や文語調の文章やインタビュー記事などを、口語体に統一した上で分類編集し、形式上、勝自身の許しを得て、書籍化されたものである。同書には、編者たる吉本の主観が入り混じり、文意が歪曲されている疑いがあるため、長らく近代史研究の素材とはなりにくいという問題があった。しかし、松浦玲らの尽力によって成った講談社版『勝海舟全集』において、吉本による改竄が見込まれる箇所への指摘と、海舟による実際の談話との突き合わせのもとで校訂がなされたことで、ようやく使える情報となりえた。

海舟の思想、構想を再検討するため、今回はあえて『氷川清話』における彼の語りに注目してみたい。幕末期における徳川幕府政治の当事者として多くの政策立案と推進に携わった海舟ではあるが、その思想的背景がうかがえる史料が意外に見つからないことも、彼の回顧談に耳を傾けなければならぬ理由の一つでもある。

2 勝海舟の思想形成と華夷意識

幕末維新期の政治に関わった人びとが、その本来的な資質以上の評価を得て、なかば伝説として語られ、顕彰がなされていることは、もはや周知の事実となっている。そのなかで、ことに幕末には時代をリードする「開明的」人物が不特定多数、存在する。勝海舟もそのなかの著名な一人であるといえよう。

では、幕末の「開明的」人物はどのような条件付けのもと、あるべき評価がなされているのか。背景的な条件としては、その身分階層はさまざまあるが、比較的裕福ではなく、勤勉であり、親孝行であることなどがあげられよう。付随する条件としては、政治世界における判断力、行動力に秀でており、ことに幕末においては「西洋」の知に対して積極的であるか否かが、あいまいな基準を作っているようである。勝海舟は、先述の松浦玲によって、「もつとも先

進的でさえあった自己の構想」²⁰と説かれ、石井孝には、海舟には「ある種の近代的性格」²¹が備わっているなどと評され、その豊かな国際認識とその合理主義的な政治志向によつて「西洋」を受け入れ、幕府の存亡に拘泥することなく、あらたな国家形成を目指した近代的な人物として評価される。果たしてそうか。ここでは、勝海舟の青少年期の環境をふまえながら、その時代における「開明」とはなにかを考えていきたい。

ここで勝海舟の履歴を確認しておく²²。海舟は、文政六年（一八二三）、幕臣勝左衛門太郎惟寅の嫡子として生を受けた。著名な「麟太郎」は通名であり、諱は義邦（よしくに）、これを維新後に安芳（やすよし）と改めている。勝家の歴史は、天正三年（一五七五）、勝市郎左衛門時直にまでさかのぼることができ、徳川家康にはじめて仕官した時直を家祖とし、四代目の市郎右衛門命雅まで代々、鉄砲玉薬同心を職とした。以降、小禄の旗本ながら六代、甚三郎元良まで、「小十人組」といわれた旗本の常備軍組織のなかの一家として、将軍「御成」（外出）の折の護衛、江戸城内の警護などの職務にあずかった。七代、惟寅は「小吉」の通名が有名な海舟の実父である。喧嘩っ早い性分で、生涯、無役の旗本であったこと、江戸で栄えた剣術流派であった直新陰流の使い手であったことなどは、彼の著した自伝『夢酔独言』²³に詳しい。

父、惟寅の生家は男谷家といい、同家は杉山流鍼灸術を修得した「検校」たる地位にあった米山粮一の三男、忠恕を家祖とする家であった。「検校」は盲人を支配する家で、十家が存在した。忠恕は、勝家と同様の小十人組で、支配勘定、勘定組頭などの職を歴任し、その子、思孝は、江戸時代に編纂された大名、旗本の系譜集である『寛政重修諸家譜』の編纂に携わった当代屈指の儒学者であった。海舟は親しい伯父、思孝に儒学のいろはを学んだといわれる。さらに、思孝の養子で江戸後期の三大剣術家に数えられる男谷精一郎信友は、講武所剣術師範役を務め、講武所奉行並として、下総守に任じられた、「武」のエリートであった。

少年期の海舟のまわりには、良質な文武の環境が存在し、これによつて政治家としての素養は形成されたといえよ

う。海舟自身は、後年、自らの青少年期を振り返り、「本当に修行したのは剣術ばかり」とし、男谷信友の弟子で、信友と共に、三大剣術家に数えられる島田虎之助に学んだことを特に強調している。島田が文武を奨励し、特に禅学、儒学の習得を指示したことも、海舟の人間形成に大きく寄与したと考えられる。「座禅と剣とがおれの土台」という彼は、後年にも儒学についてはあからさまには語っていない。西洋および洋学受容に関する主張や意見は、新聞紙上の文章や著作のなかで吐露しているが、儒学に関する見解が反映されたものはない。儒学の学び自体が、人間形成の基礎、根幹をなし、さして特別な評価基準になりえないこともある。事実、国立国会図書館憲政資料室に所蔵される勝海舟関係文書中、勝自身の蔵書と目される分類に、儒学に関わる書籍は存在せず、「和蘭別段風説書」の写本や、「海上砲術全書」・「三兵答古知幾」と題された軍事に関わる洋書の和訳本が大半を占める²⁶。推測の域を出ないが、青少年期の学びに関わる書籍は、現代における学校教科書などと同様に、修学の後、廃棄されるか、あるいは後学の徒に譲渡、回本されたのであろうか。

それでは、勝海舟において儒学的思考、見解が見いだせないのか。その手掛かりは、後年の語りからうかがえる。明治二十年代の海舟は、藩閥政治を批判的にとらえる評論を多くおこなったが、そのなかで、「政治家の秘訣は誠心誠意」として論じた一文²⁷がある。

政治家の秘訣は、ほかに何も無い。ただただ正心誠意の四字ばかりだ。この四字に拠りてやりさへすれば、たとえいかなる人民でも、これに心服しないものはない筈だ。また、たとえいかなる無法の国でも、ゆえなく乱暴する国はない筈だ。ところで見なさい、今の政治家は、僅か四千万や、五千万足らずの人心を収攬することの出来ないのは勿論、いつも列国のために恥辱を受けて、独立国の体面をさへ全うすることが出来ないとは、いかにも齒痒いではないか。つまり彼らは、この政治家の秘訣を知らないからだ。よし知って居ても行はないのだから、

やはり知らないのも同じことだ。何事でもすべて知行合一でなければいけないよ。

右は、明治二十九年（一八九六）五月二十八日の『国民新聞』紙上に掲載された「海舟翁茶話（下）」を初出とする談話である。日清戦争後の政情混乱の收拾が付けられず、退陣間近であった第二次伊藤内閣に対する批判文である。「正心誠意」とは、「意を誠にして、心を正す」の意で、四書五経の一つ『大学』において説かれる表現である。また「知行合一」は、明代に王陽明がおこした学問である陽明学の命題のひとつとされ、『論語』為政第二にある「先ず其の言を行い、而して後にこれに従う」を原点とする論理である⁶⁶⁶。また、「外交の極意」についても同様に、儒学的な見地から「誠心正意（心を誠にして、意を正す）」で説き、真摯な外交姿勢の必要性を主張している。

この論理を想定しつつ、内外の政治に向き合えというのであれば、明治二十年代における海舟の思考のあり方は、儒学的論理によってその正しさを主張するものであり、幕末期からほぼ一貫していよう。

3 海軍興隆のための西洋「知」

海舟の海軍論は、自然、彼自身の対外観から生成されている。彼の対外観、ことにアジア観を論じた研究は、征韓論へとつながり侵略戦争と結び付ける森谷秀亮らの見解⁶⁶⁷と、西洋への対応するためのアジア諸国の連衡とする松浦玲⁶⁶⁸・木村直也⁶⁶⁹らの見解がある。これを考察するためには、海舟の思想基盤を解明する必要性があるろう。

安政二年（一八五五）正月、海舟は、下田取締掛手付として蕃書翻訳勤務に就任して以降、講武所師範、蕃書調所頭取助など、洋楽に向き合うことで対外問題にかかわる職務を担った。ゆえに西洋からの「知」と向き合うという仕事のイメージと、のちに「西洋化」をすなわち「近代化」と解する発想のなかで、海舟自身が「開明的」かつ「先進

的」であると認識された。ここで、海舟の才知が凡庸であると言っているのではない。問われるべき「開明」は、先にみた幕臣の子弟として、受けてきた教育のなかにおける儒学が、その人間の精神に大きく働きかけていると考える。西洋、東洋といった対象を問わず、日本人の対外意識は儒学的思考に支えられていたと思われるのである。

さて、海舟が蘭学と向き合うようになったのは、天保十三年（一八四三）、二十歳のことと言う。これには諸説あり、海舟に師事した富田鉄之助によれば、天保九年（一八三八）、十六、七歳のころ。大概如電によれば、弘化二年（一八四五）、二十三歳のころとある。何れにせよ二十歳前後の多感な折に、あらたな「知」におおいたる関心を抱いたのである。海舟が師事したのは、まず、西洋馬医術の専門家都甲斧太郎、つづいて筑前藩の侍講であった蘭学者で、『銅版万国輿地全図』を著した地理学者でもある永井青涯であった。ことに地理学者より受けた学びは、政治家海舟の世界観の深化につながった。「城中において、和蘭陀より献納せし大砲を見る。砲身の文字を見ては切に之を理解せんことを思ふ。よつて直ちに時の蘭学者を訪ひ、海外の事情を問ふ。ますます感慨に堪えず、是に於いて決然として蘭学を修めんと志を生ぜり」とあるのは、従前の儒学の素養に加えて、西洋を冷静な目でみる視角を保持する大きな機会となりえたのである。

海舟の本音は、西洋基準では当たり前となっていた軍艦で乗り込んできた西洋諸国に対する無策な状況に向けられた。西洋に翻弄される状況に辟易としているのである。「東洋の弱小国の伍を脱して西洋の文明国と進退を共にするようになったからといって、朝鮮とか、シナとか、ロシアとか、英国とかいって各別に見て貧富強弱によつて種々手加減するのは間違っている」と述べる。さらには、「一片の至誠と断乎たる気骨さえあるならば、国威を宣揚することも決して難しくはない。こういうふうに切り抜けようなど、あらかじめ見込みを立てておくようなことはしない。ただただいっさいの思慮を捨てて、妄想や邪念が靈智を曇らせることのないようにしておくばかりだ」とこと外交に対する強硬姿勢を論じる。

嘉永三年（一八五〇）、江戸の赤坂において開かれた私塾「氷解塾」を経営し、蘭学の考究と教授にあたる傍ら、大名家に請われ、大小銃砲の設計と製造に従事した。この頃には、のちに幕府の海軍施設、軍艦操練所蘭書翻訳方として活躍する佐藤与之助（政養）、幕府開成所教授として幕臣の教養に当たる杉純道らが海舟に師事している。当該期に書かれた海舟の論策には、蒸気の圧力で砲弾発射が可能な新式砲を紹介した「蒸気砲」、旧式の砲術を改め、「蟬行私言」がある。私塾の事業として銃砲製造が積極的におこなわれたことからもうかがえるように、海舟の興味は、銃砲の軍事インフラに向けられていた。海舟の軍事構想は、嘉永六年（一八五三）七月、その前月、アメリカ合衆国ペリ―艦隊の来航を受け、その対応策が幕府内外に問われた際に提出された海防に関わる上書（「愚衷申上候書付」²²※以下、上書bとする）よりうかがえる。

一点目は、江戸湾の防衛の強化についてである。これは上書aの主要命題とされ、そのための海舟なりの方法論が示されている。

アメリカが来航し、日本近海の情報を探り、持ち去ったと考える海舟は、その原因を我が国に生じた緩み、隙であると考え、それを防ぐ手立て、すなわち「当時之御急務肝要之御所置」として、「軍政之御変通」すなわち軍制改革と、「択将」すなわち人材登用、さらには「調練」すなわち軍事調練をあげる。そのうえで、「江戸海え堅固之御台場御建造」し、幕府旗本の待遇を手厚くするように求める。具体的には、実用性のないこれまでの海防、江戸湾房総半島の「富津・観音崎・猿島等」の防禦拠点の見直しをはかり、「当今之御急務」として「海岸ニ設置候銃台ニは十八斤以上之大銃并暴母加農（ボンベカノン）と唱候銃を採用」するとともに、その「製作」方法の確立を急ぎ、実戦に対応できるようにすべきと述べる。そして、「先大森羽田之出洲、品川之洲先并二佃島之出洲等築出し、此所え七十挺備御台場、其外深川之地先、芝因州之下屋敷并浜御庭先等えは、十挺、或は二十挺備之御台場御建造被遊、是より彼は相

応じ、十字射に放発」することができれば、江戸はかなり安全であろうと説く。海岸における防備の充実化だけでなく、当該期に存在した海防論者に同じく、軍艦の必要性を認めるが、海舟の軍艦への思いは、あくまで現場を担当する可能性の高い当事者の視点で主張され、それは「唯今之處にては、軍艦御座候ても不練熟故、急ニ御用立」たないとし、ひとまずは「差当り江戸之御固厳重ニ御世話」し、「其上追々軍艦、其他之御世話」しても遅くはない。たとえ、戦争となつて「孤島杯一、式ヶ所奪ひ取られ」ても、ゆくゆく「軍艦御製作ニ相成」れば、取り返しはつくものと、はなはだ樂觀的とも取れる海舟の真意は、上書bによつて補完的に説明づけられる。

上書bは、①人材の登用、低身分のものからの意見聴取（言路洞開）、②海防の要となるのは、やはり軍艦であること、③首府たる江戸を厳戒に警備すること、④旗本を経済的に支援するとともに人材育成し、改正された兵制に見合う教育の場が必要であること、⑤弾薬に必要な人工硝石、あたらしい武器の製造、という五つの骨子からなる。このなかで、この後の海舟の構想と結び付くものは、①、②、④と思われる。

まず、①については、幕臣勝海舟の希求する政体のありかたであり、従来までの研究においては、「公議政体」創出の議論として最も注目された見解である¹⁴。賢明有能な人材を役人として登用し、彼らによつて合議をおこない良策を生み出すこと、すなわち封建政治に対して向けられたアンチテーゼたる見解である。②の軍艦については、それを早急に造ることや、航海術、戦闘技術の習得が困難であると認知している。この苦境に如何に対応するべきか。海舟はこの際、日本の外から得られる利益に着目するのである。

大砲・大艦を備えるには莫大な費用が必要となる。その費用を国内から賄うことは、不当な課役に頼らざるを得ず、不可能に近い。ともかくも、大きく、堅固な艦船の製造を認め、それを運用し、戦争にはなく、「まず清国・魯西亜の辺境ならびに朝鮮へ此方より雑穀・雜貨を以て有益の品々と交易盛に」とりおこなうべきと、積極的なアジア諸国との通商を主張する。アジアとの連携が、維新後の海舟の対外觀に顕著なことは後述するが、海舟の対外觀は、近世

期とほぼ一環したものであることに注目したい。近世、江戸時代の日本人の対外観は、官学とされた儒学（朱子学）的世界観たる「華夷秩序」によって形づくられていたことはよく知られている⁷⁶⁰。明から清への王朝交替による周辺、隣国における清朝の相対化にあいまって、近世後期、日本の朱子学のなかで問われるアジア、殊に中国（清）の位置づけが低下していく⁷⁶⁰。

近世後期の昌平黌の儒者においても、清朝を相対化する傾向があらわれ、従来の呼称である「中華」から「齊州」、「西土」と呼称が替えられ、天保二年（一八三一）以降、ついには「支那」と変転することにもうかがえよう⁷⁶¹。自然、儒学によって、世の中を理解し、人間形成をしえた海舟においては、一九世紀のアジアが相対化されるべき対象として低く見積もられて理解されていた。日本の海防のための軍艦製造と、これにかかる経費捻出のために使われる東アジアという構図が海舟の頭のなかには存在するのである。

ゆくゆくは建造したい軍艦。④は、その担い手を育成していくための教練機関の設置についてである。この機関においては「和漢蘭の兵書・銃学書、何に寄らず御取集め、其内廉立ち候科は天文学・地理学・究理学・兵銃学・築城学・機械学杯先研究仰せ付けられ、もし御家人の内人数不足の分諸藩より召し出され、御人撰の上教授仰せ付けられ候はば、暫時の内に上達、出藍の者これ有るべく候」と、西洋の知の積極的な需要と、幕臣にとられない人材の育成が問われている。

嘉永六年における勝海舟の政論は、日本の防衛に向けられた。日本の風土や文化を保守するために、軍艦、銃砲および軍事的インフラの整備が必要であり、この素地を作るために、隣国アジアが使われる。また、あらたに成るであろう軍事施設の有意義な活用のために、西洋的な知の導入が図られていく。このような、勝海舟の論策は、幕末期全般にわたって貫かれ、ひいては、近代日本の戦争に対する海舟の思いにまで連続していくことになるのである。

4 神戸海軍操練所という思想

文久二年（一八六二）は、日本において「国政」のあるべき姿、殊にペリー来航以降の徳川幕府の外交姿勢が、政権担当者以外、武家、公家の身分の別なく強く意識されて問われはじめた年となった。同年八月に武蔵国橘樹郡生麦村（現、神奈川県横浜市鶴見区生麦）付近において起きた薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件により、その賠償をめぐって対英関係が悪化したことに危惧した朝廷は、大坂湾岸警備の嚴重化を求め、文久三年（一八六三）二月、鳥取藩主池田慶徳を「摂海守備総督」に任じ、大坂湾の防禦指揮を命じた³⁰。大坂湾における台場建設は、嘉永七年（一八五四）、プチャーチン率いるロシア艦来航をきっかけに、翌二年（一八五五）、幕臣川路聖謨によって紀淡海峡、明石海峡の要所に台場を築き、砲台を建設が提唱されており、安政五年（一八五八）よりは、長州藩毛利家を中心に、鳥取藩池田家、岡山藩池田家、土佐藩山内家、柳川藩立花家、尼崎藩松平家の藩兵によつて、兵庫から堺に到るまでの海岸が防禦されていた。しかし、文久三年（一八六三）、長州藩による大坂湾警備からの離脱にともない、外様雄藩によつてなされた警備体制が一変し、畿内地域に所在する譜代藩を中心になされるものとなった。

勝海舟が大坂湾警備を職務として担うようになるのは、このような大名家による警備転換の時期に当たり、幕府は、外様雄藩の力に委ねていた大坂湾の海防を、徳川幕府による台場建設による軍事インフラの整備と、畿内譜代大名からの軍役によつて補填しようとしていたのである。軍艦奉行並として、幕府海軍を牽引する立場となっていた海舟の任務は、大坂湾に軍事施設を建設し、海軍に対する理解を京坂地域に根付かせることであつた。将軍徳川家茂を幕府軍艦順動丸に乗せて大坂湾を巡視させたことも、宮廷社会における改革派公卿で、文久二年十月、三条実美とともに江戸に赴き、攘夷断行を迫った姉小路公知を順動丸に乗せ、艦上から海防の発展の必要性を問いたこともその一環で

あった。

文久三年段階の大坂湾の軍事インフラの整備は、摂海台場用掛に任命された老中格小笠原長行によって主導されるも、天保山台場の他、和田岬、湊川、西宮の砲台建設はまだ緒に着いたばかりであった。この時期の海舟の思考は、ペリー来航当初に抱いていたような軍事インフラの整備にのみ終始するものでなかった。確かに数年の後には、大坂湾の要所に台場が建設され、計画では八〇〇を超える大砲が設置されるはずであった²⁰。この台場をしつかりと活用できうる人材、新鋭の軍艦を操り、海より守ることを体現できる人材の育成こそ必要であると主張する。前出の姉小路公知に「摂海警衛の事」を問われた際にも、海舟は言い切る。「海軍にあらざれば本邦の警衛立ちがたし」と²¹。

文久二年閏八月、軍艦奉行並に就任した海舟は、徳川幕府がなすべき最大の「急務」を人材の登用であるとした。すなわち、海軍を振興させるには「寧ろ學術の進歩して、その人物の出でんことこそ肝要」であると述べ、その「人材」を「皇国の人民、貴賤をいわず、有志を選抜」することを求めたのである²²。幕臣のみならず、諸大名家中より有志を募り、育成する。ペリー来航に際して述べた教練機関の設置こそ、もっとも人材に必要な大坂湾、神戸の地において実現させようとしたのである。人材登用についての積極的に主張は、当該期の幕府内部ではかなり一般的となっていたが、海舟の主張する人材は、海軍を担うことで日本防衛をおこないうる武勇を備えた人材であったことが、近年、平良聡弘によって指摘されている²³。海舟は、そのような人材を「武夫」と呼称し、「近時天下の形勢を動かせしは武夫なり、武ならでは天下の事は成らず」と語る²⁴。海舟がその建設に尽力し、短期間ながら存在しえた施設、神戸海軍操練所に込められた「一大共有の海局」たる意義は、自らが案じて建設した幕府機関を有志とともに共有し「武夫」を育成し、前述した東アジアに対する上からの働きかけを念頭に置き、世界に向き合うための機関であったのである。

海舟の日記によれば、文久三年四月、將軍家茂の兵庫小野浜巡視があった頃には、施設の運営および規模はおおよ

そ決定していた。

摂州神戸村海軍所、御取建相成り、土着の者、追々御引移り相成るべく候、ついでには、海軍所御入用として、年々金三千両宛相渡すべく候間、御取締りは勿論、御実備相成り候よう取扱い、年々御勘定仕上げいたし差出さるべく候、尤も津田近江守、松平勘太郎へ掛り仰せつけられ候間、談ぜらるべく候、其方、拝領のうち五十俵、摂州神戸村最寄りにおいて、地方に御引替え下され候間、委細は御勘定奉行談ぜらるべく候事、摂州神戸村最寄りへ相對を以て、地所借受け、家作いたし、海軍教授致し候儀、勝手次第致さるべく候事⁸⁴

神戸海軍操練所は、神戸村において用地を買い受け、勘定奉行であつた津田近江守正路と、大坂町奉行の松平勘太郎（信敏）が操練所の運営を兼帯し、年間三〇〇〇両の幕府予算によって運営されることになった。用地は、神戸村小野浜安永新田敷地一万七〇七四坪。大小三つの船着場、ドックが完備されたものであつた⁸⁵。また、老中支配の機関であつた大坂船手組を吸収し、長崎浦上村淵字飽の浦に所在した長崎製鉄所と、採掘量こそ芳しくないが、神戸に近在した高取山の炭鉱を従属し、幕艦観光丸、黒龍丸の利用が認められた。

海舟は、幕臣のみならず、大名家臣および自身の弟子の育成をも同所でおこなうべく、幕府予算とは別に、経済的支援者を求め、福井前藩主松平春嶽に三〇〇〇両の融資を依頼している。坂本龍馬を遣わして乞うたのは、この勝手づくりの私塾を、大名家臣に開かれた昌平黌諸生寮に似た形で運営するためであろう。事実、海舟のもとに集った書生には、割り出せる限りにおいては、土佐藩を脱した坂本龍馬のほか、長州藩、鳥取藩、岡山藩といった大名家中の人間が多く、彼らを大坂湾軍事インフラの運用のための人員候補と見ていたといえる。「大坂より十里あまりの地にて兵庫という処にて、おおきに海軍を教え候処をこしらへ、又四十間五十間もある船をこしらへ、弟子共も四、五百人

も諸方よりあつまり候」とか、「今何事かでき候得は、二、三百人ばかりは私預かり候得ば、人数気ままに使ひ申候よふ相成」などと、自らの状況を誇張しつつ、家族に伝えた坂本龍馬も、諸生のなかの「武夫」候補であったといえるのである⁸⁶。

さらに、操練所の展開、展望について海舟は次のように語る。「文久の初め、攘夷論の甚だ盛んにして、摂海守備の説、また囂々たり。予建議して曰く、宜しくその規模を大にし、海軍を拡張し、営所を兵庫、対馬に設け、その一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合縦連衡して西洋諸国に抗すべしと」。このうち、「三国合縦連衡」は、これまで東アジア同盟論と解されてきた⁸⁷。もちろん、組織規模の拡大を狙い、この展開を朝鮮、中国の地においてなしえようとしているところなどは、同盟と解される面であらう。だが、当該期の海舟の日記に、日本のアジアへの姿勢について「我が邦により船艦を出だし、弘く亜細亜各国の主の説き」と、その主導性が強調されているのは、アジア諸国との「合縦連衡」のなかには、先にみた幕末に日本型にアレンジされた華夷意識が介在していると考ええる⁸⁸。神戸海軍操練所は、軍事インフラの運営に堪えうる「武夫」の育成をおこない、華夷秩序における上位者たるべき日本の政治体制を守ることに意義を有する徳川幕府の機関として存在したのである。海舟は、神戸海軍操練所に設置された「私塾」について、後年、次のように語る。

塾生のなかには諸藩の浪人が多くて、薩摩の暴れものも沢山居たが、坂本龍馬がその塾頭であつた。当時のあばれもので、今は海軍の軍人になつて居るものがずいぶんあるヨ。しかるに、幕府の役人からは、勝は海軍を起し、地所を買入れ、薩州のあばれものや、諸藩の浪人を集めて、そして彼らもまた喜んで勝に服しているといふのは何かの仔細があるのであらうなどと、ひどく憎まれて、たうとうしまひには江戸の氷川へ閉門を命ぜられ、地所などもいつさい取揚げられてしまつたヨ。⁸⁹

文久三年当時において、海舟は神戸海軍を「共有」機関とすることを理想としていたはずであったが、結果、塾生の多くが幕府予算のなかで新規事業を推進していくための足かせとなった。「武夫」育成の思いは、およそ一年九ヶ月で潰えた。インフラ建設に重きを置き徳川幕府の防衛方針と、「武夫」育成のための海舟の海軍操練にかける思いが完全に矛盾するものとなってしまったのである。元治元年（一八六四）三月、海舟の日記には、「我が建議せし海軍の事、悉く破れ、殆ど俗吏の愚見に圧せられんとす。此日、憤激して、此議御採用に充られずむば、私力を以て暴起せむ、これ国家の患難、傍觀に堪えざるの余りなり」⁹¹と、自身の構想がなかなか実現の運びとならないことの憤りがうかがえる。また、翌四月、若年寄稲葉正巳へ上書を提出し、「撰海砲台数ヶ所に築くは急務」ではなく、そのような予算を「海軍興起」に当てよ。「海軍を捨て、狭小の砲台、わずかに撰海の警備を以て天下の一大急」とするのはどうしてなのかと憤懣やるかたな思いを吐露している⁹¹。

「おれも最初から到底永続はすまい」と悟っていたと語る海舟の思いは現実となり、元治元年十一月、海舟の江戸召還、免職によって、神戸海軍操練所は廃止されることとなった。神戸海軍は、勝海舟という政治家がおこないえた、最初で最後のクリエイティブな仕事となるはずであったが、志半ばで終幕することになった。まさに人材を育むという目的を成就させるために必要な「翼」をもがれてしまった海舟は、慶応二年（一八六六）五月まで、隠遁生活に入る。譴責が解け、軍艦奉行に返り咲いたのちの仕事といえ、第二次長州戦争の幕引きと事後処理であった。

5 亡き「友」、アジアの「友」

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽伏見の戦いのち、明治新政府が山陰道鎮撫を完了すると、つづいて東征が開始

された。旧幕府内にこのような時局に対応できるものがおらず、海舟が徳川家の家職である陸軍総裁として、後に軍事総裁として全権を委任され、旧幕府を代表する役割を担う。官軍が駿府城にまで迫ると、幕府側についてフランスの思惑も手伝い、徹底抗戦を主張する小栗忠順に対し、海舟は早期停戦と江戸城の無血開城を主張し、ここに歴史的な和平交渉が始まる。三月九日、山岡鉄舟を駿府に滞在していた西郷隆盛のもとに遣わし、和平への基本条件を整えた。予定されていた江戸城総攻撃の三月十五日直前、十三、十四日の両日、勝が西郷と会談、江戸城開城の段取りと徳川宗家の存続などについての交渉をおこない、結果、江戸城下での市街戦という事態は回避され、戦火から救われた。

維新後も海舟は旧幕臣の代表格として外務大丞、兵部大丞、参議兼海軍卿といった外交・軍事の要職を歴任する。しかし、明治八年（一八七五）、海軍卿を辞して以降、元老院議員、枢密顧問官に就任するも、早期に辞意を表するなど職務への情熱を失っているらしい。事実、「部下に仕事を丸投げして判子を押すだけの様な仕事しかしてない」との語りもそれを裏付ける。

明治十年（一八七七）、ある人間の死が海舟の気持ちを顕彰に向かわせる。不平士族に擁立された元参議西郷隆盛が、西南戦争に敗北し、鹿児島城山で自刃するという事件がおこる。これを悼んだ海舟は『亡友帖』なる冊子を編み、次の漢詩を詠んで西郷を追懷する。

明治六年奉勅到于鹿児島（明治六年、勅を奉じて鹿児島に到る）

先生訪余旅舎談笑揮毫歡甚矣（先生余を旅舎に訪い、談笑揮毫、歡甚し）

偶誦旧詩愴然為録于此（たまたま旧詩を誦して愴然たり、為にここに録す）

因想疇昔真如隔世（因って疇昔を想えば、真に世を隔たるが如し）

明治六年、島津久光を上京させるべく、鹿児島に赴いた海舟は、宿を訪ねてきた西郷と会し、旧詩を詠んで歓談した思い出をつづったものである。『亡友帖』に掲載された「友」からの来簡は、西郷を含めて一〇名。佐久間象山、吉田松陰、島津斉彬、山内容堂、木戸孝允、小松帯刀、横井小楠、広沢真臣、八田知己。彼らを「友」とし在りし日の思い出を追懐するのである。海舟は、「友」あるいは「友人」という言葉をよく使う。明治十六年（一八八三）、西郷隆盛を弔うべく建設した留魂碑の裏面には「友人 勝安房」との刻銘がある。ここでいう「友人」とはなにを意図するのか。これも儒学的見地における「知己朋友」であると解釈したい。自分の心や真価を知ってくれる人、すなわち良き理解者といえようか。身分を超えた「友」を追懐し、自己正当化をはかる一連の作業を通して、もはや人材育成をおこなえない、自らを慰撫しているように思える。明治十年代の海舟に特徴的なおこないであるといえる。

海舟が「海外の一知己」として、その人間関係を称して憚らない人間がいる。丁汝昌。清国北洋艦隊司令長官である。丁汝昌は、清国の公務として二度、来日している。一度目は明治十九年（一八八六）八月、ウラジオストクからの帰国途中に、艦船修理を目的に長崎に入港した。この折、清国水兵と日本の警察との間で乱闘事件（長崎事件）が起こり、八十名を超える死傷者を出し、事後、両国間の談判に半年をかけねばならなかった。二度目は明治二十四年（一八九一）七月、六艘の軍艦によつて編成された北洋艦隊は、長崎、神戸、横浜、宮島（呉）を順に寄港した。この一ヶ月にわたる清国軍のトップにある人間が訪日したことは日本中の大きな関心事となった。明治二十四年七月七日付の『東京日日新聞』には「自から提督たるの風采を備へ居れり」と、丁汝昌の大きな存在感を示されている。二度目の北洋艦隊の訪日に際し、前回の不祥事をふまえ、日本全国が大いなる歓待ムードとなり、在留清国人、政治家、学者も出席する盛大な歓迎セレモニーが催されたり、日本主要軍港の見学、史跡見学などによつて、厚くもて

なされた。

海舟が「知己」たる丁汝昌に面会したのも、この折であった。明治二十四年七月九日、丁汝昌と初めて面会している。同日の海舟の日記には、「清国海軍惣提督丁汝昌、種々和談」とあり、プライベートな面会がなされたものと思われる。翌、十日の昼、丁は旧幕臣で当時、外務大臣であった榎本武揚によって東京後樂園で催された園遊会に出席し、同日の夜には芝紅葉館において開催された亜細亜協会主催懇親会に出席し、列席者と漢詩文に交流した。七月十四日の夜は、丁汝昌自身が、来航以来の歓迎を謝し、返礼のために、軍艦定遠号内において在朝在野を問わず、貴顕紳士および新聞記者を招いた懇親会を催した。海舟がオフィシャルな場において丁と会したのはこの折であり、親しく意見交換をした海舟は、退出の際、丁より「海軍大将の礼を以て」送還したが、『国民新聞』七月十六日付の記事とになっている。海舟と丁の間を取り持っていたのは、旧米沢藩士で、亜細亜協会の前身、興亜会の創立に携わり、中国要人と関係の深い宮島誠一郎である。海舟と丁は「臂を把て談」じ、その有り様は「旧識」があるかのようなであったという⁹³⁰。

海舟は、明治八年（一八七五）、海軍卿および元老院議官を辞して以降、前述のとおり政治を實踐する立場になく、在野に程近い人となっていた。丁は、そのような海舟の海軍にかかる実績を尊敬の念を抱いていた。丁の関心事は、海舟がかつての政府である徳川幕府において、軍艦奉行、海軍奉行並、陸軍奉行といった軍の最高幹部を歴任し、神戸海軍操練所においてなしえようとしていた「武夫」すなわち有能な人材の育成であった。この海舟の経歴に清国海軍の統率者である丁汝昌は共感の念を抱いたのであろう。丁は海舟が、明治二十一年（一八八八）、明治政府海軍省から依頼を受けて執筆した『海軍歴史』の熱心な愛読者であり、「うたたの同情の感に堪えず、切に敬慕致し居る」との思いを述べたとされる。

『海軍歴史』は、日本における刊行の後、すぐに漢訳され朝鮮、中国の知人に対して配付されたという⁹⁴⁰。日本にお

ける刊行物の漢訳に大いに協力していたのが亜細細協会であり、宮島誠一郎であった。ことに維新後、宮島は清国公使館との間で個人的に人脈を作り、日本の要人と清国政府との橋渡しをしたことで知られる。また子の宮島詠士は海舟に師事し、のちに善隣書院長として父の遺志を継いだ⁹⁹。

誉められること、歓待されること、やぶさかではない海舟は、「友」たる丁汝昌と彼の統率する北洋艦隊に好印象を抱いた。軍艦「定遠号」の西洋の力によつて近代化された内装に「吃驚」し、「世の中の惰眠を警醒」しうるものとし、艦内の日用品が「一つの外国製のをを用いず、支那製ばかり用いて居たところなどは、実に関心した」などと、日常までは西洋に傾倒しないところに、清国人における力強い国家への思いを感じた⁹⁹。

「定遠号」のレセプションに参加した東郷平八郎などの軍関係者、その他、政府要人が、清国人の士気の低さを指摘するなか、海舟の北洋艦隊評はなかば誉めすぎの感が否めない。丁という男に対する私情もさることながら、丁の清国政府における立場についても、幕末に徳川幕府の軍事責任者たる自らとをだぶらせて、その労苦に共感しているのであろう。丁汝昌は、軍事に暗い文官によつて占められている北京の政府首脳と軍事政策において反目していた。

清国への忠誠心を持つて戦場に位置する丁ら軍人、戦場を経験しない政府首脳の間に来た溝は、海舟の海軍構想にフタをした幕閣の海軍に対する認識の差異に類似する。また、伊藤博文や陸奥宗光によつて展開される西洋型の国家建設に対して警鐘を鳴らしつつも、政界に一線を引いた現実が、海舟に丁が自らの後進たるイメージを抱かせたのであろう。海舟が、維新後、清国および朝鮮の人びとと交流を持ったことは、『氷川清話』のなかからもうかがえるが、この丁汝昌ほど、海舟の心を揺さぶった「友」はいない。

丁汝昌の北洋艦隊が日本を去つて、約三年。明治二十七年（一八九四）朝鮮において大規模な農民反乱である東学党の乱が起きる。朝鮮は、清国へ乱鎮圧のための援軍を求め、朝鮮を勢力下に置きたい日本政府、在留日本人の保護を名目として出兵を決する。いわゆる日清戦争の端緒であった。海舟が日清戦争に反対していたことは、周知のこと

である。従来、「アジア同盟論」と解された海舟の論理は、前述のとおり、幕末より培われた対外観、すなわち日本型華夷秩序を基底とした東アジア擁護主義である。

日清開戦にあたり、海舟は「偶感」と題された漢詩をよむ。

隣国交兵日（隣国兵を交ふるの日） 其軍更無名（その軍、さらに名無し）

可憐鶏林肉（憐れむべし、鶏林の肉） 割以与魯英（割きて以て魯英に与ふ）

隣国において戦争を起こすことは無意味である。清国と戦えば「鶏林（新羅の意）」、すなわち朝鮮などは、ロシアやイギリスに漁夫の利として分け与えることになる。隣国との交戦否定し、この思いをかなり上位者の視角から論じている。

日清戦争は、結果的には軍事の近代化をなした日本によって、終始有利に展開された。三年前に、驚嘆した軍艦「定遠」を上回る快速軍艦を利用した連合艦隊が結成され、陸海軍ともに清国軍を凌駕しえた。丁汝昌率いる北洋艦隊は豊島沖海戦、黄海海戦で敗退し、旅順、そして威海衛へと逃れ、この威海衛において、日本軍の水雷艇によって甚大な被害を受けることとなる。日本軍の最高司令官であり、かつて海舟の門下生であった伊東祐亨は、丁汝昌に対して降伏を勧めたが、自害。勝利を確実なものとした日本は、アメリカ政府の仲介により下関において講和条約を調印するに至る。⁹⁶

小 括

幕末期の「開明派」吏僚、勝海舟における儒学的素養から生成された世界観、ことに近世日本における外国認識の基軸たる華夷秩序との関係づけることによって、海舟の意識のなかにある「保守性」をあぶり出し、その上で海舟が西洋の「知」を受容し、軍事面の強化につなげようとしたことを確認した。神戸海軍操練所は、海舟の軍事構想の具像であるといえ、そこにおいては、華夷秩序に基づいた隣国連携が目指された。その折に、同じく強調された人材（「武夫」）育成の方針と、軍事インフラの早急な整備を掲げる幕府方針が齟齬をきたし、海舟の海軍構想は瓦解してしまう。人材育成を放棄せざるをえない海舟は、自らを理解し、支援してくれる心広き「英雄」、「知己朋友」を待望する。

維新後、海舟は、明治の性急な開化主義的なありようを受け入れず、往時より抱かれてきた近世的世界観をモノサシとして、近代外交を看取していた。政治の当事者たりえない海舟は、亡き「知己朋友」の死を悼み、あらたな「知己朋友」を国外の理解者に求めようとした。丁汝昌に対する「友」の意識は、清国における丁の立場に共感しただけでなく、清国が相対化された日本型華夷秩序の枠内において、自らに教えを請う者として捉えていたのである。

第五章 第一節 注

「蘇峰徳富猪一郎編述『三条実万公・三条実美公』（梨木神社鎮座五十年記念祭奉賛会、一九三五年）二頁。以下、『実美公』と略。

² 『国史大辞典』六（吉川弘文館、一九八五年）五五七～八頁。

³ 『実美公』六～七頁／下橋敬長『幕末の宮廷』平凡社東洋文庫三五三、一九七九年、二五四～五頁。（以下、『宮廷』と略。）

⁴ 『公卿補任』五（吉川弘文館、一九七七年復刊）四〇四頁、四八七頁。

⁵ 三条家の庶流は、富田織部（本文参照）が慶応元年十一月に記した「備忘」（国立国会図書館憲政史料室蔵「三条実美関係文書」所収、以下、「実美文書」と略）に整理されている。これによれば庶流（一族）は、正親町三条、三条西、姉小路、滋野井、武者小路、高松、阿野、押小路、河鱈、園池、風早、花園の十二家である。

⁶ 宮内省図書寮編纂『三条実美公年譜』（宗高書房、一九六九年復刻）四四～四五頁（以下、『年譜』と略。）

⁷ 同右、四八頁。

⁸ 同右、四五～八頁／『実美公』一一～三頁。

⁹ 『贈位諸賢伝 増補版』下（近藤出版社、一九七五年）一六三～四頁／『実美公』一〇九～一三頁。

¹⁰ 富田織部「故蝶のゆめ」（『実美文書』所収）

¹¹ 鳥取藩池田家の政治運動と景山龍造については、仲村研『山国隊』（中公新書版、一九九四年）一三八～五〇頁。

¹² 富田織部をはじめ、公家の家士や、地下官人・諸大夫層の政治動向および公家社会における位置付けについて研究はない。史料的な制約もあるうが、幕末期の朝政運営の動静を解明するためには、家士・諸大夫層の政治動向に関する分析が必要となるう。

¹³ 『七卿西竄始末』二（日本史籍協会編「野史台維新史料叢書」一八、東京大学出版会、一九七二年復刻）八～五〇頁（以下、『七卿始末』と略。）

¹⁴ 「三条実美自筆書取」（『実美公』五三～四頁）

¹⁵ 『七卿始末』二、六四頁。「非蔵人日記」文久元年正月十六日条（『孝明天皇紀』三、平安神宮、一九六七年所収、

以下、『孝明』と略)。『年譜』六四～五頁。

¹⁶ 『実美公』一一九～二四頁。蘇峰の著述には、伝記特有の誇張的顕彰が少なからず見られるが、そこで使用されている史料は、現在、散逸などにより利用できないものも多数あり、

重要な文献資料といえる。

¹⁷ 「上奏案」(『実美文書』所収)。『年譜』七六頁。

¹⁸ 『実美公』一〇～二頁。

¹⁹ 『年譜』七六頁。阿野以下の四家は三条家庶流。河鰭公述は実美の実弟である。

²⁰ 「平野国臣培覆論」(『実美文書』所収)。平野国臣顕彰会編『平野国臣伝記及遺稿』(象山社、一九八〇年復刻)三九～四三頁。なお平野の文久二年四月、王政復古の方策を説いた「回天三策」を朝廷に提出している(四四～八頁)。

²¹ 『七卿始末』二、一〇九頁。縁戚のある土佐藩山内家臣の出入りが主だが、実美自ら藩主の上京、周旋を求めた熊本藩細川家臣の出入りも見受けられる。

²² 四奸二嬪排斥運動については、原口清「孝明天皇と岩倉具視」(『名城商学』三九別冊、一九九〇年)を参照。

²³ 「建言案」(『実美文書』所収)。『年譜』八二～三頁。

²⁴ 東久世通禧「竹亭回顧録維新前後」(幕末維新史料叢書三、新人物往来社、一九六九年)一三〇頁。東久世の勘違いと思われるが、村井と結城は蔵人所衆である。公家の諸大夫はその員数が決められていた。三条家は森寺、丹羽、柳田の三家である。

²⁵ 「久光上書案」(『紀』四、一二四頁)

²⁶ 「毛利敬親事蹟」(『紀』四、一四二頁)

²⁷ 『年譜』八五頁。

²⁸ 『七卿始末』二、一三三頁。

- 29 『宮廷』二五四～五頁。
- 30 久邇宮文書所収実美書翰（渋沢栄一『徳川慶喜公伝』二、平凡社東洋文庫）一〇二頁。
- 31 『三条家文書』（日本史蹟協会編、東京大学出版会、一九七二年）二六二～三頁。
- 32 『年譜』七六頁。
- 33 「尊融親王御記」（『紀』四、七六頁）。
- 34 「隈山春秋」文久二年九月二十日条（『実美公』一三〇～一頁）。
- 35 『実美公』一四七頁。
- 36 「隈山春秋」文久二年九月二十日条（『実美公』一三〇～一頁）。
- 37 『七卿始末』二、一五三頁。
- 38 家近良樹『幕末政治と倒幕運動』（吉川弘文館、一九九五年）補論「幕末期の朝廷に新設された国事審議機関」。
- 家近氏は、国事御用掛が青蓮院宮ら朝廷上層部の求めによって成立したことを明らかにしたが、ただ朝廷内における上と下のせめぎ合いの構図を重視しすぎる感がある。文久二年八月以降の朝議はあきらかに、その議事決定能力を喪失しており、議事参加員数を増やすことで、その欠を補おうという意向が、青蓮院宮ら勅問御人数の面々には存在した。

39 維新史料編纂会編『維新史』三（吉川弘文館、一九八三年復刊）二八四頁。

40 丹羽正雄の人物情報については、戦前の郷土史による他ない。滋賀県教育会編『近江人物志』（文泉堂、一九一七年）六九三～四頁。近江愛智郡教育会編『近江愛知郡志』巻三、第十七篇人物志、一九二九年、四八二～七頁を参照。

41 同右

42 「村中古記録」（滋賀県東近江市「平尾区有文書」）。『東近江市史 愛東の歴史』第二巻、東近江市、二〇〇九年、五四〇～九頁、五四〇頁）

43 『東近江市史 愛東の歴史』第二巻、東近江市、二〇〇九年、五四〇頁

44 「東向要録」（「三条実美関係文書」所収）

45 「公武一和」蓬左文庫蔵。

- 46 同右
47 同右
48 『改訂肥後藩国事史料』巻四、国書刊行会、一九七三年、二二二～二三頁。
49 前掲『近江愛知郡志』巻三、四八四～五頁中、挿入写真。
50 『一条忠香日記抄』（日本史籍協会編、東京大学出版会、一九六七年復刻）三二三頁。
51 家近前掲著書、二一九〇頁。
52 「東向要録」（「三条実美関係文書」所収）
53 『七卿始末』三、三一～二頁。
54 『孝明』四、八四六頁。
55 三条西季知、東久世通禧、壬生基修、四条隆謨、錦小路頼徳、澤宣嘉の六名。
56 「六卿進退之条目」文久三年十月二十五日（『七卿始末』四、一五～七頁）。
57 同右
58 「送迎解釈始末」（『太宰府市史』近世資料編、一九九六年）八五六頁。

第五章 第二節 注

- 59 『勝海舟全集 二一 氷川清話』講談社、一九七三年、二四九～五〇頁。
60 松浦玲『勝海舟』中公新書、一九六八年、まえがき五頁。
61 石井孝『勝海舟』吉川弘文館、一九七四年、二四五頁。
62 勝海舟の履歴については、石井前掲書、松浦玲前掲書の他、同『明治の海舟とアジア』岩波書店、一九八七年、同『勝海舟』筑摩書房、二〇一〇年より多くを学んだ。
63 勝小吉『夢酔独言』平凡社東洋文庫、一九六九年。
64 広瀬順昭「国立国会図書館所蔵勝海舟文書について」『参考書誌研究』一〇号、一九七四年。
65 前掲『氷川清話』一七八頁。
66 松浦玲は、前掲『氷川清話』一四九頁の注記のなかで、初出の『国民新聞』明治二十九年五月二十八日号における海舟談話との文面の異同を指摘し、「知行合一」などの陽明学的見識は、『氷川清話』の編集者の吉本襄の創作であるとする。

- 67 森谷秀亮『明治維新』（『日本歴史 全集』一四卷、講談社、一九六八年）
- 68 松浦前掲『明治の海舟とアジア』岩波書店、一九八七年。
- 69 木村直也「幕末の日朝関係と征韓論」（『歴史評論』五一六号、一九九三年）。
- 70 前掲『氷川清話』九二～四頁。
- 71 同右
- 72 『勝海舟全集 二 書簡と建言』講談社、二五五～六頁。
- 73 同右、二五七～六一頁。
- 74 三谷博『明治維新とナショナリズム』山川出版社、一九九七年。
- 75 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、一九八八年。
- 76 岸本美緒『東アジアの近世』山川出版社、一九九八年。
- 77 前田勉『近世日本の儒学と兵学』ペリカン社、一九九六年／奈良勝司『明治維新と世界認識体系』有志舎、二〇一〇年。
- 78 『贈従一位池田慶徳公御伝記』二、鳥取県立博物館、一九八八年、三一頁。
- 79 日本史籍協会編『会津藩庁記録』五、東京大学出版会、一九八二年復刻再刊。
- 80 『勝海舟全集一 幕末日記』講談社、一九七六年、八五頁。
- 81 同右、六五頁。
- 82 平良聡弘「勝海舟―「開明派」幕臣の実像―」笹部昌利編『幕末維新人物新論―時代を読み解く16のまなざし―』昭和堂、二〇〇九年。
- 83 浅井政弘・上野利三編『竹斎日記稿』三、松阪大学地域社会研究所、一九九六年。
- 84 『勝海舟関係資料 海舟日記（一）』江戸東京博物館、二〇〇二年。
- 85 「神戸海軍操練所絵図」神戸市立博物館蔵。
- 86 日本史籍協会編『坂本龍馬関係文書』二、東京大学出版会、一九六七年復刻再刊。
- 87 前掲『明治の海舟とアジア』岩波書店、一九八七年。
- 88 『勝海舟関係資料 海舟日記（一）』江戸東京博物館、二〇〇二年、八七～八頁。
- 89 前掲『氷川清話』一九九～二〇三頁。
- 90 前掲『勝海舟全集一 幕末日記』一四八頁。
- 91 同右一四七～八頁。
- 92 『勝海舟全集二十二 秘録と随想』講談社、一九八三年。
- 93 『国民新聞』明治二十四年七月十六日付。
- 94 『勝海舟全集』勁草書房版、一三卷、「解題」。

⁹⁵ 松浦前掲書『明治の海舟とアジア』岩波書店、一九八七年、一四一頁。

⁹⁶ 『国民新聞』明治二十四年七月十六日付。

⁹⁷ 日清戦争に至る政治、軍事の諸過程については、高橋秀直『日清戦争への道』東京創元社、一九九五年。原田敬

一 『日清・日露戦争』岩波書店、二〇〇七年。大谷正『兵士と軍夫の日清戦争』有志舎、二〇〇六年を参考にした。